

紅蓮激唱シンフォギア

zelga

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全てが終わり、己の役割を全うして戦士はその物語を結実させた。彼に一切の後悔はなく、また心残りも存在しない。最高のエンディングを迎えたのだ。

——しかし何の因果か、その物語には続きがあったようで。

※一部独自設定あり。後書きにて解説してあります。

目次

プロローグ

第1話	『THE BUGSTER!』	1
第2話	『規格外のBUGSTER!』	12
第3話	『Identityを超えて』	22
第4話	『Resetされたパワー!』	33
第5話	『オペレーションの名はBattle!』	45
第6話	『Sub stageは突然に：前編』	57
第7話	『Sub stageは突然に：後編』	69
第8話	『定められたFarewell』	76
第9話	『動き始めるGame!』	85
第10話	『紅槍少女のEveryday』	94
第11話	『蒼き防人のReadiness：前編』	104
第12話	『蒼き防人のReadiness：後編』	114
第13話	『Courage girlの覚悟!』	134
Stage. I く戦姫絶唱シンフォギアく		
第14話	『新たなChallenger現る!』	151
第15話	『少女に捧ぐ Sunny&Peace!』	159
第16話	『Lonely girlの想い』	171
第17話	『拳を刻め in the fist!』	186
第18話	『Noiseと介入者と：前編』	198
第19話	『Noiseと介入者と：後編』	209
第20話	『夜にすれ違うsignsの行方』	223
第21話	『暴かれしenemy!』	236
第22話	『重なり始めるGear!』	247

第23話	『覚醒のbeat!』	261
第24話	『辿り着いたtruth』	272
第25話	『Dragon knightの極意!』	284
第26話	『翳りなきSunny』	298
第27話	『舞台を動かす—そのPreparation』	308
第28話	『衝撃までのCountdown!』	322
第29話	『Gungnirの少女』	334
第30話	『無双の一振り』	349
第31話	『奏者たちよ、Let's fight!』	368
第32話	『砕け散ったRampart』	381
第33話	『雨上がりからのTake off!』	399
第34話	『禁断のTrap!』	411
第35話	『ふぞろいのPlayers!』	428
第36話	『張り巡らされたYarn!』	438
第37話	『Emotion&Ruthlessの狭間!』	450
第38話	『Noiseをぶつとばせ!』	463
第39話	『Bossを追跡せよ!』	477
第40話	『仕組まれたConclusion!』	489
第41話	『限界無きDreamer!』	504
第42話	『翼を抱いてGo ahead!』	522

プロローグ

第1話 『THE BUGSTER!』

——暗闇に光が差し、目を覚ます。

そして目前に広がっていたのは、どこまでも広がる青空だった。

「……どういふことだ」

そう呟きつつ、倒れていたその存在は立ち上がる。

その者は男性であり、見た目の年齢は20代前半だろうか。眼付きは鋭く、服装は所々部族のそれを彷彿とされる装飾が施されていた。

立ち上がった彼は周りを見渡す。そこは海岸近くの崖下であり、先ほどまで彼自身がいたはずの採掘場ではなかった。

「……馬鹿な。俺はあの時、あの女に倒されたはずだ」

この男の言ったとおり、本来なら彼はこの世にいないはずだった。敵キャラである自分の役割を全うし、最後まで誇り高き龍戦士として正義の者たちと戦い抜いたのだ。そして彼らに倒され、満足して逝ったはずだった。

だが目覚めて見ればこれだ。以前も一度倒されたことがあったが、仲間に復活されるまでの間にこのような場所に出た記憶などなかった。

「誰かが俺を復活させたわけではなさそうだな……どこだ、ここは」

自分が戦い抜いた世界。自分の故郷となる世界。はたまた、地獄や

冥府と呼ばれる世界だろうか。

なんにせよ、だ。現状態を判断するには情報が足りなさすぎる。そう判断した彼は、情報収集のため遠くに見える街へと繰り出した。

「……なんということだ」

それから1時間後。ベンチに座り込んだ状態で彼はつぶやいた。

雑誌かテレビ辺りを見れば、自身の中にある記憶を基に今の居場所を判別でき、元の場所に戻れると彼は思っていた。

だがしかし、それは叶わなかった。いや、少し言い方が違うだろう。わかったのだが叶わなかったのだ。

「アメリカと来たか。日本へ戻れない以上、何かしらの移動手段が必要になってしまった」

本来なら彼に移動手段は必要ない。なぜなら彼、およびその同種の仲間たちは瞬間移動の類となる特殊能力が使えるからだ。情報収集の途中、とりあえず日本へ戻るために彼はそれを行おうとした。

しかしできなかつたのだ。今までは日本国内でしか使ってこなかったため、もしかしたら距離制限があるのかもしれない。または別の理由もあるのかもしれない。

が、彼はあまり考え事をしない性格だ。瞬間移動ができないのな

ら、別の手段を用いればよいと判断する。

「移動手段は主に飛行機か……人間どもと行動するのはまっぴらだ。西側へ出て船でも奪うか」

そう決めた彼は立ち上がり、街を出て西へ向かって歩き始める。ここから海までは距離がある。移動手段は徒歩か車なのだが、自分もあの女も車の運転経験はなく、実質徒歩一択だった。

かなりの時間がかかりそうだが関係ない。なぜなら彼には食事どころか睡眠も必要ではないからだ。

ずっと歩き続けていれば、何時かつくだろう。そう思いつつ、彼は歩を進めていった。

歩き始めてから数時間。彼は現在、街からは遠く離れた草原の中を歩いていた。その道中彼は何もせず歩くのも退屈なので、少し前までやっていた闘争を思い出す。

ほぼ一日中かけて行われた、あの者たちとの決戦。あの戦いで彼は文字通り己のすべてを出し尽くしたのだ。好敵手たちとも信念を交わし合い、己のすべてをかけて戦った。

——そして敗北した、完膚なきまでに。

だが彼はそれを屈辱と感じていなかった。むしろ満たされていたのだ。あの時、彼は自身に与えられていた役割を最後まで全うできたのだ。それができたのも間違いない戦い抜いてくれた彼らの、そして彼の生き様を最期まで見届けてくれた仲間たちのおかげだった。だからこそ最後に登場した介入者に対して激怒したのだ。

そして誇りある闘争を邪魔した存在を取り除き、彼は最高のエンディングを迎えることができた。

「……と、思っていたのだがな。まさか続きがあるとは」

完全に満足して終えた生涯。そこに続きが現れたところで、彼は今空っぽなのだ。人間に対しては相変わらず敵意を抱いてはいるが、奴らの支配者になりたいというかつての野望は見る影もなくなっていた。

「俺は今、何がしたいんだ………いや、今はとにかく日本に戻り、あいつらが生きているのかどうか確かめなければ」

堂々巡りになりそうな思考を頭を振ることですったん止め、彼は再び歩き出した。

——そしてそれは、唐突にやってきた。

「ッ!!」

それを素早く感じ取った彼は、とある方向を睨みつける。その視線の先には広い草原が広がっているだけだが、彼はその向こう側に確かにいるナニカを見ているようだった。

「なんだ、この気配は……?」

彼に向けられたものではなく、かといって特定の存在に向けたものでもない。しかしそれを放たれている気配から感じ取れるものはある。

それは気配の持ち主が、間違いなく強者であることだ。これほどの威圧、そして存在感を放つことができる存在などそうそういない。事実、それを裏付けるかのように先ほどまで穏やかだった草原も静まり返っていた。

戦士としての勘から、その存在がまだ遠くにいることが分かる。それでいてこれならば、一体それはどれほどの強者なのだろうか？

「この気配、まるで獣のようだが……間違いなく強い!」

そう呟いたその直後、彼は胸元で熱く滾るナニカを感じる。チラリと見てみたがそこには何も変化はない。だが彼は、この胸に宿る灯の正体に気づいていた。

「……ああ、そうだ。思い出せ、俺の名を!」

自身に言い聞かせるように強く呟く。その言葉につられるように、胸の灯は勢いを増しているように感じる。

「ッ、ハハハハハ……なんだ、簡単なことじゃないか!!」

先ほどまで迷っていたのはなんだったのかと、彼は今までの彼を笑う。簡単なことだったのだ、たとえ今までの野望がなくなった所で、彼が彼であることは変わらない。

彼の生きざまは、何も変わりはないのだ。

「これでは会った所であいつらに笑われてしまうな。……まずは、リハビリと行こうか」

——その言葉の後、文字通り彼の身体は崩れ去った。

場所は変わり、とある研究所。そこに件の気配の持ち主はいた。

「ッ!!」

その存在は巨大で白く、所々に赤い線が走っている。目はないが、明らかに正気、あるいは正常でないことが分かる。そしてそれを示すかのように、それは周囲のものを破壊しようと手当たり次第に暴力をふるっていく。それを格納していた部屋は無残に壊れ、どこからか出た火が部屋全体を覆っていた。

暴虐の限りの尽くす白き怪物、その前に一人の少女が立ち塞がる。その身には白銀の鎧をまとい、濃い亜麻色の髪を肩まで下ろしてい

た。

「……みんな、今までありがとう」

少女は研究所の被験者の一人であり、怪物を鎮めることができる力を持った聖遺物の適合者でもある。

彼女は暴走する怪物を止めるため、大切な人たちを守るため。覚悟を持って、この場に立っていた。

「Gatrandis babel ziggurat edena
l Emustolronzen fine el baral
zizzl——」

「やめて……やめてえええっ!!」

その歌を止めようとする少女が一人。彼女は知っているのだ。この歌を歌い切れば怪物は止まるが、それと同時に大切な存在を失ってしまうことを。

止めようとするがそれは複数の成人によって止められる。これしか怪物を抑える方法がないことと、彼女が行った所で状況が悪くなるだけだということ。かと言って説得できるわけもないとわかっている彼らは、少女を無理やり抑えることしかできなかった。

そんな中でも彼女は歌を紡いでいく。怪物を鎮める、優しき歌を。

——しかしここで予想外の事態が発生した。暴走し理性を失っていた怪物、それが本能で気づいてしまったのだ。目の前の少女は、自身の脅威になり得ると。

「——ッ!!」

「Gatrandis babel ziggurat edena

「きゃっ!?!」

大切な家族との別れ。命を失うことの恐怖。皆を守らなければという責任。

まだ少女である彼女にとって、これらの思いは重すぎた。故に歌うことに必死で、怪物からの攻撃を避けられなかったのだ。

薙ぎ払われた腕から繰り出される一撃を喰らった少女は壁へぶつかり、ズルズルと落ちていく。まだ意識はあるようだが、不意打ちであることもあって既に満身創痍になっていた。

そしてそれを見逃すほど、怪物は甘くない。確実に脅威を取り除くため、さらなる一撃を少女へ繰り出す。

「あ……う……」

「逃げて、セレナアアアッ!!」

その光景を見ていた少女が叫ぶも虚しく、怪物の拳は彼女の顔へと迫り――

「悪いがこの戦い、俺に預けさせてもらおうぞ」

――突如現れた男性によって、受け止められた。体格差が3、4倍はあるという怪物の一撃を、その男は片手で受け止めたのだ。

「ッー!」

それを見て怪物は即座に距離をとり、威嚇する。先ほどの少女よりも、目の前の男の方が危険だと判断したのだろう。先ほどまで少女に向けていた敵意はすべて、男にそそがれていた。

そしてそれを感じ取った男は臆することなくほくそ笑む。もし誇りある決闘のような場合は傍観するつもりではあったが、戦っていたのがまだ年端もいかぬ少女だったのだ。

ならば、彼が躊躇う理由はもはや存在しない。

「っ、あの男はいつたいどこから来たのです?」

「……わかりませんが、間違いなく先ほどまではいませんでした。この状況を作りだせるのだとすれば、瞬間移動くらいです!」

「なんですって!?!」

「……子供に戦いを押し付け、自分たちは高みの見物か。反吐が出る」

上の様子を見つつ、思わず彼はつぶやく。そして視線を変えると、そこには窓に両手を付け必死に何かを叫んでいる少女がいた。

それを見て彼は先程庇った後方の少女と見比べる。なるほど、似通った点があることからこの二人は姉妹なのだろう。何を言ってるのかはわからないが、その様子から間違いなく身を案じているのだろうと彼は考える。

「——ッ!」

「……ああ、しかとわかっている。お前との闘争、誰にも邪魔はさせないやい」

催促するかのように咆哮する怪物に対し、彼は内なる炎を隠そうともせず答える。そして足を踏み出し、怪物に近づいていく。

「あ、あの……」

「……………」

後方の少女が何か言いたそうだったが、彼はそれに答えなかった。今の彼の意識はすべて、1つ残らず怪物にそそがれていたからだ。

「さあ、始めるぞ……！」

その言葉とともに、彼は懐から1つの機械を取り出す。黒と紫を基調とし、赤と紫のボタンがついたそれは、まるでゲームのコントローラーのようだった。そして彼は赤のボタンを押す。すると低い電子音が、周囲へ鳴り響いていく。

それは彼が行う戦いの儀式。すべての敵と戦う際に必ず行っていた行為。

そのまま彼はその機械を右手に握っていた固定具へ近づけていく。

「培養……！」

『infection!』

その言葉とともに機械を固定し、彼は右手の甲を相手に向けつつ胸元へ持つて行った。その瞬間、彼を細かいブロックのようなものが覆っていく。それは彼が戦装束へと変わっていく、変身であった。

『LET'S GAME!』

『BAD GAME!』

『DEAD GAME!』

『WHAT'S YOUR NAME!?!』

「俺は龍戦士グラフィイト……さあ、行くぞ!!」
『—THE BUGSTER……—!』

——今この地にて、誇り高き龍戦士が再誕する。

《See you Next game……》

第2話 『規格外のBUGSTER!』

右手に取り付けた機械——ガシヤコンバグヴァイザーから響く音が止まり、彼を覆うものが消え去った時。彼の姿は一変していた。

体長は1周り大きくなり、まるでドラゴンをそのまま纏ったかのような全身鎧は赤く鋭い。そしてその右手には、龍の牙をそのまま刀身にしたかのような双刃——グレングラファイトファングを握っていた。

その武器を水平に向け、腰を落としてグラファイトは静かに構える。その様子を見て怪物もまた姿勢を低くし、いつでも飛び出せる体勢に移る。この一連の動きの最中、辺りはとても静かだった。唯一聞こえるのは部屋を包んでいる炎のはじける音のみ。戦いを間近で見ている少女も、上で見ている者たちも皆、声を発することをできなかった。

それは全員が分かっていたからだろう。次にどちらかが動き始めたその瞬間から、戦いが終わるまで止まることはないのだということ。つまり今の状況は、嵐の前の静けさなのだということ。

——そして、その瞬間は訪れた。

「ハアアアアアアアアツ!!」

「ツ!!」

タイミングはまさしく同時だった。

互いに駆けだした二体。片方は双刃を、もう片方は拳を。互いの獲物に対し、ただ全力で打ち付けあう。その間より放たれた衝撃は並大抵のものではなく、部屋を、ひいては大気をも振るわせるほどのものだった。事実同じ部屋にいた少女は軽く吹き飛ばされ、上の部屋の窓は全面に罅が入っていた。

「フウウウウ……！」

「——！」

それほどの衝撃が走ってもなお、衝撃波の中心にいた二体はお互いに一歩も動いていなかった。この状況を見る限りでは、体格差がかなりあるのにも関わらず、その力は互角であるかのようだ。

「この程度では一歩も引かんか。流石だな！」

「——……ッ！」

いや、互いの表情と台詞から、どちらが有利であるかは明白のようである。

理性がないのもあって怪物が全力なのかはわからないが、少なくともグラフィイトには余裕があった。あれほどの打ち付け合い、さらには罅迫り合いをすることのできる力を出していても尚、普通に話しかけることができるのだ。

「ならば……これならどうだ!!」

その言葉とともに、怪物を蹴り飛ばす。そして怪物が体勢を立て直すよりも早く肉薄し、双刃を連続して振るう。

一撃一撃が喰らえば重症。様子見の攻撃など一つもないことに怪物は本能で気づき回避に専念するが、獣にとってその行動には限界が

あった。

「フンッ!!」

「——ッ!?!」

怪物の回避行動を数度見たグラフィイトは、即座に太刀筋を変えて回避先へ双刃を振るう。その予想は当たり、怪物は避けきれず胴体を斜めに切り裂かれる。痛覚があるのかはわからないが、怪物は苦しうに後退する。それを見ながらグラフィイトは思案する。

(手応えはあった……しかし、血の類は出てこないか。生物かと思っていたが、どうやら少し違うようだな)

そこまで考えたところで、怪物が再び動き始めたので思考を中断する。そもそも奴が生物ではないとわかった所で、グラフィイトがとる行動は変わらないのだ。

四つん這いから跳び上がり、上空からグラフィイトに迫る怪物。彼はそれを前転して避け、背中に向かって双刃を振り下ろす。それは反応して同時に攻撃してきた怪物の拳とぶつかり合い、再び衝撃波を発生させる。

しかし今回は数秒だけ鏝ぜり合った後、グラフィイトが一方的に怪物を吹き飛ばした。そして壁に叩きつけられる怪物を見て、彼は違和感を抱く。

「全力を出さない……いや、力を出しきれない、と言った方が正しいか」

めり込んでいた壁から抜け出す怪物を見て、グラフィイトは呟く。最初こそ自分と戦っていたが、傷ついてからの動きは明らかに鈍っていた。先ほど感じた威圧感からして、目の前の存在がこの程度のはずがない。長年戦士として戦い続けてきた彼だからこそ、自身の観察

眼には一定の信頼を置いていた。

「おそらくこいつは自立型の兵器。……まさか、エネルギー不足か？」

その考えにいたり、グラフィアイトは内心落胆する。間違いなく自身と同格か、下手すれば強者の相手。より強き者との闘争を望んでいる武人氣質な彼にとって、この発想はあまり思いつきたくないものだった。

かと言って手加減するのはグラフィアイトの性に合わない。一度始めた以上、敵には敬意を持って全力で叩き潰すのが彼の流儀である。

「些か残念だが……キメに行かせてもらおうぞ」

その言葉と共に握っていた武器ごと拳を地面に叩きつける。すると叩きつけた地面から炎が膨れあがり、刀身に紅蓮の炎が纏わりついていく。持ち上げて振り回すと、まるで生きているかのようにその炎は激しさを増していき、そのすべてが刀身に集まっていく。これから放つ技は、グラフィアイトにとって最強に近い大技だ。

「これで終わりだ。超絶奥義、ドドドドドドドドドドド……」

「ッ、——！！」

それを見て止めようと怪物が吠えて動き出そうとするが、その動きはとても鈍い。先ほどの戦いですでに消耗しきっており、立ち上がるのがやっこのようだ。

そしてそれを見逃すほど、彼は甘くない。その隙を逃さず彼は溜めていた力を開放し、双刃を全力で振るった。

「紅蓮爆龍剣！！」

放たれた炎は龍のようになねり、怪物へ突撃する。それに対し、怪

物は拳を持って迎え撃った。

「ッ!!」

わずかながら耐え、拮抗する怪物。しかしその激しい奔流を抑えることができたのはせいぜい数秒程度。ついに耐え切れず、怪物は炎龍に飲み込まれた。

そして激しい爆発音とともに、部屋中が光で満たされる。そのあまりの眩しさに、人類は目を閉ざすしかなかった。

「——ほう、まだ生きているか。強靱さだけは健在のようだな」

グラフィアイトの言葉通り、怪物はいまだ健在であった。かろうじて、と言う言葉を付け加える必要があるが。

「……………」

怪物は四肢こそ残っているものの、全身傷だらけでボロボロだった。そして動く様子は全くないが、グラフィアイトはこの怪物がまだ生きていることを見抜いていた。

「二定以上のダメージを受けたことで休眠状態に入ったか……」

個人的には消化不足な戦いであつたが、グラフィアイトはそれを飲み込む。休眠状態であるというのなら、再び戦える可能性があるという

やがて限界を超えた痛みには耐えきれず、思わずグラフィイトは叫ぶ。するとそれに呼応するかのように体内の熱が体外へ排出されていく。

文字通りグラフィイトの体内から排出されていくそれらは目の前に集まっていき、何かを形作っていく。

そして痛みが治まり、荒く呼吸をしているグラフィイトの目の前に、それは落ちてきた。

「これは、ガシヤット……?」

それらを拾い上げ、グラフィイトは呟く。自分たちを生み出した基であり、かつての強敵が変身する際に使用していた道具。

見慣れているので間違えるはずもない。彼が持っているのは、二つのガシヤットだった。

しかし普通と違う点が一つ。それはゲームの名称が記載されていないことだ。本来ならガシヤットの持ち手にはゲームのタイトルとロゴが記載されている。しかし、グラフィイトが持っているそれらは持ち手の部分が真っ黒だった。

「名称不明のガシヤットだと……? なぜそれが俺の中から——」大丈夫ですか!」——む?」

思考しようとするグラフィイトに、少女が駆け寄ってくる。おそらく先ほどまで苦しんでいたグラフィイトを心配しているのだろう。当初、彼は別に少女を助けようと思って戦いに介入したわけではないのだが、少女がそれを知る由はない。

「あの、先ほどは助けていたありがとうございます。お礼に治療をさせてもらえませんか?」

「なんだと?……いらん、そんなもの必要ない」

先ほどの戦い。終始グラフィイトが押していたが、彼は無傷ではなかった。と言っても大した傷はなく、人間でない彼にとってこの程度の傷は放置しておけばそのうち治るものだ。それに人間から施しを受けるなど、バグスターとしての彼のプライドが許さなかった。

「俺は奴と闘いに来ただけでもう目的は果たした、さらばd……………」
「何をする?」

「何って、あなたさつきまで苦しんでいたじゃないですか! まだ安静にしていなと!」

立ち上がろうとするグラフィイトを、少女が止める。先ほどまでの苦しんでいる姿を見ていた少女は、彼が無理してこの場を去ろうとしていると思ったのだ。怪人へと変身していたが、今の姿は人間そのものなのはその勘違いを助長している。

そんな少女のことなど、グラフィイトは知る由もない。一步も引きそうにない様子に苛立ち、直接的な手段に出る。

「ええい、どけ! 俺はお前たちの治療なぞ受けん!!」

そう言って強引に少女の手を払いのけた。それを見て、少女は固まった。ピタリと止まった少女を見て、グラフィイトは訝しげに見る。

——さて。簡潔にいうとこの少女、いろいろ限界であった。

家族との別離の覚悟。生との決別。守るべきという責任感。

すでにいっぱいだった少女の眼の前に突如現れたのは、謎

の人間(?)。怪物を単独で抑え込み、結果的に少女は死なずに済んだのだ。ならばせめて治療をしなければと思いつて話しかけてみれば、拒絶される始末。

短時間で起きたあまりにも濃い出来事に、すでに彼女の容量は爆発寸前だった。そして治療せずともせめて安静にした方がよいと手を伸ばしたら、その手を強い口調と共に払いのけられた。

——この瞬間、彼女のナニカが決壊した。

「……フン、お前たち人間の施しなんだ「うるさああああああい!!」なっ!」

耳元で放たれる突然の大声に思わず耳をふさぐ。いまだ脳内でキーンと音が残響する中、元凶となる少女をにらみつける。しかし彼女の表情もまた、怒っているようだった。

その表情のまま、少女はグラフィイトの身体にしがみつく。ときめく要素など一つもないこの状況、グラフィイトは引きはがそうとするが何故か全くはがせない。それは少女が纏っている鎧が原因なのだが、この時彼はその発想に至ることはできなかった。

「良いから怪我を治させてください! いくら軽い傷だからって放っておいて、バイ菌が入ったらどうするんですか!」

「ツ、うるさい! 俺はお前たち人間とは違う! この程度の傷、放っておけば治る!」

「さっき苦しんでいたのを見ていて、はいそうですかって放っておけるわけないでしょ! 自分のことが知られるのが嫌ならママと話してなんとかするから、せめて安静にしていってください!」

「ええい、いいから離せ！」
「離しません！」

剥がせないのに離れてもらうために怒鳴るグラフィイト。絶対に離さず、意地でも治療しようとするタガが外れた少女。二人の会話のドッジボールは収束するはずもなく、平行線となるのは自明の理だった。

「……所長、どうしましょう?」

「はあ………とりあえず二人の言い争いが終わるまで待ち、できれば彼を治療しましょう。理由はどうであれ、彼がセレナの命を救ったのは事実です」

「は、はい」

「色々と聞きたいことはありますが……それよりも、彼に感謝をしなければなりませんね」

そう言いながら上の部屋にいた女性は、いまだ口論している二人を見ながら、安心したように微笑した。

「は・な・せ!!」

「い・や・です!!」

《See you Next game……》

第3話 『Identityを超えて』

彼は最後まで自分の生き様を貫き、満足して逝った。

しかしその生涯にはあるはずのない続きが存在した。己の願いに迷い考え、強者との出会いにより武人としての在り方を思い出す。そして彼は仲間らしくないと笑われないよう、自らを鍛えなおそうと奮起した。

その誇り高き龍戦士、グラフアイトは今――

「あの、あー……………大丈夫、ですか？」

「……………これが、大丈夫に見えるか？」

――項垂れたミイラ男と化していた。

さて、まずはなぜこうなったのかを説明せねばなるまい。

始まりはこの時より30分前。1時間余りによる口論の末、グラフアイトは少女の治療を受けることにしたのだ。

長時間による口論により彼の頭は冷え、少し冷静になっていた。そこで言い争いをしながらも考えた結果、さっさと治療を受けてこの場を離れた方が早く済むと判断したのである。なぜならもしもの可能性が残っている以上、できる限り早く日本に戻りたいと彼は考えていたからである。

「まったく、わかった！……お前の治療を、受けよう」

「本当ですか!? やった！」

「……………」

別に涙目で迫り続ける少女に気圧されたわけではない。ないのである。

そして少女に（無理やり）連れてこられ、場所は変わって医務室。グラファイトはせめて道具だけ受け取って自力でそれっぽく治療しようとしたが、少女がそれを断固拒否。

「私に任せてください！」

の、一言と共にグラファイトを椅子に座らせる。抵抗するだけ時間がかかると判断していた彼は、何かおかしい行動をしない限り任せることにした。

「えっと、包帯がここで……消毒液はここ、と……」

そう、おかしい行動をしない限りは。

「では消毒が終わったので、包帯を巻いていきますね。……あれ、どうやって巻いたらいいんだろう?」

「……………」

そう、おかしな行動を――

「あれ、姉さんはこうやってたわよね？ 何でできないんだろう……
なら、こうやって……」

「……………」

そう、おかしな――

「あれ、あれあれあれあれ?」

「……………」

その数分後。先ほどの戦い、上の部屋で指揮をとっていた女性が様子を見に来たところ、その目に写ったのは予想外の光景であった。

「ごめんなさい、ごめんなさい……………」

「何をどうしたら、これが治療行為になるんだ…………?」

女性の視線の先には椅子に座り、なんともいえぬ雰囲気をつたミイラ男に謝り倒す少女の図があった。

多少は和解できているだろうか？ あの子はお礼を言えただろうか？ 私はなんとお礼を言えればいいか？ もしかして険悪な雰囲気になつてないか？

様々な状況を想定し、脳内でシミュレートしていた結果は彼女からサラサラと消去されていく。あまりの衝撃に思考停止したと言ってもよいだろう。

——これが最初の光景に至るまでの過程である。ではなぜこうまでされてグラフィイトが動かなかったのか？

その答えはこうだった。

「治療をやると言っておきながら、まさか知識なしだとは……」

グラフィイトは包帯をほどきながら呟く。彼にとってのおかしな行動とは、彼自身を探るような行動だったのだ。

先ほどの反応を見る限り、少なくともこの少女はバグスターの存在を知らない。普通未知に遭遇した人間がとる行動は二つ。解き明かすか忘れるかだ。そして少女は彼と接触した。つまり忘れるという選択肢はとらなかつたことになる。なので彼はこの治療中に少女が何か聞いてくるものだと思い、気づかれぬよう身構えていたのだ。それを行った瞬間、すぐさま行動に移れるように。

しかし、その結果がまさかのこれだ。普段全くやらないグラフィイトですら知っている治療の基本手順を、少女は知らなかつた。それどころか記憶を頼りにやった結果、包帯を途中で切らずに全身の傷を覆うということんでもない行動をしてきたのだ。

彼女は怪物を抑える力を扱えるだけで、それ以外は何も変わらない普通の少女だった。その事実途中で気づいたグラフィイトは、警戒していた自分自身が馬鹿らしくなってしまうた。

確かに人間を嫌悪してはいるが、これは流石に度が過ぎていた。そう思い、軽く落ち込んでいたのが最初に項垂れていた原因でもある。

「……で、お前はなんのようだ。こいつの様子を見に來ただけではないのだろうか？」

取り外した包帯を巻きながらグラフィアイトは女性に問いかける。その声を聞きハツとした女性は、意識を切り替えて口を開いた。

「ええ、私がここに来た理由はそれだけではありません。米国連邦聖遺物研究機関〔F. I. S.〕を代表して、感謝を申し上げます」

そう言つて女性が頭を下げる。それを聞いたグラフィアイトは不機嫌な表情を隠そうともせず包帯を置いた。いくつか気になる単語が出たが、それよりも彼は自分の思いを口にすることにした。

「あいつと戦つたのは俺自身のためだ、お前たち人間のためではない」
「……だとしてもあなたのおかげでネフィリムの暴走は収まり、その娘……セレナの命は救われました。本当なら何かお礼を渡したいのですが、あなたはそれを望まないでしょう」

「全くだ、貴様らのような子供に戦事を押し付けるような輩からもらうものなどない」

「っ、それは！」

「止めなさい、セレナ。それしか方法がなかったとはいえ、私は貴方に死を命じたに等しいことをした。その事実から目を背けるつもりはありません」

あえて挑発するかのようになうグラフィアイト。それを聞いてセレナが弁明しようとするが、女性がそれを諫める。その様子に嘘偽りがないのを見抜いた彼は、愚かだがその自覚はあるのだなと少しだけ評価を上方修正した。

「まあいい、何度も言うが礼を言われる筋合いはない。俺は俺のために動いただけであり、お前たちはその結果偶然助かった」

それだけだ、と締めくくる。包帯を外すついでに体調のチェックを行つており、問題ないと判断した彼は椅子から立ち上がる。

「もう行っちゃうんですか？」

「ああ、俺には戻るべき場所があるのでな」

「それってやつぱり、日本？」

「……なぜそれを知っている？」

グラフィイトは身構えつつ尋ねる。少なくとも今までの会話から彼が日本を目指していることはわからないはずだ。

彼が警戒しているのにも気付かず、セレナはあつけらかんと答えた。

「だって、あなたは日本語を話しているじゃないですか？　だから日本出身じゃないかと思って」

「……ああ、そうだ、そうだったな」

そうだった。すっかり忘れていたがここは日本ではなくアメリカ、外国である。事実、街中で情報収集していた時は彼の中にある記憶を基に英語を翻訳していたのだ。

しかし戦闘による興奮、彼女たちと会話を通じることによる違和感の無さ、彼女たちが話す日本語が流暢である事。これらにより、彼は今まで違和感なく日本語で話してしまっていた。

そのことをセレナに指摘され、グラフィイトは内心頭を抱える。彼は基本的に争い事が専門であり、そう言った細かいところは仲間任せであまり目を向けてこなかった。その弊害が出てしまったのだ。

「日本へはどうやって行くんですか？　飛行機、それとも船？」

「……人間と共に行動する気はない」

「じゃあ船、というよりボートですね。けど、ここからじゃ太平洋まで車でも数日かかりますよ」

「車の運転経験はない。それに俺に睡眠は不要だ、その内着くだろう」
「……………」

地味にシヨックを受け、かつ考え事をしていたせいでセレナの質問に対しグラフィイトは普通に答えてしまう。その返答を聞いた彼女が何かを考え始めたのを見て、質問が終わったと判断する。

「質問は終わりだな。では俺はいk「あの!」……今度はなんだ?」

「あの、もしかしてですけど……あなたは徒歩と船で日本に行くつもりなんですか?」

「……そうだ、それがなんだ?」

再び話しかけてくるセレナに対し、少し鬱陶しそうに答える。ちなみに先ほどから彼自身のことを聞く【おかしな行動】に分類できる質問を彼女がしているのだが、彼女に対して警戒を緩めていたグラフィイトは無意識に答えていた。

そしてその返答を聞き、セレナはさらに質問を重ねる。ちなみに女性は少し離れたところで二人の様子を黙って見守っていた。

「あの、その方法だと日本に着くのにか月もかかってします」

「そうだな、だがそれは承知の上だ」

「もし……もし、もっと早く日本に行く方法があるなら、嬉しいですか?」

「……何が言いたい?」

回りくどいことを嫌うグラフィイトは率直にセレナに聞く。先ほど彼は人間と共に行動する気はないと言ったはずだ。なのにその条件を満たしたうえで早く着く方法があるというのか?

その言葉を含めた問いに対し、セレナは慌てながらもはつきりと答えた。

「はい、えつとですね……私と一緒に日本に行きませんか!」

「………待て、まずなぜその案が出たのを教えろ」

何度目かのこのパターン。グラフィアイトは怒りを通り越え、呆れの念を抱き始めていた。だが先程の反省から、まずは案だけでも聞いてみようとするを促す。

「えっと、まず私は1週間後に日本へ行く用事があります。その時は飛行機に乗っていくのですが、貸し切りで私しか乗りませんし、操縦も自動運転だとママから聞きました」

ママ、というのが誰を指すのかはわからなかったが、その名を発する際に部屋の隅にいた女性を見ていた。言葉の内容に対し相槌を打っているのだから、あの女性がママなのだろう。

「ですので、もしあなたがよろしければ一緒に行きませんか？ 人間は私しかいませんし、それでも嫌なら頑張ってなんとかします！」

最後まで言い切るセレナ。それを聞き終えたグラフィアイトは、今までの様に怒鳴るのではなく静かに彼女へ問いを投げかける。

「一つ、聞きたいことがある」

「なんですか？」

「なぜお前は俺にここまで固執する？ 俺たちには何のつながりもないというのに」

正直な話をする、この案はグラフィアイトにとって悪くないものであった。人間と共に行動する気はないが、1人程度ならやるかどうかは別として我慢できるだろうし、その相手がセレナなら問題はないだろう。

だがそれよりも気になることがグラフィアイトにはあった。それはなぜセレナがここまで彼を気にかけるのか、である。

エグゼイドとパラドのように同一存在でもなく、彼とブレイブ、ス

ナイプのように宿敵でもない。ましてや彼とパラド、ポツピーピポポ達のように仲間でもない。

赤の他人に等しいはずの彼女がなぜここまで必死なのか、彼にはそれが気になったのだ。

そしてその問いに対し、セレナの答えは至極簡単であった。

「私は貴方に助けてもらいましたから。今度は私が、あなたを助けたいんです！」

笑顔で、セレナは言い切った。

ただ、それだけだった。それだけだったのだが、逆にそれだけセレナが真剣にそう思っているのをグラフィアイトは感じ取った。そして、彼女がどのような人間なのかを理解した。

本当に、この子はただ一生懸命なのだ。

皆を守るため、一生懸命に力を扱い――

怪物を抑えるため、一生懸命に歌を歌い――

――そして今は助けてくれたグラフィアイトのため、一生懸命手助けしようとしている。

「……………」

「ど、どうでしょう……?」

「……フ、ハハハハハッ!!」

「うええ!?!」

沈黙していたかと思えば突如笑い出したグラフィイトにセレナは驚く。しかしその表情が晴れやかになっていることに気づき、ポカンとした表情になる。

「ハッ！……いやなに、あれこれと考えていた俺自身が馬鹿らしくてな。つい笑ってしまった」

「あ、え？ はい……？」

「良いだろう。お前からのその案、受け取ってやる」

「……え、本当ですか!？」

「ああ、だが俺は基本的に人間とは行動を共にしない。それでも構わんな？」

「っ、はい！」

内心受けると思っていなかったのだろうか、セレナは驚いた表情と声で叫ぶ。それに補足を加えつつグラフィイトが答えると、彼女は花が咲いたような笑顔で返事をした。

「……ついだな。おい、ママと言う名でいいのか？」

「私の名はナスターシャです。ママと言うのは、ここに居る子供たちからの呼び名ですね」

「そうか、まあいい。こいつが言ってることはできるのか？」

恐らくだがセレナの日本遠征計画等は彼女が立てている。そう考えたグラフィイトはナスターシャに確認がてら尋ねることにした。

「ええ、問題ありませんよ。1人分の追加なら、いくらでも理由を付けれます」

「ならば、それをやれ。こいつの案を手助けする事で、礼として受け取ろう」

「……はい、しっかりとやらせていただきますよう」

一瞬ナスターシヤは驚いたような表情をする。その反応をグラフィットは見逃さなかったが、何も言わなかった。何せこの行動は少し前の自分でも予想できなかったものだったからだ。

手を組む気など毛頭ないが、少しだけ人間に歩み寄る行為。これももし仲間たちが見たら、どんな顔をするだろうか？

再び椅子に座り、彼は今はもう会えるかもわからない友の顔を思い出しながら、そう考えていた。

▪ See you Next game……▪

第4話 『Resetされたパワー!?!』

彼女たちとの話し合いも終わり、結果的にグラフィアイトは1週間の間にここに留まることとなった。ナスターシャから部屋を提供すると提案されたが、彼はそれを拒否。用があればこちらから出向く、とだけ言って施設を出ていった。

断った理由は普通に人間嫌いというものもあるが、バグスターという種族は睡眠も食事も必須ではないため、住居を持つ意味もないからだ。F・I・Sの場所を認知した以上、その気になれば瞬間移動で向かうことはできる。そこで彼は適当な場所で1週間を過ごすつもりだった。

そう、何事もなければ――

グラフィアイトがこの地に現れてから3日後。朝日がまだ昇ったばかりの早朝に、彼は森の中で鍛錬を行っていた。

「フン、ハアッ!!」

己が相棒である双刃を振るい、上下左右へと飛び回る。そこには彼一人しかいなのだが、彼の眼には確かに敵がうつっていた。その相手は二人おり、一人は剣を、一人は重火器を用いて彼に迫りくる。

彼はその猛攻を時には防ぎ、時には受け流し、時には避けていく。そして隙を見つけると次はこちらの番だとしても言うように双刃を振り、拳や足をぶつけていく。その動きの激しさに草木は切られ、周りの地面は荒れていく。予めこうなるとわかっていたので偶然見つけたこの空間を使っていたのだが、それでもこの有様だった。

そして攻防が始まってからどれほどの時間が経っただろうか。上段に振りかぶった双刃を下ろす直前、グラフィイトの動きがピタリと止まった。

「……………ここまでか」

そう呟き、ガシヤコンバグヴァイザーを外して変身を解く。そのまま深呼吸をし、いまだ昂っている感情を抑える。しかし焦燥感を拭うことはできず、握った拳が震える。

「まだだ、こんなものでは足りない……。どうすれば……？」

そのまましばらく考え事をしていたが、何かを思いついたように顔を上げる。しかしその表情はしかめっ面であり、いやしかし……。などと呟いていた。

そしてそのまま考え事を続けてなんと1時間後。なにか覚悟を決めたかのような表情のグラフィイトはその場を後にし、とある場所に向かって移動し始めた。

「鍛錬方法、ですか？」

「ああそうだ。状況が状況でな、今までならば常に実践の中で鍛錬してきたのだが……」

場所は変わってF. I. S. 研究所の外庭。そこでグラフィアイトは呼び出したセレナにそう問いかけた。

この数日間、二人はなんだかんだ交流を続けていた。あのナスターシヤとかいう女性から言われたのか、はたまた自分の意志なのか。それはわからないがセレナは積極的にグラフィアイトに話しかけてくる。あの日のやり取り以降、多少は彼女のことを認めたのか、こうして質問をしに訪れる位には態度が柔らかくなっていった。

そして途中言葉を濁したグラフィアイトを見て、セレナはその続きを察した。

「なるほど、ここではその相手がいないと言うわけですか」

「……まあ、そう言うことだ。しばらく考えては見たが埒が明かん、何か心当たりはあるか？」

「そうですね……。えーと、あるにはあるんですけど……」

「……やはりか」

どうにも歯切れが悪いセレナの反応を見て、グラフィアイトはわかっていたかのように顔を歪ませる。今朝思いついた内容はまた別であり、今回彼女を呼び出したのはあくまでその確認だ。

「一応聞きたい。それは？」

「……戦闘訓練用シミュレーターです、研究所内にある」

この返答を聞き、グラフィアイトは自分の予想が正しかったのを少し恨む。そして同時に思う、なぜあんなことを思いついてしまったの

か、と。

そもそもなぜグラフィアイトが鍛錬をしているのか、それにはとある理由がある。しかし周りに敵はおらず、できることと言えばかつての好敵手をイメージし、それと戦うぐらいだ。しかしイメージはイメージ。最初こそ鍛錬にはなったがすぐに限界が訪れ、彼は行き詰ってしまった。そこで何か方法はないかと考えているうち、彼は思いだしたのだ。セレナ達F・I・S・のこを。

あそこでは何かを研究している。その一環がああ怪物であり、セレナが纏っていた鎧だ。そして怪物が暴れていた時、奴らはセレナに鎧をまとわせて抑制しようとしていた。

つまりあの鎧は力を持った武具ではないか？　そしてそれを扱う以上、何かしらの訓練を行える環境があるのではないか？

その発想に至った時、グラフィアイトは自分自身を恨んだ。多少譲歩する事にこそしたが、基本的に彼と人間の関係は敵対だ。その敵であるはずの人間の施設を扱うなど、奴らを多少評価しているとはいえ彼には到底許容できなかった。

だがしかし、現状それ以外の手段が思いつかないのも事実。彼は長時間悩みに悩んで、やるかどうかはともかくまずはそれが可能であるかを聞きに行くことにしたのだ。

——そしてその結果が先ほどの会話である。

「あの、やっぱり人間は嫌いですか？」

「……当たり前だ」

悩んでいる理由が分かっているのか、セレナは少し悲しそうな表情でグラフィアイトに問いかける。それに対し彼は少し歯切れが悪そうに答える。別に隠すつもりなど微塵もないが、暗に彼女も嫌いと言っているようなモノだ。流石に何も感じないわけではなかった。

「そう、ですか……」

「——ッ」

そしてその予想はあたり、セレナの表情は暗くなる。別にこんなことを話しに来たわけではないのに、なぜこうなってしまったのか。彼女にどんな言葉をかけるべきかわからず、グラフィイトは頭を掻く。

この状況はまずい。どこからともなく仲間の『そんなんじや女の子は振り向かないよ?』なんてキザな台詞が聞こえてきそうなくらいにまずい。

とにかくこの状況を打破すべくグラフィイトは口を開こうとするが、セレナが何か考えているのを見てそれが止まる。

「……うん、ならこうすれば——よし。ママには何とか説明して……」

「……おい」

「じゃあ問題は……そうだ、あの時間帯なら……」

「おい——」

「……え、ひゃっ?!? って、ああごめんなさい!」

声をかけるが反応せず何か呟いてるのを見て、グラフィイトは少し強い口調でセレナを呼ぶ。それに驚いたのか彼女の肩が少し跳ねるが、今まで彼をほったらかしにしていたことに気づいて慌てて謝った。

「それは別にいい。その、なんだ……この話は忘れろ」

それに対するグラフィイトの反応がこれだ。このまま泥沼と化すのを恐れたのか、話をなかったことにしようとする。原因を突き止めるため新たな鍛錬方法を見つけたいが、もし日本に戻り、仲間と合流できるのならその必要はなくなる。未だにこの世界がそうであるか

が分からないため少々博打になるが、もうこれしかないとは彼は判断した。

そしてそれを言い終えたのち、この場を離れようとする。しかし慌てた様子でセレナがその腕をつかんだ。

「あの、待つてください。あなたは人が作ったシミュレーターが嫌なんでしょうか？ それとも私たち人間に見られるのが嫌なんですか？」

「何を言って……………」

「答えてください、お願いします！」

「……………後者だ」

確かに前者の理由もある。しかしそれ以上にグラフアイトにとっての懸念は、シミュレーターを行う過程で自身のデータを記録されてしまうのではないかということだ。未だに情報不足である以上、出来る限り自身の痕跡は消しておきたいというのが彼の考えであった。

「じゃあ誰にも見られず、記録などにも残らずにできるのなら、シミュレーターは使いたいですか？」

「おい、何を企んでいる？」

セレナの問いには答えず、逆にグラフアイトが彼女に問いかける。しかしそれは暗に yes と返答していることを示しており、その反応を見たセレナは嬉しそうに両手をぐつと握る。

「一つ、それができるかもしれない方法を思いつきました。では、私は準備をします！」

「つ、質問に答えろ！ 勝手に話を進めるな!？」

少しだけ待っていてくださいーい！ と言い残してセレナは研究所内へ走っていく。あまりにも突如な行動に、グラフアイトの右手は標的を見失って空中を漂っていた。

「なんなんだ、あいつは……………」

そして戻ってきたセレナから告げられる内容を聞いて、グラフィイトが呆れ返るのはもう少し後の事。

時間は過ぎて、現在の時刻は〇〇時。静まり返った敷地内の片隅で研究所の扉がゆっくりと開き、そこからセレナがこそこそと出てくる。その表情は緊張しており、常に周りの様子を気にしているかのようだった。

そして周囲を見渡し、目的の人物を見つけたところで笑顔になって右手を振る。結果的に強引に誘ったので来るのかどうかはわからなかったが、なんだかんだで彼は来てくれたようだ。

「こつちですー！」

なお大声を出しているかのように見えるが、もちろん小声である。今この場にセレナ達がいることは誰にも知られてはならないのだ。

——そう、この〇〇時。まごうことなき深夜なのである。草木も眠る時間を過ぎたあたりと言ったところか。

「……で、あの時言っていたことは本当にできたのか？」

研究所内を歩きながらグラフィアイトはセレナに尋ねる。それを聞いたセレナは恥ずかしそうに手を組んで口を開く。

「はい、なんとか……。ママに事情を言ったら、特別に許可してもらいました」

「そうか……」

今更自分のした行動に恥ずかしがっているのだろうか、彼女の顔は赤い。

セレナ自身、こうも積極的に行動ができるようになったことに驚いている。以前の彼女は穏やかと言うよりは大人しい性格で、自分から行動し、主張するような人間ではなかった。それがこうして変化が生じているのには、もちろんきっかけが存在する。

それは現在セレナの少し後ろを歩いている者……そう、グラフィアイトであった。あの怪物——アルビノ・ネフィリムをも圧倒する力を持ち、自分自身に強い一本の芯が通ったかのようなブレのなさ。人間を嫌っているようだが、嫌いな人間である自分とこうして話をしてくれる器の大きさ。

端的にいうとセレナは、グラフィアイトに憧れているのだ。そこで彼に少しでも近づくため、このような変化が生まれている。なお、それを察知したとある人物がグラフィアイトに対して敵意を抱くのだが、それはまた別の話であり、セレナはそのことに一切気づいていない。

「……あ、着きました。ここがシミュレーションルームです」

そうこうしている内に目的地に着き、セレナは機器の前に座っている女性の元に駆け寄る。グラフィアイトは一瞬警戒したが、その女性に

見覚えがありすぐにそれを解く。

「どうやら問題なく来てくれたみたいですね、セレナ」

「うん！……ところでママ。私は何をすればいいの？」

「基本的にはシミュレーションの開始と終了。後は難易度の調整だけですよ」

「……本当に問題ないのだろうか？」

操作を教わっている様子を見ながら、グラフィイトはナスターシャに問いかける。それに対して彼女はしっかりと彼の顔を見て答えた。

「ええ、話はセレナから聞いています。ここは完全防音になっていましてので絶唱……いえ、街を丸ごと破壊するような一撃を放たない限りは音は漏れません。加えて既に使用痕跡は消してあります。何か起きない限り、このシミュレーターが最後に起動したのは昨日の18時になるでしょう」

「……そうか」

つまり、情報隠蔽は完璧だということらしい。乗り掛かった以上、この船を下りる気はグラフィイトにはない。だがそれでも警戒するに越したことはないのだ。

「……はい、こちらの準備はできました。ではセレナ、後は任せましたよ」

「はいママ。おやすみなさい」

「おやすみなさい」

そう言葉を交わし、ナスターシャは部屋を出ていった。操作説明をセレナにしていたことから、これはグラフィイトに配慮しての行動だろう。

それを見届けたグラフィイトはシミュレーションルームの中に入

る。周りを見渡す限り、ただの少し広めの部屋にしか見えないが、様々な機械が取り付けられていた。

『あーあー、テスト。聞こえていますか？』

部屋に声が響いてくる。セレナが操作室からアナウンスしているようであり、グラフィアイトは聞こえていることを頷くことで示した。

『はい、では始めますね。ステージ3：街郊外、セットアップ』

——その瞬間、周りの景色は一変した。

「ほう、これは……」

無機質な部屋は青空が広がる近代都市へと変貌する。試しに走ってみるが端にたどり着く様子はない。どうやら何かを気にする必要はなさそうである。

『準備は大丈夫ですか？』

「問題ない。始めろ」

『はい。では対ノイズ戦シミュレーション、レベル5を開始します』

セレナからの問いに返答しつつグラフィアイトはガシヤコンバグヴァイザーを取り出し、ボタンを押す。低い電子音が鳴り響く中、彼は周囲へ意識を集中させる。

「——っ！」

瞬間、グラフィイトは左へ跳んだ。そしてその直後、先ほどまで彼がいた場所へなにかが突撃する。

「随分とせっかちな……培養！」

『infection! LET'S GAME! BAD GAME!
E! DEAD GAME! WHAT'S YOUR NAME
!?!』

その言葉と共にグラフィイトは変身する。彼の全身を細かいブロックが覆い、その姿を戦装束へと変えていく。

しかし敵は一体ではないようで、同じような存在がもう一体、変身中のグラフィイトに向かって突っ込んでくる。その勢いはとても素早く、一直線に彼の頭部へと向かい――

「甘い！」

『THE BUGSTER……!』

――その手に持つ双刃によって、地面へ叩き潰された。

「随分と素早いようだが、その分制御は甘いな。軌道さえ見切れば、たやすく撃ち落とせる」

叩きつけたそれが消滅したのを確認し、グラフィイトは改めて周囲を見渡す。すると視界の端々で同じような存在が次々に現れる。

その数、優に100は超えているだろう。そのうち10体ほどが身体をねじれさせているのを見て、彼は双刃を構える。

「少し悔っていたが、これはなかなか楽しめそうだ。……さあ、来いっ!!」

そう叫び、敵の集団に向かって突っ込んで行った。

「あれ？」

場所は変わって操作室。戦闘している様子を俯瞰で見ていたセレナはふと違和感を感じた。

そこで仮想敵相手に大立ち回りをしているグラフィアイトをズームしてみる。すると、その違和感にすぐ気づくことができた。

「あの鎧、赤じゃない……………緑？」

《See you Next game…………》

第5話 『オペレーションの名はBattle!』

「ふんッ!」

地上の敵を吹き飛ばした後、他の敵が飛び込んでくるのを見て上空へ跳んで回避する。それに対し敵の軍勢は次々に形態を変え、グラフィイトへと襲いかかる。

「ハアアアアアアアッ!!」

それ見てグラフィイトは焦ることなく、冷静に双刃を振るう。素早く正確なその連撃は次々と襲い掛かる敵——ノイズと呼ばれる存在をことごとく撃ち落としていく。

迎撃をしつつ着地したグラフィイトは一度前転し、双刃に力を込める。すると赤いエネルギーが発生し、刀身に伝わっていく。

「これで終わりだ……! 激怒竜牙!!」

双刃を振るい、溜めていたエネルギーを開放する。放たれた十字の剣戟は残っていたノイズに襲い掛かり、大きな爆発が発生する。

それが収まり、煙が晴れた時。グラフィイトの周囲に、ノイズの姿は一体も存在しなかった。

『フェイズ5、クリア。対ノイズ戦シミュレーション・レベル7、コンプリートです』

アナウンスが聞こえると同時に、周囲の風景が荒野から無機質な部屋へ戻る。それを確認したグラフィイトは、先ほどまでの戦いを振り返っていた。

あのノイズとかいう敵。妙な特性があって最初こそ手こずったが、

対処法さえわかれば後は雑魚同然だった。そんなわけでレベル5を瞬殺した後、難易度を上げていき、今レベル7が終わったという所だ。

（まだだ。かなり近づいてはいるが、これではまだ至ることができない……！）

しかしグラフアイトの表情はそこまでよくない。あの怪物との戦いの後から赤色の鎧は緑となり、以前のような圧倒的な力を引き出すことが難しくなっていた。しかしあの時の状況から原因はおおよそ予想できており、この状況を打開するために彼はこうしてより強い敵と戦い続けていた。

『どうかしましたか？』

「……いや、何でもない。まもなく朝が来る、次で最後だ。難易度を上げられるだけ上げろ」

『はい』

少しずつ制限時間が近づいており、結果がどうであれ次が最後の戦いになるだろう。グラフアイトは最終戦に向けて、意識を集中させていった。

場所は変わって操作室。セレナはパネルを操作し、難易度を変更しようとしていた。しかしふとその手が止まり、先ほどまでの戦いに思いをはせる。

(……本当にすごい。このシミュレーターで出てくるノイズは本物同然の戦闘力なのに、彼は聖遺物の加護なしで戦い、圧勝するなんて)

セレナが驚くのも無理はない。シミュレーターで登場するこのノイズと言う敵、実はかなり厄介な性質を持っているのだ。主にそれは二つに分けられるのだが、その内1つは特に関係ないので除外する。

もう1つの厄介な性質。それは「位相差障壁」というものだ。これによりノイズは「現世に存在する比率」を操ることができ、物理的な干渉を減少させる。つまりどうなるのかというと、この性質により一般的な兵器はほぼ無効化してしまうのだ。

しかしこれにも弱点は一応存在する。こちらが干渉できない間は、ノイズもまた干渉できないのだ。詰まる所、奴らが自分たちに接触しようとする瞬間、つまり攻撃してくる間だけはノイズに対し一般兵器も通用するのだ。そしてセレナが纏っていた鎧は「位相差障壁」を弱体化させることで、常に物理的干渉ができるような状況に持ち込む力を持っている。

そしてグラフィイトは「位相差障壁」を知らず、無効化する手段など持たない。なのになぜ圧倒できたか、その理由は1つしかない。

(攻撃できる隙は一瞬。それを彼は1度も逃さず、かつ一撃でノイズを倒している)

外見が変わっていることには驚いたが、その強さは全く衰えていないように感じた。彼には彼なりの考えがあって戦っているようだが、基本的に圧倒しているので鍛錬になっているのだろうか、セレナは少し不安に感じていた。

(どうすればいいんだろう……)

『なにをグズグズしている?』

「あつ、すみません。すぐ始めます。ステージ5・海岸、セットアップ」

考え事をしてしまい、グラフィアイトから催促された。セレナは思考を中断し、戦場を選択して難易度の数字を調整する。

レベル8・9では彼はおそらく満足しないだろう。そう思いその先を見ようとして、セレナはあることに気づく。

「あれ、レベル9の次が10じゃなくて【X】……?」

パネルの難易度の一覧の中に一つだけ存在する英語。他のレベル表記が数字の中、この【X】という文字は一際異彩を放っていた。しばらくセレナは考えていたが、思い当たる節があった。それはしばらく前、ナスターシャから教えてもらったことだ。

「そう言えばローマ数字でXは10を示しているんだっけ。……でも、なんでこれだけ?」

『おい、まだか!?』

「ああ、はい! ではシミュレーション、レベル10を開始します!」

これ以上彼を待たせるのはまずい。そう判断したセレナは準備を整え、レベル【X】のパネルをタッチした。そしてシミュレーションを開始する。

なにかきつかけがあるとしたら、それは間違いなくここだったのだろう。セレナはレベルXをレベル10と判断してしまい、もう一つの意味を知らなかったのだ。

Xとは10であると同時に、未知数であることを示している。尚、シミュレータにはこれ以上の難易度は存在しなかった。

「オオオオオオオオツ!!」

『フェイズXは続行。ノイズ、追加されます!……お、多すぎます!?!』

——その結果がこれである。

手応えはだいぶよくなっていたが、それでもグラフアイトの目標には届かなかった。そのままフェイズ5が終わり、元の部屋に戻ると思っていたグラフアイト。しかし、周囲の風景は採石場が変わっていた。これには彼だけではなく、セレナも疑問に感じる。そして二人の眼の前に表示される「フェイズX」のパネル。

そして次の瞬間、グラフアイトの周囲は大量のノイズで囲まれた。

360°、ありとあらゆる方向から次々に迫りくるノイズ。地上からはカエル型ノイズや人型ノイズが襲い掛かり、空中からは鳥型ノイズが隙を見つけて襲撃してくる。さらにその後方からは爆弾を葡萄の実のように身につけた人型ノイズが仲間であるノイズごとグラフアイトを爆撃してくる。この戦場を上から見ているセレナには、彼を中心にして円状にノイズがみっちり詰まっているのを目視できていた。

一瞬でも気を抜くか立ち止まればすぐさまノイズの嵐が襲い掛かる、そんな場所でグラフアイトは今、戦っていた。そんな中で彼は――

「そうだ、もっと来い! この俺を楽しませろっ!!」

—— 全力で楽しんでいった。常に思考を続け、最速で最適解を導き出す。それを素早く実行し、さらなる手を考える。少しでも遅くなれば間に合わなくなり、一度でも失敗すればそこから波状的に押しつぶされるだろう。

しかしそれこそ、グラフィアイトが望んでいたもの。すぐ隣に死が存在し続ける戦い。この緊張感こそ、彼が鍛錬において何よりも欲していたものだった。

「ハアアアアアツツ!! くらえ、激怒竜牙!!」

ノイズが攻撃するその瞬間を見切り、地上と空中に必殺技を放つ。次々と撃破されていくノイズだが、その数秒後には新たなノイズが襲い掛かる。

『ノイズ、さらに増加! いくらなんでもこの難易度は……!?!』
「黙れ!!」

セレナがシミュレーションを止めようとするがグラフィアイトがそれを遮る。その直後、上空から迫る何かを感知し、後方へ大きく跳ぶ。その直後、今までは圧倒的に違う質量を持ったノイズが着地し、周囲を土煙が覆った。

「……ほお、今度のは随分とデカブツだな」
『今度はギガノイズ!?! この難易度を作った人は何を考えているんですかーっ!?!』

土煙が漂う中、その巨体を見上げたグラフィアイトは眩き、その存在を知っているセレナは頭を抱える。

こちらを認識したギガノイズは芋虫のようなその巨体をこちらに向けてたたきつける。グラフィアイトはそれを避け切りつける。が、あまり有効打にならないと判断して距離をとった。そこで土煙が晴れ、

小型ノイズからの猛攻が再開される。

「ッ、なに!？」

迎撃していくグラフィイトだが、予想外の速度で飛んできた一体の反応が間に合わず、一撃を喰らう。

何とか体をひねったため直撃は避けられたが、この隙は致命的だった。

「ガアアアアッ!!」

次々に襲撃してくるノイズの攻撃を喰らうグラフィイト。いくつかの迎撃は間に合った。しかし一度崩れてしまった以上、崩壊するのは時間の問題だった。

グラフィイト、あるいはその周辺にノイズが衝突して大量の土煙が周囲を覆う。さらに葡萄ノイズの爆弾がそこに降り注ぎ、追い打ちをかけていく。

『っ、グラフィイトさん!!』

「ハア……ハア……」

煙が晴れ、グラフィイトの姿が確認できる。しかし鎧がいくつか欠けており、少なくともダメージを負っているのは見て明らかであった。

「今の、攻撃は……っ!」

再び異常な速度で襲撃するノイズ、それをグラフィイトはほぼ反射で避けることに成功する。そしてその原因を彼が見逃すことはなかった。ギガノイズ、そいつの口と思われる箇所から鳥型ノイズが飛び出していたのだ。

「奴が発射口となっていたか……!」

ならばまずギガノイズを倒す、そう判断したグラフアイトは双刃を構え、突撃する。

まるでミサイルのように次々と襲い掛かるノイズを避け、一部は打ち落としてゆく。そしてギガノイズを射程圏内に捉えた瞬間跳びあがり、双刃に赤いエネルギーを纏わせる。それに対しギガノイズは力を溜め、グラフアイトに猛烈な勢いで突進する。

「激怒竜牙!!」

放たれた十字の剣戟はすぐ近くまで来ていたギガノイズとぶつかり合い、爆発する。ほぼゼロ距離で爆発したためグラフアイトも吹き飛び、周囲のノイズも余剰エネルギーで消滅する。

「フ、ハハハ……!」

地面を転がり、すぐさま立ち上がるグラフアイト。まだ余力はありそうではあるが、かなり消耗している様子。しかしその声色は歓喜しており、感情は昂っていた。

「そうだ。もっと、もっと俺と戦え!」

そこまで言って、グラフアイトはふと仲間の口癖を思い出す。そう言えば彼は楽しくなっていた時、こんなセリフを言っていた。そして今の状況はまさに、彼にとって楽しいモノだ。

「……ああ、心が躍るな!!」

そう叫んで双刃を握りなおす。そして土煙が晴れたら再開されるノイズの猛攻に備え、態勢を整える。

——そして懐の熱に気づき、彼は迷いなくそれを手に取った。

土煙が晴れ始め、グラフィイトを囲んでいた小型ノイズが攻撃の準備を始める。さらにはギガノイズも再び現れ、そのすべてが一斉に彼に向かって突撃した。

「ハアアアアアアアアアアアツ!!」

そしてその直後、彼を中心とした暴風に攻撃中止を余儀なくされる。何が起きたのかをセレナは確認しようとし、彼が今どんな状態なのかを知る。

「アアアアアアアツ!!」

グラフィイトは、その身体から細かいブロックが怒涛のように溢れだしていた。それはまるで竜巻の様にねじれながら空中へ吹き出していく。

そして彼は懐から物体を取り出し、それを上へ向けた。

「来いッー!」

その言葉がきつかけなのか、空中へ飛び出したそれは途中で向きを変え、グラフィイトが持っている物体に吸い込まれていく。この際にも衝撃が発生しており、その激しさからノイズは近づけない状況になっていた。

そしてそのすべてが吸い込まれ、辺りが静寂に包まれる。グラフィイトは手に持つ何かを確認し、それを今度はノイズに向ける。

「……さて、随分と待たせたな。度重なるお前たちの戦いにおいて、俺はさらなる高みに至ることができた！」

そしてその道具——ガシヤットの起動スイッチを押した。

『ドラゴナイトハンター、Z！』

「培養……！」

その言葉と共にガシヤットの向きを変え、彼の鎖骨付近に差し込む。すると接触したところから細かいブロック状の粒子が雷撃と共に発生し、グラフィイトを覆い尽くす。

そして変身が終わった時、再び彼の姿が変わっていた。緑色の鎧は黒色となり、右腕部分は赤色から黄色へと変化していた。また負っていた傷は消え、今までよりもはるかに存在感が増している。

それを確認した彼は双刃を振りかざし、ノイズに向かって駆け出した。

「龍戦士グラフィイトの新たな力、とくと見るが良い!!」

——そして数分後。フェイズXが終了して元の部屋に戻った

時、彼は無傷で立っていた。

「本当にすみません!!」

「……………何がだ?」

目的を果たし、満足して部屋から出てきたグラフィイトを迎えたのは、涙目で謝罪するセレナの姿だった。

「まさかあんなにノイズが出るとは思わなくて。けど、なぜかシミュレータは止めれなくて……………」

「落ち着け、俺は別に気にしていない」

「ですが……………」

「俺はこの鍛錬に満足している。何も問題はなかろう?」

「え、あの。そうなんですか…………?」

ああ、と彼は懐からガシャットを取り出す。その持ち手には「ドラゴナイトハンターZ」という文字と色合いがモノクロなロゴが刻まれている。グラフィイトの姿が初期状態になった前、彼からは二つのガシャットが生み出されていた。ここに自分の力が封じられていると予想した彼は度重なる鍛錬により自身のレベルアップを画策。結果的にレベルXというぶつとび難易度により、彼の経験値は爆発的に上昇。条

件を満たし、ガシヤットの封印が解放されたのだろう。

未だ最強の姿であるグレンジラファイトではなくダークグラファイトだが、グラファイト自身の予想が当たっていることが確認できたので、今回の鍛錬の結果に彼は大満足だった。

「それは？」

「今回の目的だ。あと一歩のところまでは来たのだが、最後の一押しが弱くてな」

最後のあれが良い一押しとなった。とグラファイトは嬉しそうに言う。いつになく上機嫌な彼を見てセレナも穏やかな笑みを浮かべる。

「そうですか。力になれてよかったです！」

「ああ……………ツ、んん……………もう朝が近い。俺は行く」

ようやく落ち着いてきたのか、咳払いをして元のテンションに戻るグラファイト。シミュレーションルームから出ていこうとする彼をセレナはしばしキョトンと見つめ、慌ててシミュレーションルームの電源を落として彼の後を追った。

《See you Next game…………》

第6話 『Sub stageは突然に：前編』

鍛錬の末、制限されていた力の一部を開放することに成功したグラフィイト。なおその時行われたレベルXのシミュレーションはあまりにも無謀な難易度だったため、研究所では使用禁止となった。しかし彼自身はレベルXを気に入り、日本へ旅立つまでの間に何度か使用したという。

そしてここから記すのは、グラフィイトが研究所付近に滞在している1週間の間に起きた出来事をいくつかピックアップしたものである。

【Case 1-1：龍戦士とおさんどん娘】

グラフィイトがその2人のうちの1人と知り合うきっかけとなったのは研究所の敷地内にいた時だった。

「じーーーーー」

「……………」

その日はいつもよりも鍛錬が早く終わり、グラフィイトは少し暇を持って余っていた。そこで彼と戦ったあの怪物について調べてみようと思い立ち、研究所内に瞬間移動してきたのだ。もちろんセレナ達には何も言っていない。

そして研究員に見つからぬよう行動しつつ、資料室へ侵入。付属しであるPCをハッキングし、怪物———どうやらアルビノ・ネフィリムと言う名らしい———についての情報を手に入れることができた。

目的を果たし、ここから離れるために瞬間移動をしようとする。し

かし後ろを向くと、いつの間にか入り口に見慣れぬ少女が立っていたのだ。一体いつからそこにいたのかと内心驚きつつ、自分がいるということを知られないようにするため、少女に近づく。しかしその少女は驚くことも後ずさることもせず、グラフィアイトが近づくのをただじつと見ていた。

「じー」

「……おい」

そして目の前に立ったのはいいが、相変わらずジーと少女はこちらを見つめ続けている。そして業を煮やしたグラフィアイトが声をかけた。

「なに？」

「お前、なぜここにいる？」

とりあえずなぜ少女がここにいるのかグラフィアイトは聞く。本来その言葉がかけられるのは彼自身の方なのだが、そんなことは棚に上げているのだろう。

「1人に、なりたかったから」

「1人に……？ まあそれはいい。おい、俺がここにいたことは誰にも言うな」

いいな、とグラフィアイトは脅すように念押しする。鋭く力強い気配も相まって子供が見たら泣き出す光景なのだが、少女は顔色一つ変えない。

それが少し気になったがグラフィアイトはここから出るため、周囲の気配を探る。何人かが施設内を走り回っているようだが、ちょうど資料室の周りが空いていた。そして誰かが近くに来る前に部屋から出ようとして――

「待って」

——少女に袖をつかまれ、立ち止まった。初対面なうえ、脅された相手に対し呼び止める行為。その気になればすぐにでも振り払えたが、少女が放つ妙な雰囲気になり、グラフィイトは少女の方に振り向いた。

「……なんだ？」

「あなたがいたことは黙る。けどそのかわり、私がここにいることも黙っていてほしい」

「お前は……」

何を言っている？ そう言おうとして、グラフィイトはあることに気づいて一度口を閉ざす。

恐らくだがこの少女、自分を研究所の職員と勘違いしているのではないかと。と。

そこまで予想し、この状況を利用するためにグラフィイトは少女から話を聞くことにした。

「なぜお前の存在を隠す必要がある。お前がここにいるのも妙なことはないだろうか？」

「切ちゃんと喧嘩しちゃったから。……私も熱くなっちゃったし、しばらく頭を冷やしたいの」

年齢の割には冷静だ。少女の話聞いていたグラフィイトはそう思ったが、すぐに頭を切り替える。

切ちゃん、というのが誰のことを指しているのかはわからないが、おおよその状況は把握できた。ならば後は約束を守ると言って、ここから脱出するだけだ。

「……ふん、いいだろう。ならば——」

『調——どこにいるのー!?』

「ッ!?!」

その声が聞こえた瞬間、二人の肩が跳ねた。1人は人が近くに来たことこの緊張感から、もう一人は近くにいるであろう存在を知っていたから。

『調ー?』

「……セレナ」

「ッ、やはりか……!」

これはまずい、グラフィアイトは策をめぐらせる。セレナに出会ってしまったら、自分が職員であるという誤解を晴らされる可能性があるのだ。かと言って人間の前で瞬間移動するわけにはいかない以上、この部屋内でどうにかするしかない。

『……声が聞こえた。ここにいるのね?』

「おい、こっちに来い!」

「っ!」

「調、切歌と喧嘩したって本当なの……って、あれ?」

いない……、と部屋に入ったセレナは周囲を見渡す。絶対いると思っていた部屋の中には誰もおらず、本棚の隙間や机の下なども探し

てみるが、人ひとりいなかった。

「んー、気のせいだったのかな……?」

最後に部屋を見渡して、セレナは資料室を出ていく。そして再び調という少女の名を呼びながら、その声がどんどん小さくなっていった。

——そしてその声が完全に聞こえなくなった時。グラフィイトは腕に抱えた少女と共に天井から飛び降りる。

なんとこの男、セレナが部屋に入ってくる直前に少女を抱え、忍者よろしく天井に張り付いていたのだ。

「なんとかなったか……」

「……あの、ありがとう」

「?……ああ、気にするな。約束を違えぬためだ」

お礼を言う少女にグラフィイトはそう返しつつ、再び周囲の気配を探る。そして誰もいないことを確認し、今なら安全に脱出できると判断した。

「ではな。俺は行く」

「うん、またね」

少女が最後に何か言っていたがグラフィイトはすぐに部屋を出ていったため、その言葉に気づくことはなかった。

「…………うん。ビックリするぐらい真っ直ぐで、意外なほど不器用」

セレナの言ったとおりだね。そう呟きつつ少女——月読調は、喧嘩した親友とどうすれば仲直りできるのか、1人資料室で考えていた。

【Case 1—2：龍戦士とデース】

「……………はあ」

「どうしたんです？……………は、まさかこんな美人と一緒にいられるからってうれしすぎるため息デースか!？」

(ゴッ!!)

「殴るぞ」

「も、もう殴ってるデース……………」

なぜこうなった。この時のグラフィアイトの感情は、これに尽きていた。

例の研究所侵入の次の日。以前見つけた崖の上で休んでいた所、グラファイトがいる方向へ歩いてくる存在を感じ取ったのが始まりだった。

ここは道から大分外れた場所にあり、普通に考えて人間は通らない。不審に思ったグラファイトはその気配の持ち主が見える場所に移動する。そして木の上から覗いてみると、そこにいたのは1人の少女だったのだ。その少女の服装は動きやすそうではあるがラフな格好であり、間違ってもここのような森林に入る服装ではない。なおかつその少女は荷物を1つも持つておらず、更には常に周りを見渡しなからおどおどと進んでいた。

そこまで確認した時、少女が今どんな状態なのかはグラファイトでもわかった。間違いなく彼女は今、迷子なのだろう。

「……………ふん」

彼女は迷子である。グラファイトはそう判断したが、助けに行こうとはせずに木の上に留まっていた。眼下に移る少女は無害に見えるが、かといって無条件で助けに行くほど彼は善良な存在ではない。しばし観察した後、この場を去るつもりであった。

「うう、ここはどこデスカ…………？ 勢いで出ちゃったとは言え、こんな所ママやマリアから聞いたこともないデスし…………」

風に乗って少女の声が聞こえる。何やら独特な口調だが、今の言葉で彼女が迷子なのが確定した。見た限りでは幼いため、感情に流されるまま家出をした。とでも言った所だろうか。

そしてその内容より気になる内容が1つ。それは少女の言葉にあった人物名だ。

「ママ、それにマリアだど？……まさかあいつ、研究所の奴か」

以前セレナから、自分も含めて研究所には何人もの子供が住んでいることを聞かされていた。研究所こそ自分たちの家であり、だからナスターシヤのことをママと呼んでいるのだとも。そしてマリアと言えば、セレナの姉の名が確かそれだったはずである。

それにしてもそれが本当なのだとしたら、随分と走り続けてきたことになる。この森林は町はずれにあり、研究所もまた町はずれにあるとはいえ、その直線距離は結構長い。少女ほどの体格では1、2時間はかかる距離ではなからうか。

「き、きついデース……行けども行けども森ばっかり。どっちに行けば研究所に帰れるデスカ……？」

「……………」

……待て、今俺は何をしようとしていた？ 自然と降りそうになつた足を止め、グラフィイトは思いなおす。

俺には関係ない。迷った拳句少女が死ぬのなら、それが自然の運命だ。そう己に言い聞かせ、早めに立ち去ることにしたグラフィイトは瞬間移動を使おうとして――

「もしかして、私もう帰れないデスカ？……もう、みんなに会えないデスカ？ マリア、セレナ、調、みんな……」

「……………」

瞬間移動を――

「っ、えぐ……ああううう……」

「…………っ、ええい！」

——その行動を取りやめ、グラフィイトは少女から離れた場所に飛び降りた。そして彼女の元へ歩いていき、背後から話しかける。

「おい、ここで何をしている？」

「……………ふえ？」

少女は振り返る。その顔は不安からか涙があふれ、鼻水まで出ている有様だった。

「見た所、森林浴ではなさそうだが。…………成程、迷い子か」

「……………デ、デースッ!!」

「なっ!？」

どうすればさっさと研究所まで送れるか、そんなことを考えていたグラフィイトは突如腹部に衝撃を受ける。どうやら感極まった少女が腰にタツクルをかましたようだ。

「救世主デス、ヒーローデス、英雄デスウウウ!!」

「ええい離れる！ 顔をつけるな！ どさくさに紛れて俺の服で鼻をかむなっ!!」

「ご、ごめんなさいデス。もう駄目だと思っていたところに来てくれたので、つい…………」

「全くだ…………で、お前は迷い子でいいのか？」

「うつ、その通りデス……」

少女は歩きながら目をそらす。その様子を見たグラフィイトはそうか、とだけ言って歩き続ける。

そしてとくに会話もなく数十分後。森林を抜け二人は道に出ている。

「お、おおおおおおお！ 道に出たデス！」

「そうだな、それでお前の拠点はどこだ？ 場所が分かるのなら道を教えるが」

舗装された道路を見ただけで大きなりアクションをとる少女に対し、グラフィイトは淡々と問いかける。それを聞いて少し少女がガクツとなるが、すぐに姿勢を戻して身振り手振りを交えて説明をする。

「研究所デスよ。こーんなにデツカイのデス！」

「……なるほど、あそこか。ならばこちらだ」

正直、まるで説明になっていない。しかし、あたかも少女の説明でわかったようなふりをして、グラフィイトは研究所の方向に向かって歩きだす。それを見た少女は上機嫌でにその後をついていった。どうやら少女は自分の言葉をしっかりと理解してくれたこと、自然から人工物に戻ってきた事による安心感などから、大分調子が戻っているようだ。

その傾向だろうか、少女は道中グラフィイトに様々な話題で話しかけてきた。それに対し彼は適当に返事をしているだけだったのだが、彼女にとってはそれでも構わないようである。

——その話をいくつか交えた結果、最初のようなやり取りが行

われる位にぞんざいな扱いをするようになってしまったのだが。

後ろからピーピー何か言っている気がするが、グラフィイトはそれを無視する。そして前方の景色を注視していると、人工の建造物が見えてきていた。

「もうすぐだ、このままいけばじきに街にたどり着く」

「話を聞いて……って、もうこんな近くまで来てたんデスカ」

どうやら少女はあの町のことは知っていそうだ。ならば街に着いた時点でグラフィイトの役割は終了するだろう。というより、正直彼はさっさと道案内を終えたがっていた。ハイテンションでずっと話しかけられるのは結構疲れるみたいである。

そして案内し始めてから1時間半。街の入り口へたどり着いた少女は腕をぐくつと上へ伸ばす。

「暁切歌、街へ帰還デス！」

「後の道はわかるな？」

「はい、もうバッチリデスよ！　ここまで案内してくれてありがとうデス！」

そう言ってグラフィイトに少女——切歌は頭を下げる。それを聞いたグラフィイトは気にするな、とだけ答えた。

「……あ、そういえば自己紹介がまだだったデスね。私は暁切歌デス！　お兄さんの名前は何デスカ？」

「名乗るつもりはない、俺はただ案内をしただけだ」

自己紹介も何も先ほど自分で言っていた気がするが、そこは華麗にスルー。妙な情報が研究所内へ流れないよう、グラフィイトは名乗らずに街から出ようとする。しかし切歌がそれを許すはずもなく。

「良いから教えるデス！ 私は受けた恩は一生忘れないデスから、いつかお兄さんがピンチになった時に颯爽と助けに行くデスよ？」
「そんな時は決して現れん、さっさと帰れ！」

切歌が腕にしがみついていたので素早く振りほどき、グラフィアイトは建物の裏へ走る。そして切歌を含む人間の視線が途切れた一瞬のスキをついて瞬間移動を使い、別の建物の屋上へ移動した。

「……なんだったんだあいつは」

『どこいきやがったデスカー!!』

「……………」

町中へ響く声を聞き、再び出そうになったため息を抑えてグラフィアイトは街から離れていった。なお瞬間移動を行う彼の背中にどことなく哀愁の雰囲気があったがそれは気のせいである。

——その後、研究所内で切歌が家出中に迷子になったことが判明した。その際に道案内をしてくれた男の姿を切歌が話したのだが、とある少女二人がその正体に感づいたのはまた別の話。

《See you Next Sequel……》

第7話 『Sub stageは突然に：後編』

【Case 2：龍戦士とたやマさん】

セレナが二人を見つけた時、二人は険しい表情でにらみ合っていた。

「私、あなたのこと嫌いよ」

「ほう、それは奇遇だな」

「あ、あのー。二人とも落ち着いて……」

「……………」

「あわわ……」

なにがどうしてこうなったの、睨みあう二人をどうにか落ち着かせようと必死に思考するセレナは内心思わずにはいられなかった。

思っていたより早かったな。グラフィアイトは対面している少女を見ながら内心思う。

マリア・カデンツアヴナ・イヴ。F・I・S研究所にいる子供たちの中で最年長であり、セレナの姉でもある。あの時現場にいた一人であり、グラフィアイトの事は大切な妹を救ってくれたということ、お札を言いに来たときはずいぶん態度が柔らかかったのを覚えている。

だがグラフィアイトは彼女を見た時、彼女は自分とは相容れないという直感を感じ取った。なので何時かはマリアとは対立するだろう、と言うのもわかっていた。ただその時が今になったというだけ

だ。

「必要なのは力だ！　いくら意志があろうが、力がなければそれは妄言となる」

「いいえ、必要なのは意志よ！　意志なき力なんて、それはただの暴力」

なぜ二人が対立しているのか、この会話だけでわかるだろう。何がきっかけだったのかはセレナにはわからないし、いつの間に二人が知り合っていたのかもわからない。しかしセレナにとって重要なのは、この話題においてグラフィイトとマリアは水と油の関係になっているということだった。

「歴史からもわかるだろう？　常に世界を支配してきたのは、力あるもの！　想いだけでは何もできない」

「何を言っているのかしら？　意志のない人が支配した先にあつたのは、革命による衰退！　その革命だって、当時の状況を何とかしたいという人々の想いが集まったからこそ達成されたの」

「だがその革命とて、力なくては成しえなかつた」

違うか？　グラフィイトは目にその言葉を込めてマリアを見る。それを受けて彼女は言葉が詰まる。

「……力が不要とは言わないわ。けれど、力は意志によって制御しなければ暴走する」

「現実から目を背けるな。その結果人間は理想に目が眩み、何度もその身を滅ぼしてきた。ただの愚か者だ」

「なにを……！」

「ストップ、二人とも熱くなりすぎだよ！」

これ以上はまずい。そう判断したセレナは二人の間に無理やり入

る。グラフィイトは気づいていたようだが、口論に熱中していたマリ
アは突如入ってきたセレナに驚く。

「セレナ!? でも……」

「でもじゃなくて!」

「……………ふん」

「あつ…………」

セレナが続けようとするマリアをなだめている間に、グラフィイト
はその場を立ち去る。その後ろ姿を見たセレナは一瞬追いかけてよ
うとしたが、まずマリアに話を聞くことにした。

「姉さん、何があつたの?」

「…………別に、何も無いわよ」

しかし気まずそうにマリアは目をそらすだけで、何があつたのかは
答えようとはしない。こうなったマリアは意地でも言おうとしない
ということも昔から知っていたセレナは、ハアとため息をつく。そし
てふと気になっていることを聞いてみることにした。

「けどびっくりしたよ。姉さん、いつの間にグラフィイトさんと話す
ようになったの?」

「知り合ったのは少し前。セレナを助けてくれたお礼を言いに行つた
のがきっかけだったわ」

「そうだったんだ…………」

今日会ったのは偶然ね、とマリアは続ける。それを今まで全く知ら
なかったセレナは驚き、マリアから何とか話を聞きだそうとすること
を心に決めた。そしてまず手始めに、彼女は姉を連れて近くの喫茶店
に消えていった。

強いが故に力こそすべてだと断じるグラフィイトと、聡明で優しいが故に理想に縋るマリア。
相反する思想を持つ二人。少なくとも今、二人の道が交わることはないのであった。

【Case 3：食事もまた鍛錬】

「……これは、どうしたものか」

森の奥深く。ここ最近拠点としつつある洞窟内で、グラフィイトは目の前に転がる物体を見ていた。その大きさはグラフィイトほぼ同じくらいだが4足歩行で、厚い毛皮で覆われている。

拠点に侵入してきて襲い掛かってきたので殺したその存在——
—その名も、猪。

「俺が奪った命、食わぬわけにもいかないが……丸焼きにするとしても道具が足りんな」

グラフィイト自身はバグスターであり、食事は必須ではない。しか

し自らの手で奪った以上、可能であれば食べるのが龍戦士としての彼の思想だった。

かといって流石にグラフィアイトファングを包丁として扱うのには無理がある。グラフィアイトはしばし考え、調達するための手段を思いつき、洞窟から姿を消した。

「……ナイフしかなかったが、これさえあれば十分か」

準備が整い、猪の解体を始めていく。まず毛をすべて引き抜き、四肢を関節から切断する。そして顎骨の下からグルリと首にナイフを入れ、脊髄ごと頭部を切り落とす。次に腹を割いて内臓を取り出し、近くを流れる川の水で洗う。これで下準備は完了だ。

本来なら専用の道具がなければ到底できないが、グラフィアイトはナイフを使う作業以外は素手で豪快に進めていた。

「油さえあれば骨も食えたのだが……」

無い物ねだりをしてもしようがないため、今回は見送ることにした。そして解体した肉塊のうち、半分を棒につるして固定し、火がついている焚火の上へつるす。後は時々回しつつ待つだけだ。

——そして時は過ぎ、始めた時には昇っていた太陽もすっかり落ちてしまった頃。グラフィイトの眼前には美味しそうに焼き色がついた猪肉があった。

解体しているとは言えさすがの巨体。油がしたたり落ち始めるまでに2時間半、全体に火が通るまでにさらに2時間半。合計5時間もかかってしまった。ちなみにその間グラフィイトはちよくちよく肉を回しつつ鍛錬していたのだが、それは些細なことである。

「いただきます」

巨大な肉塊にかぶりつく。細かい下処理なんてせず、塩胡椒等の調味料も使っていない。猪肉特有の獣臭さがあるが、噛む度に肉から溢れ出てくる脂がアクセントとなり、非常にシンプルな美味しさがそこにはあった。

食べ勧めつつ、グラフィイトはふとこの味に懐かしさを感じていた。それはグラフィイトバグスターとしてではなく、ドラゴナイトハンターZの龍戦士グラフィイトとしての記憶。あの頃は狩ったモンスターをこうして調理し、仲間たちと食卓を共にしていた。

「……いつの間にか、妙なところまでできたものだ」

——数十分後、あれだけ焼いてあった肉は1つとして残っていない。食事を終えたグラフィイトは毛皮を風呂敷のように扱い、中に内臓と頭、そして骨を詰める。これらを食することはできないので、自然に返すつもりのようなのだ。

準備が終わり、毛皮と残してあった生の猪肉を抱え、洞窟から出ていく。誰もいなくなった洞窟には、まだ消えてない焚火だけがパチパ

チと音を立てていた。

モンスターがひしめき合い、それを狩る「ドラゴナイトハンターZ」。その記憶を保持しつつバグスターとして人間と戦う「仮面ライダークロニクル」。この2つの記憶はどちらもグラフィアイトにとって大切な記憶であり、思い出であった。

現時点でこの世界がどのようなものかはわからず、それ故にこの世界での明確な目標も完全には定まっていない。

これから何を為すべきなのか。それを決める期限が迫っていることを、彼は心のどこかで感じ取っていた。

《See you Next game……》

第8話 『定められたF a r e w e l l』

「……忘れ物は無し、と」

ベッドの上に並べてあるものを確認し終え、セレナは呟く。そしてそれらをキャリーケースに入れてゆき、それを持って部屋を出る。

キャリーケースの転がる音が廊下に響く。今の時間帯、子供たちは外で遊んでいるはずなので、とても静かだ。

そしてしばらく歩いていると、廊下の向こう側からマリアが歩いてくる。どこかへ行こうとしていたがセレナに気づき、彼女の元へ近づいていく。

「セレナ、おはよう」

「姉さん！」

おはよう、とセレナはマリアに挨拶を返す。それに対しマリアは微笑み、彼女の荷物を見た。

「……もうこの時期なのね。また1か月？」

「ううん、半月だけだよ。今回は主に調整だけらしいから」

「そう。気を付けてね、セレナ。……向こうの先生に迷惑かけちゃダメよっ。」

「もう、姉さん！」

セレナの声にマリアはクスクス笑いながらじゃあねと言って、庭の方へ向かう。多分既にいる二人と合流して子供たちの面倒を見るつもりなのだろう。

「って、もうこんな時間。まだ余裕はあるけど……」

彼を待たせるわけにもいかないだろう。セレナはそう判断し、できるだけ急いで空港に向かうことにした。

「ママ、こんにちは！」

「こんにちは、セレナ。忘れ物はありませんね？」

「うん、大丈夫だよ」

空港に到着したセレナは案内された部屋に入り、既に座っていたナスターシヤに挨拶する。彼女は挨拶を返し、向かいのソファに座るよう促した。

それに従ってソファに座り、時計を見る。離陸予定時間まで30分、十分余裕を持って来れたと言えるだろう。

「彼はまだ来ていないようですね」

「ふうー……あ、多分そこは気にしなくていいかな」

ナスターシヤがふとこぼした言葉に対し、セレナは出されたココアを冷やしながら答える。苦笑しているセレナを見てしばし考えたナスターシヤは、ある事に気づいてああ、と言葉を漏らした。

「……そう言うことですか。随分と、彼のことがわかるのですね」

「そんなことないよ。私が知っていることなんてあの人の表面、その

ほんの一部なんだもん」

セレナは否定し、ココアをチビチビ飲む。

彼と何度か話せているだけでも十分だと思っただけけれど。そうナスターシヤは思ったが、口にする必要はないと判断してコーヒを飲む。

「そうだママ。今度のお土産は何がいい？」

思いだしたかのようにセレナはポンと両手を合わせ、ナスターシヤに聞く。彼女にとって日本遠征は初めてではなく、何度かお土産を持って帰った。しかし珍しくとも何度も同じ物を持って帰ったら飽きられてしまうだろう。

そこで今回はみんなにリクエストを聞いてきたのだが、彼女だけはまだだったのだ。ちなみにそのリクエストを抜粋すると以下のとおり。

『そうね、携帯できる将棋セットとかがあると嬉しいわ』

『おせんべいが欲しいデース！』

『缶詰、保存のきく食べ物は大変』

『『おもちゃ!!』』

「……なるほど、でしたら醤油を。やはり本場の物が一番おいしいですからね」

「うん。まかせて!……ママ、本当に醤油が好きなんだね」

「もちろん。醤油こそ最高の調味料ですよ」

ナスターシヤの答えを聞き、セレナはそれを承諾する。そして彼女が本当に醤油が好きなのを再確認し、向こうで会う人に美味しい醤油について聞いてみようかなと考える。

そしてふと時計を見ると、予定時刻まで15分になっていた。そろ

そろ出ようかとセレナはキャリーバッグを持ち、席を立つ。

それを見たナスターシャは彼女の前に立ち、USBメモリを差し出した。

「これは？」

「向こうであの方に会ったら、これを渡してください。概要は先に送ってありますが、おそらく彼女は詳細を欲するでしょうし」

「あー、確かに……」

セレナは苦笑いしつつ受け取り、バッグの中にしまう。そして部屋の出口に向かって歩きだし、その手前で振り向く。

「じゃあママ、行ってきます！」

「いってらっしゃい。良い旅を」

笑顔で手を振ったのち、彼女は飛行場へ向かって部屋を出た。部屋はナスターシャ1人だけになり、彼女は残っていたコーヒーをすべて飲み干す。

「……私も行きますか。まず無謀な難易度を作成したウエルキンゲトリクス博士を問い詰めなければ」

「来たか」

「はい。……やっぱり直接乗っていたんですね」

「……ふん」

「そろそろ時間です、準備は良いですか？」

「ああ」

『定刻となりました。システム、自動モードで起動します』

電子音声が響き、二人が乗る小型飛行機が動き出す。

滑走路の上を走るそれは徐々に加速していき、地上を離れて空中へ。高度はどんどん上がっていき、遂に雲を突き抜けて青空が顔を出す。

「わあ、やっぱり綺麗……！」

「……………」

『軌道が安定しました。これより10時間、席を離れることができま
す』

セレナは目を輝かせながら外の景色に感嘆の声を漏らす。そして
グラフィイトは無言だが、静かに青空に見入っていた。

そして時間は過ぎていき――

「……………ようやく、戻ってこれたか」

朝に出た飛行機がその地に着いたのは、すでに日が暮れた時間帯。
徐々に高度を落としていき、飛行機が雲の下に出る。そして窓から見

える夜景を見ながら、グラフィイトは静かに呟いた。

あと10分もしないうちに、この飛行機は地に着くだろう。それを確信し、ふと反対側の席を見る。

「……ん、すう……………」

「……………はあ」

そこに座っていたセレナは、すやすやと眠っていた。朝早くから準備していたのだろうか、昼を過ぎたあたりで彼女は眠りだし、結局今まで寝続けていた。

そうこうしているうちに飛行機は着地し、速度が抑えられていく。それを確認したグラフィイトは席から立ち、眠っているセレナの肩を乱暴に揺らす。

「おい、起きろー!」

「……………ふあい?」

「もう目的地だ。……世話になったな」

「え?……………あ、ちよつと待ってください!」

さつさと飛行機から降りるため歩くグラフィイト。それを見て目が覚めたのか、セレナも急いで飛行機から降りる。

「もう、行っちゃうんですね」

「……………ああ」

滑走路の上で並んで歩く二人。セレナは少し寂しそうに確認し、グラフィイトは淡々とそれに答える。

「そうですか。目標が達成できるといいですね」

「……………そうだな」

グラフィイトは短く答え、ただ前を見ている。その横顔を見ながら、セレナは色々な話を彼に振っていく。

日本の美味しい物や観光名所、研究所であった出来事やレベルXの製作者についての話題。いろいろなことをセレナが話し、グラフィイトは前を歩きつつ静かにそれを聞いていた。

そしてしばらく歩き、滑走路から出る手前まで行く。そこでグラフィイトは立ち止まり、振り返って静かにセレナを見る。その様子に彼女は少し戸惑ったが、同じようにじつと彼を見た。

しばらくそれが続き、ふとグラフィイトが別の方向を見る。同じ方向をセレナも見ると、その方向から車が走ってくる音が聞こえていた。

「……………時間だ。今度こそ世話になったな」

「はい。……………グラフィイトさん！」

セレナと距離をとるグラフィイト。彼がもうすぐいなくなることを感じたセレナは、最後に言いたいことを伝えるため、大声で呼びかける。

「あの、改めてありがとうございます！ あなたののおかげで、私は今ここにいます」

「……………」

「そして、さようなら。あなたの目的が叶うことを、私も願っています」

「……………ああ」

その返事を切っ掛けに、彼の身体が崩れ去っていく。その様子をジッとセレナは見守る。

たった1週間。その中でも彼と話せたのは両手で数えられる程だ

が、それでもセレナにとって大切な思い出となっていた。そんな相手と、もう会うことはもうないかもしれない。そう思うと何かがこみ上げてきそうになるが、彼女はそれはしまいと必死でこらえていた。

そしてグラフィアイトの身体が消えていき、その場からいなくなる直前。彼は静かに口を開いた。

「さらばだ、セレナ」

「っ！」

初めて呼んでくれた名前。それを聞いてセレナは何か言おうとするが、その場には既に誰もいなかった。彼女一人だけとなり、立ち尽くしていたところに件の車が近寄ってくる。

そしてドアが開き、1人の女性がセレナに駆け寄っていく。

「ごめん、セレナちゃん。遅くなっちゃって……あら？」

「……いえ、大丈夫ですよ。行きましょう、櫻井先生」

「もー、了子さんで良いのよ？……そ・れ・よ・り・も」
「？」

「しばらく見ない間に、随分女の子になったわねー！ 何があったの、やっぱり恋？」

「いいえ、違いますよ」

「またまたそんな……って、ありやいや。もう時間が押ししちゃってるし、話の続きは車の中でしましょうか？」

「はい。今回もよろしくお願いします、了子さん」

「まっかせーなさーいー！」

そして二人は車に乗り、飛行場を離れていった。

«
S
e
e

y
o
u

N
e
x
t

g
a
m
e
:
:
:
»

第9話 『動き始めるGame!』

太陽が昇り、今日も人々は動きだす。

ある人は学校に、ある人は会社に、ある人は遊びに、ある人は趣味を謳歌しに。目的がバラバラだが様々な人間が外を出歩き、朝から街は騒がしかった。

そしてその一角にある図書館、その二階。そこは今日が平日なのもあって人は少なく、閑散としていた。

その隅。ただでさえ少ない人間が更に少なくなる個別勉強室、そこにグラフィイトは座っていた。

「……………」

パリリと本のページをめくりつつ、パソコンの画面を眺める。1時間前からグラフィイトはここで調べ物をしており、それも終盤に差し掛かっていた。

そして数十分後。調べ物が終わったのかグラフィイトはパソコンの電源を落とし、読み終えた数冊の本を返却ボックスにいれる。そして周りに人の目がないことを確認し、彼はその場から姿を消した。

場所は変わり、とある建物の屋上。安全面の観点より立ち入り禁止になっているその場所の貯水タンクの上に座り、グラフィイトは手に持つ紙を眺めながら考え事をする。

日本へ戻り、セレナと別れてから1週間。グラフィイトは日本中を移動し、様々な手段で調べ物をしてきた。時に本を読み、時にハッキングして情報を集め、そして時には自身の記憶にある場所へ立ち寄った。

今回の調査で調べたこと、それはグラフィイト自身の記憶にある要素はこの世界に存在しているかどうかである。日課の早朝鍛錬以外はすべて調査に費やし、グラフィイト自身でできる限界まで行った。故にこの結果にはかなりの信頼度があるだろう。

そしてグラフィイトが見ている一枚の紙。そこにはこの世界にも存在する要素が単語でいくつも記してある。

一部を抜粋すると『マイティアクションX』、『タドルクエスト』、『バンバンシューティング』、e t c, e t c……。これらは元いた世界同様、ゲームとして発売されていた。もちろんその中には『ドラゴナイトハンターZ』もあり、攻略ページを見た所、敵キャラであるグラフィイト自身に関する記述もあった。また発売会社が『幻夢コーポレーション』であることも同じだったが、社長は少なくともグラフィイトの知る人物ではなかった。

「そして、この世界に存在しない要素……」

それがこれか。とグラフィイトは紙を裏返して、そこに記されている単語を眺めていく。

その単語は『聖都大学附属病院』、『電脳救命センター』、『衛生省』、『仮面ライダークロニクル』。

——そして『ゲーム病』に『バグスターウイルス』。
これらが示す真実は、一つだった。

「ここは俺がいた世界ではない、か」

紙をクシヤリと握りつぶし、確かめるかのように呟く。意外なことにこれを確信した時、あまりグラフィイトの心は揺れなかった。

正直なところ、薄々感づいてはいたのだ。アルビノ・ネフィリムにセレナが纏っていた聖遺物、ノイズと言う未知の敵に怪人態となったグラフィイトを見た時の彼女たちの反応。あれは確実にバグスターと言う種族を知らないからできるものだ。いくら海外進出しなかったとはいえ、あの出来事は日本国内で秘匿できるものではない。

アメリカにいた時から感じていた違和感。それが今回、明確な形となって彼の前に現れただけだったのだ。

「わかっていた。わかってはいたんだ……」

だがしかし、それでもグラフィイトは心のどこかで期待していたのだ。仲間たちと再び出会い、肩を並べて戦う事を。

心の整理を付けるため、彼は瞬間移動する。そして移動したとある山奥、人ひとりいないその場所にとある岩の上に座り、目を閉じて瞑想する。

わかり切っていた真実を受け入れるため、これからの行動に支障を来さないため。再び目を開けた時にはいつもの自分に戻れるよう、今の彼には静かな時間が必要だった。

「……………ここか」

日も暮れ、草木も眠る時間帯。グラフィアイトは街に戻り、とある場所を訪れていた。

それを見つけたのは偶然で、きつかけはF・I・S研究所に侵入した時に得た情報。そこにはノイズや聖遺物に関する記述があり、その先駆者が日本人であるといったこと等が記されていた。

そこでグラフィアイトが注目したのは聖遺物だ。はるか昔より存在し、神が作ったと伝えられている武器。これを手に入れることができれば、さらなる強さを得ることができないか。そう彼は考えていた。

そして聖遺物に関する研究を行ってきた日本の機関。それを改組した組織の拠点が今、彼の視界に入っている。

「特異災害対策機動部二課……随分と長い名称だな」

さて、どうするか。とグラフィアイトは侵入するための作戦を練る。最初はネットワークから特異災害対策機動部二課のサーバーにハッキングしようかと考えた。が、そこは流石に国直轄。情報管理は徹底されており、付け入るスキがなかった。

ならば直接叩くまで。グラフィアイトがその発想に至るまでにかかった時間は長くなかった。

そんな訳でこうして件の建物までやってきたわけだが、案の定警備

員が出回っている。周囲を探っていくが、警戒網の網に隙間はない。

「誰にも気づかれず行くのは無理か。……ならば」

ならば、手段を変えるまで。攻略法を決定した彼は、再びその場から姿を消した。

今日は満月か。いつものコースを回りながら、男性は夜空を見上げる。

都会の中に建っているとはいえ、ここは夜空が綺麗に映る。今夜は晴れであり、星と月が爛々と輝いていた。

「おい、油断するな」

「わかってるさ。仕事はしつかりこなすよ」

空を眺めているのがばれたのか、隣を歩く同僚から注意を受ける。それに対しては男性は気を緩めていないことを伝え、再び周りに目を向ける。

第二次世界大戦後から存在する風鳴機関、それを改組した特異災害対策機動部二課が新設され二年。ようやく軌道も安定し、引き継ぎもほとんど完了したこの時期。一番緊張していた時期が過ぎたことで、男性は少しだけ緊張感が緩んでいた。

——そして幸か不幸か、この隙は彼にとって決定的なものだった。

ドサリ、と後方から音が聞こえる。男性はそれを聞いた瞬間すばやく振り返り、音の発生源を探す。

そしてその発生源はすぐ近くだった。

「なっ……!?!」

倒れていたのは、先ほどまで一緒に歩いていた同僚だった。それを確認し、緊急用の通信機を使うために手を伸ばす。

「なかなかの判断力だ。だが、一手遅い」

そして伸ばした腕は、側方より出てきた腕につかまれる。その腕は緑色の鎧に包まれていて、明らかに一般人のそれではない。

誰だ、声の主に警告しつつ、男性は懐の拳銃を取り出そうとする。しかしその言葉を発することはなく、同僚と同じ様に意識を暗闇に落とされていった。

多くの星がちりばめられた満天の夜空。それを見ながら、グラフィアイトは考えをまとめる。

欲しいものは手に入った。後はこれを基に、場所を突き止めるだ

け。

あの資料を見る限り、聖遺物は世界中に散らばっているらしい。研究報告書はもちろん、伝承されている神話や現地民にのみ伝わる御伽噺など。それらをまとめたことで聖遺物がありそうな場所はいくつか目星がついた。

そしてその他にグラフィアイトが得た新情報はもう一つ。それは聖遺物が納められている遺跡には、奪われることを防ぐための防衛機構があるという事。そしてそれは旧文明の技術力で作られており、どれもこれも一般人ではどうする事も出来ない危険物であるということだ。

「宝を得るにはまずその門番を倒す必要がある、か。むしろこちらから挑戦したい程だ……!」

それを知り、グラフィアイトは歓喜した。ちょうどここ最近、新たな鍛錬相手を欲していたのだ。

やはり実戦の中でこそ、己が力は磨かれる。そう思っているグラフィアイトにとって、それはむしろ朗報だったようだ。

「では行こう。まずは……あそこからだ」

そしてグラフィアイトは姿を消した。新たな力を得るために。そして、新たな強者と戦うために。

次の日の朝、衝撃の事実が日本政府に伝えられる。その内容は特異災害対策機動部二課に侵入者が現れたというものだった。

警備員を全て行動不能にしたその侵入者。そのあまりの手際の速さに、事態が発覚したのが定時連絡の時だったという。しかし聖遺物が盗まれた報告はなく、データが盗まれた形跡も何かしらの機器が接続された痕跡も一切ない。そして監視カメラに姿は映っておらず、警備員が無力化された際の映像には激しいノイズが走っており確認する事も出来なかった。

静かに現れこちらの戦力をすべて無効化し、何か奪うわけでもなくその場を去る。それはまるで『お前たちのデータなんていつでも奪える』と、日本政府に対して宣戦布告をとっているかのように思えた。

これに対し日本政府は秘密裏に警戒態勢をとることを決定。今現在、特異災害対策機動部二課はノイズ対策における先端組織であり、そのアドバンテージを失うわけにはいかない。これをきっかけに安全性が見直され、施設までの侵入路は少なくし、移動手段を絞ると言う改装措置が行われたとか。

——そして何より気になるのは、その侵入者と相対した警備員からの証言だ。

「奴は人間じゃない。俺が対応しようとした時、奴は何もないところから現れた」

彼曰く、まるでドラゴンが人の形をとったかのような姿。力はとて

も強く、握られた右腕はピクリとも動かなかった。そして痛みを感じ
る間もなく、一瞬で意識を刈り取られたとのこと。もしそれが本当な
のなら、相手はいったい何者なのだろうか？

突如現れた正体不明、目的不明のその存在。

ただ一つ分かること。それは、そいつの力量はこちらを上回ってい
るという事実だけだった。

《See you Next game……》

第10話 『紅槍少女のEveryday』

——あの日の光景を、私が忘れることはないだろう。

『ノイズ!? よりによってこの場所に……!』

『全員逃げろおお!』

何事もなく終わるはずだった遺跡発掘。両親について来た形で、私もその現場にいた。しかしそれは、目的の物を発掘した瞬間に崩れ去ることとなった。

『来るな……くるn』

『っ、イヤアアアア!』

『二人とも、こつちだ!!』

周辺に突如現れたそいつらの名は、ノイズ。国連総会にて認定された特異災害であり、人類の天敵。

奴等に触れられた瞬間に体は炭化し、人間だけを襲う化け物。その襲撃を受けた私たちは、次々とその餌食にかかっていく。

『父さん、母さん!』

『こつちよ! こつちよえ抜ければ……!』

『っ、危ない!!』

『……え?』

『父、さん?』

そして厄災は容赦なく、私の大切な人も奪っていった。

パニックを起こしそうになった私を母さんは激励し、その命を代償に私の逃げ道を確保してくれた。

『父さん、母さん……。ごめんなさい、ごめんなさい……。!』

——しかし、だからと言って無事生還できるほどのこの世は優しくな
い。

ようやく見えてきた出口。そこから漏れる光を見て希望を抱き、全
力で出口を抜ける。

『やったー……………え？』

そこにいたのは、数多のノイズ。奴らは遺跡内部だけではなく外に
も沸いていたのだ。そして私の存在に気づき、一斉に向かってくる。

『……………ここまで、なの』

希望など一切ないその光景を見て、私はへたり込む。全力で遺跡の
通路を走り抜け、既に息は絶え絶え。精神的にも身体的にも限界だっ
た。

……………あんなに頑張ったのに、結局は無駄に終わるのか。

『そんな、わけない……………！』

脳裏に浮かぶ言葉を即座に否定し、近くに転がっていた採掘道具を
手に取る。結構重量があり取り回しが悪いが、ないよりはましだ。

『父さんと母さんが、命をかけて繋いでくれた……………！ ならこの程度
で、生きるのを諦めてたまるかよッ!!』

自分を叱咤する意味も込めて叫び、迫りくるノイズに向かって駆け

出す。そして――

「……………んあ？」

少女は目を開ける。枕元で鳴り響く時計を乱暴に止め、上体を起こす。カーテン越しに窓から差し込む光は強く、今が真夏であることが実感できる。

「ふあああ……………随分と、懐かしい夢だったな」

少女は夢の内容を振り返りつつあくびをし、起き上がる。そしてカーテンを開け、窓から外の風景を覗く。そこには巨大な入道雲と青空が広がっていた。

「うん、今日もいい天気だ」

そんな感想を抱きつつ、少女――天羽奏は、いつもの場所に行く準備を始めていった。

「ちわーす、旦那」

「うむ、おはよう！」

指令室に入り、奏はそこにいた男性に声をかける。彼女に気づいた男性——風鳴弦十郎は快活な挨拶を返す。

「今日は随分早めに来たな。何かあったのか？」

「何も無いよ。ただ懐かしい夢を見ただけさ」

「……そうか」

一瞬悲しそうな表情になるが、弦十郎は奏に気づかれる前に表情を元に戻す。そして、伝えようと思っていた要件を話した。

「つと、忘れるところだった。奏君、了子君から呼び出した。レポート提出、まだなんだろう？」

「うげえ……旦那にチクっていたのか」

相変わらず抜け目がないな。そう思いながら奏は、カバンの中から紙の束を取り出して弦十郎に見せる。

「大丈夫だって。心配しなくてもこの通り、ちゃんとやってきたからさ」

「みたいだな。まだ訓練まで時間がある、渡せるなら早めの方がいいぞ？」

「んー……わかった。じゃ、これ出しに行ってくるよ」

弦十郎の提案を受け入れ、奏は指令室から出て移動する。目指すは研究室、そこにこのレポートを提出すべき人はいるはずだ。

「失礼しまーす……あ、いた」

「あら、おはよう」

研究部屋に入ると、椅子に座っていた女性が奏を迎える。挨拶ついでに確認も兼ねて、奏は女性に話しかける。

「了子さん、これレポート。あと、今日の訓練いつからだっけ？」

「はい、受け取りました。訓練は今から30分後ね……って、そうだと体調はどうかしら？」

思いだしたかのように女性——櫻井了子は奏に問いかける。それを聞き、改めて彼女自身の体調を確認するが、どこにも異常はないように感じた。

奏は本来不可能な事を無理やり可能にしている。その時に使用する薬——LiKERの後遺症は身体への負担が大きく、最初は適合訓練すらままならなかった。しかし了子の尽力もあってLiKERは日々改良されており、こうして負担は大分低下しているのだ。

「全然大丈夫だよ。にしても、最初に比べてずいぶんよくなったよな——」

「もちろんよ。奏ちゃんの負担を減らすため、皆が一生懸命だったんだから。なんたって……」

問題ないことを伝えると、了子は嬉しそうに答え、LiKERが

どうやって改良されていったのかを説明し始める。こうなった彼女の話は長くなるのを知っている奏は急いで周辺を見渡し、時計を見て驚くフリをする。

「つと、ごめん了子さん。もう行かなきゃ!」

「そこでなんと……って、あらもうこんな時間。訓練頑張つてねー!」

「あいよー!」

了子からの激励に返事をしつつ、奏は部屋を出て訓練室へ向かう。実はもう少し余裕があったのだが、彼女の話は難しすぎてよくわからないのだ。ほどほどなところで切り上げるのが一番である。

「わりい、待たせた!」

「おはよう、奏。あと大丈夫、全然待つてないよ」

訓練室に入ると、すでに奏の相棒が待つていた。遅れたのかと思ひ詫びるが、彼女はまるで気にしてないかのように挨拶してくる。

「そうか、そりゃよかった。……おはよう、翼」

「うん」

挨拶を返すと相棒——風鳴翼は微笑む。それにつられて頬が緩むが、訓練の時間が刻一刻と迫っているのを思い出す。

「ん、そろそろ時間だ。翼、始めようぜ」

「うん、わかった」

翼の返事を聞きつつ、奏は持つてきたLiNKERを自身に打ち込む。注射器で注入するには慣れたが、身体の中に入っていく際の妙な感覚はあまり慣れそうにない。

投薬が終わり、翼と一緒にシミュレーター室の中に入る。そして奏達は似たような形状のペンダントを握り、歌を紡いだ。

それは武器を起こす歌であり、ノイズ共と渡り合える力を引き出す歌。

「CroitzalronzellGungnirzizzl

」
「Imyuteus amenohabakiritron——

——そして、聖遺物の欠片から生み出されたFG式回天特機装束、シンフォギアシステムを起動させる歌。

その名を、聖詠という。

『ステージ3：街郊外、セットアップ。対ノイズシミュレーション、レベル4で開始します』

「行くぞッ！」

「ああ！」

「ふわぁ……………ねみい」

寢室の灯りを付け、ベッドに身を投げ出す。ボフィンという音とともに奏の身体は小さく跳ね、やがて落ち着いた。

「くっそー、翼の奴また腕を上げやがった…………」

仰向けに寝がえり、今日の訓練内容を思い出す。今日はすこぶる調子がよく、シミュレーションも単独でレベル4、翼と組んだらレベル7までこなすことができた。

問題はその後の組手だ。ここ最近、ようやく翼の太刀筋が見えてくるようになっていた。なので今日こそ白星をつかもうと思っていたが、今日も黒星を付けられてしまったのだ。

「なんだよ逆羅刹って…………。あんなの予想できるワケがねえ」

そう愚痴りつつ、奏の脳内ではいくつもの対策シミュレーションを行っている。しばらくそれを行った後、思いついた中で有効そうなものをノートに書きだしていく。こうすることで情報を整理でき、次回の訓練までに対策を練ることができるのだ。

「…………よし、こんなもんか」

ノートを閉じ、一度起き上がって窓から外の景色を見る。夜も更け、ここが田舎だったら綺麗な星空が見れたことだろう。それをしばらく眺めていて、ふと今朝見た夢を思い出す。

「そっか……もう、1年になるんだな」

あの日、奏がすべてを失った日。あれから彼女は日常を捨て、復讐の道を選んだ。その事を後悔したことなんてないし、するつもりもない。ノイズに復讐するため、今思えば随分と無茶をしたものだ。

特異災害対策機動部二課の拠点侵入に、人質を使った交渉。さらにはまだ未完成品だったLINKERを多用した聖遺物の適合。ぶっちゃけどこで死んでもおかしくないな、と奏は苦笑する。

「そんでその結果、またこうやって日常に戻らされる羽目になるとはね……」

そして今現在、奏の覚悟を受け取った弦十郎の配慮により、彼女は奏者として活動する傍ら、日常生活を謳歌している。最初こそ戸惑ったが、日常を過ごしているうちに心に余裕が生まれ、訓練も良い結果が出ている。そこで、彼の判断は間違っていないかったんだと感心したのを覚えている。

世の中わかんないな、そう思いつつ奏はカーテンを閉める。そして部屋の明かりを消し、ベッドにもぐりこむ。

少しずつ薄れていく意識の中で、明日はどんな出来事が起こるのだろうか。と未来へ想いをはせながら奏は目を閉じ、眠りに入ってしまった。

——ノイズ共へ走り出した直後。上空から襲い掛かった衝撃

に、私はノイズ諸共飲み込まれた。

十字の剣戟がそのまま飛んできたかのような一撃。それは大地を割り、私の周辺にいたノイズを消し去る。その衝撃は激しく、私は踏ん張る間もなく遺跡の壁まで吹き飛ばされる。

『がッ！』

頭を打ち、意識がもうろうとする。薄れゆく意識の中、私は土煙の中で佇む1つの存在をその視界にとらえた。

そいつはゲームに出てくる戦士のような出で立ちをしていた。龍をイメージした鎧をまとい、その牙をそのまま取り付けたかのような双刃を持っていた。

突如現れたそいつは、周辺のノイズを見渡す。なぜかそいつを見て、もノイズ共の反応は薄く、逆に少しづつ距離をとっていた。それを確認した彼は私を一瞥し、ノイズに向かって駆け出していく。

そしてノイズと激突する寸前で、私の意識は途切れる。あの時そいつが何か言っていたような気がしたが、既に気を失う寸前だったので覚えていない。それにあの戦闘の結果がどうなったのかも私にはわからない。

ただそれでも、やけに大きく見えたあいつの背中には私の眼に焼き付いていた。

《See you Next game……》

第11話 『蒼き防人の Readiness : 前編』

人である前に、人類を守る剣であれ。

物心ついた時から言われ続けていたその教えに従い、私は今まで鍛錬を重ねてきた。

どんなにきつくても、どんなにつらくても、どんなに苦しくても。倒れそうになった時はその教えを思い出し、剣であろうとした。

だがしかし、私は結局のところ人間だったようだ。

なぜなら、剣はこんなに荒れ狂った感情を抱かない。剣はその身に宿す衝動で燃え尽きようとはしない。剣は大より小を優先しない。

ある出来事によって、私は変わった。今までと変わらず鍛錬は続けるし、人類を守るという意思も変わらない。しかし、自分は間違いなく人間であると確信したのだ。それを決意したのは皮肉なことに、私の大切な人を奪われた時だった。

ああ、だからこそなんでも言おう。この衝動を忘れぬために、この思いを減らさぬために。

——私は、奴を絶対に許さない。

奴を知る最初のきっかけは、了子さんによる講義を奏と一緒に受けていた時だった。

「——じゃあ最後に、各種ノイズの特徴をまとめていくわよ。二人とも、手元の資料を見て」

「はい」

「はい……ふあ」

櫻井女史の声を聞き、私はタブレットに入っているデータを開く。そこには各種ノイズの概要と特徴、外見に出現時期などが分かり易くまとめられていた。

クロール、ヒューマノイド、フライト、e t c……。シミュレーションでよく相対するノイズもあれば、未だ資料でしか見たことのないノイズも記されている。その一つ一つに目を通し、思いつく限りの対策をシミュレートしていく。奏もこの時は真剣な表情でその資料を眺めている。

「……………あれ？」

そしてその中で私が気になったのは最後のページ。そこには出現時期以外、ほとんどの情報が書かれておらず、名称には『アンノウン』とだけ記されていた。

「櫻井先生、最後にあるアンノウンとは一体……？」

「え？……あちゃー、私が個人的にまとめていたのを丸々持ってきたから、それも入っちゃってたのね」

私の質問を聞き、了さんは失敗したとでも言いそうな表情で右手を額に当てる。それを聞いていた奏も気になったのか、私が見ている

ものと同じページを開く。

「なになに……うわ、なんだこれ。二年半前に初めて現れたこと以外、何もわかってないじゃねえか」

「ほんとそうなのよ。それに、そもそもこのアンノウンはノイズかどうか不明なのよねー」

「え?」

それを聞き、私たちは同時に疑問符を浮かべる。

ノイズかどうかわからない、ならばなぜ了子さんはここにまとめていたのだろうか?

「……ふーん、聞きたい?」

「はい、興味があります」

「おう、私も翼と同意見だ。一度気になったんだし、最後まで聞いてみたい」

私の考えを見透かしたかのように、了子さんは笑顔で私たちに聞いてくる。予定の時間まではもう少しあったので、どうせならと私たちは聞くことにした。

「んじや、櫻井了子のノイズ講義・特別篇! 始めるわよ……と言つても、さつきも言った通りアンノウンはノイズかどうかわからないの」

順を追って説明するわね、と了子さんは手に持つタブレットを操作する。すると正面のプロジェクトエクターが稼働し、ある建物が映し出された。その建物を見て、私は既視感に包まれる。

「これって……」

「二課じゃねえか。……あれ、ちよつと古い?」

「奏ちゃん、鋭いわね。アンノウンが初めて確認されたのは二年半ほど前で、場所は改装する前のここなのよ」

サラリと明かされる衝撃の真実。それを聞いた私は一瞬思考が止まり、奏の大声で我に返った。

「ちよ、どういうことだよ!？」

「予想通りの反応どうも。知らないのかもしれないわよ、これは機密事項なんだし」

「ではなぜ、アンノウンはここに？」

「それが全くの不明だったのよねー。警備員を全員無力化し、外部に情報が届かなくなった状況で侵入。なのに聖遺物は盗まれてないし、データを抜かれた様子もない。そしてアンノウンがいた痕跡は偶然姿を見た警備員の証言だけ、監視カメラは雑音交じりで何も映らず」

残った事実は当時の二課の防衛機構は何一つアンノウンに対して無力だったということだったのよ。了さんはそう話を締め、それを聞いた私は正直なところ、不審に感じていた。

明らかにノイズとは思えない複雑な行動。それに了さんは警備員を全員【無力化】と言っていた。

ノイズが人を無力化？ そんなこと、あるはずがない。奴らは人間のみを襲う災害だ。なのに活かしておくなんて、どうにも信じられなかった。

「んー、翼ちゃん。今アンノウンは本当にノイズなのか、なんて思ってたでしょ？」

「え？ あ、はい……わかってるのなら、なぜ了さんはアンノウンをノイズに分類したのですか？」

「まあ、これだけ見たならそう思うわよね。……じゃあこれを見たら、どう思う？」

そう言って了子さんはタブレットを操作し、画面を切り替える。映っていたのは世界地図であり、いくつか赤いマーカーが記されていた。先ほどの話から察するに、それ以降のアンノウンの出現場所なのだろう。

そしてそれを見ているうち、私はあることに気づく。それを確認するために、了子さんに問いかけた。

「櫻井先生、まさかこれ……」

「さすが翼ちゃん、すぐ気づいたわね」

「やっぱり……」

「翼、何かわかったのか？」

「奏……この間学んだばかりなのに……」

本当に気付いてない様子の奏を見て、私は少しため息をつく。奏は戦闘方面はとて優れているのだが、勉強方面がからつきしなのだ。それがこんな所でも出てくるなんて……。

「このマーカーがついている場所。全部、聖遺物があると推測されている場所よ」

「聖遺物、聖遺物………。ああ、あの時の！」

どうやら思い出してくれたようで、奏はポンと手を叩く。それを複雑な思いで見た後、気を取り直して了子さんが続きを話すのを待つ。

「そう、それ以降アンノウンは聖遺物があると推測されている場所に出現し始めたの。と言っても相変わらず映像は無く、証言から同一の存在であると推測されているだけだ」

「と、いうことはまさか……」

「その推測はたぶん正解。アンノウンが二課に侵入した理由、それは聖遺物の所在地を調べるためでしょうね」

その言葉と共に、マーカーがついている場所の画像がピックアップされる。

それは遺跡だったり、密林だったり、果ては湖だったり。全く統一性のない場所ばかりだが、しかし一つだけ共通している箇所があった。それは――

「……なんか、どこもかしこもボロボロだな」

「老朽化、ではありませんよね」

「その通り、これはアンノウンが起こした戦闘の爪痕よ。おそらく相手は聖遺物の防衛機構でしょう。奴らが戦った余波で周囲が揺れ、建物が崩れかけてるの」

了子さんの言ったとおり、画面に移されてる建造物はどれもがボロボロだった。優しい場合でも穴が開いてたり、周囲の地形が少し変わっていたりする。ひどい場合は原形すらとどめず崩れ去っており、残骸しか残ってないような場所さえあった。それほど激しい戦闘を、アンノウンは行っていたのだろう。

「ふーん……なあ、了子さん。結局のところ、アンノウンは聖遺物が集めることを目的としたノイズってことか？」

奏が本筋に迫るため、了子さんに尋ねる。それを聞いた彼女は、むず痒そうな表情で頬をポリポリかきながら首を横に振った。

「そうだったら事情は簡単なんだけどね……。聞いた話じゃ、アンノウンはノイズに対して敵対行動をとっていたそうよ」

「はっ」

「……………」

それを聞いて頭がさらに混乱する。

人を消さないだけでも驚愕なのに、ノイズと敵対？
流石におかしいを思ったのか、奏が了子さんに質問する。

「了子さん。それを聞いた感じ、アンノウンはノイズじゃないんじゃないか？」

「私もそう思っていたわよ？ この映像を見るまでは——」

そう言いつつ了子さんは画面を切り替えようとして、その途中でピタリと動きが止まった。

それを見た私はなぜ止まったのだろうと疑問に感じていたが、奏は何か感づいたようだ。

「櫻井先生、どうしたのです？」

「えっと、そのー……ね？ 今回は映像じゃなく、言葉で伝えてみようかなーと思って……」

「……了子さん」

態度がしどろもどろになっている了子さんを、奏が静かに呼ぶ。微笑を浮かべていたが、どこかそれは悲しそうだ。

「私は大丈夫だ。辛いことだけど、もう受け入れることができてるよ」
「あっ……」

その言葉だけで、私は察してしまった。私と奏が初めてあった時、彼女は憎悪に染まった表情で叫んでいたのだ。家族を殺したノイズに復讐する、と。

そして今の台詞。つまりこれから流れる映像は、その時のものなのだろう。

「……本当にいいの？」

「ああ、今はアンノウンについて知りたいからな」

「奏……」

「私は大丈夫だよ、翼」

「……じゃあ許可をもらったことだし、再生するわね」

その言葉と共に、画面内の映像が再生される。それは遺跡の入り口を映しており、カメラは倒れたのか視界が90°回転していた。

そして鳴り響く重厚な音。どうやら遺跡外部で戦闘行為が起きてるらしく、画面もカタカタ震えていた。

「えっと、たしか………ここら辺ね」

了子さんが映像の時間を進めていき、ある程度進んだところで等速再生に切り替わる。

先ほどと打って変わって静まり返った空間。すると数秒後、入り口から誰かが近づいてくる。それは入り口で止まり、内部を見渡している。内部が暗いせいか日光の反射が激しく、その存在は外見の輪郭しか確認できない。

「これが、アンノウン」

「おそらく、なんだけどね。でも証言と外見が一致しているから、ほぼ間違いないと思うわ」

「……………」

そして全て見渡し、目的を終えたのだろうか。直後、彼の身体に異変が生じる。

身体が急激に崩れていき、細かいブロックが空中に舞う。そしてすべてが崩れ去った後、ブロック状の物質は意志を持つかのように空へ昇っていった。

「これは……」

「ノイズの瞬間移動、とはまた少し違うでしょ？ 最初は位相差障壁

を利用したのかと思っただけど、どうもそれとは違うみたいなのよ
ねー……」

ムムム……と了子さんは考え込む。そしてふと気づくと、奏が俯いで何かを考えていた。その表所は真剣で、何かを思い出しているようだった。

その様子が心配になり、私は声をかける。

「そうか、ということはあいつが……」

「奏、大丈夫？ きついなら休んでも……」

「え？ いやいや、大丈夫だって！」

な？ と奏は笑顔を向ける。どこか誤魔化そうとしている雰囲気を感じたが、その様子を見た私は安心して、了子さんに続きを聞くことにする。

「了子さん！ アンノウンについては大体わかったし、そろそろ元のお題に入った方がいいんじゃないか？」

「でも、もしそうなら………え？ ああ、そういえば今日のまとめをしている所だったわね。大分脱線しちゃったし、そろそろ戻りましょうか」

了子さんは気を取り直し、私たちの講義は再開された。

そしてこの時、私たちはアンノウンと言う名称で奴のことを知っただのだ。

——もしもあの時、奏に話をもつと聞いておけば。もしもあの時、抱いていた違和感を解消しようとしていたら。

「っ、あ……………」

「……………さらばだ」

「かなでええええええええええツ!!」

あんなことには、ならなかったのだろう。

《See you Next Sequel……》

第12話 『蒼き防人のReadiness：後編』

事の始まりとなったのは1か月前。

叔父様に呼ばれた私たちは、昼食を終えた後に指令室に集まっていた。

「よし、みんな集まったな」

「司令、今日はどうしたのですか？」

「その事なんだが……緒川」

「はい」

叔父様に呼ばれ、隣にいた男性——緒川慎次が一步前が出る。彼は私たちの視線が集まったのを確認すると、右手に持っていた資料の束を私たちに渡す。

それを受け取って中身に目を通していく。その内容を把握していくうちに、私の感情は驚きで満たされていった。

「これは……」

「おいおい、マジかよ……!」

「うーん、良いリアクション! その顔が見たかったのよねー」

驚きのあまり言葉が出ない私と、声が少し震えている奏。その様子を見て、了子さんは満足そうに笑っていた。

「そこに書いてある通りだ。1か月後に行われるツヴァイウイングの大型ライブ。そこで完全聖遺物【ネフシユタンの鎧】の起動実験を同時に行う事となった」

ツヴァイウイング。それは私と奏、二人で活動しているボーカルユ

ニットで、特異災害対策機動部二課に所属している私たちの【表の顔】
とでも言えるものだ。

結成のきっかけは1年前。ノイズとの戦闘を終えた後、奏が自衛隊の人に感謝を述べられたらしい。その時に、歌を聴いてもらう事で誰かを勇気付けられる事を知ったらしく、奏が私たちに発案したのだ。

最初こそ難しいんじゃないかと思っていたが、叔父様や緒川さん、了子さん等のサポートのおかげで今もこうして活動を続けている。緒川さん曰く結構人気が出ているとのことらしい。

「ライブと同時に、ですか」

「ああ。ネフシユタンの鎧を起動させるには、生半可な量のフォニックゲインでは足りない」

「そこで今度行われるライブ。そこで二人の歌に特殊な機器を介することでフォニックゲインを増大させ、それを用いて起動させようと、いうわけなの」

「なるほど、確かにライブの時の方がテンション上がるからな」

叔父様が説明し、了子さんが補足する。それを聞いた奏は納得していたし、私もその意見には同意だった。

「では叔父様、ライブの間私たちは何をすれば？」

「今まで通り、全力でライブを楽しんでくれ。それだけで必要なフォニックゲインを確保できるはずだ」

「はい、わかりました」

「おう、まかせときな！」

結局のところ、私たちはライブをこなせばいいらしい。その後、起動実験に関する話し合いをし、私たちは訓練へと戻った。

そしてライブが行われるまでの1か月間。その日まで私たちは時に訓練、時に歌の練習、時にノイズとの戦闘をこなしていった。

——1か月後。私たちはライブ会場の控室で待機していた。

「翼さん、奏さん。ライブ開始まであと20分ほどです。もう少ししたら準備に入りましょう」

「はいよー。……にしても、あれだな。やっぱり開演するまでのこの時間が苦手だ」

開演時刻が近づき、私が緊張している横で奏はいつもの様子で背もたれにのしかかる。

「こちとらさつきと大暴れしたいって言うのに、そいつもままならねえ」

「そうだね」

「ん？……もしかして翼、緊張とかしちやったり？」

「……当たり前でしょ」

確かにこの時の私はかなり緊張していた。了子さんも今日は大事な日だと言っていたのだ。緊張しないわけがなかった。

その様子に気づいたのか、奏が更に声をかけようとしたところでドアが開く。そこには叔父様がおり、私たちの様子を見に来たようだった。

「奏、翼。ここにいたのか」

「司令！」

「旦那じゃないか！ 様子でも見に来てくれたのか？」

「まあな。分かっていると思うが、今日は——」

私たちの様子を見て大丈夫だと判断したのだろう。叔父様は励ますことはせず、今日の実験に関する念押しをしようとする。しかしそれを奏が途中で止め、強気な笑みを浮かべる。

「分かっているから。大丈夫だって」

「……フ、分かっているならそれでいい。このライブの結果が人類の未来をかけている、って事をな」

そう言い終わった後、叔父様の携帯が鳴る。彼は私たちから離れ、携帯で誰かと話をしている。あの様子を見る限り、おそらく了子さんが準備完了の連絡を入れたのだろう。

「じゃあ、俺はもう行く。起動実験に関しては俺たちに任せて、お前たちはステージで思いっきり歌って来い！」

「はい、全力で挑みます！」

「ああ。ステージの上は任せてくれ！」

「おうー！」

お互いに激励の言葉を交わし、叔父様は控室から出ていく。その様子を見送り、私は今一度気合を入れようと目を閉じて——

「まじめが過ぎるぞ、翼」

「……………奏」

奏にデコピンを喰らい、何をするんだという気持ちを込めて彼女を

軽くならむ。その行動に対して奏は気にせず、笑顔で私の頭に手を置いた。

「私の相棒は翼なんだから。翼がそんな顔してると、あたしまで楽しめない」

その言葉を聞き、私は目を丸くする。私はそんなにひどい表情をしているのだろうか？

……今日は大切なライブの日。起動実験は大事だが、私たちはツヴァイウィングとして、観客の人たちを楽しませなきゃならない。そのことを忘れてしまう程、その時までの私は緊張していたのだ。

「……うん。私たちが楽しんでないと、ライブに来てくれた皆も楽しめないよね」

「わかってんじゃないか」

ウリウリと頭を撫でられる。それが急に恥ずかしくなり、急いで手を打ち払う。どうやら絶妙な力加減をしてくれたようで、髪形の崩れはないみたいだ。

気を取り直して、立ち上がる。それを見てもう大丈夫だと思ってくれたのか、奏ではそれ以上は何もせず立ち上がる。そして二人並んで控室の出口へ向かう。

「奏と一緒になら、なんとかかなりそうな気がする。……行こう」

「ああ。私と翼、両翼そろったツヴァイウィングなら、どこまでも飛んで行ける！」

「どんなものでも、超えてみせる……！」

そしてライブは始まった。私たちが歌い、ライブに来てくれた人たちと一緒に会場は高揚していく。このままいけば、順調に起動実験は終了。私たちのライブも大成功に終わると思っていた。

——しかし、物事がすべてうまくいくとは限らない。この時私は、そのことを痛感させられた。

突如会場内になり響くアラーム。それに私が驚いていると、突如奏が別の方向を凝視した。

「……………来る」

「奏？」

「ノイズが、来る！」

そして突如襲来してきた、ノイズの大群。必然的に会場は大混乱となり、パニック状態と化していた。

「翼、戦うぞ！　今この場で奴らと戦えるのは、槍を持つ私と剣を持った翼だけだ！」

「でも、司令からは何も……………」

「Croitzalronzell Gungnir zizzl
——」

私がシンフォギアを纏うべきか迷っているうちに、奏はためらわずシンフォギアを展開してノイズの前に躍り出る。そして右手に持つ槍をふるい、ノイズを薙ぎ払っていった。

「おらあ!!」

「奏！　Imyuteus amenohabakiritron

」
奏に遅れないよう、私もシンフォギアを展開して続く。二人一緒にノイズの大群、その中心にとびかかる。そして背中を合わせ、襲い掛かるノイズを迎撃していく。

「翼！」

「わかった！」

――STAR DUST∞FOTON――

――逆羅刹――

お互いに技を放ち、周囲のノイズを薙ぎ払う。一時的に敵は消えたが、次々と周囲にノイズが現れる。

「おらおらおらあッ！」

「せい、はあッ！」

とにかく目の前にいるノイズを倒していく。一ヶ所に固まっていると追いつめられる危険性があるため、走りながらノイズを打ち倒す。移動先からノイズが襲いかかってきたので私は剣を、奏は槍を振るう。

「吹き飛ばッ！」

――LAST∞METEOR――

奏が放つ一撃が、前方のノイズを一気に消し去る。しかし未だにノイズの数は減っておらず、私たちは再び背中を合わせる。

「ふう……奏、大丈夫？」

「当たり前だろ？」

「そう。……それより、気づいてる？」

「ノイズがやたら多いことか？」

「うん。もしかしてこのノイズ、起動実験の聖遺物を狙っているんじゃない……」

なぜこんなにノイズが襲い掛かってくるのか、その理由を考えているうちに、あの日受けた了子さんの講義を思い出したのだ。そこで奏にそのことを尋ねてみる。

それに対し、奏はシンプルに答えた。

「なんにせよ、だ。私たちはまず目の前のノイズどもをぶっ潰なければ旦那のところにも行けない。そうだろ？」

「……うん、そうだね」

奏が私に問いかけてくる。確かにその通りなので私は頷き、獲物を構える。先ほどまでの会話の間に、周囲にノイズが集まってきたようだ。

「行くぞー！」

「うんー！」

そして再びノイズの大群に突っ込むために力をためる。そして私たちは同時に全速力で飛び出し、ノイズの集団、その一角を崩そうとして――

「激怒竜牙!!」

——その声が聞こえた瞬間、全力でその場を離脱した。

しかし数瞬間に合わず、突如上空より飛来してきた十字の剣戟はノイズの集団に直撃し、大爆発を起こす。それを目の前で受けた私たちは吹き飛ばされ、それぞれ離れた場所に落ちる。

「ぐ、何が……………!?!」

何が起きた、そう思いながら前方の土煙を見る。それは徐々に晴れていき、はつきりと見えるようになった時。その場にいる存在は、ただ1つだった。

「……………なんだ、あいつは?」

その姿は一言でいうなら異様。人型だが龍を模した緑色の全身鎧をまとい、牙を模した双刃をその手に握っている。そして静かにたたずんでいた奴は、ある方向をじっと見ていた。

「ッ、お前は……………」

「……………」

その視線の先にいたのは、立ち上がったばかりの奏だった。互いに睨み合っていたが、息を合わせたかのように同時に走り出す。奏は槍を、乱入者は双刃を。走る勢いを殺すことなく振りかぶり——

「フンツ!!」

「はあッ!」

——そして互いの視線の先にいたノイズを、その手に持つ武器で切り払った。そしてそのまま互いを無視して戦いだす。

奏が奴とすれ違う寸前、奏が何か言っていたような気がするが場所が遠いので聞こえない。それよりも奏の援護をするため、私もすぐさま彼女に駆け寄る。

「翼！」

「奏、あいつは一体……?」

「ああ、あいつはアンノウンだ」

「アンノウン!?!」

奏の一言に、私は驚く。アンノウンといえば、了子さんの講義で出てきた謎に包まれているノイズのはずだ。それを聞いて改めて乱入者の姿を見る。その姿は確かに、あの時のカメラ映像で見た輪郭と一致していた。

なぜ奏がアンノウンを知っているのか? なぜ当たり前のように共闘しているのか? もしかして奏はあの時、アンノウンと出会っていたのではないか?

様々な疑問が頭の中に浮かぶが、まずは現状を把握するために必要なことを聞くことにした。

「奏、もしかしてアンノウンと会ったことがあるの?」

「……まあな。と言ってもあの時、気絶する直前にチラッと見た程度なんだけど」

「そう……じゃあ、今のアンノウンは味方?」

「いや、私たちの味方というよりノイズの敵だ。今あいつがこっちに攻撃してこないのは……っとー!」

奏は解答を中断し、飛んできたノイズを打ち落とす。どうやら大部分がアンノウンのほうに行っているのか、周りにいるノイズの数は先

ほどよりずいぶんと少ない。

「とにかく話はあとだ！　まずはこいつらを全員……ガッ!?」
「奏!?!」

奏は再びノイズの集団に飛び込もうとする。しかし、突如動きが止まり、膝をつく。

「なにが……ッ、時限式はここまでかよ」
「ッ!」

まずい、直感で奏の今の状態を知った私は奏を守るためにノイズの前に立ちはだかる。先ほどの言葉から推測するに、おそらくLINK ERが切れかけているのだ。

奏は本来、シンフォギアを起動できるほど適合値は大きくない。しかしそこに、了子さんが作った制御薬LINKERを投与することで、一時的にシンフォギアを動かしているのだ。先ほど彼女が言っていた時限式というのは、このことを指し示していた。

今の状況を打破するために思考しようとした瞬間、さらなる不幸が襲い掛かる。

「キヤアアアアアアアアアア!!」
「なに!?!」
「ッ、逃げ遅れたのか!」

客席だった場所。ノイズとの戦闘で崩れてしまったその足元で、女の子の悲鳴が聞こえた。ノイズが襲撃してきたため、ライブの参加者たちはみんな避難しているはず。しかし突然のことでパニック状態になっており、あの子のように逃げ遅れた者がいたのだ。

「うおおおおおおおッ!!」
「奏!」

声が聞こえた直後、奏が立ち上がってその方向へ走り出す。先ほどまでの動きに比べると鈍いが、それでも十分な速度で少女のもとへたどり着き、襲い掛かろうとしていたノイズを吹き飛ばす。

「ああ……ハア、ハア……」

「駆け出せ!!」

「ッ!!」

目の前にノイズがいた。その衝撃からか少女は声が出ない。そこに奏が怒鳴ることによってようやく意識をとり戻し、会場から離れるために走り出した。しかしその少女に狙いを定めたのか、周囲のノイズがいくつか少女へ襲い掛かる。

もちろん奏がそれを許すはずもなく、少女の後ろに立ってノイズを迎撃する。しかしやはり動きが鈍く、槍で攻撃を受け止めるのが精一杯のように見えた。

「くうっ!」

「奏ッ!」

手助けするため、駆け寄ろうとする。しかし突然私たちの間にノイズが出現し、分断されてしまう。

「ツク、邪魔だああッ!!」

「――蒼ノ一閃――」

手に持つ刀を大型化させ、斬撃を飛ばす。道が開き、急いで奏の元に行こうとするが、一歩遅かった。

「こんのおおお!!」

奏は余力を振り絞り、全力での槍を振るう。それは次々にノイズを薙ぎ払っていき――

「……………えっ」

「ッ、あ……………?」

最後のノイズとぶつかり合い、その矛先はバラバラに碎け散った。LINKERの制限時間が訪れたのだ。

武器が壊れたことも十分まずいことなのだが、そこにさらに不幸が重なる。碎け散った槍の破片、その一部が守っていた少女の胸元に突き刺さってしまったのだ。

奏はこの数瞬の間起きた出来事に思考停止していたが、少女の胸元から噴き出る血によって正氣に戻る。

「はあああああッ!!」

そこで私はようやく二人のもとにたどり着き、周囲のノイズを切り裂く。その隙に奏は少女を抱きかかえ、呼びかける。

「おい、死ぬな! 目を開けてくれ!」

「う……………あ……………」

少女の意識は朦朧気で、目の焦点もあっていない。それでも奏は必死に少女に呼びかけ続けていた。

「生きるのを、諦めるな!!」

「は……………」

最後に少しだけ意識が戻ったのか、少女がかすれた声で返事をす
る。しかしその直後意識を失い、ぐったりと倒れる。このままここに
いれば、間違いなく少女は死んでしまうだろう。

「……………翼、この子を連れて脱出してくれ」

「奏!! 何を言ってる……………」

「いいから行け! このままじゃこの子は間に合わない、私じゃ間に
合わないかもしれないんだ!!」

「っ!」

奏の言うことは正しかった。このままここにおいては少女は死ぬ。
かと言って奏が治療できる場所まで少女を運ぶ場合、間に合わない可
能性がある。ならば一番速度が速い私がこの少女を運ぶ、それが確実
な手段だろう。

しかしそれは、奏をこの戦場に残すということになる。今の奏がこ
こに残った場合、命の危険性が高いのだ。そんなこと、私には選ぶこ
とができなかった。かと言って少女を見捨てることもできるわけが
ない。

「……………10分で戻る。だから、それまで耐えて!」

「っへ、任せておけ!」

その言葉を背に私は少女を抱きかかえ、その場から離脱する。そし
てノイズを迎撃しつつ、最速でライブ会場に設置してある司令室を目
指して走る。

結局私が選んだのは、最短距離で少女を安全な場所まで移動して誰

かに渡すというものだった。奏の状況がまずい以上、少しでも早く戻る必要がある。そのためにも戦闘行為も必要最低限にして走り抜けていった。

「……あーあ、ずいぶんと見栄張っちゃったな。これは中々骨が折れそうだな」

「……………」

「さあ、ノイズ共。あいにくと私は時限式なもんで、そう長く戦えない。けど、この場を死守することくらいはしてやらあ!!」

「……戦う才能はあれど力を扱う才能はない、か。あいつとは真逆だな」

ライブ会場から出て、周りにノイズがないことを確認し、通信機を使う。

最初のほうこそ雑音が走っていたが、やがて向こうとつながった。

『……さん、翼さん！ 聞こえますか!?!』

「藤堯さんですか!? よかった、私がいる場所に人をよこしてくださいー!」

『何かあったんですか!?!』

「逃げ遅れた少女が重傷を負っています！ そして私が安全に運べる

よう、奏が会場で戦い続けています！」

『ッ、わかりました！ 今すぐ人員を派遣します』

通信が終わり数分後。車がかなり速い速度で私の近くまで走ってくる。そして目の前で止まり、中から男性が出てきた。

「翼、怪我をしているのはこの子か！」

「叔父様!?!……そうです、後はお願ひします！」

「わかった！……つて、おい、翼!?!」

少々無責任なような気がするが、それを気にする余裕は今の私にはなかった。叔父様が少女を受け取ったことを確認した私は、瞬時に飛び出して会場に戻る。

できる限りの速度を出し、できる限りノイズを無視し、道をふさぐノイズを最低限殲滅する。その間も速度を緩めることはせず、最高速を維持し続ける。

「頼む、間に合ってくれ……!?!」

そして私が会場を離脱してから10分後。会場に飛び込んだ私の視界に映ったもの、それは――

「えっ?」

地面に横たわり、ピクリとも動かない奏。

「……遅かったな」

そして、矛先が砕けた槍を持つアンノウンの姿だった。

その光景を見た瞬間、私の中の何かが切れた。

「きさまあああああああッ!!」

――天ノ逆鱗――

巨大化させた剣を投擲し、アンノウンに向かって蹴って加速させる。何も考えずがむしやらに放った一撃は瞬時に着弾し、土煙が周囲を覆う。手ごたえを感じることができなかった、おそらく避けられたのだろう。

「……ふん、やるか？」

「あああああああ!!」

アンノウンが何か言ってるが、そんなもの私には関係ない。地面に突き刺さった剣を瞬時に元の大きさに戻し、連続して振るう。しかしアンノウンはそれを冷静に対処、双刃を用いてそのすべてを受け流される。

そしてそのうちの1手で鏑迫り合う。私は全力で剣に力を込めているというのに、アンノウンは余裕のある状態で拮抗する。

「どうした、その程度で俺を倒せるとでも？」

「うるさいッ！ お前だけは、お前だけは絶対に許さない!!」

「……愚者が、獣では俺には勝てん!!」

その言葉の直後。剣をかち上げられ、腹部に強烈な蹴りが入れられる。モロに入った私は吹き飛び、壁に激突して倒れる。ただの蹴りだというのに、私はその一撃で満身創痍となっていた。

「ツガ、グウウ……!」

「つまらん。今のお前と戦う価値など無い」

そう言い放ち、アンノウンは私に背を向ける。絶対に逃がさない、その思いだけでどうにか上体を起こした私はアンノウンに手を伸ばす。

「待て……それは、奏のものだ……!」

「ならば強くなれ。そして俺と戦い、勝ち取って見せろ。……さらばだ」

そう言い残して、アンノウンは消えた。周囲にノイズはおらず、人は私たちしかいない。ボロボロの体に鞭を打って、這いずりながらも奏に近寄る。

「奏、奏え……!」

ずるずる、ズルズル。まるで芋虫のごとく遅い動作だが、確実に私は奏に近づいていく。

そしてようやくたどり着き、奏の表情をこちらへ向ける。彼女はまるで眠っているかのように穏やかな表情だ。

「あ、あああああ………」

口元から流れる血と腹部の大きな傷がなければ、の話だが。嫌な考えを必死に拒絶し、奏を抱き起す。すると奏はうつすらと目を開け、私を見て微笑んだ。

「……翼」

「奏!!」

「忘れんな……翼が笑顔でいる限り、翼は翼だ」

「なにを言ってる……!?!」

奏の言葉に対する反応をしているうちに、私は目を見開いた。私が抱きかかえている奏の身体が、うつすらと透明になっているのだ。

なんだこれは。今まで聞いたことのない状況に私が焦っている中、奏は構わず言葉を紡ごうとする。

「だからさ……」

「そんなこと後で聞くから! 今は早く治療を!」

「良いから聞けって……何があってもさ、自分自身を、見失っちゃ、駄目……だぞ……」

「奏!?!」

——そう言った奏は静かに目を閉じ、彼女の肉体は細かい粒子となつて空へ飛んでいった。

「あ……え……う?」

「うそ、うそだ……奏?……かな、で」

第13話 『Courage girlの覚悟!』

私は、呪われているのかもしれない。

そう思い始めるようになったのは、いつからだろうか？

お父さんがいなくなった時だろうか？ みんなから拒絶されるようになった時だろうか？ 胸に破片が刺さって大ケガをした時だろうか？

——それとも、あの日ライブに行った時だろうか？

「……ううん、そんな訳ない」

頭に浮かんだ考えを振り払い、両手で頬をパチンと叩く。しかし足取りが軽くなることはなく、顔は俯いていた。

「……はあ」

もうこれで何度目のため息なんだろう。まだ1日が始まったばかりで、これから学校がある。親友である未来にも会える、だと言うのに今の私の心の中は、その嬉しい気持ちよりも暗い気持ちの方が大きくなっているように感じた。

「へいき、へっちゃら。へいき、へっちゃら……」

お父さんから教わった、魔法の言葉。それを繰り返し呟いていく。そうすることで少しずつ心が落ち着いていき、いつもの調子に戻って

いくの感じる。

これなら、学校に着くまでには元に戻るかな。そう思いながら、再び歩を進め始める。

「ねえ、あの娘……」

「ほんと、なんで生きているのかしら……」

「……………っ!」

ヒソヒソと話す声、その内容が聞こえてしまう。

それが何のことを言っているのかわかった時、私は自分でもわからないうちに走り出していた。

「……………はあ、どうしよう」

先ほどの場所からしばらく離れた山。その子にある神社の階段を上りながら、私は呟く。

この時間、とつくに学校は始まっていた。つまり、私は学校をさぼったことになるのだろう。

「あ……」

ポケットの中の振動に気づき、そこに入っている携帯を取り出す。着信名には『未来』と記されていた。多分、授業の時間になっても来ない私を心配して、こっそり連絡してくれているのだろう。

「未来………ごめん」

けれど、今の私に電話に出る勇氣はなかった。携帯の電源を切ってポケットに入れ、階段を上り続ける。

数分後、神社の境内が見えてくる。結構大きな神社なのだが、町から大分離れた場所にあるのも相まって普段から人が少ない。そこに平日の朝と言うのもあって私以外の人はいなかった。

鳥居を抜け、境内を歩いていく。そして賽銭箱へ続く階段にカバンを置いて、腰かけた。そして体育座りの状態で頭を膝の間に埋め込み、視界をふさぐ。

何も考えないようにして、ただその暗闇の中にいる。こうでもしなきゃ、私の心は保ちそうになかった。

「……私って、やっぱり呪われてるのかな」

知らぬうちに呟いてしまう。それと同時に、私はどうすればよかったのかと考え始める。

——あの日、大好きなツヴァイウィングのライブがあった日。私は未来と一緒に見に行く予定だったが、未来に急用ができて一人で見に

行った。それでも最高潮となったライブに観客と言う形で参加して、私は大満足だった。

しかし、それは何事もなければの話だ。事実はライブの途中で突然アラームが鳴って、その直後、ノイズがたくさん現れたのだ。

会場は大混乱となり、私も急いで逃げようとしたが誰かに強く押され、頭を打って気絶してしまった。そして意識が戻った時、すぐ近くにノイズがいた。

あまりの恐怖に押しつぶされそうになった時、私はあの人に助けられた。なぜあの人かノイズと戦っているのかはわからなかったが、それを考える前に彼女から放たれた「駆け出せ」の言葉に応じ、その場から走って離れる。

少し意識がふらふらしていたが、そんなこと気にしている場合ではない。走っている間も後ろから何かかぶつかり合う音が響き、ある程度離れたので振り向いてその様子を見ようとした。

その直後、何か壊れる音が聞こえたかと思ったら、私の身体を吹き飛ばされていた。

そこからの記憶はあまりない。どんどん薄れていく意識の中、私を助けてくれた人に抱きかかえられ、なにか呼びかけられていたと思う。けれど、1つだけはつきりと覚えている言葉があった。

『生きるのを、諦めるな!!』

何とか声を出そうと思ったが、あの時私は返事をできていただろうか。その言葉を聞いたのを最後に私は気絶したので、それを確認する方法はもうない。

そして次に目を覚ました時、視界に写ったのは涙で目と顔をクシャクシャにした親友の姿だった。私が意識を取り戻したのを確認した直後、彼女が私に抱き着いてわんわん泣いていたのを覚えている。

なんと半年間もの間眠っていたらしく、起きた直後は自分の身体が

全く動かなかった。なのでそこから退院するまでの間、私はリハビリを必死にこなした。かなり辛かったけど、未来の手助けもあったのでなんとかかなり、退院する前にリハビリが完了できた。

けれど、学校に復帰した私に待っていたのは、地獄だった。

『なんで〇〇は死んだのに、あんたは生き残ってるのよ!』

『どうせお前も、他の誰かを見捨てたんだろ!?!』

『立花さん、今のお気持ちをお聞かせ願えますか!?!』

『ここから消えろ!』

『どうせなら、お前が死ねばよかったんだ!!』

どうやらあのライブの事件は大々的に報道されていたらしく、その中で生き残った人たちは死者を見捨てた卑怯者と言われているらしい。そのことを知らなかった私は、周囲から放たれる数多の悪意に襲われた。必死に未来がかばってくれたが、今度はその悪意が彼女に向きそうになったので、私は庇うのを止めさせた。

私だけがこれを受ければいい、未来が巻き込まれるのは嫌だ。そんな感じの事を言ったんだっけ。そしたら未来がまた大泣きしちやつて、なだめるのに時間がかかっちゃったのも覚えている。

あと1年半、その間さえ耐えれば高校へ進学する際に離れられる。ならこの位はへいき、へっちゃらだと思っていた。

——けれどわずか半年で、私の心は悲鳴を上げていた。その結果がこれだ。

「……生きるのを、諦めない」

これがあの日から私がたてた誓い。あの人が最期に私に遺してくれた言葉、もしこの言葉を覚えてなかったら、私はとつくに潰れていただろう。

……でももう、それだけじゃ駄目なのかもしれない。

「辛いよお……………」

誰もいないせいか、溜まっていた本音が漏れてしまう。その一言がきっかけになったのだろう、身体の内側からナニカが溢れてきそうになる。それを抑え込むため、再び魔法の言葉を繰り返し言い聞かせる。

「へいき、へつちやら……………へい、き」

「空の言葉で自分をも偽るか、滑稽だな」

「…………え？」

絶対にありえないと思っていた、私以外の言葉。それが私の左側から聞こえてくる。

頭を上げ、声が聞こえた方向を見る。すると賽銭箱を挟んだ反対側に、1人の男性が座っていた。彼は厳しい視線をこちらに向けていたが、ふと右手に持っていた物を私に投げ渡す。突然のことで驚いたが、私はそれをキャッチした。

「えつと、これは…………？」

「とりあえず食え。頭だろうが身体だろうが、動かすのなら補給する

必要があるだろう」

そう言いながら彼は同じものを取り出して食べていく。あまりにも突然なこの状況に困惑していたが、彼がそれ以上何も話さなかつたので、私もとりあえずそれを食べることにする。

そう言えばこれを食べるのはずいぶんと久しぶりだ、そんなことを考えながら一口食べる。

「……………美味しい」

久々に食べたそれ——シュークリームは甘く、私の中に染み込んでいった。

「あの、ごちそうさまでした」

「……………」

時間をかけてシュークリームを食べ終えた私は、男性にお礼を言う。しかし彼はそれに反応せず、ただこちらをジッと見ていた。

それは好意的な視線ではないが、今まで感じてきた悪意の混じったものでもない。私の何かを測ろうとしている、そんな目だ。

「えつと……………」

「なぜ、お前は激怒しない？」

「え？」

激怒？ 突然口を開いた男性が言った一言に、私は困惑する。そん

な私の様子は無視するかのよう、彼は言葉が続ける。

「お前はただ生き残っただけだ。だがお前の周りの愚か者たちは虚言に惑わされ、お前を偽善で糾弾した」

「……………」

「自らに降りかかった理不尽を、お前を犯人に仕立て上げることでは紛らわせようとした。愚かな選択だ、そうしたところで何も戻らないというのに」

「あはは……………」

次々と吐かれる毒に、私は乾いた笑いを浮かべる。あまりにもド直球なその言葉は、それだけで男性が人間嫌いであることがわかるほどだった。

「そしてお前だ、もう一度問うぞ。なぜお前は激怒しない？」

「……………」

「なぜお前は愚か者共に反逆せずに耐え続ける？ 行動を起こさねば状況は変わらない、それもわからんのか」

「それは…………けど、どうしてそんな事を」

「良いから答えろ」

「え……………わかりました」

色々な感情がごっちゃになる。言葉をまとめようとするが、全くまとまりそうにない。どうにか話そうと四苦八苦している私を、男性は何も言わずに待っていた。

結局まとまらなかつたが、とりあえず思ったことを素直に言葉にしてみよう。そう思った私は口を開く。

「…………怒ったことはありません。それに、何回も泣きました」

「なんで私がこんな目に遭わなくちゃいけないんだ。私だって死にかけたんだ。そんなことを言いたくて、たまらなかつた」

「けどそれを表に出したって、悪い言葉が回り続けるだけなんです。だから、私のところで止めようと……」

「……………」

いや、違う。そんな素敵な理由で私は怒らなかつたんじゃない。途中で言葉を止め、私は考える。

私が耐えるようになったのは、もっと簡単だつたはずだ。それを思い出すため、当時の光景を思い出そうとする。

ライブに行った記憶、ツヴァイウィングのライブを見ている記憶、ノイズに襲われた記憶、あの人に助けられた記憶、そして――

『響！ 生きてる、生きてるよお……！』

――ああ、思い出した。

「ごめんなさい」

「……なにがだ」

「さっきの理由、あれ違いました。私が怒らなかつたのは……………」

「大切な親友の、未来の笑顔が見たかつたからです」

「……………」

「私が理不尽な目にあつた時、未来は私を庇ってくれた。けれど、今度はそれが未来に向けられそうになつていたんです。そのせいで、未来

から笑顔が消えそうになっていた」

「その時、私は胸が張り裂けそうでした。そこで思ったんです。未来の笑顔を守るのなら、この位耐えられるって」

「……………そうか」

まあ、半年でこんな状態になっちゃったんですけどね……。と、言葉が続ける。けれど今の私は、ここに来たときは打って変わって晴れやかな表情をしているだろう。

ようやく言葉にできた答え。これさえあれば、残り1年程度なら大丈夫な気がした。

「人間は脆弱だ」

「？」

「1人では何もできず、そのくせに全てを背負おうとしてその重さに潰れる。自らの限界を見極めようともせずに進む、愚かな生き物だ」
「そう、ですね…………？」

私の答えを聞き終え、男性が再び口を開く。そして再び吐かれる毒に、私はとりあえず聞くことにする。多分だけど、今度は彼が自身の考えを言うのだろう。

「……………だが、だからこそ人間は仲間を作る。背負うものを分担し、自らの限界を見極めてもらい、可能な行動を増やしていった」

「えっと、それってつまり…………？」

「……………わからないのか？」

「はい、わかりません！」

わからないものはわからない、ということ素直に聞こうと思ってそう言うと、男性はため息をはく。そして目をさまよわせながら考えて、口を開いた。

「お前の行動、それは人間共の観点では正しくない。遅かれ早かれ、お前は自らが背負うものに潰されるだろう」

「うぐっ」

「故に、一人になるのはお門違いだ。共にそれを背負ってくれる仲間がいれば、その想いはどこまでも貫ける」

「……………え？ あ、はい！」

つまり友達を大切にしなさい、ということなんだろう。そう判断し、私は返事をする。

もう迷いはしない。この想いを忘れない限り、私はいつまでも戦えそうだった。

「……………これ以上は不要だな」

そう言つて男性は立ち上がり、前へ歩き出す。おそろくここから出ていくつもりなのだろう。そう思った私は急いで立ち上がり、彼の背中に向かって呼びかける。

「あの、ありがとうございます！ あと、そう言えばなんで私に!?!」

まずはお礼を言う。男性の問いに答えた結果、私はこの想いを思い出すことができたのだから。

そして、それと同時に疑問もぶつける。男性は突然現れ、私の事情を知っているような口ぶりだった。それが不思議に思ったんだ。

「気にする必要はない。これは、俺自身の意思で行ったことではない」「へ？ じゃあ誰が……………?」

私のその問いには答えず、男性は境内から出ていく。そしてさっきと階段を下り、私の視界から姿を消した。その様子を私はじっと見ていたが、途中であることに気づく。

「……あ、そういうえば名前聞いてなかった!？」

なんてことだ。男性は大切なことを私に思い出させてくれた恩人なのに、その名前を聞きそびれてしまったのだ。

急いで彼を追って境内を出る。そして鳥居を抜けて階段を見下ろすが、男性の姿はどこにもなかった。

しようがない、次会った時にしっかりと名前を聞いておこう。そう心に決め、なおかつ初対面の相手にはちゃんと自己紹介をしようと誓う。

そこまで考えた時、私のおなが鳴った。そこで時間を確認するため、携帯の電源を付ける。

「えっとー……うそ、もうお昼の1時!？」

どうやら随分とあそこにいたようだ。急いで学校に戻ろうと賽銭箱に置いてある鞆をとりに行っていると、携帯が震えた。確認するとそこには『未来』と言う文字が。

「……あ」

そこで私は気づく、未来からの着信はもう何件もあることを。そのうちのいくつかは休み時間に行われていたが、昼休みに入ってから引つ切り無しだ。ちなみに後で気づいたのだが、お母さんからも何回か電話がかかっていた。着信欄が未来で埋まっていたため気づかなかったのだが。

この様子を見るに、かなり心配させちゃったみたいだ。とりあえず安心させるため、電話に出る。

「もしもし」

『響!? 良かった、つながった!』

「アハハ……ごめん」

『どこにいるの!? 休んだのかなって思っておばさんに聞いたら、今朝は普通に家を出たって聞いて……』

「えつとね……今は○○神社にいます」

『○○神社って……かなり遠いよ。なにがあつたの?』

「んーと、愚痴を聞いてもらったんだ」

『響……』

「大丈夫だよ、未来。私はもう、大丈夫だから」

『響……うん、わかった。でも直接会ったら、話はちゃんと聞かせてもらいますからね』

「うへえー……わかったよ。私は今から学校に向かうね」

『……ううん、——で集まるう?……今日はちよつと悪い子になっちゃおうか』

「!……うん、すぐ行くね!」

『じゃあ、また』

「またねー」

通話を切り、再び境内から出るために歩き始める。今の話を聞いた感じ、やっぱり未来は昼休みに学校を抜け出して、私を探していたようだ。こんなにも大切な友達がいる、それだけで私の心は満たされていく。

そして鳥居を抜け、顔を上げる。そこに広がっていたのは真夏にふさわしい、大きな入道雲と青空だった。

「うん、いい天気だ!」

「——響、ひーびーきー！」

「……………んえ？」

「やっと起きた。朝ごはん、もうすぐできるよ。顔を洗って目を覚ましてきてね」

「ふぁーい……………」

まだ半分しか覚醒していない意識でベッドから起き上がり、洗面台へ向かう。そして冷たい水で顔を洗い、そこでようやく私の意識ははつきりと目覚めた。

「……………そっか、夢だったんだ」

随分と懐かしい夢だったな。そう思いながら身支度を整え、未来の元へ向かう。そこには美味しそうな料理が並んでいた。

「おー、美味しそー！」

「フフ、ありがとう。じゃ、食べよっか」

「うん！ 頂きます！」

「いただきます」

手を合わせ、朝ご飯を食べていく。

うん、今日も未来の料理は最高だ！ そう思いながら朝ご飯を食べていると、ふと未来が口を開いた。

「ねえ響、何かあったの？」

「ん？ どうして？」

「今日は朝から絶好調だなー、と思つて」

「そう見えるかな……うん、あつたよ。と言つても昨日じゃなくて、さつきまで見てた夢なんだけど」

「夢？」

「うん、未来覚えてる？ 1年前のあの日のこと」

「1年前……うん、覚えてるよ。響がいなくなつちやつて、私本当に不安だつたんだから」

当時のことを思い出したのか、未来は頬を膨らませて私を見る。それを私はアハハ……と笑うことでごまかす。

「でもね、私はあそこで大切なことを思い出したの。その時見た青空がすごく綺麗でね、それを夢で見れたんだー」

「大切なこと……そう言えば、そのきっかけだった男の人とは会えなかったね」

「うん、シュークリームの人の名前を聞けなかった。そこだけが残念だよ……」

そう。あの日から1年の間、私たちは何度もあの男性を探して回つた。けれど、どこに行つても見つけることができなかつたのだ。

「でも、顔はしっかりと覚えてるよ！ だからもしもう一度会えたら、ちゃんと名前を聞かなきゃね！」

「……うん、それでこそ響だね」

嬉しそうに未来が笑う。それにつられて私も笑い、少しの間、お互いに笑い合った。

「ごちそうさまでした！」

「お粗末様でした。お皿水につけたら行こつか？」

「うん！」

そして未来の準備が終わるのを待つて、一緒に玄関から出る。外を見ると桜の花が咲いており、まさしく春と言えるような風景だった。

「未来、入学式まであとどのくらい?」

「あと30分。今からなら十分間に合うよ」

「よし、それじゃ私立リディアン音楽院にレッツゴー!」

「ちよつと響、走らないで!」

——
かくして役者は、舞台にそろろう。

「私立リディアン音楽院、楽しみだなー!」

全てをつなぐ少女は、希望を胸に。

「私は、決して止まらない。止まるわけにはいかないんだ……!」

人である事を選んだ防人は、燃え盛る炎を胸に。

そして——

「1年ぶりか。さあ、俺を楽しませてもらうぞ……!」

誇り高き龍戦士、グラフィイトはその胸に何を抱く。

《See you Next game……》

Stage. I 　　～戦姫絶唱シンフォギア～
第14話 『新たなChallenger現る！』

夕焼け色に染まる街。それを形作っている物の1つである建物の屋上、そこにグラフィイトは立っていた。

「――」

屋上の隅に位置取り、そこから街並みを見下ろしている。グラフィイトの視線の先には人間や犬、乗り物などが動いているが、彼の関心はそこにはなかった。

何かを探し出すようにグラフィイトは観察を続ける。絶対にそれを見逃さないよう、彼は警戒を怠っていなかった。

――そしてしばらく時間が経った頃、グラフィイトの目がピクリと動く。その視線は街のある地域に絞られていた。

「未だ確証はない。だが……行く価値はある」

その言葉の後、グラフィイトはそこから姿を消して移動する。予めこの街のマッピングは済ませてあるため、主要な場所にはいつでも移動できるようになっていた。

そして移動した先は、別の建物からなる裏路地。少し歩いて表に出れば、帰宅途中の人間がたくさんいることだろう。その事を確認したグラフィイトは、フードを被って表に出た。

顔を隠しているので道行く人からチラチラ見られているのを感じ

る。が、そんなことは意に介さずに歩き続ける。その間も周囲への警戒は緩めていない。

(この辺りのはずだが……)

標的を探すため、グラフィイトは一度周囲を見渡す。しかしそれは見つからず、グラフィイトは一度裏路地から元の屋上に戻って索敵を再開するべきか考える。その為にも一度引き返し、裏路地に向かって歩き始めた。

——その直後。風に乗って後方から吹いてくる風、そこにわずかながら炭粉が混じっていることにグラフィイトは気づく。素早く振り向き、懐からガシヤコンバグヴァイザーを取り出して走り出した。

しばらく走り続け、グラフィイトの視界にコンビニが映る。しかしその中に人間はおらず、代わりに炭粉の山がいくつかあった。それを確認した直後、ガシヤコンバグヴァイザーを持った右手を上空へ向けて振り抜く。

それは上空から接近する存在——ノイズにぶつかり、ガシヤコンバグヴァイザーの紫色のボタン側についているチェーンソーによって両断される。そして二つに別れたノイズは急速に炭化し、地面に着く前に崩れ去る。

「ようやくお出ましか……!」

そう言いながらボタンを押し、周囲に低い電子音が響き始める。それと同時にグラフィイトの周囲の空間が歪み、大量のノイズが出現す

る。

「培養……！」

『Infection! LET'S GAME! BAD GAME!
E! DEAD GAME! WHAT'S YOUR NAME
!?! ……THE BUGSTER……!』

変身が完了し、グラフィットファングを構えてノイズへ突貫する。それに反応して、周囲にいるノイズのうち数体が彼に向かって突撃してきた。

「相変わらずだな！」

しかしそれを待っていたグラフィットはギリギリのところまで避け、すれ違いざまに一閃。走った勢いのまま集団へ飛び込み、双刃を用いて自分の周りにいるノイズを薙ぎ払った。

ノイズ共が吹き飛び、そのすべてが崩れ去ったのを確認した彼は振り向きざまに双刃を振るい、後方から飛び込んできたノイズを切り裂く。不意打ちを完全に見抜かれたそのノイズは一瞬で崩れ去っていった。

どうやらそのノイズで最後だったらしく、周囲に静寂が満ちる。戦闘が終わったことを確認したグラフィットは周囲に人間がいないことを確認し、そのまま最初の屋上に戻る。そして再び気配を探りだした。

（奴らがあの程度の規模で終わるとは思えん。必ず別の集団がいるはずだ……）

その予感的中し、1分も経たない頃にそれを見つける。しかしグラフィットの表情は先程とは打って変わって、渋い表情になっていた。

た。

それもそのはず。グラフィアイトが感知したのはノイズの気配だけではない、そのすぐそばに人間の気配も感知したのだ。本来なら全く気にかけないのだが、2つある気配のうちの1つが既知のモノだったのが問題だった。

「なぜあいつがここに……?」

気になったため、件の場所から少し離れた屋上へ移動する。そこから下の景色を見下ろし、幼い少女をおぶってノイズから逃げている少女を見つけた。どうやらノイズとは偶然接触したらしく、彼女が望んでこうなったわけではないようだ。

「あいつとの約束を果たした以上、もう俺に関係はない。……だが」

ノイズは俺の獲物だ、グラフィアイトはそう呟きつつ飛び降りようとする。しかしすぐそれをやめ、後方に振り向いた。すると先ほどまで何もいなかった空間が歪み、数多のノイズで埋め尽くされていく。

前回の戦闘の時とは規模が段違いなのだが、グラフィアイトの表情はむしろ明るくなっている。先ほどのあまりにもぬるく、ウォーミングアップにもならなかった。ようやくまともな戦いができそうだと彼は考えていた。

「よほど俺の存在が気に入らないようだな……いいだろう」

グラフィアイトフアングを構え、ノイズの突撃を待つ。奴らが攻撃している最中でないとダメージを与えられないという特性を持っている以上、彼の対ノイズ戦はカウンターが基本となっていた。

「……………ほう?」

しかしグラフィアイトの予想は当たらず、ノイズたちは距離を保ったまま動かない。そしてブドウ型ノイズが爆弾を大量に生成しているのを見て、彼はこいつらが標的であることを確信した。

「こちらが当たりだったか」

今までの機械的な行動とは違う、統率されているノイズ。制約があるのか、直接指揮しているわけではなさそうだ。

「ならまずは奴を叩くまでだ！」

そう言いつつブドウ型ノイズに向けて走り出す。するとまるでそれを遮るかのようにブドウ型ノイズを他のノイズが取り囲む。そしてその一部が一斉にグラフィアイトに向けて攻撃を始めた。さらにそこに畳みかけるようにブドウ型ノイズの爆撃が重なる。

「ハッ！」

だがこの程度、レベルXに比べれば造作もない。グラフィアイトは突撃してくるノイズやこちらに飛んでくるブドウ型爆弾を的確に打ち落とし、更に進路上のノイズをすれ違いざまに切り払う。そしてブドウ型ノイズにたどり着き、一体は貫き、もう一体を貫いたノイズごと叩き潰す。

それはわずか数秒の出来事だった。そしてグラフィアイトの行動が終わり、埋もれていたグラフィアイトファングを引き抜いた直後。周囲に倒した数と同じ量のノイズが出現した。

「今回は量で攻めに来たか、まどろっこしい事をする」

再会されるノイズの猛攻をいなしながら、グラフィアイトは呟く。

このまま迎撃を続けていれば、その内ノイズを倒しきることができ

るだろう。だとしてもこの状況はいささか面倒だ。遠距離攻撃をしてくるブドウ型ノイズを叩けばいいのだが、周囲のノイズがそれを簡単に通さない。かと言ってブドウ型ノイズの爆撃を避けつつ他のノイズを倒していくのは時間がかかる。彼の性格的に、チマチマやるのは合わないのだ。

「フ、ちょうどいい。こいつの試運転と行こうか……!」

グラフィイトはそう言いつつ懐からソレを取り出し、起動させた。

「反応絞り込みました! 位置特定!」

場所は変わって特異対策機動部二課・司令室。

ノイズが出現したことによりアラートが発令。ノイズの出現場所を確定させるため分析していたのだが、それが今完了する。

「座標出ます!」

「今回は2ヶ所か……距離は?」

「リディアンより距離8000、及び9000!」

女性オペレーターの後、前方に映るマップに円状のマークが2ヶ所現れる。それを見た二課の司令である男性——風鳴弦

十郎がここからの距離を聞くが、どちらもほどほどに遠い距離であることが分かった。

近い場所から順に向かわせるか。弦十郎がそう考えていると、追加の情報が入ってくる。

「2ヶ所ともに、ノイズとは異なる高出力エネルギーを検知！」

「波形の照合急いで！」

男性オペレーターからの報告に対し、同じく解析していた女性——櫻井了子が素早く指示を出す。一刻も早く知ることのできることを対策を組み、シンフォギア走者を安全に送り出すことができるからだ。

——だがしかし、今回は対策を組む必要がなかった。

「まさか、これって……アウフヴァツヘン波形!？」

解析の途中結果を見て了子は頬に汗を垂らす。

アウフヴァツヘン波形。それは聖遺物、あるいは聖遺物の欠片が歌の力によって起動する際に発する、エネルギーの特殊な波形パターンのことだ。つまりノイズが発生している2カ所において両方ともに聖遺物が起動しているということになる。

一体なにが？ 解析している了子と彼女の言葉を聞いていた弦十郎がそう思案していると、アウフヴァツヘン波形の解析結果が大画面に表示された。

「なっ!？」

「ええ!？」

「っ……………!？」

その結果を見て、二課のメンバー全員が動揺する。了子や待機していた少女——風鳴翼はもちろん、司令である弦十郎も驚きを隠せなかった。

なぜならこの波形を、二課の面子は何度も見てきたのだから。そして、もうこの波形を見ることはないと思っていたから。

そこに記されていたのは、1つの聖遺物の名前。発生個所は2つだが、規模は違えどその波形は完全に一致していた。

「2つの……………ガングニールだとッ!？」

《See you Next game…………》

第15話 『少女に捧ぐ Sunny & Peace
!』

大画面に表示される【GUNGNIR】の文字にぎわめく司令室。それもそのはず、二年前に失ってしまった聖遺物、そのアフフヴァツヘン波形が観測されたのだ。つまり観測された二地点で、ガングニールを用いて戦っている者がいるということである。そのため、この喧騒はある意味必然のものであった。

——そして、この少女が動き出すのもまた必然なのだろう。

「っ、現場に向かいます!!」

「翼!?!」

弦十郎の指示を受ける前に翼が司令室から出ていく。それを彼は止めようとするが、今の彼女が止まるわけがないとすぐに気づく。

ならばせめて彼女をサポートしようと判断し、オペレーター達からの報告を待った。

「っ、司令! A地点のノイズ反応が消失しました!」

「なんだとっ!?!」

そして早速出てきた報告を聞き、弦十郎は驚愕する。まだガングニールのアフフヴァツヘン波形が観測されてから二分と経ってない。もしその場にいる何者かがノイズと戦っているとしたら、すでに戦闘を終わらせたことになるのだ。

「念のためだ、再度確認! それにガングニールの反応はどうなっている!?!」

「再度確認します……A地点、やはりノイズの反応はありません。そしてガングニールの反応は消失………ッ!?!」

報告の途中で、女性オペレーターの声色が変わる。そして画面を見直し、それを確信した彼女は一刻も早く司令に伝えるため、口を開いた。

「A地点の反応は消失!……そして、B地点の反応が増加しました!」
「ッ、翼に連絡。急いでB地点へ向かわせろ!」

「うわあああああああ!?!」

幼い少女を抱きかかえて大声、と言うよりは悲鳴を上げながら建物から落下していく少女——立花響。その姿は日常生活で纏うようなものではなく、一般人が見たらコスプレと勘違いしそうな衣装だった。

響たちは先ほどまでノイズに襲われており、絶体絶命のピンチだった。しかし生きるのを諦めたくない響が強く願った時、突如頭の中に歌が思い浮かぶ。ためらわずそれを歌った瞬間、彼女の身体を光が包み、現在の格好になったのだ。

突然起きた事態に響は混乱したが、そんなことノイズは待つてくれない。ノイズが動き出したのを見て、響はとりあえずここから逃げよ

うと考える。そこで少女を抱えて屋上から少し離れた箇所へ飛び移ろうとジャンプした結果、先ほどのように悲鳴を上げる事態となったのだった。

「うわ……つとー！」

勢いよく落ちていき、ようやく着地する。跳んだ場所からはかなりの落差があったものの、響の足は何ともなかった。それを不思議に思ったが、頭上から飛び降りてくるノイズを発見し、横に跳んで避けた。

距離をとることに成功するが、次にノイズは体の一部を伸ばして接近する。細くなっているとはいえノイズはノイズ、それに触れてしまえばそこから身体が炭化してしまうだろう。

「何がどうなってるのーッ!？」

響は今抱いている感情を吐き出しつつ、再びジャンプしてそれを避ける。しかし相変わらず自分の力を制御できず、勢い余って建物の壁に激突してしまう。あまりの勢いにぶつかった壁が凹むが、落ちる前にその凹みに手をひっかける。

「おつとつと……ん？」

ぶら下がるような状態になり響はホツとしたが、突然視界が暗くなる。それを疑問に感じ顔を上げると、そこには巨大なノイズが腕を振りかぶっていた。

それを確認した響は急いでその場を離れる。彼女が空中に映ったのと同時に、後方で建物が破壊される音が聞こえる。その際の衝撃で多少体勢が崩れたが、何とか着地に成功する。しかしそれを狙ったかのように、ノイズが一体跳びかかってきた。

「っ、このー」

避けられないとすぐにわかった響は、思い切って拳をノイズに突き出す。自殺行為とも取れる行動だが、彼女は抱きかかえている命を守るために躊躇わなかった。

そしてその拳はついにノイズとぶつかり合い――

「……………つて、あれ？」

普通ならば触れた拳から響の身体は炭化していくはずだ。しかし、いつまでたつてもその感覚は訪れない。

恐る恐る目を開けると、目の前のノイズが黒くなって罅が入っている。そして茫然と見ている響の前で、そのノイズは崩れ去った。

「私が、やっつけたの…………？」

予想外の光景に、響は自分の目を疑う。その直後ハツとして、この隙にこの場を脱出しようとする走り出す。すると走っている響の視線の先に、何か光が見え始める。それは徐々に近づいていき、かなり近づいてきた頃にその正体がバイクのライトであることが分かる。

そしてバイクに乗っている人がノーヘルだったため、その表情が明らかになった。

「え、翼さん!？」

「……………ッ」

高速ですれ違う二人。響は前から迫りくる人物に驚き、バイクに乗った少女――翼は、戦装束を纏いながらも逃げてばかりいる響を見て表情をしかめる。

そして翼は勢いを落とさずにバイクから飛び降りる。そのままノ

イズの集団に突っ込んでいったバイクは、何体か巻き込んで爆発する。

「呆けない、死ぬわよ！……あなたはなににもせず、ここでその子を守っていなさい」

「へ？……あ、はい！」

翼は綺麗に着地、後方でポカンとしている響に対して檄を飛ばす。いろいろ言いたいことはあるが、それよりもまずは前方のノイズを処理することが先決だと判断した。

動き続ける状況に響ははまだ混乱していたが、翼からの指示に半ば反射で返事する。そして少女を改めて抱きかかえ、ノイズから少しずつ距離をとる。その様子を確認した翼は、ノイズに向かって走り出す。

「Imyuteus amenohabakiritron——」

そこからノイズが殲滅されるのに、5分とかからなかった。人類の天敵であるノイズ、それがあつげなく倒されてゆくその光景を、響たちはただ茫然と見つめていた。

そして翼がノイズを蹂躪している様子を見ていたのは、彼女たちの他にも存在していた。彼はまるでゲームを観戦しているかのように、別の建物の屋上からその様子を見つめている。

「……………やはり、俺があのを完全に引き出すには何かが足りない

ようだな」

そのまま観察を続け、戦いが終わって翼と響が何かを話しているのを確認した彼——グラフィイトは、その場から姿を消した。

『そんな、待ってええええ!!?』

どこからか車に連れ去られてゆく響の声が聞こえたような気がしたが、それは彼にとって些細な事だろう。

「響、遅いな……」

リディアン寮の一室。そこで小日向未来はテレビを見ながら呟く。今の時間は21時を過ぎている。響が風鳴翼のCDを買いに行くと言って別れたのが最後、未だに彼女は帰ってこない。そこにある事情が重なって未来に不安を掻き立てていた。

「大丈夫だよね……けど、夕方にノイズが出たって聞くし……」

『た、ただいまー……』

「っ、響ー！」

玄関から聞こえる声に、未来は思わず立ち上がってその名前を呼びながら玄関に向かう。

「疲れた……あ、未来。ただいま」

そこには心底疲れたような表情の響が靴を脱いでいた。そして未来に気づいた彼女は安心したような笑顔で彼女に話しかける。未来は彼女が無事なことが分かってホッとしつつ、事情を聞こうと尋ねた。

「おかえり。もう、こんな時間までどこに行ってたの？」

「う、ごめん……」

「心配したんだよ？ 近くでまたノイズが現れたって、さつきもニュースで言ってたから」

「うん……ちよつとそれでドタバタしてさ」

色々あつてこんな時間になっちゃった、と響は未来に事情を話す。困っている人を見かけたら助けてしまう彼女の性格を知っている未来は、何となく事情を察する。つまりノイズから逃げている人々をいつもの様に助けていたのだろう、と。

響のこの癖は今に始まったことではないので、未来にそれを止めるつもりはない。それよりも彼女の身を案じた未来は、これ以上追及することをやめた。

「まったくもう……とりあえず着替えて、ご飯は食べた？」

「一応食べたけど、未来が作ったご飯も食べたい！」

「はいはい」

ご飯と聞いた途端に表情を明るくする響を見て、未来は今までの不安が消えていくのを感じる。時々彼女がどこか遠くに行ってしまうのではないかと言う不安が未来を襲う時があるが、それと同時に彼女が必ず自分の傍にいてくれるという信頼もあった。だからこそ、不安な時だからこそ、こうやっていつもの様に響を迎えようと思ったのだ。

数分後。作っておいたご飯を温め、響が食べる様子を未来は笑顔で眺める。自分が作った料理をこうも美味しそうに食べてくれるのは、それだけで心が温かくなるのだ。

「んー！ 美味しいよ、未来！」

「フフ、ありがと」

そんな会話を交えつつ、穏やかな時間が流れていく。するとテレビの音声がふと耳に入った。

『風鳴翼、移籍の可能性も？』

「え？」

それが聞こえた響は箸を止め、テレビに目を移す。未来自身もニュースの内容が気になったので、振り向いてテレビを見た。

『本日新曲を発表した風鳴翼さんに関する、大きなニュースが舞い込んできました。イギリスの大手レコード会社メトロミュージックより、海外展開の打診があった模様です。また――』

「へえ……響、知ってた？」

「ううん、知らなかった……」

情報を伝えていくニュースを見ながら、響が呟く。その表情は何と

も言えないもので、テレビ画面に映る翼の姿をジッと見つめていた。

「それじゃあ、電気消すよ?」

「うん」

時間は過ぎて消灯時間になり、二人は寝るために電気を消す。同じ布団に入った二人は背中を向け合いながら、眼を閉じる。

「……未来、ごめんね?」

静まり返った暗闇、そこに響の声が静かに響く。まだ起きていた未来はそれを聞いて目を開け、彼女の方を向かずに返事をする。

「なにが?」

「帰り、遅くなっちゃったから。心配させちゃったよね……ごめん」

「……うん、すごく心配した」

「うっ……こんなこと言うのも変かもしれないけど、ありがとう。ちゃんと心配してくれるの未来だけ……わっ!?!」

そこまで聞いた時、未来は寝返りを打って響を背後から抱きしめた。彼女の過去を知っているだけに、今の彼女を一人にしてはいけないと思ったのだ。

「大丈夫だよ、響。私はちゃんと、響の傍にいるから」

「……っ、うん」

響は抱きしめている未来の手に、自分の手を重ねる。彼女から伝わってくる温もりが、ちゃんと彼女がそばにいてくれることを実感できた。

「未来は暖かいなあ……」

未来の温もりを実感しているうちに疲労からか、ゆっくりと響の意識が微睡んでいく。その様子を未来は穏やかな表情で見守っていた。

「小日向未来は私にとっての陽だまりなんだ。未来の傍が一番暖かい場所で、私が絶対に帰ってくるどころ……」

「これまでもそうだし、これからもそう……」

「……………」

「……………おやすみ、響」

「……………」

冷たいシャワーが、戦いで火照った翼の身体を冷やしていく。しかしこの冷たい水は身体を冷やすことはできても、昂った感情を抑える

事はできそうにない。

思い出すのは今日あったノイズとの戦闘。そしてそこに現れた、ガングニールを纏う響。

姿は全然違う。だと言うのにどうしても思い出してしまう、彼女との大切な記憶を。

『二人でなら、怖いものなしだな』

『っ……うん！』

「——っ！」

迸る衝動のまま、右手を壁に叩きつける。あの時保護した少女——立花響。戦いの後、彼女を二課に連れていき、なぜガングニールを扱えるのかの検査を行った。その結果は明日出るのだが、その時弦十郎に対して了子が放った一言を、翼は聞き逃さなかったのだ。

『もしかしたら、あの子にも手伝ってもらうことになるかもしれないわね』

「ふざけないで……！」

その言葉を思い出し、翼は険しい表情で壁を睨む。

あの時間近で見たからこそ分かる。立花響は、戦いなんて全く知らない一般人だ。少女を迷わず救おうとした姿勢は素晴らしいが、彼女にはまるで覚悟が足りない。そんな状態でノイズと戦っても、命の危険性が高まるだけだ。

今の二課の状況はわかっている。だがしかし、翼にとってそれとこれとは別問題なのだ。

「私はもう、あの時とは違う」

目を閉じればいつでも思い出すことができる。

目を閉じたまま消え去っていく大切な人の姿。圧倒的な実力差で敗北し、自分を敵として見ることにすらなかった宿敵の姿。無力に打ちひしがられ、ただ泣くことしかできなかったみじめな自分の姿。

——もうあんなことを、二度と繰り返すつもりはない。

「ノイズと戦うのは、私ひとりで十分よ」

《See you Next game……》

第16話 『Lonely girlの想い』

「俺にはなく、あいつらにはある何か……か」

一人立ち寄らない街はずれの廃墟。その中にあるボロボロのソファーに腰かけた状態で、グラフィイトは右手に持つ棒状の金属を見ながら呟く。

それはよく見ると武器の柄で、その先端には小型化された突撃銃の刀身があった。

それを見ながら思い出すのは、以前これを使用した際の戦闘。手に入れたこの聖遺物の改造に成功し、人間ではないグラフィイトでも扱えるようにした。その試運転のためにあの時の戦闘で使ってみたが、思っていたほどの成果は出なかったのだ。

「ノイズの位相差障壁は無効化できた。しかし……」

これだけではないはずだ、グラフィイトはそう考える。事実、彼が今まで見てきた適合者たちはそれぞれ特徴があった。

——西洋剣の聖遺物、アガートラム。その適合者はいくつもの剣を遠隔操作し、それを持って視界に映るノイズを殲滅する。

それはきつと、一人でも多くの人を守るため。

——剣の聖遺物、アメノハバキリ。その適合者は空を駆け、数秒の間に数十体のノイズを切り裂いた。

それはきつと、一秒でも早く人間の脅威を消し去るため。

——そしてグラフィイトが持っているものと同じ槍の聖遺物、ガングニール。かつての適合者は嵐のように攻め、ノイズに攻撃する隙

を与えなかった。

それはきつと、一体でも多くのノイズを殲滅するため。

また現在の適合者は未熟だが少なくとも身体能力は向上し、拳に触れたノイズは崩れ去っている。

これらのことから考えられる推測。それは聖遺物にはノイズの位相差障壁を無効化するだけでなく、使用者の想いに応えて形態変化を起こすということだ。だがしかし、グラフィイトが使用した際に形態変化は起きず、また恩恵と呼べるものもなかった。

「これが最も俺に適しているとは思えん……まさか、こいつを使った状態で経験を積む必要があるのか？」

武器は最初から強いとは限らない。それを用いて何度も鍛錬を重ねることで手に馴染み、そこで本来の力を発揮するのだ。

今回もその類だろう。そう判断したグラフィイトは立ち上がり、敵を求めて姿を消した。

『人類ではノイズに打ち勝てない。人の身でノイズに触れることは、すなわち炭となって崩れることを意味する。そしてまた、ダメージを与えることも不可能だ』

「……………」

壁の向こうから声が聞こえる。先ほどまで翼もその場所にいたのだが、発覚した事実で動揺し、心を落ち着かせるためにこうして部屋の外で息を整えていた。

今現在部屋の中では弦十郎と了子、友里に藤堯といった特異災害対策機動部二課のメンツ。そして先ほど連れてこられた1人の少女がいる。

『たった一つの例外があるとすれば、それはシンフォギアを纏った戦姫だけ。日本政府、特異対策機動部二課として改めて協力を要請したい』

少しも聞き逃さないように耳を澄ます。今まさに弦十郎が、少女に勧誘を行っていた。事実、現在だと二課のシンフォギア奏者は翼しかない。弦十郎の言う通り、一般人や自衛隊ではノイズに無力なのだ。だからもし彼女が二課に加わった場合、より多くの人たちを守れるだろう。

『……立花響くん。君が宿したシンフォギアの力を、対ノイズ戦の為に役立ててはくれないだろうか？』

「———っ」

翼はそれを理解している。しかし、納得はできていなかった。

だからこそ今すぐにも部屋に入りそうになる。しかしそれを歯を食いしばることで抑える。翼が言った所で状況は変わらない。そして件の少女、響が彼女の思う通りの性格だとしたら———

『わかりました。この力で誰かを助けられるというのなら、私は戦います！』

「……………フウ」

——こうなることは、必然だ。

その声が聞こえた翼はため息を吐き、壁に体を預ける。しかしすぐに体勢を整え、この場から離れるために歩き出そうとする。

「あ、翼さん」

「……………」

しかしプシューと言う音とともに扉が開き、そこから出てきた響が翼に声をかける。それに対し翼は歩みを止め、振り返って静かに彼女を見た。

「私も、戦うことにしました」

「……………そう」

「慣れない身ではありますが頑張ります。一緒に戦えればと思います」

そう言つて響は握手をしようと手を差し出す。その手を翼は見るが、握手せずに再び前を向いた。

「あ、あの……。一緒に、戦えれば、と……」

「……………あなたの力は必要ないわ」

「えっ？」

なぜですか、そう響は翼に問いかけようとする。しかし突如視界が暗くなり、それと同時に警報が響き渡る。緊急事態が起きていること

は誰の目にも明らかだった。

突然の警報に響は狼狽えるが、翼は指令室へと走りだす。それを見て我に返った響も後に続き、二人が指令室に着いた時には、弦十郎たちは既に持ち場についていた。

「ノイズの出現を確認！」

「現在、場所を特定中……………出ました。座標を表示します！」

友里の声と同時に、司令室の大画面にマップと同時にノイズの座標が表示される。

「リディアンより距離6000、及び20000！」

「また二カ所か……………だが片方は近い！」

「迎え撃ちます！」

「あ……………！」

場所が判明した直後、翼が指令室から飛び出る。それを響は見送ったが、しばし考えたのちに表情を引き締め、司令室から出ようとする。

「待て、君はまだ……………！」

「私の力が誰かの助けになるんですよね？ シンフォギアの力でないとノイズと戦うことは出来ないんですよね？ だったら行きます！」

「っ！」

今日、協力することが決まった響。もちろんシンフォギアを纏った戦闘訓練などした事がないので、危険だと弦十郎が止めようとする。しかし彼女は即座に言い返し、自身の覚悟を伝える。

それを聞いた弦十郎は、響が決してここで止まらないことを感じ取る。かと言って初心者を経験場の真っ只中に単独で送るのは自殺行為に近いので、新たな指示を出すために口を開く。

「……わかった。だが今回は翼のサポートに回れ！ 一人で戦うのは危険すぎる！」

「っ、……………はい！」

響は少しの間詰まるが、返事を返して今度こそ司令室を出る。やはりこのまま見送った場合、響はもう一カ所のノイズ出現座標に向かうつもりだったのだろう。

それを確信した弦十郎は内心ホツとしつつ、司令としての仕事をするために意識を切り替えた。

「2カ所の様子を常に報告しろ！ 了子君、あの GANG ニールの反応は？」

「二カ所共に反応なしよ」

「わかった。二人以外のアウフヴァツヘン波形を計測したらすぐに教えてくれ」

「了解。この間はまんまと逃げられた、今度は絶対に逃がさないわよ……………」

珍しく燃えているのか、了子はめまぐるしく機器を操作する。その様子を弦十郎は見ていたが、ふと藤堯の言葉が耳に入る。

「危険を承知で誰かの為になんて……。あの子、いい子ですね」

（…………果たしてそうだろうか？）

その言葉を聞いて弦十郎は内心疑問を抱く。

確かに響は人助けを率先してするのだからいい子なのだろう。しかし、それが命に関わるノイズとの戦闘においても一切変わらないというのは、普通なのだろうか？

（翼のように幼い頃から戦士としての鍛錬を積んできたわけではない。ついこの間まで日常の中に身を置いていた少女が、誰かの助けに

なるというだけで命を賭けた戦いに赴けるというのは、それは歪なことではないだろうか……?)

「……！ 弦十郎くん、来たわよ!!」

「っ、どつちだ!?!」

思考に陥りそうになった弦十郎だが、了子の大声で我に返る。

【来た】、つまり再びガングニールのアウフヴァツヘン波形が計測されたのだろう。響はまだ到着していないはずなので、それが以前現れたそれと同一である可能性は高い。

そして弦十郎はどちらで反応が起きたのかを了子に聞く。それに対し、了子からの返答はすぐだった。

「距離20000、B地点！ ……なにこれ、この前よりノイズの殲滅速度が速い!?!」

「ハアツ!!」

跳びかかるノイズに対し、グラフィアイトは双刃を振るう。切り裂きながらノイズの位置を確認し、その内の1集団に狙いを定めて、左手に持っていた槍を投げ飛ばす。

音にも匹敵する速度で投げられた槍は、ノイズが反応するよりも早

く着弾。土煙が周囲を覆うが、グラフィアイトは躊躇うことなくその中に入る。そして地面に突き刺さっているそれを拾いつつ、まだ倒しきれしていないノイズに拳や蹴りを叩きこむ。そしてその場から跳ぶことで土煙から脱出すると、それを狙っていたかのようにノイズが数体襲い掛かる。

「遅いッー！」

グラフィアイトはそれを冷静に観察し、双刃を振るって迎撃する。襲い掛かってきたノイズのすべてを打ち落とし、着地した彼は槍を構え、深く息を吐く。

「フウウウウウウ………！！！」

目を閉じ、グラフィアイトは足に力を溜める。動かない彼を見て好機と見たのだろう。残っていたノイズは全て溶けて混ざり合い、1つとなくなっていく。

瞬く間に彼よりも数倍の大きさになったノイズは、威嚇をしながら突撃する。

「——ッ!!」

「……………」

さらに巨大ノイズは体に付着していた部品を外し、飛び道具のようにしてグラフィアイトへ飛ばす。それは彼の逃げ道をふさぐような軌道を取り、その中心を巨大ノイズが走り抜ける。この攻撃、彼は避けることはできないだろう。

「……ここだッ！」

——もつともグラフィアイトに避けるつもりがあるのなら、の話だが。

巨大ノイズの攻撃が当たる直前、彼は目を見開いて足に込めた力を開放する。あまりの力に地面は大きく凹み、彼の姿はブレて消える。その突撃は一直線に巨大ノイズに迫り、一瞬のブレもなく通り過ぎた。

そして足を地面に叩きつけることで勢いを抑え、暫く地面を抉り続けることでようやく止まる。だがグラフィアイトは再びノイズに攻撃することはなく、槍を肩にかけて後ろを見ようとしなない。

あまりの速さにグラフィアイトを見失っていた巨大ノイズはそこでようやく気付き、今が好機と口を大きく開けて襲い掛かる。

「……ッ!!」

「無駄だ、すでに勝敗は決している」
「ッ!」

口がグラフィアイトに触れる直前、そこで巨大ノイズはようやく体に生じた異変に気づく。肉体に大きく空いた穴、そこから急激に体が崩れ去っていき、巨大ノイズが何かする前にそのすべてが塵となった。

「……やはり、足りんな。ノイズ程度では敵にもならんか」

グラフィアイトは右手に持つ槍を見ながら再びノイズを索敵する。そして別の箇所でノイズの集団を見つけ、そこに行こうと意識を集中させる。

しかし、瞬間移動する直前にノイズの数が減ったことを感じ取った。さらにノイズとは違う反応が二つ、両方ともにグラフィアイトにとっては既知のものだ。

「ガングニールにアメノハバキリ……………そうか」

あの二人がノイズと戦っている、それをグラフィアイトが感じ取った後、彼の声色が変わる。

今の状況、行ったところでノイズは殲滅されている可能性が高い。そして自分があの場合に現れば、彼女は間違いなく彼と戦うだろう。そしてグラフィアイトの今の目的は、この槍を使って実戦経験を積むことだ。

ならばここからグラフィアイトがとる行動は、おのずと絞られていた。

「あれから2年。どれほど成長したのか、見せてもらおう……………！」

「せいやッ!!」

剣を振るい、ノイズを細切れにする。致命傷を受けて崩れ始めるノイズを横目に見つつ、巨大ノイズを仕留めるために力を込める。

それをやらせはしないと巨大ノイズは体の部品を飛ばして攻撃しようとするが、それが放たれる前に響が横から蹴りを入れる。勢いよく放たれたそれをもろに喰らったノイズは体勢を崩し、致命的な隙を生み出す。

「翼さん！」

「ッ、はああああッ！」

——蒼ノ一閃——

響の声を聞き、翼は込めていた力を開放。巨大化した剣から放たれた剣戟は巨大ノイズの中心を通り過ぎ、真つ二つにする。その直後爆発が起こり、それは戦闘終了の合図でもあった。

「翼さん！」

「……………」

爆発した方向を見ている翼に対し、響が後方から声をかける。彼女は相変わらず無反応だったが、響きはひとまず自分の想いを伝えることにした。

「私……………今は足手まといかもしれないけれど、一生懸命頑張ります！」

「……………」

「だから、私と一緒に戦ってください！」

爆発も収まり、静かになった空間に響の声が響く。それを聞き終わった翼は、静かに振り向いて彼女を見た。

「……………そうね」

「翼さん……………」

始めて返してくれた、賛同の言葉。それがうれしくて、響の声色と表情は明るくなる。

その様子を眺めながら翼は、先程から変わらぬ表情で続きの言葉を口にしました。

「あなたと私、戦いましょうか」
「……………え？ つ！」

翼が放った言葉に呆ける響。しかし彼女が剣を振り上げたのを見た瞬間、横に転がってそれを避ける。

それを見た翼は響が体勢を整える前に近づき、その喉元に剣を突きつける。

「そういう意味じゃありません！ 私は翼さんと力を合わせて……………」

「わかっているわ、そんなこと」

「だったら、どうして!?!」

一瞬勘違いしたのかと思ったが、翼の言葉はその可能性を即座に切り捨てる。ならばなぜ戦おうとするのか、彼女は必死に問いかける。それに対して、翼の返答は単純なものであった。

「私があなたと戦いたいからよ」

「え？」

味方であるはずの自分と戦いたい。理解できないその返答に、響は頭が混乱する。

そしてそれに追撃するかのように翼の言葉は続く。

「私はあなたを受け入れない。力を合わせ、共に戦う仲間など風鳴翼には必要ない」

「……………」

「それでも人助けをしたいというのなら、アームドギアを構えなさい」
「アームド、ギア？」

初めて聞く単語に響は首をかしげる。その様子に翼は一瞬目を伏せるが、すぐに元の険しい表情に戻る。

「……常在戦場の意思の体现。あなたが何者をも貫き通す無双の一振り、ガングニールのシンフォギアを纏うのであれば——」

突きつけた剣を戻し、響と距離をとる。そして数歩の距離で向かい合った状態で彼女は響に再び剣の切っ先を向け、言葉を紡ぐ。

「——その覚悟を、構えてごらんなさい」

「か、覚悟なんて、そんな……」

翼が本気であると響は感じ取ったが、如何せん初めて聞いたものを出せと言われてもどうしようもなかった。

だからこそ響は正直に自分の状況を伝える、それがどうなるのかも知らずに。

「私、アームドギアなんてわかりません。わかってないのに構えろなんて、それこそ全然わかりません……」

「……………そう」

その言葉を聞き、翼は剣を下ろす。それを見た響はホツとしたが、すぐにそれが間違いであるとわかった。

——剣を下ろした翼は、一瞬で響の目の前に肉薄した。そしてその拳を握りしめ、油断していた彼女を目標にして振りかぶる。

「ノコノコと遊び半分で戦場に立たれても、いい迷惑なのよ」
「うぐッ！」

シンフォギアの恩恵か、ギリギリで顔をそらすことで響はその拳を避ける。しかし翼はそれを確認した瞬間にその手に剣を持って切り返し、峰を背中に叩きつける。そのまま衝撃で浮いた響の肩をつかんで地面に振り下ろす。

「カハッ……！」

「やはり、その程度なのね」

響は仰向けの状態で地面に叩きつけられる。一気に空気が押し出され、彼女は苦しそうに荒い呼吸している。シンフォギアのおかげで肉体へのダメージは少なそうだが、それでも今の彼女は戦闘不能だ。それを見ながら翼は彼女の胴体を跨ぐように立ち、その喉元に再び剣を突きつける。

「わかった？　これがあなたの限界。人助けなんて口では言ってるけど、あなたは何もできないの」

「翼、さん……」

「いい加減に夢から覚めなさい。奏のガングニールを引き継いだところで、あなた自身が変わったわけではないのよ」

「……………」

淡々と紡がれる翼の言葉を、響はただ聞くことしかできない。事情はどうであれ、間違いなくそれは事実なのだから。

響が大人しいのを見て、翼は最後の言葉を紡ぐ。彼女の心を、完全に折るために。

「ここは戦場。中途半端な覚悟を持った人間が来ても、すぐに死ぬだけ」

「ヒーローごっこなら、家でやってなさい」

《See you Next game……》

第17話 『拳を刻め in the fist!』

——随分と吠えるようになったじゃないか?——

「!?!」

二人しかいないはずの空間に響く第3者の声。忘れるはずもないその声を聞いた翼は目を見開き、どこか既視感を抱く声を聞いた響は辺りをキョロキョロと見回す。

翼が響の喉元から剣を離し、立ち上がる。そして立ち上がった彼女の後方に突如細かいブロックが発生し、それが収束して生物を形作っていく。

「利益を度外視し、己が意志を優先する。……成程、今のお前は人間のようだ」

そしてすべてを構成し終わり、歩きながらこちらへ近づいてくる存在の姿があらわになる。それは龍を模した全身鎧を纏い、右手には片手で持てるサイズの槍を握っていた。

そして足音から位置を察した翼は振り返り、その姿を視界に収める。

「お前、は……!」

「——だが、あまりにも傲慢が過ぎるな。その程度の力で、英雄にでもなるつもりか?」

そう言っただけの存在——グラフィアイトは立ち止まり、槍を翼に向けてる。その槍を見た彼女は剣を強く握り、己が抱く激情を隠そうともしない。

そして立ち上がった響がその槍を見た時、纏っているシンフォギア

が少し熱くなるのを感じる。違和感を感じて自分の身体を見ると、鎧が鼓動しているかのように淡く点滅している。そしてまた、それと共鳴するかのようにグラフィイトが持つ槍も点滅していた。

「ほお、共鳴反応か。その鎧とこの槍、同一の聖遺物ならそのくらい起きるか」

「あれって、まさか……………ガングニール？」

最初から予想していたかのような台詞を言い、グラフィイトは構える。それを確認した翼は跳び出し、剣を振り上げた。

「ようやく、見つけた！」

「ッ！」

上段から振り下ろされた剣と、振り上げられた槍が鏝ぜり合う。拮抗しているかのようにギチギチと二人の武器から音が鳴り、両者の距離はほとんど零に近い。

「あれから2年だ。今のお前がどれほどの力を得たか……………見せてもらう！」

「あの時の雪辱、忘れはしないぞ……………アンノウンツ!!」

以前と違って一歩も引かぬ様子の翼を見てグラフィイトは嬉しそうに言い、翼はその名を叫びながらさらに剣に力を込める。すると翼の纏うシンフォギアの脚部及び剣の峰からブースターが起動し、前方への加速力が増加する。

それを見たグラフィイトは矛先をずらし、左方向へ受け流す。彼のすぐ横を通り過ぎそうになるが、翼は峰のブースターのみを即座に解除。地面に刀身を突き刺し、それを軸として回転しつつ彼の背中を狙って蹴りを放つ。しかし彼は既に振り返っており、彼女の蹴りを両腕をクロスさせた状態で受け止めた。しかし勢いは強かつたらしく、

その状態のまま彼は数メートル後ろへ下がる。

そして着地した翼は剣を巨大化させて振りかぶり、グラフィイトは槍を地面に突き刺し、双刃を構えてそれを迎え撃つ。

「はあああああああッ!!」——蒼ノ一閃——

「激怒龍牙!!」

両者の放つ剣戟は中心でぶつかり合い、激しい衝撃と爆発を起す。煙で覆われ、響の視界から二人の姿が消える。しかし金属のぶつかり合う音が何度も響き始めたので、煙の中で二人はまだ戦っているのだろう。

そして一際強い金属音が鳴った時。煙が掻き消えるように払われ、鏝ぜり合っている二人の姿があらわになる。

「これはどうだ!」

「っ、なめるなあ!」

グラフィイトが力を込め、翼の剣をかちあげる。そして右足を挙げ、無防備な腹部に蹴りを放つ。しかしそれを察知した彼女は体を捻りながらその足をつかみ、その力を利用して後方へ投げ飛ばす。そして落ちてきた剣をキャッチしつつ走り出し、着地した瞬間の彼に切りかかる。それを彼は槍を持って受け流し、刺突と薙ぎ払いを混ぜて反撃する。

今までの攻防。グラフィイトは攻撃をすべて槍を持って対処し、翼は攻撃を時には避け、時には受け流す。そして隙を見つければ両者ともに武器と体術を持って反撃していた。

「随分と成長したな、アメノハバキリ!!」

「アンノウン! 私はお前を倒し、弱い自分の過去に決着を付ける!!」

幾度となく打ち合わされる剣と槍。その様子を響はただ観戦する

ことしかできなかつた。

『——やん、響ちゃん！ 聞こえる!?』

「了子さん!？」

『よかつた、音声は繋がっていたのね。そこで誰が翼ちゃんと戦っているの?』

「えっと、わかりません。でも翼さんは「アンノウン」と呼んでいました」

『アンノウン……カメラが急に使えなくなつたからまさかと思つていたけど、やっぱり……!』

「あの人を知っているんですか?」

『話した後、今はすぐにその場から離脱して!』

「でも、翼さんが……!」

話をしている間も二人の攻防は続く。しかしわずかだがグラフィアイトの攻撃の時間が多く、翼の防御に割く時間が長くなってきていた。

未だ互角ではあるが、このままだと翼が不利になるのも時間の問題だ。そう思った響は走りだそうとするが、頭の中に先ほど言われた彼女の言葉が響く。

——ここは戦場。中途半端な覚悟を持った人間が来ても、すぐに死ぬだけ——

——ヒーローごっこなら、家でやってなさい——

「……………」

いつの間にか響の足は止まり、その瞳は悲しきで揺れていた。

響が今までやってきた人助け、それは翼から見ればヒーローごっこなのだろう。そして彼女は未だ、ノイズと戦うことの重さを実感できていなかった。故に風鳴翼は、決して今の立花響を受け入れない。

その事をわかってしまった響は、前に進めずにいた。

『響ちゃん！ 気持ちはわかるけど……』

「……わかりました。けど、このままじゃ翼さんが」

『あら、それなら大丈夫よ』

「？」

『特異対策機動部二課の最高戦力が既にそっちに行つたから』

その声が聞こえたのと、響の視線の先で轟音が鳴り響いたのは同時だった。

「……これは」

グラフィアイトは前方にいる男性を見て眩く。

先ほどまで翼との戦闘を楽しんでいた彼だが、徐々に自分が押していることに気づいていた。ならばここで一撃加えてやろうと考え、彼女が振るった剣を左手で握って止め、その隙を流さず槍を叩きこむ。彼女は防御しようと腕を上げるが、それよりも早く槍が迫り――

「ふんー！」

――突如現れた男性によって受け止められたのだ。生身の人間が

自分の一撃を止めたことにグラフィアイトは驚くが、すぐさま距離をとってその男と相対する。

突然の乱入者に驚いたのはグラフィアイトだけではなく、翼もまた男性に驚いていた。

「叔父様!？」

「おう、翼。響君を連れて下がっている」

「しかし、奴は私が！」

「いいから行け。……頭に血が上っているのは、勝てるものも勝てないぞ」

「っー……………はい」

翼が一步下がったのを横目に見て男性——弦十郎は拳を構える。彼から放たれる気迫を感じ取り、グラフィアイトは油断など必要ない相手だと判断した。

「話は終わったか？」

「ああ、十分だ。悪かったな、待たせちゃって」

「構わんさ、お前が俺を楽しませてくれるのならな」

そう返し、グラフィアイトは槍を構える。

「……………」

「……………」

お互いに一步も動かず、その場の空気が静まり返る。その並々ならぬ様子に響はおろか、翼でさえもその場を動けずにした。

「おおおオオオツ！」

「っ、なに!？」

数秒後、弦十郎の目が見開いて突撃する。踏み締めた足の衝撃はさまざま、それは地面に穴が開くほど。それ故に一瞬でグラフィイトの目前まで迫り、拳を握りしめて撃ち放つ。

油断こそしていなかったが、ただの人間がこれほどの速度を出すとは思っていなかったグラフィイトは、反応が少し遅れて防御の構えをとる。その直後に弦十郎の拳が叩き込まれ、彼の腕に予想以上の衝撃が伝わる。

さらに追撃を加えようとする弦十郎を見て、グラフィイトは即座に蹴りを放つ。それを見て彼は冷静に拳を開き、迫りくる足を受け止める。

弦十郎の拳を受け止めるグラフィイトと、グラフィイトの蹴りを受け止める弦十郎。お互いの攻撃の強さは、それぞれ受け止めた際に両者の足場が大きく凹んだことからわかるだろう。その状態で拮抗するが、二人の眼からは隙を見せた瞬間に攻撃するという意思がひしひしと伝わっていた。

「なんの力も使わずにここまでやる人間がいるとはな……!」

「人間なだけじゃなく、俺は大人だからな。子供たちが見ている前だと、普段よりも強くなれるんだよ!」

「っ、何を馬鹿なことを!」

到底納得できない返答に、グラフィイトは怒りを含ませながら弦十郎の拳をはじく。そして槍を持って薙ぎ払い、彼が距離をとった瞬間に詰め寄って連続で刺突を繰り返す。

それを見た弦十郎はファイティングポーズを崩さぬままその刺突を避け続け、その内の一撃をアッパーで崩す。これによりグラフィイトの体勢が崩れ、その隙を見逃さずに顔面に拳を叩きこむ。それはモ

口に入ったように見えるが、彼は数歩後ろに下がるだけで大したダメージではなさそうだった。

このやり取りを経て、グラフィアイトの身体が震える。ただしそれは憎しみや悲しみなどではなく、ましてや人間に攻撃を喰らったという怒りなどでもない。

「フ、ハハハハハハハッ!!」

——彼の心を満たすもの、それは歓喜であった。

「いいぞ！ 俺と互角に戦うどころか、まともなダメージを与えたのはお前が初めてだ……!」

そう言い放ち、握っていた槍を消す。そしてグラフィアイトも拳を握り、腰を落として堂々とした構えをとった。

奴と戦う場合、武器はむしろこちらの枷となる。そう判断したグラフィアイトは、体術を持って弦十郎と戦うことにしたのだ。その構えを見た弦十郎は不敵に笑い、再び構える。

「……始まる前に聞こう、お前の名はなんだ？」

「風鳴弦十郎、特異対策機動部二課の司令だ。……行くぞ、アンノウン」

「アンノウンではない。俺の名はグラフィアイト、龍戦士グラフィアイトだ!!」

奴は自分が名乗るのにふさわしい戦士である。グラフィアイトは弦十郎を認め、名を名乗った。そしてそれと同時に駆け出し、拳を握り

しめる。それを待ち受ける弦十郎もまた、拳を構えた。

そして二人の距離がゼロになり、二人は同時に拳を繰り出した。それはクロスカウンターのように互いの頬にねじ込まれ、二人の顔が横にずれる。しかしその目は相手を逃さず、すばやく体制を整えて殴り合う。

「ハハッ、凄まじいな！ どのような鍛錬を行えば人の身でそれほど
の強さが手に入る!?!」

「飯食って、映画見て、寝る！ 男の鍛錬は、それで十分よ!!」
「そうかッ！」

グラフィアイトの拳は荒々しく、一撃一撃に必殺の意志が込められている。致命傷以外は無視して拳を振るう姿は、まさしく肉を切らして骨を立つを体現していた。

弦十郎の拳は洗練されており、一撃一撃が必中の意志が込められている。グラフィアイトの攻撃を時には避け、時には受け止め、時には受け流して無力化していく。そして隙を見つけては的確に反撃を加え、確実にダメージを加えていく。本来ならその一撃一撃もすさまじく重いもののだが、グラフィアイト自身の耐久性と纏う鎧が衝撃を抑えていたのもあって大したダメージにはなっていなかった。

「どうッ！」

「無駄だ！」

グラフィアイトの拳を、弦十郎は顔をずらすことで避けつつ拳を腹部に叩き込む。それを膝を上げることを受け止め、勢いを利用しながら回し蹴りを放つ。彼は両手で蹴りを受け止めるがグラフィアイトは力づくで足を振るい、彼の体勢を崩させる。そして着地した足を踏みしめてそのまま飛び蹴りを放つが、体勢を立て直しながら彼は正拳突きで迎え撃った。

しばし拮抗し、ぶつかり合うエネルギーが爆発する。その勢いに二

人とも吹き飛ばされるが、グラフィアイトは体制を戻して着地しながら走りだし、弦十郎はバク転で着地しつつ走り出す。右手を握りしめた両者は全力で振り絞り、射程内に入った瞬間に振りかぶった。

「おらあああああああああッ!!」

「おおおおおおおおおッ!!」

そして同時に放たれた拳は互いの顔面を捉え、轟音を響かせる。最初と同様にクロスカウンターとなった二人はふらつきながら距離をとる。弦十郎は靴が壊れているがかすり傷しかなく、グラフィアイトは兜の部分に罅が入っていた。

「はあ、はあ、はあ……この靴高かったんだぞ。一体何本の映画を借りれると思ってるんだ？」

「フウウウー……俺が知るか」

息を長く吐いたグラフィアイトは構えを解く。その様子を見て弦十郎は内心疑問に感じたが、警戒を解くことはしなかった。

「今宵はここまでだ、弦十郎。お前との戦いをここで終わらせるのはあまりにも惜しい」

「そうか？ お前には聞きたいことが山ほどある。同行願いたいものだが……」

「人間共のところに行くなど願ひ下げだ……ではな、次は相応しき舞台で心行くまで戦おう」

「っ、待てー!」

そう言うとグラフィアイトの身体が崩れ始める。ここに来たときと同様の方法で離脱するつもりなのだろう。逃すまいと翼が駆け寄るが、弦十郎が手を伸ばしてそれを遮る。

弦十郎から見て、全力を出しても勝てるかどうかかわからない相手。

ここで離脱し、かつ狙いを自分一人に絞ってくれるのならむしろ歓迎だった。

「……アメノハバキリ、お前との決着も必ず付ける。だが、今のお前では俺には勝てん！」

その言葉を残し、グラフィアイトは消え去った。数秒間弦十郎は周囲を警戒するが、何も来ないのを確認して構えを解く。

そしてこちらに駆け寄ってくる響を見つつ、目の前で座り込んだ翼にどう言葉をかけるか、思考をめぐらせるのであった。

街はずれの廃墟。その一室に細かいブロック状の粒子が集まり、グラフィアイトが姿を現す。そしてガシヤコンバグヴァイザーを取り外して変身を解除しつつ、ソファに転がる。

「ハハハ……今日は予想以上の収穫だった」

そう呟きつつ槍を取り出す。その外観は今までと変わらないが、その内部から伝わる力がほんの少しだが強くなっているのを感じ取れる。原因はおそらく、響が纏っているガングニールと共鳴反応が起きたためだろう。

今回は戦うどころか接してもいないのでこの程度だが、もし長時間

戦うことができたならこれ以上の収穫を得れるかもしれない。

「そしてアメノハバキリ……随分と強くなった」

2年ぶりの翼との戦い。以前は力もなく、何より心が弱かった彼女だが、今宵の戦いではそれらがだいぶ改善されていた。事実グラフィアイトと十数分間も互角の戦いを繰り広げ、1・2発だが彼女の攻撃も喰らっていた。このまま順当に強くなれば、そう遠くないうちにこの状態の自分を超えてくるかもしれない。

これらは想定していた目的であり、両方ともに十分な成果を得ることができた。これだけでも今宵戦った甲斐があるのだが、そこに更なる成果が加わっていた。

「風鳴弦十郎……ただの人間でありながら、あれほどの高みに至った存在」

あの時の戦い、お互いに様子見程度だったが十分に心躍る戦いだった。この程度であればほどの実力なのだ、本気を出して戦った場合はどこまで強くなるのか。考えただけで武者震いが起きる。

「ああ、楽しみだ。本当に楽しみだ……！」

これならば、こいつを開放できる日も近いかもしれない。そう思いながらグラフィアイトは懐から真っ黒なガシヤットを取り出し、月の灯りに照らされたそれを眺めていた。

《See you Next game……》

第18話 『Noiseと介入者と…前編』

「今夜、あなたにも出てもらおうわ。狙いはこいつ……」

目の前の女性から、1枚の写真が手渡される。それを見た私は、頭に浮かんだ疑問をぶつけた。

「フィーネ、こいつは？ 二課の連中には到底見えねえが」

その写真に写っていたのは、どう見てもシンフォギア奏者には見えなかった。龍を模した全身鎧を纏う存在、人型であることから人間だと予想できるが、それ以外はこの写真からはわからない。

「そいつの名はグラフィアイト。数年前から突然現れ、いくつかの聖遺物が私をとる前に奴に奪われているの」

「あんたよりも？ ノイズを送っているのか？」

「信じがたいことだけど、奴は以前まで聖遺物の加護無しでノイズを殲滅していたわ。さらにここ最近では聖遺物を扱い始め、本格的にノイズでは手が付けられなくなっている」

「な……!?!」

女性——フィーネの言葉に、私は啞然とする。シンフォギアの加護無しでは戦いにもならないノイズ相手に、聖遺物なしで戦う。性質の悪い冗談としか思えなかったが、彼女の表情からして真実なのだろう。

「そんな奴が……」応聞くけど、この鎧は違うんだよな？」

「聖遺物でないことは確定ね。でもこいつについては不明なことばかり。だから今夜の戦い、あなたの目的は3つよ」

フィーネが指を3本開いた状態で私に突き出す。私が写真から彼女に視線を移すと、彼女は指を1つずつ折り曲げながら口を開く。

「1つ、グラフィアイトに接触し、可能なら協力関係を結ぶこと」
「……………」

そんなことできるのか？ そう思ったが私は言葉にしなかった。確かに現状の私たちの目的は一致しているが、それで協力するのなら向こうから何か接触があってもいいはずだ。それがないということは、向こうにその気がないということなのだろう。

と言ってもフィーネもそのことは重々承知しているはずだ。【可能なら】と言っている当たり、彼女は内心無理だとわかっているのだろう。

「2つ、それが無理そうなら戦い、奴を排除すること。基本的にこの2つが優先ね」

「へ、いいじゃねえか。私は最初からそっちの方がいいんだけどな？」
「念のためよ、それにあなたにはこれを使ってもらおうわ」

そう言いながらフィーネは後ろにある鎧を見ながら言う。私としてもそちらの方が都合がいいので、断る理由もなかった。

「いいぜ、歌う必要がないからそっちの方が私にや合ってる」

「あなたのシンフォギアを二課に隠匿するのも理由よ。おそらく途中から奴らは介入してくるだろうし、そこで一度拮抗状態になるはず」

そして3つ目、そう言つてフィーネは最後の指を閉じる。その言葉を聞いて、私は了承の意を込めて笑った。

「二課に所属しているシンフォギア奏者、立花響を私の元に連れてき

なさい」

「……………」

拠点の廃墟。その一室に広げられた地図を見ながら、グラフアイトは思案する。それは彼が今いる街の地図なのだが、そのいたるところには赤いマーカーで印がされていた。

「そしてこれが昨日奴らが現れた地点。……やはりか」

手に持ったペンで地図の一角所に赤い点を加え、グラフアイトは呟く。そして再び地図全体を見渡し、今まで自分が予想していたことを確信した。

一見まばらなようにも見えるノイズの出現位置。しかしある場所に注目してみると、明らかにそこを中心としてノイズが出現しているように見える。その場所の名は――

「――私立リディアン音楽院、あの連中の根城となっている場所」

別の色のペンでリディアン音楽院に印をつける。そしてそこを中心として真円を描くと、ノイズの出現位置のほとんどがその中に入る

ていた。

そもそもグラフィアイトが事前に調べた情報では、ノイズ自体の出現頻度は低いはず。だと言うのに数年前から妙にノイズの出現頻度が高いように感じていた。……まあ、と言うよりもグラフィアイトが行く先々に大体ノイズがいた、と言った方が正しいのだが。

つまり何が言いたいのかと言うと、グラフィアイトは最近のノイズは人為的に操られているのではないかと考えていたのだ。そしてその操作ノイズの出現先は遺跡やいつぞやのライブ会場、今回のリディアン音楽院周辺。これらに共通していることは一つ、聖遺物の存在だ。

「ならば今の狙いは二課にある聖遺物……おそらくはあれか」

以前侵入した際に手に入れた、二課が所有している聖遺物のリスト。その中に2つ存在していた、経年劣化や破損が見られない完全聖遺物。考えられる狙いはおそらくこれらだろう。

しかしそのうちの1つは既に現在は消失している。つまり奴らの目標は、もう1つ。

「完全聖遺物、デユランダル。もしあれが狙いだとしたら、早めに潰す必要があるな」

まだ憶測の域を出ないがグラフィアイトと目的が重なっている以上、おそらくノイズ側とは敵対するだろう。普通なら協力関係になるのかもしれないが、この男に限ってそれはない。

「まずは釣り出す必要がある……ちよūdい、次は少し派手に行くか」

既に夕日は消え始め、夜が近づいている。今までと同じなら、今宵もノイズが現れるだろう。狙うならそこだ。

そう決断したグラフィアイトは立ち上がり、ノイズを探すために部屋

を出ていった。

そして時は過ぎて、辺りが暗闇に包まれたころ。グラフィアイトの目の前には、ノイズが大量にうごめいていた。

「今日はずいぶんと多い。が……」

そう呟きつつグラフィアイトはガングニールを構える。そして一気に肉薄し、ノイズたちの目の前まで迫る。

「もはや貴様ら程度では、敵にもならん！」

そう言いながら、槍を振るう。加護を得ている一撃はノイズを切り裂き、撃墜していく。

一手遅れてノイズも反撃していくが、それももう見慣れたもの。グラフィアイトは最小限の動きで避けながら接近し、次々にノイズを塵に変えていく。

「戦うだけ無駄だな。最早奴らから得られるものはない」

その言葉と共に一步下がり、獲物をグラフィアイトフアングに切り替える。そして力を込めて、ノイズの集団に向かって全力で振り抜く。

「激怒龍牙!!」

その言葉とともに放たれた剣戟はノイズの集団に吸い込まれるように飛んでゆき、大爆発を起こす。

そして土煙が晴れると、そこにノイズは1体たりとも存在していなかった。

「……………」

戦闘は終わったが、グラフィアイトはその場から離脱せずにとどまっていた。彼の戦士としての勘を感じ取っていたのだろう、あまりにも呆気なさすぎるということ。

今まで通りなら、ここからさらにノイズが追加で出現していた。なのに今回はその様子はない、それはつまり——

「よお、あんたがグラフィアイトか？」

——獲物が針にかかったということだ。

「思えば貴様らは随分と邪魔をしてくれた。その正体が気にはなっていたが……………」

聞こえてくる声に返答はせず、グラフィアイトはある一方向を見ながら話す。一見、木々しか見えないが、その奥から歩いてくる存在を彼は感じ取っていた。

そしてそのすべてを言い終える前に、その存在は姿を現した。白銀

のボディースーツに青銅の蛇を思わせる鱗で形成された肩パーツ兼鞭、そしてその顔はバイザーによって隠されていたが、声から大体の察しはついていた。

「女と来たか、それに子供だと？ 冗談もいいところだな」

「……ほーお、言ってくれるじゃねえか？」

グラフィアイトの言葉が癩に障ったのだろう、少女の口角がヒクヒクと上がりながら震える。その様子を眺めつつ、彼は言葉をつなげる。

「で、今度はお前が俺と戦うか？」

「私はそうしたいんだけどな。その前にやることがある……お前、私たちと手を組まないか？」

「フンッ！」

少女への返答は、槍の投擲だった。高速で飛んでいくそれだが、少女はそれをわかっていたかのように首を傾けてそれを避ける。彼女の顔面の横すれすれを槍が通り過ぎていき、後方の木に深く突き刺さる。

「おー、危ねえ危ねえ………ッ！ わかつちやいたが、やっぱ無理かい!？」

「当たり前だ、人間と手を組むだと？」

投げたと同時に飛び込んでいたグラフィアイトは、振りかぶったグラフィアイトフアングを少女に向けて振り下ろす。それを少女は鞭を間に挟むことで受け止め、鏢迫り合いになる。その状態で少女は口を開くが、それに対する彼の口調は荒々しい。

「随分となめたことを言ってくれる。なぜ俺が弱い人間如きと手を組まなければならぬ！」

「協力関係は無理……ならー！」

無理やり相手をはじき、グラフィアイトは双刃を連続で振るう。刺突と薙ぎ払い、更に叩きつけが混ぜられた攻撃を少女は危なげなく躲す。そして距離をとった少女は反撃とばかりに鞭を振るった。

「もうやっちまってもいいってことだよなあ!？」

「はあッ！」

迫りくる鞭を、グラフィアイトは跳んで交わす。そして双刃を握る手に力を込め、それを開放した。

「激怒龍牙!!」

「そらよっ！」

放たれた剣戟を、少女は鞭を振るうことで迎撃する。ぶつかり合った瞬間に爆発するが、彼女にダメージが入った様子はない。それを示すかのように少女は不敵な笑みをグラフィアイトに向けていた。

自分の技を防がれたが、グラフィアイトは動じた様子を見せずに着地する。そしてお互いに武器を構え、一步も動かなくなった。

「……なるほど、それが完全聖遺物の力ということか」

「へえ……てことは、こいつの出自を知ってるんだ？」

先ほどの戦いを思い返しつつ、グラフィアイトは呟く。それに少女は返答しつつ尋ねるが、お互いの眼は油断がない。どちらかが隙を見せた瞬間、状況は再び動き出すだろう。

「あの時奪い損ねたものだ。……ちようどいい、奴らのシンフォギアを奪い取る前に貴様のモノからいたただこうかッ！」

その言葉とともに再び跳びあがり、槍を投げつける。少女はそれを鞭で迎撃しようとするが、同時に双刃を持って落下してくるグラフィアイトを優先するために横に跳んで回避する。そして槍が着地し、辺りが土煙で覆われる。

視界が遮られたことで少女は一瞬動揺するが、後ろから迫りくる殺気を感じ、ほぼ反射でその場にしゃがみ込む。するとその直後、先程まで少女の頭があった場所に双刃が振るわれ、続いてしゃがんでいる少女に振り下ろされる。

「ちい……………ガッ!？」

それを少女は両腕を交差させて受け止める。強い衝撃が身体に伝わり、彼女の足元が大きく陥没する。

どうにか反撃しようと画策するが、それを行う前に突如腕の負担が軽くなる。突然の事態に一瞬混乱するが、背中に衝撃が走って吹き飛ばされたことで、グラフィアイトに蹴られたことがわかる。

勢いを殺せず背中から着地してしまうが、すぐさま姿勢を立て直す。しかしその隙を逃すはずもなく、グラフィアイトは既に肉薄していた。

「どうした、その程度かッ!？」

「っ、冗談ー!」

そう言いながらグラフィアイトは走り、途中地面に突き刺さっていた槍を引き抜く。そしてその勢いのまま放たれた刺突を、少女は鞭を持って正面から迎撃した。激しくぶつかり合う二つの武器、武器としての格は少女の方が上なのだが、使用者のスペックがその差を埋めていた。

そしてぶつかり合うエネルギーが爆発し、お互いに距離をとる。数秒にらみ合ったのち、お互いに同じ方向へと走りだした。

「おおおおおおおおおおおおおッ!!」

「おらあああああああああああッ!!」

同じ方向に走りつつ、その間も激しい攻防が止むことはない。道中あつた物体はすべてなぎ倒し、高速でぶつかり合う二人。

いつの間にか最初にいた森林から離れ、少しずつ周りの風景は人の手によって整備された風景に変わってきていた。

「くらうがいい……! 激怒龍牙!!」

「ちよせえ!!」——NIRVANA GEDON——

周りに邪魔なものがないことを確認した二人はその場に立ち止まり、力を込める。同タイミングで放たれた二人の大技、それは中心でぶつかり合い、激しい爆発を引き起こす。

その衝撃はすさまじいものだが、知ったことかと言わんばかりに二人は武器を構えて突撃する。そしてお互いに振りかぶった武器を相手に叩きつけようとして——

——千ノ落涙——

「ッ、来たか!」

「ちいつ!」

——上から来る脅威を感じ取り、その場から離れた。その直後、彼らが出た場所に剣型の剣戟がいくつも降り注ぎ、再び周囲を土煙が覆う。少女はいきなり攻撃してきた襲撃者を、グラフィアイトはようやく来た戦士を見つけるために目を凝らした。

そしてその煙が晴れた時、彼らの前に立っていたのは、1人の少女。

「奏を失った事件の原因と、奏のガングニールのシンフォギア……この巡りあわせは、幸運と言わざるを得ないわね」

「てめえは……!」

「……それで、お前は どうする?」

「知れた事。その2つ……共に回収させてもらう!!」

その言葉と共に少女——風鳴翼は、剣を構えて二人に突貫した。

《See you Next Sequel……》

第19話 『Noiseと介入者と：後編』

「おりやああああッ！」

その知らせが届いたのは、響がノイズと戦っている時だった。

せっかく今夜は未来と星を見に行くという約束をしていたのに、それすらも許さない連日のノイズ発生。彼女にすぐ戻ると言った以上、今回の響は一味違っていた。

「未来と一緒に、流れ星を見に行くんだ……だから、さっさと消えろッ！」

いつもはノイズの動きを避け続け、確実に攻撃が通る時だけ反撃をしていた響。しかし今回は攻撃こそ最大の防御と言わんばかりに猛攻を続け、出てくるノイズを一網打尽にしている。

「——ッ!!」

ノイズにつかみかかり、力に任せて引きちぎってゆく。身体の内側から溢れ出てくる激情に身を任せて暴れ回る彼女の姿は、まるで理性ある人間のように見えなかった。

そして響の咆哮が響き渡ること数分。彼女が落ち着いた時、周囲にノイズの気配は残っていなかった。そこで彼女がようやくやく正気を取り戻したところに、二課の司令部から連絡が届く。

『響さん、聞こえますか!』

「藤堯さん?……まさか、他の場所にノイズが!」

『ノイズではありませんが、ノイズ並に重要度が高いことです。アン
ノウン……グラフィアイトが現れました!』

「っ!」

飛び込んできた知らせ、それはグラフィアイトが出現したという事。
あの日以降は出会うことはなかったが、度々どこからか現れてノイズ
と戦っていることが確認されているらしい。そこに向かおうとする
が、大抵自分たちが相手取っているノイズを殲滅できたときには向こ
うの戦いは終わっており、そのまま行方をくらませている。

「場所はどこですか!」 あと、翼さんは?」

『場所は今からナビゲートします、そして翼さんなら既に到着して
でしょう!』

「ですよねえ!」

それはともかく、このタイミングで現れたのは少しまずい。なぜな
ら今は戦闘が始まってから時間が経っている。それはつまり、自分よ
りはるかに強い翼なら既にノイズとの戦闘を終わらせているとい
うことだ。

藤堯のナビゲートに従い、響は急いで戦っていた駅から出る。そし
てシンフォギアの恩恵を最大限に生かし、建物を跳び移りながら高速
で移動する。

『またグラフィアイトだけではありません。もう一人、ネフシユタンの
鎧と言う完全聖遺物を纏った何者かもその場にいます!』

「わかりました!……翼さん」

グラフィアイトと翼の因縁はあの戦いの後日、大まかにだが弦十郎か
ら聞かされていた。翼の相棒——天羽奏の武器を奪い、奪い返そうと

した翼が惨敗した存在。自分の無力さを思い知らされた彼女はその日から、何かにとりつかれたかのように鍛錬を行ってきたらしい。それほどもでに、彼を憎んでいるのだろう。

普段の翼の戦い方は洗練されており、的確に攻撃していくものだった。しかしあの時の戦いの時だけは少し違っており、とても荒々しく感じたのだ。2年もの間、刃を研ぎ続けていた彼女にとって待ちわびた相手と出会ったのだ。今まで溜まってきたものが爆発しても仕方がない。

「あのグラフィイトって人も強かった。でも、翼さんだって……ッ！」

直後、視界に爆発が映る。それは藤堯に教えてもらった場所付近であり、すでに戦闘が始まったことを示していた。

「ようやく着いた……って、うひゃッ!？」

指示された場所にたどり着き、着地する響。すると正面に見える木々が音を立って砕け散り、土煙の中から3つの人影が飛び出してくる。

「せいー！」

「甘いー！」

「ッ……まだだあー！」

最初に飛びだしてきたのはグラフィイト。それを追うように翼が飛び出し、彼に剣を振り下ろす。それをグラフィイトは武器で迎え撃たず、体を捻ってかわしつつ回し蹴りで反撃する。カウンター気味に

放たれたそれを翼は間に腕を挟むことで衝撃を抑えるが吹き飛ばされる。しかし地面に背中が着く前に立て直し、足を打ち付けて空中へ跳ぶ。

「この一撃、受けて——」

「おいおい、あたしを無視すんじゃないよ！」

「ッ、邪魔をするな!!」

剣を巨大化させようと構えた翼に、最後の人影である少女が鞭を振るって攻撃する。それを確認した翼は行動を中断して回避。連撃の中に生まれるわずかな隙を見つけて少女に向かって剣を投げ、巨大化させつつ蹴って加速させる。

「はあああああアッ!!」——天ノ逆鱗——

「ハ、ちよせえ!」

回避することは無理だと即座に判断した少女。地に足をしっかりとつけ、鞭を盾のように重ねて展開して翼の攻撃を受け止めた。剣と鞭は激しくぶつかり合っていたが、徐々に剣が押し返されていく。

「生憎と、使ってるモンのポテンシャルが違うんだよ……!」

「随分と悠長だな!」

「なっ!?!」

そのまま弾こうと少女は力を込めるが、唐突に翼の声が背後から聞こえて驚く。その直後にわき腹に衝撃が走り、体勢が崩れる。それによつて盾が崩れて、巨大化した剣が一気に少女に迫る。思い切り横に跳ぶことで回避に成功するが、即座に剣を持った翼が追撃する。

そのまま繰り出される翼の攻撃、それは反撃する暇も与えないほど苛烈であり、少女は防戦一方だった。

「てめえ、いつの間に回り込んでいやがった!？」

「ぶつかり合った、その瞬間からだ!」

「そういうこと……って、グッ!」

受け止めながら少女が叫ぶと、翼がネタ晴らしをしつつ姿勢を一気に下げる。一旦距離をとるため薙ぎ払おうとした少女は見事にそれを透かし、隙だらけの腹部に翼の蹴りが容赦なくたたきこまれる。

しかし少女もただではやられず、その勢いを利用して後方へ跳ぶ。それを逃がさんとばかりに翼は剣を巨大化させるが、それよりも少女の反撃の準備が整うのが早かった。

「隙だらけなんだよ、くらいやがれ——」

「貴様がな!」

「な……!？」

大技を叩きこもうとした少女の頭を、後ろからグラフィイトがつかむ。そのまま力づくで彼女を地面へ投げつける。強い衝撃と共に地面に打ち付けられた彼女はしばし意識が朦朧となるが、すぐに意識を取り戻して立ち上がろうとする。

……が、その隙を地上に立つ翼と空中で構えるグラフィイトが逃すはずもなかった。

「激怒龍牙!!」

「はああああッ!!」——蒼ノ一閃——

同時に放たれた2つの剣戟。それは少女を中心として大爆発を起こす。それを見届けた二人はお互いを見据え、武器を構えて跳びだした。

しかしぶつかり合う前に突如煙が晴れ、その中心には少女が立っている。鎧に多少傷が見られるが、その様子は未だ健在だ。

「……ほお、随分と頑丈だな。流石はネフシユタンの鎧、完全聖遺物の名は伊達ではないということか」

「ネフシユタンだけだなんて言ってくれるなよ。……あたしの天辺は、まだまだこんなもんじゃねーぞー！」

「なら、その上から叩き切るまでよ」

一旦膠着するが、言葉を交わした後に3人共己が獲物を構える。見た限り三つ巴の状況のようだが、何にせよ翼の援護に来た響は今のうちに声をかける。

「翼さん！」

「っ、あなた……！」

「……ガングニールか」

「お、来たか。だが今のお前はノーセンキューだ、こいつらと遊んでな！」

少女はそう叫び、右手に持っていた杖を構える。その先端から光線が放たれ、ちょうど3人と響の間に着弾して光がほとぼしる。それが消えた時、その場にはダチョウ型ノイズが複数体おり、それらは同時に響に襲い掛かった。

「嘘、ノイズが操られてる!？」

「ッ、そこをどきなさい！」

「嫌なこった!!」

ノイズと戦闘を始める響を見て、翼はその場に向かおうとする。しかし少女がそれを阻み、彼女に向かって鞭を振った。

再びぶつかり合う二人。それを横目にグラフィイトが響の元に向かおうとするが、その正面に男性が立ちふさがった。

「おっと、響君の元にはいかせんよ」

「ようやく来たか、弦十郎。……だが、お前の相手は俺ではない」

「なに……?」

弦十郎にそう返しつつ、グラフィアイトは懐から物体を取り出す。

武器とは思えぬそれを見て疑問に感じる弦十郎をよそに彼はその物体——ガシヤットを起動させた。

『ドラゴナイトハンター、Z!』

「ドラゴナイト、ハンターZ……?」

「……フ、はあッ!!」

「っ!」

周囲に響く音声を聞き、その言葉を繰り返す。しかしその直後にグラフィアイトが切りかかり、それを弦十郎は横に跳んでそれを避ける。グラフィアイトはそのまま弦十郎の横を通り抜けて駆けだし、右腕のみ鎧を解除する。その視線の先には、響と交戦しているノイズの姿があった。

「さあ、始めるぞ!」

『ガシヤット!』

「待て!」

弦十郎が追いかけるが、それよりもグラフィアイトの方が早い。起動させたガシヤットを右手に固定されているガシヤコンバグヴァイザーに差し込み、がら空きになっているノイズの胴体にバグヴァイザーの銃口を突き刺した。

「ノイズは所詮兵器……そしてバグスターウイルスは、元はコンピュータウイルスだ。……推測の域を出なかつたが、上手くいったな」

「なに、これ……?」

「まさか、ノイズが作り替えられている?」

突き刺さると同時にガシャットとノイズに電気がほとばしる。それと同時にノイズの動きが止まり、その身体が細かいブロックに覆われる。それは徐々に大きくなっていき、ブロックは球体の形をとって膨張を続けていく。

元の質量の数倍まで膨らんだそれは激しく光り出し、その内側からノイズとは別の存在が姿を現した。

「こいつは……!」

「ッ!!」

黒い鱗に覆われた爬虫類を思わせる体、鋭い爪と牙を携え、大きくはためかせる翼によってその体は空中にとどまっている。そして口や鼻からはたびたび炎の息を吐いていた。

「ドラゴナイトハンターZは、最大4人プレイでドラゴンの討伐を行う狩猟ゲームだ。……まあもつとも、今回はお前1人だが」

「ドラゴンだとッ!?!」

「さあ行け!」

「っ、おらあ!」

グラフィアートの命令に応じ、ドラゴンは雄たけびを上げながら弦十郎に襲い掛かる。ただの突進だが、その質量から放たれる威圧感尋常ではなかった。

しかし弦十郎は退かず、真正面から応戦する。しかし元がノイズであるため直接触れられるのか判断できず、地面に拳を叩きつけて土塊をドラゴンにぶつける。ドラゴンの勢いは衰えたが止まることはなく、切り返して再び弦十郎に襲い掛かった。

「弦十郎さん!」

「今宵の俺の相手はおまえだ、ガングニール」

「ッ、どいてください!」

ドラゴン相手に一人で奮闘する弦十郎の援護をするため、響は跳び上がろうとする。しかしその上からグラフィアイトが跳びかかり、槍を振り下ろす。それを響は何とか避け、グラフィアイトに呼びかける。

「なんで、どうして同じ人間同士で戦わなければならないんですか!」

「戦場に立っておきながら、何を馬鹿な事を!」

「ヒッ!」

「この状況は……!」

「あたしと戦っている時にあいつの考え事か?……度し難えッ!」

「くッ!」

だがそれは逆にグラフィアイトの琴線に触れたようで、彼の怒りの言葉に思わず身体がすくむ。それを聞いていた翼はこの状況がまずいと思案するが、そんな余裕を少女は与えまいと蹴りを放つ。それを翼はバク転することで避けるが、その隙に少女は新たにノイズを呼び出した。

「そらどうする、このままじゃあのアマチャンはやられちゃうぜ!」

「させるものかッ!」

襲い掛かるノイズの集団を、翼はすれ違いざまに次々と切り裂いていく。さらに剣を巨大化させ、周囲にいるノイズを一気に殲滅する。そしてその勢いのまま走り出そうとするが、上空から感じる気圧に立ち止まって上を見る。そこでは少女が鞭を振るい、巨大なエネルギー球を形成していた。

「くらいなッ！」

—NIRVANA GEDON—

「っ、ああ!!」

「翼ッ！」

翼は剣を巨大化させたまま地面にさし、その球体を受け止める。しばし拮抗していたが激しい爆発を起こし、彼女の体が吹き飛ばされる。

何度かバウンドしてようやく止まるが、先回りしていた少女が彼女の顔を踏みつける。

「のぼせあがるな人気者。まさかお前が今夜の主演だなんて思ってたえだろうな？」

「なに、を……」

「いいぜ、教えてやるよ」

そう言いながら少女は響に向かって指を指す。そして遂にその少女は、自分の目的を話した。

「狙いはな、はなっからこいつなんだよ」

「な、に……?」

「こいつを搔つ攫うこと、それがあたしの目的だ」

「……………」

「ガングニールではなく、こいつを……?」

「響君が目的だと?……まさか!」

グラフィイトはその言葉が気になり、攻撃を止めて少女の方を見ている。そして弦十郎は何か思い至るが、ドラゴンの相手に精一杯で動けない。

そしてその言葉を聞いた翼は目を見開き、黙っていた。その様子を見ながら少女は嗤い、彼女を追い詰めるために言葉をつなげる。

「鎧も仲間も、アンタには過ぎてるんじゃないのか?」

「……………誓ったんだ」

「なんだって?」

足元でつぶやく声を聞き、少女は翼に聞き返す。それに対し、翼は左手を上空に掲げて答えた。

「二度と繰り返さないと、あの時に誓ったんだ!!」

——千ノ落涙——

その言葉と共に、上空から剣型の剣戟が無数に降り注ぐ。それは彼らの戦場の全てを覆うほどに多く、次々に着弾していく。

易々と受けるわけにはいかず、少女はその場を離れて回避する。その隙に翼は立ち上がり、狙いを定めて投げつける。

「こんな無遠慮にばらまいたところで……!?!」

「そうね。でも、あなたの動きを封じることが出来る……そして！」

——影縫い——

——蒼ノ一閃——

翼が投げつけたもの——小刀は少女の影を貫き、地面に突き刺さる。するとまるでそれに縛られるかのように少女の動きが止まる。その隙に剣を巨大化させて剣戟を放ち、前の攻撃でひるんでいたドラゴンに直撃させる。致命傷には至らなかつたがドラゴンは標的を変え、弦十郎の元から離れて飛び立った。

「あいつを呼んだところでなにができるって……まさか、おまえ!?!」

「……さあ、月が覗いているうちに決着を着けましょう」

「翼、歌う気か……!?!」

少女が何か気づき、弦十郎は翼の覚悟に顔をしかめる。その声をよそに翼は静かに夜空を見上げて目を閉じ、口を開いた。

「あの子は奏が命を賭して救った子……奏が残してくれた、光なのよ」
「え………?」

その声が聞こえた響は目を見開く。その独白は、彼女にとって衝撃の大きなものであった。

「だからこそ、あの子には日常を謳歌してほしかった。だからこそ、私はノイズの脅威を打ち払う防人であろうとした」

「翼、さん……」

「あの子が戦う必要なんてない……ノイズと戦うなんてこと、私ひとりですら十分よ」

「……………」

そこで目を開け、少女をしつかりと見据える。その翼の様子を、グラファイトは静かに見つめている。その在り方を見て、誰かを思い出しているのだろうか。先ほどまでの荒々しい様子は鳴りを潜めていた。

「そしてあなたはあの子の日常を奪おうとした……………さあ、覚悟はいいかしら？」

「ッ、この！」

そう言つて翼は少女の前に立つ。その表情から何をするのか確信を得ている少女は逃げ出そうとするが、その体はピクリとも動かない。

「防人の生き様、覚悟を見せてあげる。しかとその胸に、焼き付けなさい！」

「——ッ!!」

遂にドラゴンの射程圏内に翼が入り、ドラゴンは突進する。しかしそれを一切見ず、彼女は歌を紡いだ。

「G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a
l E m u s t o l r o n z e n f i n e e l b a r a l
z i z z l——」

「くそ、動けえ！」

尚も動こうとする少女の肩に触れ、翼は薄く笑いながら歌う。これから起きることが分かっているのに、2人の表情は対極と言つていいほど違っていた。

翼が歌っている歌は奏者への負荷を厭わず、シンフォギアの力を限

界以上に撃ち放つもの。対価が大きいものほど、放たれるエネルギーは絶大なものになる。

——その名は、絶唱。

「Gatrandis babel ziggurat
edee
nal Emustolronzen fine elbara
l zizzl」

歌い終えた翼は穏やかな表情で目を閉じる。

そして膨大なエネルギーが彼女を中心に爆発し、周囲を覆い尽くしていった。

《See you Next game……》

第20話 『夜にすれ違う signs の行方』

「かろうじて一命は取り留めました。ですが、容態が安定するまでは絶対安静。予断を許されない状況です」

「よろしくお願いします。……俺達は鎧の行方を追跡する、どんな手がかりも見落とすな！」

『はいー！』

「……………」

ある病室の待合所。そこにあるソファアールに座り込んでいる響の表情は、とても暗いものだった。彼女の後方では弦十郎が医師に頭を下げた後、部下に向けて指示を送っている。

その会話を聞き、手術室に運ばれていったあの人が無事であることを確認する。ひとまず安心して一息つくが、響の心の淀みは晴れそうにない。

「……………翼さん」

——あの光が収まった時、先ほどまでの不利な状況は一変していた。

周囲にいたノイズは一掃され、あの黒いドラゴンは見る影もない。翼を中心として放たれた絶唱のエネルギー、それを間近で喰らった少女は生きてこそいたが大きなダメージを負っていた。

「あ、ああ……………」

翼やグラフィイトの攻撃を受け止め続けていた鎧は様々な箇所が壊れ、そうでない箇所も罅が入っている。バイザーも砕け散り、そこから見える少女の表情は生きていることを実感していた。

そして倒れている少女の前に立っている翼。その表情は響からは確認できないが、纏うシンフォギアはボロボロでピクリとも動かない様子から明らかに平常には見えなかった。

「この……………っ、ちいー」

少女はしばし呆けていたが、鎧に起きた異変に気づいて何とか立ち上がる。その際に翼の顔を見て目を見開いたが、振り向いて飛び去っていった。

「……………生き様、そして覚悟か」

「翼さん！」

翼の後ろ姿を見て呟くグラフィイトの横を、響が走って通り過ぎる。今度はそれを遮ることなく見送り、近くに走って来ていた弦十郎の方を向く。

「行くがいい」

「……………なに？」

その言葉に、弦十郎は疑問符を浮かべる。それを横目にしつつ、グラフィイトは再び翼の方を見る。

「アメノハバキリ、お前の生き様はしかと見届けた。……………再び相まみえる時を、楽しみにしている」

その言葉を残し、グラフィイトはその場から姿を消す。その様子を弦十郎は眺めていたが、後方から聞こえる車の音に気づいて後ろを見る。そこにはこちらに走ってくる黒い車の姿がある。それは弦十郎の少し後方で止まり、そこから1人の女性が出てきた。

「了子君、来たか」

「いきなり【ハンドルを頼む】なんて言われた時は何事かと思ったけど、まさかそこから跳んでいくなんて……って、それどころじゃないみたいね」

「ああ……翼が、絶唱を使った」

「ッ、やっぱり……」

「翼さん！ 翼、さん……？」

そう言葉を交わしつつ、二人は翼の元に走っていく。響は彼女の少し後ろまで来て声をかけるが、反応はない。その様子を疑問に感じてもう一度声をかけようとするが、そこで響は気づいてしまう。

——佇んでいる翼、その足元に血だまりが広がりつつあることに。

「……この通り、私は完全聖遺物相手にも退きはしない」

そう呟きながら、静かに翼は振り返る。そして明らかになった彼女の様子を見て、3人とも声を出すことができなかった。

翼の目や口からは血があふれ出し、ポタポタと胸元へ落ちていく。そこから胴体を伝って地面に流れていき、響が見たように血だまりを形成していた。

このように誰が見ても重症な翼だが、その表情は絶唱を歌う前と同じく穏やかな表情だった。そして響が無事なことを視界に収めた彼女は少しだけ微笑み、口を開く。

「私はノイズから人類を守る防人。こんなところで折れるほど……脆く、は……な……」

「翼さん……!」

最後まで言い終えることはなく、ドサリと翼は崩れ落ちる。完全に倒れる前に響が抱き留めることに成功するが、すでに彼女は意識を失っていた。

後ろで弦十郎たちが救急車を手配している声が聞こえるが、その内容は響の頭には入ってこない。自分の腕の中でピクリとも動かない翼の様子は、まるで手遅れのように見えて――

「翼さああああああんツ!!」

あれからすぐに来た救急車に翼が乗せられ、響も弦十郎たちが乗ってきた車に乗ってついていく。そして病院につき、すぐさま翼が手術室に運ばれていく様子を眺めた後、現状の様にソファ―に座って待ち続けていた。

「私は、足手まといだったのかな……」

「あなたが気に病む必要はありませんよ」

「……緒川さん」

落ち込む響に声をかけながら、緒川は自販機で飲み物を買う。

「ご存知とは思いますが、以前の翼さんはアーティストユニットを組んでいました……どうぞ」

「……どうも。ツヴァイウイング、ですよね？」

買った温かいコーヒーを響に手渡し、緒川もソファアームに座る。響の返答に対して静かにうなづき、緒川は思い出すように話した。

「その時のパートナーが天羽奏さん。今はあなたの胸に残る gangs ニールのシンフォギア奏者でした——」

そこから緒川によって語られていく、風鳴翼の過去。それは弦十郎から語られたものに補足を加えていくような内容だった。

2年前のあの日、ノイズに襲撃されたライブの被害を最小限に抑えるため、奏が限界を超えて戦ったこと。そこに当時はアンノウンと呼ばれていたグラフィイトが介入してきたこと。途中、ノイズに襲われて重傷を負った女の子を救うために翼が一時的に戦場を離脱したと。

——その結果、グラフィイトに奏の命とgangs ニール、その両方を奪われたこと。

「翼さんにとって大切な片翼の消失、そしてツヴァイウイングの解散。一人になった翼さんは奏さんの抜けた穴を埋めるべく、がむしやらに戦ってきました」

当時のことを思い出しながら、緒川はコーヒーを飲む。あの時の翼の姿は、見えていて本当に危うかった。睡眠や休憩はすっかりとっていたものの、彼女はそれ以外のすべてを鍛錬に費やしていた。文字通り

命を燃やして自らを鍛え続けた翼は、その年代では最強と言えるほどの強さを手に入れた。

……しかし、対価を得るには相応の代償が必要だ。

「同じ世代の女の子がしてしかるべき恋愛や遊びも覚えず、自分を殺して生きてきました。……そして今日、防人としての生き様を果たすため、死ぬことすら覚悟して歌を歌いました」

「……………」

「不器用ですよ。でも、それが風鳴翼の生き方なんです」

「そんなのって……………」

そう言つて、緒川は微笑を浮かべる。しかしその顔はどこか悲しそうで、それを見た響は涙を流しながら言葉を漏らす。

「そんなの、ひどすぎます……………」

「……………」

「そして私は、翼さんのこと何にも知らずに一緒に戦いたいだなんて……………」

涙を流しながら響は翼の独白を思い返す。彼女が自分に対して敵意を抱くような真似をしていたのは、自分に戦ってほしくなかったから。そして翼の言葉や緒川さんの話を聞くに、その中に出てきたある少女は自分なのだろうという確信に近い予想。

つまり翼からすれば、響は奏が命懸けで守つたのにもかかわらずノコノコと戦場に出てきているように見えたのだ。そうだとしたら、あの行動にも納得がいく。そして、響はその事を理解したと同時に今までの行動を後悔していた。

「僕も、あなたに進んで戦ってもらいたいだなんて思っていない。そんなこと、誰も望んでいません」

響の涙を見て、緒川は微笑む。確かに彼女は失敗してしまっただが、それは彼女がまだ何も知らなかったからだ。それに緒川から見ても、翼の行ってきた行為は決して褒められたものではない。しかし、目の前の少女はそれでも翼のことを思ってくれているのだ。

この子になら、任せられるかもしれない。そう思った緒川は、未だ泣いている響に対して口を開く。

「ねえ、響さん。僕からのお願いを聞いてもらえますか？」

「…………？」

緒川の突然の願いに響きは目をパチクリとさせる。その様子を見ながら、彼は言葉を続ける。

「翼さんのこと、嫌いにならないでください。翼さんを…………世界で独りぼっちになんて、させないでください」

「…………はいー」

その言葉を聞いて、響は涙をぬぐってしっかりと返事した。

「…………あの様子なら、大丈夫そうだな」

二人の話を隠れた箇所から聞いていた弦十郎は、ふうと息を吐く。自分も何かフォローすべきかと思っただけで響の元へ行こうとしていたのだが、その役割は緒川が果たしてくれたようだ。

彼女は必ず立ち上げられる。そう確信した弦十郎が病院から出ていくと、入り口を出たあたりで彼の携帯に着信が入った。

「俺だ、どうした？」

『藤堯です。先程指示があった件についてなのですが……彼は確かに【ドラゴナイトハンターZ】という道具を使ったんですね？』

「?……ああ、そうだ」

『でしたら至急、二課に戻ってきてください』

『まだ確定ではありませんが……あの存在、グラフィアイトの正体が判明しました』

「はあ、はあ、はあ………」

森林の奥地。周囲を見渡し、人間の気配を感じないことを確認した少女は乱れた息を整える。先ほどの戦闘、途中まで少女は互角以上に戦っていた。事実翼を追い詰め、後はグラフィアイトの隙について響を攫うだけでフィーネの指示は完了するはずだったのだ。

しかし少女の一言は、翼の逆鱗に触れたらしい。まさかあの状況をひっくり返してくるとは少女には思いもよらなかった。

「にしても、まさか絶唱を使うなんて………アグツ！」

身体に迸る激痛に、少女は顔をしかめる。原因である鎧を見ると、先ほどまで罅だらけだったはずのそれはほとんど修復されていた。

完全聖遺物であるネフシユタンの鎧、その特徴のうちの1つがこの驚異的な再生能力だ。絶唱を間近で受けた際の大ダメージも、こうして撤退している間にほぼ修復されている。

「つぐ、この……！」

驚異的な再生能力と言ったが、もちろん無条件ではない。今こうして少女が苦しんでいるように、鎧の再生は使用者の肉体を巻きこみながら行われてしまうのだ。

しばらく激痛に悶えてうずくまっていたが、不意に前方から足音が聞こえて立ち上がる。しかしその方向が少女の拠点からだとわかると武器を下ろし、迫ってくる存在を迎え入れた。

そして少女の視界に、一人の女性が映る。

「フィー、ネ……！」

「おかえりなさい」

女性の名を呟く少女の表情は、青ざめていた。フィーネから下された3つの指令、それを彼女はどれも達成することができなかったのだ。しかも完全聖遺物を使ったのにもかかわらず翼には手痛い反撃を喰らう始末。彼女の期待にまるで応えることができなかったのは考えるまでもないことだ。

どんな罰を受けるのだろう、思考のすべてがそれに染まっていく少女。そこにフィーネは微笑を浮かべながら近づいていき、少女の前で足を止める。

「鎧を外して、顔を上げなさい」

「っ、はい……！」

フィーネの指示に従い、少女は鎧を外す。その中には服を着ておらず、夏序盤とは言え少し肌寒い夜空に一糸まとわぬ姿となる。そして

その状態で彼女を見ると、フィーネは静かに右手を上げる。

恐らくぶたれるのだろう、そう考えた少女は迫りくる平手打ちに備えて身をこわばらせる。その様子を見ながらフィーネはその右手を素早く動かして――

「……………え？」

「……………」

「なっ!？」

少女とは関係ない方向に、右手を差し出した。その様子にしばし困惑するが、視界の外から迫りくる脅威を感じ取ったと同時にフィーネに剣戟がぶつかる。

爆発音とともにフィーネを煙が包む。しかしそれが晴れると、彼女の右手から障壁のようなモノが展開されていた。おそらくそれで剣戟を防いだのだろう。

「あらあら、レディに対して随分なご挨拶ね？」

『散々俺の邪魔をした貴様が言えたことか？』

「てめえは……………」

フィーネが誰にでもなく声を響かせると、暗闇の中から返事が聞こえる。その声に聞き覚えがある少女は驚き、周囲を見渡す。

「くそ、どこにいやがる!？」

「言われずとも、隠れる気などない」

どこにいるかわからず、少女は声を荒げる。それに答えたのか、それとも最初から出る気だったのかはわからないが、その声と共に上空からその存在が降りたつ。

「随分と無様な有様だったな、ネフシユタン。おかげで追跡するのは随分と楽だったぞ」

「っ、ふざけるな！ 私はまだ負けてなんざー！ー！」

「お黙りなさい」

「ッー……はい」

「……まるで人形だな、戦っている間の方が幾分かはマシだ」

眼前で繰り広げられる会話を聞きながら、その存在——グラフィアトは、吐き捨てるように呟く。それを見たフィーネは、グラフィアトに一步近づく。

「さて、私に何の用かしら？ それとも、同盟の件にいいお返事でも？」

「舐めるなよ、俺は人間と手を組む気などない！」

その言葉と共に、グラフィアトはグラフィアトファングを構える。それを目の前にしても、フィーネの様子は変わらなかった。

「ここに居るのは、俺の目的を果たすため。だが、貴様らの存在は目障りだ」

「あら、そう」

「……随分と余裕だな」

「まだ戦いにはなっていないでしょう？ 交渉と言うものは、多少は粘ってみるものよ」

「ほお、なら言ってみろ。この状況を覆せるものならな！」

そう叫びつつ、グラフィアトは突貫する。双刃を振り上げて跳びこみ、フィーネに向けて振り下ろす。それに対して彼女は再び障壁を展開し、その攻撃を防ぐ。鏢迫り合いの状態となるが、二人の様子から見て互いに本気ではないらしい。それを見て少女は加勢しようとする元々のネットワークレスに手をかけるが、彼女が目で制しているのに気づいて

その手を戻す。

「そうね……同盟が無理なら、不可侵条約はいかが？ この子や私の行動さえ邪魔しなければ、後は何をしてもかまわないわ」

「随分と身勝手な物言いだな、女……！」

「まだ話の途中よ。その対価として私から渡せるのは、とある完全聖遺物」

「聖遺物だど？……何をいまさらー！」

グラフィイトは以前二課に侵入した際に、その時点で把握されている聖遺物の情報を手に入れている。そして実際にいくつかの聖遺物入手している彼にとつて、完全聖遺物とは言え人間からの施しを受ける必要はないし、そのつもりなど毛頭なかった。

故にグラフィイトが選択するのは、フィーネを打ち倒してその聖遺物を奪う事。その為に彼は力を込め、この拮抗状態を崩そうとする。

「……………ッ!？」

フィーネの口から紡がれる、その聖遺物の名を聞くまでは。

それを聞いた直後、すぐさまグラフィイトはその場を跳んで離れる。フィーネといくらかの距離がある所に着地して再び双刃を構えるが、先ほどまでとは違い明らかに動揺が見られる。

それほどまでにフィーネが言ったものに驚愕したのだろうか、鏝ぜり合っている音でそれが聞こえなかった少女は疑問に感じるが、答え合わせをするかのようにグラフィイトが口を開く。

「……………今、なんと言った？」

「何度でも言いましょう……………異界より迷い込んだ戦士、グラフィイト」

グラフィアイトの質問に対し、フィーネは障壁を消して口を開く。
その言葉には確信が込められていた。グラフィアイトが今最も欲している聖遺物の1つだという、確信が。

「私が差し出す完全聖遺物の名は『ギャラルホルン』。あなたにとって、悪い条件ではないでしょう?」

《See you Next game……》

第21話 『暴かれし enemy!』

ギヤラルホルン、その完全聖遺物の名をグラフアイトが聞いたのはこれで3度目になる。

1度目は今から約5年前。グラフアイトが本当の意味で初めて人類に認知された場所、F. I. S. でのことだ。彼がネフィリムのことを調べるためにデータベースを（無断で）見ていた時、この名前があった。しかしその時わかっていることはこれが完全聖遺物であるということだけであり、性能及び所在地等は不明だったのだ。なので彼はこの時、名前だけは覚えていたがさほど興味を示さなかった。

2度目はそれから半月後。グラフアイトが二課へ侵入した時、閲覧した聖遺物の資料の中にこの名前があった。流星は聖遺物の先端機関であり、機密書類であることも相まって、そこにはギヤラルホルンの性能もすっかりと記されていた。

『ギヤラルホルン、たしかあの時にも見た名だが………なっ!』

——そしてその性能を知った時の衝撃を、彼は今でも忘れない。ギヤラルホルンの性能、それは自分がいる世界と並行世界を繋げることができるといふものだったのだ。

すぐさまその詳細を知るために隅々まで調べ通したが、結局明確な所在地は不明だった。過去に二課の前身である風鳴機関が所持していたらしいのだが、起動しないことも相まって性能を秘匿して研究材料としてアメリカへ引き渡されたと資料に記されていたのだ。しかしそのアメリカの聖遺物研究所であるF. I. S. にも所在地が書かれていない。それはつまり日本からアメリカへ渡された後、その行方が消えてしまったということになる。

その後、他の聖遺物を収集と並行して探索し続けたが経過は芳しくなかった。どのルートから調べても、必ずとある箇所でギヤラルホル

ンの行方が消えてしまうのだ。しかし行方を探し続けて4年経った現在でも、グラフィイトはギャラルホルンの探索を打ち切ることはしなかった。

「仲間たちと再び共に戦う」。一度断ち切った未練とはいえ、現実的に解決できる手段を伴って再び彼の眼前に現れたのだ。彼に動かないという選択肢はなく、諦めるという選択肢を選ばせるのにも未だ至らない。

グラフィイトがそれほどまでに執着する聖遺物、ギャラルホルン。どの国でも行方が分からない以上、彼はもうその名を聞くことはないと思っていたが――

「――まさか、その名を聞くことになるとはな」

「あら、異界の存在と言う点は否定しないのね」

「否定する意味もない。それを知られたところで、俺に何の不利益もないのでな」

フィーネにそう言い返しつつ、グラフィイトは構えを解く。それを見て話を聞く気になったと判断した彼女は、薄い笑みを浮かべながら口を開く。

「けれど、理由は明かさせてもらおうわ。その方があなたにも利益があるでしょうし」

「なに？」

「あなたを異世界から現れた存在と定めた理由は案外簡単よ。私がギヤラルホルンを所持していて、その起動に成功しているから」
「……………」

フィーネの話す内容を、グラフィイトは静かに聞く。

「ギヤラルホルン、その力は並行世界とこの世界をつなぐこと。これによつて私たちは並行世界への移動が可能になるのは知っているわね？」

「……………ああ」

「でもそれだけではないのよ。それと同時にギヤラルホルンは、異世界の存在を感じ取るセンサーでもある。並行世界なんでももの、余計なものを持って行ったり、持ち込まれたりすると不利益な事態に陥りやすいわ」

暗く、静かな森の中。風によつて揺れる木の葉の音だけが響く中で、フィーネは言葉を紡ぐ。グラフィイトという存在をこちら側に引き入れるために。

「私がギヤラルホルンの起動に成功させたのは10年前。ただし余計なイレギュラーを発生させないために、センサー機能だけを起動させた半想起状態にしていた」

「計画の邪魔になる存在を増やさないため、か」

「そう言うことになるわね。そして5年前、今まで一度たりとも動かなかったギヤラルホルンが反応を示した。すぐさま監視の網を広げ、その存在を探したわ。そして……………」

わずか半月後、あなたは人類からアンノウンと呼ばれる状態で現れた。フィーネはグラフィイトに手を伸ばし、そう言い切った。それに対し彼は何も反応を示さず、彼女を静かに見ている。

「私は遙か昔から、ノイズと人類の戦いを見てきたわ。しかしあなたは、明らかに今までの常識に当てはまらないのよ」

彼女は自身の計画のため、邪魔となる存在がいなか常に現人類を見張っていた。

その中で常にあったのは、人とノイズの戦い。位相差障壁のせいで現人類は当初、ノイズに蹂躪されていた。攻撃される瞬間のみ攻撃が通る事が後に判明したが、それを実践できる人間など存在しなかった。そして位相差障壁を無効化しようと様々な兵器が研究・開発されてきたが、シンフォギアシステム以外はどれも実用化に至っていないはずだ。

そんな中現れたグラフィイトと言う存在。彼は戦闘能力が高いのは言うまでもないが、それよりもフィーネにとって引っかけたのは彼の移動方法と戦闘装束への変身方法だ。

瞬間移動と言うよりは、自身を粒子化することによるわずかな時間での長距離移動。そしてグラフィイトが持つ機械、あれを用いた変身は鎧を着ているというより、彼自身を分解してあの姿に再構築しているようだ。フィーネは分析していた。

「あなたのその力は、この時代の人間では決して再現できないのよ。そしてギャラルホルンが反応を示した時期と、あなたが動き出した時期があまりにも近い」

「……………」

「これが私があるを異世界からの来訪者と定めた理由であり、それと同時に私がギャラルホルンを所持し、その起動に成功させているという根拠でもあるわ」

「……まだ足りんな。なぜ俺がその聖遺物を求めているという理由の証明ができていない」

「元の世界に帰る手段が欲しいから、でしよう?」

グラフィアイトの指摘に対して、フィーネは即答する。今までの彼の行動、無作為とはいえない聖遺物の探索、そして何度か彼女の網に引つ掛かったその足跡。それを追っついてわかったことが、彼は必ず情報を調べる時にギャラルホルンを真つ先に調べていたということだ。そしてグラフィアイトが異世界の存在という前提を持って考えた場合、彼は元の世界に帰る手段を持たず、欲しているということが簡単にわかった。

そして彼女の即答を聞き、彼はそれ以上話すことはなかった。完全にこちらの事情は知られている、そう判断したのだろう。

「沈黙は肯定と受け取るわよ。そして最初に言った不可侵条約に戻るのだけれど」

「……なんだ」

「ハッキリ言うわね、私は貴方と事を荒立てたくない。あなたに後れを取らないという自負はあるけれど、一度始めると決して少なくはない被害を私も被るでしょう」

それでは計画に支障が出る、そうフィーネは語る。ここで敢えて上下関係を明確にせず、あくまで対等であるかのように見せかけながら彼女は交渉の理由を話していく。

「本当は力を借りたいところだし同盟がいいのだけれど……あなた、人間そのものを嫌悪しているでしょう?」

「そうだな」

別に否定する理由もないので、グラフィアイトは即答する。条件を満たせばある程度認めるが、基本的に彼の人間に対する感情はマイナスだ。

「そこで不可侵条約よ。お互いに助け合うのではなく、お互いに干渉しない。幸い、私たちの目的がぶつかり合うことはない」

「待て、そもそも貴様の目的はなんだ？」

「そうね、そこも明かさないと不平等かしら。簡潔にいうと……人類にかけられた呪いを解き、救済することよ」

「なに？……いや、それ以上はいい。話を続けろ」

人類にかかっている呪い？ あまりにも突然な内容にグラフィアトは一瞬思考停止するが、すぐさま立て直してフィーネに続きを促す。

「ええ、いいわよ。条件だけれど、まずこの不可侵条約を受けてくれるのなら前金としてギャラルホルンをあなたに渡すわ。そして私の計画が成功した時、完全想起に至らせましょう………いかがかしら？」

そう言つて、フィーネはグラフィアトの反応を待つ。それに対し、グラフィアトは考えるような動きを見せる。

この不可侵条約、基本的にグラフィアトに有利な条件に見えるだろう。彼は例えこの条約を受けなくても探し続けていた聖遺物のありかを知ることができた。さらに口約束でも受ければ不完全ながらもギャラルホルンを手に入れることができるし、最後まで条約を守れば、確実に帰れると言つても過言ではないだろう。詰まる所、どの対応をしてもメリットの方が大きいということになる。

それに対し、フィーネ側のメリットは逆に小さい。一番いい条件でも、グラフィアトと対立しない代わりに完全聖遺物を1つ差し出すことになる。断られればその逆になり、途中で裏切られれば、彼と争う拳句に渡した聖遺物も無駄になるという最悪の結果になる。それでも彼女にとつて、この条件を示すほどの価値があると彼は思われているようだ。

「そうだな、悪くない」

実際は数秒間なのだが、傍にいた少女にとっては数分間にも感じられるほどの沈黙を解き、グラフィアイトは口を開く。そして握っていた武器を消し、そのままフィーネに向かって静かに歩き出した。

「条件は何を選んでも俺に有利。また俺に対する考察を聞く限り、貴様の能力は確かなもののようにだ」

「信用は得られたようで、何よりだわ」

それを確認したフィーネは、数歩前に出てグラフィアイトを待つ。

「極論を言えばその条件を受けた後、俺は何もしなくても確実に戻る手段を手に入れるということになる」

「その通り。後付け加えるなら別の形であなたと相対した場合、その時は遠慮なく攻撃してもらっても構わないわ」

「当たり前だな、それとこれは別の話だ」

お互いに言葉を交わしつつグラフィアイトは近づいていき、遂にフィーネの前にたどり着く。

「貴様は自分の計画に絶対の自信があるようだ。ならば、俺の目的が達成される可能性も高い」

「受けてくれるのならば確約しましょう。……では聞かせてもらおうかしら、あなたの判断は？」

「決まっている」

そしてグラフアイトは右手をゆっくりと挙げていき――

「答えは、ノーだ!!」

「フィーネ!」

――右腕の鎧を解き、チエーンソーモードになっているガシヤコンバグヴァイザーをフィーネの顔に向かって突き出した。

「あら、残念」

思わず少女が叫ぶも、フィーネはそれをわかっていたかのように障壁を展開。ギリギリのところまで受け止めることに成功する。

「言ったはずだ、貴様らは目障りだと。一度でも俺の邪魔をした以上、俺の敵だ!」

「ッ、この力は……!」

チエーンソーと障壁がぶつかり合い、騒音が辺りに響く中、グラフアイトは右手に力を込めつつ叫ぶ。徐々にフィーネの顔に近づいてくる刀身を睨みながら、あまりの力押しに思わず彼女は呟いた。

やがて耐えきれなくなったのか、障壁が音を立てて崩れ去る。障害がなくなっただけでチエーンソーがフィーネの顔に迫るが、崩れる瞬

間を見切っていた彼女はそれですること頬を掠る程度で回避することができた。

「逃がさんー!」

追撃を加えるために、グラフィイトは振り抜いた右腕を外へ回す。チェーンソーで切り裂くように放たれたそれはフィーネの背後に迫るが、彼女は前方に跳ぶことでそれも回避。お互いに距離をとった所で再び相対した。

「交渉決裂………そうね、理由を聞いてもいいかしら?」

「先ほど言ったはずだが?」

「それなら交渉を受けてギャラルホルンを手に入れてから裏切ればいい。不可侵条約そのものを断る理由には弱いわ」

「流石だな、この程度はやはり見抜いてくるか」

称賛するような言葉をフィーネに与えるが、グラフィイトからは敵意が一切薄れていない。しかし今はこれ以上戦う気がないのか右腕に再び鎧を纏い、無手状態で彼女の前に立った。

「俺は以前、一度だけ人間と手を組んだことがある」

「……………」

グラフィイトが話し、フィーネが黙ってそれを聞く。先ほどとは逆の状況だが、辺りを漂う雰囲気は物騒なものになっていた。

「貴様はな、同じなんだよ」

「その手を組んだ人間と、かしら?」

「ああ、そうだ。あいつと……ゲームと同じ目をしている。その目は——」

「てめえ、フィーネから離れろツ!!」

「ッ!？」

フィーネに対して言っている途中、少女の叫び声と共にグラフィアイトに多数の球状エネルギーが殺到する。いくつもの爆発音の後、周囲が土煙に覆われていく。

「くそッ、あいつはどこだ!？」

「……無駄よ。彼はもう、ここにいないわ」

フィーネの前に立ち、土煙をにらみつける少女。脱いでいた鎧を再び纏い、いつでも攻撃できるよう身構えてた彼女に対して、フィーネは静かに伝える。

もうあの気配を感じ取れない。おそらくあの土煙に乗じてこの場を脱出したのだろう。

「全く……今すぐそれを脱ぎなさい。絶唱を受けたダメージ分、あなたの身体への浸食が進んでいるのよ?」

「う、わかってるよ……」

「ええ、いい娘よ。それじゃあ帰りましょう、私たちの家に」

「!……うん」

交渉こそ失敗したが、元から失敗覚悟で挑んだものだ。計画に多少の変更は出るものの、その結末には一切の狂いはない。そう判断したフィーネは、ここにいる理由がなくなった。それに自分の期待を裏切った挙句、言いつけを守らなかった少女には教育が必要だ。

少女が脱いだネフシユタンの鎧を持ち、彼女を伴ってフィーネはその場を後にする。その道中、土煙の中で彼女だけが聞こえたであろう、グラフィアイトの言葉の続きを頭の中で思い返しなう。

『——その目は、己を絶対者と信じて疑わぬ目だ。自分以外の存在を見下し、仲間すら己の駒としか思わない目だ』
『そんな者と、俺は決して相いれない!』

《See you Next game……》

第22話 『重なり始めるGear!』

「ハッハッハ、まさか電話一本で予定を反故にされてしまうとは」

街はずれの道路を走る黒い車。

それは1台だけではなく、等間隔をあけて前後に1台ずつ、計2台走っている。その嚴重さは中心で守られている車の中にいる人物の重要度を示してもいた。

そしてその車の中で笑い声を上げている男性。言葉の内容から予定が潰れてしまったようだが、その表情には余裕が浮かんでいた。

「……旧陸軍由来の特務機関とはいえ、いささか放縦が過ぎるのではありませんか？」

男性に対しその言葉をかけるのは、隣に座っている若い男性。眼鏡をかけたその表情には呆れと苛立ちが混じっている。片方の対象は男性に、もう片方はここにいない誰かに向けられているようだ。

その発言に対し、男性は微笑を崩さぬまま言葉を返す。

「それでも特異災害に対抗し得る唯一無二の切り札だ。私の役目は連中の勝手気ままを出来る限り守ってやることなのだ」

「突起物とは、よく言ったもので……」

男性の変わらぬ意志を受け、若い方の男性はため息をつきながら膝上に置いているアタッシュケースを眺める。本来今日来るはずだった人物に渡す予定だったものがこの中に入っている。これは政府から発行されたとても重要なものであり、だからこそ若い男性は来なかった人物に対し、あまりいい感情を抱いていなかった。

こうして話している間にも風景は移っていき、車はトンネルに入る。車1台半分の幅しかないものの、そこまで距離は長くはなく、2

0秒もしないうちに出口が見えてきた。そう遠くないうちに、再び外の風景を見ることが出来るだろう。

「ぐっ！」

「うわあ!？」

——突如トンネルの出口に、巨大なトラックが現れない限りは。

そのトラックは先頭の車が出る直前に現れ、道を完全にふさぐ形で止まる。気づいた運転手が急いでブレーキを踏みつつハンドルを切るが、間に合わずに衝突する。間隔こそ開けていたが止まれるほどではなく、2台目、3台目とぶつかっていく。

そしてすべての車が止まったことを確認したかのように、トラックの荷台から多数の男性が降りてくる。その全員が防弾チョッキなどの戦闘装備を付け、手には銃器を握っていた。

『『やれ』』

襲撃者のうち、隊長格であろう男性が声を上げつつ引き金を引く。銃口から放たれる弾丸は次々に車の中にいた人たちに牙をむく。運転手席にいた人たちが車から出て応戦するが、それも虚しく次々に殺されていく。

先頭、中央、後方。それぞれにいた護衛を打ち倒した襲撃者たちは次に狙いを定め、銃口が火を噴く。

「広木大臣!!」

その狙いに気づいた若い男性、すぐさま男性の手を引いて倒れさせ

ることで彼の身を守った。しかしその代償として無防備になってしまい、身体に次々穴が開いていく。見ただけで分かる、即死だろう。

「ぐ、せめてこいつだけは……………っ！」

彼の犠牲で生き残った男性は、彼の膝上にあるアタッシュケースに手を伸ばす。

襲撃者たちの狙いは、間違いなくこの中身だろう。そう確信していた男性は、奪われる前にせめて中身を消去しようとする。

『広木防衛大臣とお見受けしましたが』

しかしアタッシュケースをつかんだ手に銃口が突きつけられ、その動きも強制的に止められてしまう。

「貴様らは、一体……………!?!」

『残念ですが、お答えすることはできません』

日本語ではなく、英語を話す襲撃者を睨みながら男性は問うが、その相手は表情一つ動かすことなく淡々と答える。そして男性の額に狙いを付け、引き金を引いた。

銃声が響き、暫くして静寂が訪れる。もう襲撃者が引き金を引くことはないだろう、撃つ相手がいらないのだから。

『例のケースは?』

『おそらくこれでしょう』

隊長格の男性が周囲に聞き、車内を確認していた別の男性が答える。その手にはアタッシュケースが握られており、その表面には乗っていた人達の血がベツトリと付いていた。

隊長格の男性が近づき、アタッシュケースを開く。その中身を確認

し、すぐさま閉じて仲間に指示を飛ばす。

『目的の物は回収した。撤収するぞ』

後はこれを彼女に渡せば任務完了だ。彼はそう考えつつ、先ほど出てきたトラックの荷台に足を踏み入れた。

「——来たな。早速だが、そいつを渡してもらおうか」

「……………」

「……………」

二課の司令室。そこにいる響と弦十郎は、ともに明るくはない表情を浮かべていた。

『私のせいです、私が悪いんです。2年前も、今度のことも……………』

——翼の過去を知り、自分の無力さをかみしめた響。自分が未熟だったから、戦うことの覚悟ができていなかったから。

シンフォギアという力を持っていても、彼女自身が至らなかつたから。自分が弱かつたからこそ、あの日翼は命をかけて詠った。その代償は重く、数日たった今でも彼女はいまだに目を覚まさない。

『私だって守りたいものがあるんです！ だから!!』

だからこそ響は、強くなるために弦十郎に師事を願った。彼女の想いを理解していた彼はそれを承諾。連日共に修行を行い、彼女に戦い方を教えていたのだ。

「師匠、了子さんと連絡は……?」

「……駄目だ、やはり繋がらない」

「そんな……」

そして響は今日も、朝から弦十郎と修行を行っていた。それは本来なら休憩を挟みつつ夕方まで行う予定だったが、急遽中断したのだ。どうやら何かトラブルが発生し、関わっている可能性のある了子と連絡がつかないようである。

「どうしよう、まさか了子さんが……」「たっだいまー!」……へ?」

「むっ?」

どこか暗い空気を吹き飛ばすかののように、室内に響く声。その声に聞き覚えがある二人は揃って扉の方向を見る。

「大変長らくお待ちいたしましたー！……つて、何この空気？」

「了子さん（くん）ー！」

「……？ 何よ、そんなに寂しくさせちゃった？」

その声の人物——了子はこちらをジッと見る二人に対しキョトンした表情を浮かべるが、続いて放たれた大声に驚き、目を瞬かせる。その様子から無事なことを確認し、弦十郎はホッと息を吐く。しかしそれもつかの間、すぐに表情を引き締めて彼女に状況を説明する。

「……広木防衛大臣が殺害された」

「ええ、本当!？」

その内容を聞き、了子は驚愕の表情を浮かべる。その反応に対して弦十郎は静かにうなずき、正面にあるモニターを見る。

そこに映ってる光景。それは壊れている3台の車、銃器によって殺された人。そして爆発したのだろう、炎を纏っているボロボロのトラックだった。倒れている人間の中には、見覚えのある人物も見える。

「……犯人は？」

「目下捜索中だ。ただ、複数の革命グループから犯行声明が出されている」

「詳しいことは把握出来ていない、というわけか」

「ああ、そうだ」

「了子さん、連絡も取れないから皆心配してたんです！」

「え？」

響の声を聞き、了子は首をかしげる。そして懐をあさり、いつも使っている連絡用の通信機を取り出す。そして履歴があったか確認しようとしばらく弄るが、やがて苦笑いを浮かべながら再び懐にしまう。

「あー、壊れてるみたいね……」

「……………アハ」

まさかの理由が発覚し、響は笑うしかなかった。しかし了子が無事だったのが分かったからだろうか、司令室の雰囲気は先ほどまでとは変わって明るくなっていった。

「……………でも心配してくれてありがとう」

自分を心配していたことを知り、了子は微笑みながら二人に礼を言う。しかし切り替えるために表情を引き締め、右手に持った物を二人の前にある机に置く。

「そして……………政府から受領した機密司令は無事よ。任務遂行こそ、広木防衛大臣の弔いだわ」

そう言っただけの子は、傷一つないアタッシュケースから取り出したチップを二人の前に差し出した。

——深い、深い海の底。

いや、海というべきなのだろうか？

判別がよく着かないが、彼女

は自分がこの空間の中で浮いているのを感じ取っていた。

しかし体は思うように動かず、仰向けの状態で少しずつ下へと沈んでいく。意識ははつきりしているので、彼女は今の状況を考えることにした。

「私、生きてる………?」

死を覚悟で放った一撃。おかげで彼女を守ることができたが、代償に自分は随分とひどい状態になった。気絶する直前に見た彼女の真っ青な顔は、あまり何度も見たいものではない。

しかしこうして意識がはつきりとしているということは、自分は生き残ったのだろうか？

……いや、違う。

「死に損なっただけ、か」

そう呟き、沈んでいく感覚に身を任せる。このまま沈んでいく先には何があるのだろうか。冥界か、海底か、はたまた闇の中か。

そんなことを考えつつ、彼女は静かに目を閉じる。そのまま意識ごと暗闇へと落ちていき――

——つたく、真面目が過ぎるぞ翼?——

「ッ!？」

その声が聞こえた瞬間、翼は目を見開く。すると先ほどまでとは一変し、そこから見える風景は彼女にとって見慣れた場所になっていた。

「ここは、あの時のライブ会場……!？」

そう呟きつつ、翼は辺りを見渡す。荒れた土、広いドーム、夕日と分厚い雲。そのすべてを彼女は覚えていた。

彼女はこの光景を何度も夢で見ていたのだ。まるで何者かがあの日の光景を忘れさせないように仕組んだのかと思うほど、鮮明に。

そしてもしこれがその夢だとしたら、そう考えて翼はドームのセンターを見る。するとそこには1人の人間が立っていた。

その人物は女性で、紅い髪は腰まで届くほど長い。普段はその性格を反映して強く光っている眼は、今はとても優しげだ。

「――ッ」

その姿を確認した翼は、急いで彼女の元に走り出す。今まで動かなかったのが嘘と思えるほど、その動きは軽快だ。

そこまで離れていない距離だが、それでも翼にとってその距離はもどかしい。早く、早く、早く、頭の中がその思考だけでいっぱいになるほどに。

そして遂に彼女の元にたどり着き、息を整えながら翼は正面に立つ。その様子を見ていた彼女は微笑み、優しく翼を抱きしめた。

「相も変わらず、翼はガチガチだな。あんまりそうだと、そのうちポツキリいっちゃうぞ?」

「奏!」

「二人になって私は一層の研鑽を重ねてきた。数え切れないほどのノイズを倒し、死線を超え、そこに意義など求めず、ただ強くあるためにひたすら戦い続けてきた」

背中を合わせ、お互いに体育座りの状態で翼はポツポツと話す。女性——天羽奏はそれを静かに聞く。

すぐ近くに奏がいる。ただそれだけのことが翼にとっては何にもよりも嬉しく、安らげた。だから、ここでは彼女を隠すものは何もない。彼女はすらすらと、自分の本音を語っていた。

「……でも、気づいたんだ。弱い私など何の意味もない、と」

先ほどまで柔らかかった表情が暗くなり、翼は顔を隠す。その様子を見て、奏は空を見上げながら口を開いた。

「戦いの裏側とか、その向こう。そこにはまた違ったものがあるんじゃないかな?」

「……?」

「少なくともあたしはそう考えてきたし、そいつを見てきた」

「それは何?」

それを知るため、翼は振り向いて奏に問いかける。しかし奏は彼女をニヤニヤと見ながら笑顔で言い切る。

「それは言えねえな。そう言うのは、自分で見つけるものじゃないか？」

「……奏は私にイジワルだ」

「まあな。それにあの時言ったじゃねえか、自分自身を見失うなって。それに今の翼は笑ってすらいない」

「それは……そうだけど」

それ聞いた翼は頬を膨らませつつ再び正面を見る。これによって奏の表情が見えなくなるが、目を閉じれば彼女の存在を確かに感じることはできていた。

——しかし、これはあくまで自分が見ている夢だ。

「でも、私にイジワルな奏はもう居ないんだよね……」

「そいつは結構なことじゃないか……つと」

「ッ！」

それを確かめるように呟いた翼に対し、奏は返答しつつ立ち上がる。背中の感触が消えたことがそれに気づいた翼も急いで目を開いて立ち上がろうとするが、振り向くのが精一杯で何故かそれ以上動かない。

いつの間にか風景は変わり、辺りはライブ会場から森林の中に変わっている。今まで見たことのない風景だが、翼はそんなこと気にせず無理やり動こうとする。例え無駄だとしても、彼女は足掻かずにはいられないのだ。

——そう、これは彼女の夢だ。まるで第3者の手が加わっているかのように、翼にこの光景を忘れさせないようにするためかのように。

「……………」

何度も見た、この光景が繰り返される。

「アンノウン……いや、グラフィアイト!!」

もし視線で人を殺せるとしたら、翼のそれは間違いなくその域に達しているだろう。しかしそれを受けてもグラフィアイトは臆せず崖から飛び降り、こちらに近づいてくる。その視線は一瞬彼女に向けられるが、それ以降は奏のみを定めていた。

「んじゃまたな、翼」

「ッ！ 待って、奏!!」

そして奏もグラフィアイトに向かって歩き出す。その先にある光景を思い出し、止めようと必死に手を伸ばす翼。しかし、奏は振り返らずに歩き続ける。

そして奏とグラフィアイト、両者が向かい合った時、翼の身体が淡く光っていく。この徴候は、もうすぐ夢が覚めるということだ。

「私は嫌だ!」

今までと同じだとこの先の光景は変わらない。二人が戦い、そして奏は地に伏すだろう。そこにいくら介入しようとも結果は変わらず、

声は届かない。

「私は……私は、奏に傍に居て欲しいんだよ!!」

例え無駄だとわかっていても、声が届かないとわかっていても、翼は叫ばずにはいられなかった。彼女は余力を振り絞って全力で叫んだ。

するとそれが届いたのだろうか、奏の歩みが止まる。そして少しだけ振り向き、片目だけが翼を映した。今までにない状況に驚く彼女を見ながら、奏は口を開く。

「あたしが傍にいるか遠くにいるかは翼が決めることさ」

「……私が？」

ああ、そう頷いて奏は笑う。それを聞いて彼女に自分の想いを届けようと、翼は口を開こうとする。時間切れは近く、あと一言届けるのが精一杯だろう。

「……なら、私は——!」

そして最後まで言い終えた翼は、満足そうに光に包まれていった。

「案外、遠くにいるかと思ってるのは翼だけかもしれないぞ?」

«
S
e
e

y
o
u

N
e
x
t

g
a
m
e
:
:
:
»

第23話 『覚醒のbeat!』

静まりかえった街道を、グラフィアイトはとある建物の屋上から眺める。現時刻は太陽が顔を出したばかりの時間帯であり、人間の活動が本格化するにはまだ早い。と言っても数人程度なら普段は見かけははずなのだが、先ほどから誰一人として気配を感じなかった。

「あの計画書通り、か。他にも奴らへ送るルートでもあつたのか？」

そう考えながら、グラフィアイトは数日前に人間共から奪ったものを出し出す。あのアタツシユケースの中には、政府から二課へ送られるはずだった極秘データが入っていた。

その内容は『敵勢力の狙いは完全聖遺物「デュランダル」の可能性が高いこと』、そして『敵に奪われることを阻止するために、デュランダルを封印せよ』というものだった。

そしてヒロキと言う人間から二課へ、別に送られたデータ。プロテクトがかかっていたため解除に苦労したが、得られた内容はグラフィアイトにとって十分なものだった。

「匣を用意して注意を引きつつ、デュランダルを送る作戦……人間の割に、よく考える」

木を隠すなら森の中と言うが、今回はその類の作戦だった。テロ警戒の名目で道路を封鎖して検問を配備。護衛車を数台、さらにはシンフォギア奏者である響も護衛に含めることで、敵勢力への備えも万全の状態で一気に輸送先まで駆け抜ける。これならば手を出されてもある程度は対応できるだろう。

——しかしそうまでやって守る車、これは匣だ。

本命、デュランダル入りのケースはなんと人間1人の手で送られる。普通に考えれば不可能に近い、無謀な作戦だと思うだろう。しかしこれを政府側の人間が提案している辺り、この人間はよほど信頼されていると見える。

そこでこの人間のことも調べては見たが、驚くほどに情報が出てこなかった。これほどまでに出ないというのは、もはやその一家が昔からそう言う存在であるとしか思えない。

（叶うなら戦いたいものだが……おそらくこいつは影の者だ。真正面から戦えるとは到底思えん）

真正面から戦うグラフィートを武士とするなら、このオガワソウジという人間は忍者だろう。彼なりに戦う方法をいくつか考えては見ただが、どれもこれももうまくいく保証がなかった。

（……まあいい。道中戦える可能性が低いというのなら、戦わざるを得ない状況を作り上げればいいだけだ）

幸いにも、今回の作戦はグラフィイトに筒抜けである。永田町地下の特別電算室、この場所に最終的にデュランダルは届けられるはずだ。

道中で奪えそうにないのならば、届け先で待ち構えるだけ。待つのはあまり性に合わないものの、今グラフィイトが取れる手の中の最善はこれしかなかった。

「……始まったか」

街道にある時計を見て、例の作戦が始まった事を確認する。遠くの方で囀と思わしき車が走る音を聞いたグラフィイトは、その場から姿を消して移動する。彼が行く先は、計画書に記されていた最終地点。永田町地下の特別電算室、通称『記憶の遺産』と呼ばれるところだ。そ

ここで待ち伏せをし、デュランダルを持って現れた人物を強襲する。
完全聖遺物の取得と、強敵との戦闘。グラフィイトの目的を両方も達成することのできるこの作戦は、彼にとって完璧と言えるものだろう。

——取得した作戦がそのまま実行されている、という前提条件が正しければの話だが。

「ッ、了子さん！」

「ええ、しつかり掴まって！」

「はい！」

グラフィイトが聞きとっていた音——櫻井了子の車に乗っていた響は、進行方向の道路の一部に罅が入ったことを確認して大声を上げる。同じ状況を見ており、響の声を聞いて再確認が取れた了子も返事をして、アクセルを大きく踏む。

一気に加速された了子の車と、同じように加速する護衛車4台。それらが過ぎ去った直後、道路の罅が大きくなり、陥没する。

『敵襲だ！ まだ確認はできないが、おそらくノイズだろう！』

「オツケー、このまま突っ切るわよ！」

弦十郎からの連絡を聞き、了子は返事をしつつ更に加速させる。街中を一気に走り抜け、架道橋に入っていく。するとその道中でもいくつか罅が入り、次々に崩落していく。

それを見た了子は、ハンドルを切って回避していく。護衛車も続いて回避していくが、遂にその内1台が避けきれず、橋から落下してしまう。

「ああつ！」

「この展開、想定よりも早いわね……！」

『急げ、下手に時間をかけると橋ごと落とされるぞ！』

「了解了解……覚悟しなさい、私のドラテクは凶暴よ？」

「へ、それって……ひゃあ!？」

トップギアにし、最大加速をする了子の車。架道橋を突き抜け、あらかじめ決められたルートを走り抜けていく。その道中、マンホールから唐突に水が吹き上がったり、それに巻き込まれた護衛車が跳んできたりしたが、それも次々に回避。

トップスピードのまま走り続けていることには成功しているが、状況はあまり芳しくなかった。

『このままではじり貧だ、更新したルートを送る！』

「オツケー……弦十郎君、これちよつとやばいんじゃない？」

そう言いながらナビを見つめる了子。更新された目的地までのルート上には、薬品工場があるのが見てわかった。

「この先にある薬品工場で爆発なんかされたら、いくらデュランダルでも……」

『わかっている！……さつきから護衛車を的確に狙い撃ちされているのは、ノイズがデュランダルを損壊させないように制御されているから

だろう!』

「ッ、やっぱり!」

弦十郎からの連絡を聞きつつ、前方から迫りくる障害物をハンドルを切って回避する。

『狙いがデュランダルなら、敢えて危険な地域に滑り込み攻め手を封じるって算段だ!』

「勝算は?」

『思い付きを数字で語れるものかよッ!!』

「上等! 聞こえたわね、響ちゃん!」

「え、あ、はい!!」

弦十郎の堂々とした返答を聞き、了子は笑みを浮かべながら薬品工場へ行くためにハンドルを切る。

門を突っ切り、了子の車と残った護衛車、計2台が敷地内に入る。一瞬襲撃の手が弱まったかに思えたが、突如前方にあったマンホールが破裂。その下からノイズが飛び出て来て、護衛者の窓に張り付いた。

前方の視界が埋められたことで焦り、護衛車の運転手は急いで車から飛び出る。そしてそのまま車は工場内の建物に激突し、爆発する。その煙の中を了子の車は突っ切るが、デュランダルを壊すのを恐れているのか、ノイズ共は了子の車には近づいてこなかった。

「……あっ」

「狙い通りです! このまま行けば……あ、あ、あああああ!」

『ッ、南無三!』

しかし激しい爆風を突っ切るのは流石に無茶が過ぎたようだ。車体は傾き、ひっくり返されてしまう。そしてその勢いが衰えることはなく、このままでは先ほどの護衛車と同じようにぶつかってしまうだ

ろう。

「このままじゃ……了子さん、シートベルト外してください！」

「え、あ、わかったわー！」

了子がシートベルトを外しているのを確認しつつ、響は後方の席にあるアタツシユケースを引っ張り出す。かなり重かったものの、火事場の馬鹿力が働いたのか手元に持つてくることに成功する。こんな行動をしている間も、建物の壁は迫ってくるのだが、不思議と彼女の思考は冴えていた。

「外したわよ……て、きゃー！」

「これ持って、しっかり掴まってく下さい！ Balwisyal
l n e s c e l l g u n g n i r t r o n ——」

——そしてついに了子の車は壁に激突し、激しい爆発を引き起こす。その爆発箇所をノイズは囲み、その様子を確認しているようだが、煙の中に人間の気配は感じ取れなかった。

「——あ、危なかったあ……！」

「ギツリギリだったわねー……」

爆発した建物、その屋根に降り立った響は思わずため息を吐く。そしてシンフォギアを纏った彼女の両腕に抱かれ、かつアタツシユケースを抱えていた了子もまた、流石に冷や汗をかいている。

『大丈夫か!』

「はい、なんとかか!……了子さん、どこか安全なところはありますか?」

「えつと、あそこなら大丈夫そうね」

了子の指示に従い、響はノイズの集団から離れたところまで跳んで移動する。そして着地し、了子を下ろした。

「了さんはこのケースを」

「オツケー、任せなさい。……響ちゃんも、やりたいことをやりたいようにやりなさい」

「……はい!」

勢いよく返事をして、響はノイズ共に向かって走り出した。

そしてその内1体に狙いを定めて飛び蹴りを放つ。全力で放たれたそれをもろに喰らったノイズは、後方にいた同種を複数体巻き込みながら吹き飛んでいく。そして着地した響を囲むように、ノイズは展開されていく。その全体を眺めながら構えをとろうとするが、自分の重心が普段よりも前方にずれていることに気が付いた。

「あれ、なんで……って、これか」

そう言いながら足元を見て、響は原因に察しがつく。日ごろ鍛錬を行っていた時は運動靴のため、靴底は平らだった。しかしシンフォギアを纏った彼女の足部装甲はヒールであり、それがずれている原因なのだろう。

「うん、邪魔だ!」

そう即決した響は、片足ずつ踏み込んでヒールを壊す。これによつ

ていつもの重心バランスに戻ったことを確認した彼女は、すぐさま周囲への警戒を戻す。この行動は数秒程度で行われたものだが、その間にノイズの展開は終わっており、完全に響は囲まれていた。

「ッ、せいー!」

周囲の警戒が終わり、狙いを定めた響。足を一步踏みだして前方へ跳びだし、正面にいるノイズに掌打を打つ。そして後方から跳びかかってくるノイズを回し蹴りで吹き飛ばし、正面から襲い掛かってくる別のノイズは勢いそのままに巴投げの要領で後方へ投げ飛ばす。

「おりやあああああッ!!」

そのままバク転して体勢を立て直した響はノイズ集団に向かって走り出し、正面にいる1体に掴みかかる。そしてそのノイズを掴んだまま振り回し、周囲のノイズごと薙ぎ払っていく。

「次……………ッ!」

ほぼ炭化したノイズを手放し、響は次の獲物を探して走りだそうとする。しかしその行動を即座に中断し、上空に向けて跳躍した。するとその直後、先程まで彼女がいた場所に鞭が激突する。

空中と言う不安定な領域。しかし響は姿勢をほとんど崩すことなく、攻撃してきた鞭をたどってその持ち主を確認する。

——そして見つけた人物は、響の予想通りだった。

「今日こそお前をモノにしてやる!」

「やっぱり……………くッ!」

跳び蹴りの姿勢のまま響に迫り、声を荒げるネフシユタンの鎧を纏った少女。その蹴りに反応し両腕をクロスさせた状態で受け止めるが、勢いは殺せず吹き飛ばされる。

何とか空中で姿勢を整え、着地に成功する響。そして迫りくる鞭に對して避けつつ対策を考えるが、根本的な力が違い過ぎて防御で精一杯のようだ。

(まだシンフォギアを使いこなせていない……！ どうすればアームドギアを……?)

——アームドギア。それは翼曰く、常在戦場の意思の体現。シンフォギアを纏い、覚悟を持った奏者だけが扱えるという武装。

響はあの日から訓練を重ねつつ、どうにかアームドギアを発現させようとしていた。しかし未だにそれは達成されておらず、それが響に「自分には覚悟がまだ足りていないのでは？」と言う疑念を抱かせていた。

この瞬間もその想いを一瞬抱いてしまうが、すぐに頭からその思考を振り払う。かと言ってこの状況を脱出するには、今は少女の攻撃を防ぎ続けるしかできなかった。

「……………あ？」

二人の戦う様子を眺めていた了子。ふと違和感を感じ、後方に振り向く。そこには先程持っていたアタッシュケースがあり、唐突に淡く発光しただしたのだ。

「これは……？」

了子がそう呟いている間に、光が徐々に収まっていく。そして完全に収まった時、アタツシユケースの口から煙が勢いよく吹き出される。

「この反応、まさか……覚醒!？」

了子はその言葉を言い終わるより早く、アタツシユケースが内側から破壊される。そしてその中より、とある物体が上空へ浮上していく。

その物体は剣状であり、両刃のそれは石造りのようにも見える。しかし幾何学的な装飾や放たれる雰囲気から、それが古代遺物であるということがは明らかだ。

——その名はデュランダル。日本政府が管理保管している数少ない完全聖遺物の一つで、今回の作戦の要でもある。

「こいつがデュランダル……!」

浮上してきたデュランダルに気づき、目標を見つけた少女は笑みを浮かべながらも響への攻撃を緩めない。そしてその内の一撃を彼女の足元に放ち、衝撃で発生した煙が周囲を包み込む。

その隙に少女は建物の屋根へと跳び上がり、デュランダルの位置を確認する。そして再び跳躍し、デュランダルに向けて右手を伸ばす。彼女の目的は響はもちろんだが、あくまで本命はこちらだ。完全に手に入れることができたと思った少女は、わずかながらも気が緩んでしまう。

——そして幸か不幸か、それは背後から迫りくる少女を察知するのを遅らせてしまった。

「おりやああああー！」

「な!？」

響は背後から少女にタツクルすることで、その姿勢を崩させる。それによって腕の軌道が変わり、デュランダルに届かなくなる。そして響はそのまま腕を伸ばし、デュランダルを確保しにかかった。

「渡す、ものかッー！」

そしてその手は届き、デュランダルの柄を握る。ひとまず手に入れたことを安堵し、この先のことを考える。

とりあえずこれは了子に預けよう。そのためにも、まずはこの場から離れなければ。響はこの時、こう考えていたはずだった。

「え？」

まばゆく光る、デュランダルの刀身を見るまでは。

《See you Next game……》

第24話 『辿り着いたtruth』

地上からは隔絶された、地下深く。【記憶の遺産】と呼ばれる部屋、その入り口を監視できる場所でグラフィイトは待機していた。

「——ッ！」

いつ来るかもわからないので、グラフィイトは常に周囲の索敵を行っていた。そして突然目を見開き、勢いよく立ち上がった。

「この気配……間違いなくデュランダル！」

グラフィイトが感じ取った気配、それはこの世界では「フォニックゲイン」と呼ばれる物。彼はそれを感覚でだが感じ取ることができていた。

そして今回感じ取った量は、今までの経験の中でもトップクラスのそれだ。これほどの気配、ただの聖遺物では発せるものではない。それはつまり、この気配の持ち主が完全聖遺物であることを示していた。

「馬鹿な、運んでいる最中に発動させたというのか？」

なぜ作戦が上手くいかなかったのか、そんなことは後で考える。幸いにも気配が膨大なおかげで、すぐ近くまで移動ができそうだ。

そう判断したグラフィイトはすぐさま移動を開始しようとする。が、ふと違和感に気づいてソレを取り出し、注視した。

彼が手に持つガングニール。それは以前よりはるかに激しく発光し、熱を帯びていた。おそらく以前と同様の共鳴反応なのだろうが、普通はこの距離で反応するわけがない。念のため周囲の気配を探っ

てみるも、響の気配は感じ取れない。

——それはつまり、この距離で共鳴する程のエネルギーを向こうのガングニールが発していることになる。

「ッ、暴走。そう言うことか！」

グラフィイトは状況を察し、自らの不覚を恥じる。だがその事を反省している時間など、今はなさそうだ。

「間に合うかは五分といった所か……培養！」

『infection! LET、S GAME! BAD GAME!
E! DEAD GAME! WHAT、S YOUR NAME
!?! THE BUSTER……!』

怪人態へ変身し、グラフィイトは目を閉じて集中する。そして、その場から移動を開始した。

「ウウウウアアアアアアアアアアアアッ!!」

手に持ったデュランダルを上方へ振りかざし、人間とは思えない叫び声を上げる響。顔は荒々しく歪み、目が赤く光っていることから明らかに正気ではないことがわかる。

そしてデュランダルの形状も変わり、全体的に淀んでいた色は想起状態になったことで本来の色を取り戻している。そしてそれから放たれるフォニックゲインは質も量も尋常ではなく、ただ持っているだけだと言うのに周囲に小さくはない衝撃波を発生させていた。

「こいつ……まさかデュランダルを起動させたってか!？」

「ああ……………」

この状況に少女は思わずうめくが、背後から聞こえる声に気づいて振り向く。そこには了子が呆然と立ち尽くしていた。

目の前の状況に圧倒されているのか、はたまたデュランダルが放つ眩い光に魅了されているのか。なににせよ了子は恍惚とした表情で、デュランダルと響を見つめていた。

「ッ、そんな力を見せつけるんじゃないっ！」

あまりにも突飛な状況にしばし混乱していたが、少女はようやく本来の目的を思い出す。そして未だに剣を振りかざして吠え続ける響に対し、右手に持つ杖を向けて叫んだ。

先端から光線が迸り、響の傍に着弾。彼女の周囲にノイズが出現する。これらと同時に攻めることで、一気に響を無力化しようと踏んだのだろう。

「なっ!?!」

「!」

——ただしその安易な行動が、響に気づかれてしまう原因となる。彼女は少女の方に振り向き、咆哮する。それに呼応したのかデュランダルから放たれる衝撃波が強くなり、それを近距離から受けたノイズは瞬く間に崩れ去った。

そして地面を踏みしめ、響は一気に少女へ肉薄する。以前とは比べ物にならないスピードに少女は反応しきれず、無防備な腹部に跳び蹴りをもろに喰らう。その勢いを止めることはできず、少女は後方にある壁まで吹き飛ばされる。

壁に激突し、ようやく止まる少女。その勢いとダメージの大きさは、壁にある凹みが少女の全長よりも数倍大きいことから察せられるだろう。

「つぐ、この……!」

しかし少女が纏うものもまた完全聖遺物。ダメージは決して軽くはないものの、立て直すことに成功する。

「——ッ」

「ふざけんじゃねえ……お前を連れ帰って、あたしは!」

——NIRVANA GEDON——

頭に血が上っているのか、少女は感情の赴くままにエネルギーの球体を生み出して響に投擲する。それを見ても彼女は身動き一つとることはなく、それは着弾した。

「ハア、ハア……これでちったあ——!」

爆発によって生まれた煙を眺めながら少女は荒い息を整えようとするが、目を見開いて驚愕する。

突如煙の中心地から光の柱が上空へ昇り、煙が一気に晴れていく。

「ツ!!」

——そしてその中心に立つ響は、無傷でデュランダルを振り上げていた。

「——あれ。なんで、身体が勝手に動いているの……………?」

……………
（あの時、確かデュランダルを奪われないよう握って、それから……………）

……………セ!!——

（なに、これ？ 頭の中に、声が響いてくる……………）

……………コワセ!!——

（頭が、痛い……………!）

——…テヲ、コワセ!!——

(うぐ、ああ……!)

——スベテヲ、コワセ!!——

(こわ、す)

(すべてを、コワス)

(すべてヲコワス)

(……ジャアマズ、メノマエニイルコイツカラ——!!)

——おっと、ギリギリだったな。それ以上はストップだ——

「――状況は！」

移動が完了し、グラフィイトは急いで現場の状況を確認する。

「完全聖遺物、デュランダル。これ程なのか……？」

グラフィイトの目に映る風景、それはひどい有様だった。工場は半壊し、建物のいくつかがガレキと化している。そして崩壊した周囲で火災が発生しており、なにが起きたのか、想像するのは難しくない。そしておそらく爆心地と思われる箇所。そこは煙で覆われており、状況を確認することができなかった。

そこまで分かった所で、グラフィイトはガングニールを取り出す。先ほどもまでの激しさが嘘のように、ガングニールの発光は収まっていた。このことから予想できることは二つ。ガングニールの暴走が収まったか、暴走の余波で奏者ごと消し炭になったかだ。最悪の場合、デュランダル諸共消し飛んだ可能性もあるのだが――

「……どうやら、五分の賭けには勝てたようだ」

煙の切れ目から一瞬だけ見えた光景。それを見逃さなかったグラフィイトは、身体に走らせていた緊張を少し解いた。

そしておそらく煙の中にデュランダルはあると仮説を立てるが、既に多数の人間が工場に集結し始めているのを感じ取る。

「構わず突っ込むのも手だが………つまらん」

確かに今行けば、ほぼ確実にデュランダルを手に入れることができ

るだろう。だが完全聖遺物の取得はグラフィイトにとって、そこまで重要視している事ではない。それに周囲の気配を探る限り弦十郎と翼はおらず、ガングニールの更なる覚醒のために戦おうと思っていた響は、先ほど見た光景から察するに気を失っているだろう。

今現在、グラフィイトが優先している事。それは弦十郎との闘争、翼との決着、彼が所持するガングニールの洗練化。

そして――

「ネフシユタンも生き残っているな。ちょうどいい、先に奴を潰すか」

――ファイネ勢力を殲滅し、ギャラルホルンを手に入れることだ。

先ほどから範囲を広げて探っているが、ネフシユタンの気配をうっすらだが感じ取れる。暴走したデュランダルの一撃をもろに喰らったというのに、どうやらいまだ健在のようだ。そして不幸なことに、今グラフィイトが察知している存在の中で、少女は一番強い。

標的を定め、グラフィイトはその場から去ろうとする。しかしピタリと動きが止まり、立った状態のまま口を開いた。

「なんの用だ、出てこい」

「――申し訳ありません、あなたに今動かれるわけにはいきませんので」

グラフィイトが正面を向いたまま話すと、建物の影から出てきた男性――緒川が返答する。その手には拳銃が握られており、既に何度か引き金が引かれたその銃口はグラフィイトの影に向けられていた。

声が聞こえる方向から居場所を察知し、グラフィイトは振り返ろうとする。しかしまるでその姿勢で縫い付けられているかのように、彼

の肉体は動かなかつた。

「……アメノハバキリと同じ技か。貴様、何者だ？」

「特異災害対策機動部二課所属、緒川と申します。司令の指示により、あなたの足止めに参りました」

「司令………ああ、弦十郎か」

「はい、そうです」

「フンッ！」

緒川の返答を聞き終わるよりも早く、グラフィアイトは振り返りつつ双刃で薙ぎ払う。それは背後にいた緒川の胴体を真つ二つに切り裂くが、グラフィアイトは手ごたえに違和感を感じた。

「この感覚………ッ、やはり偽物か！」

「影縫いをこうも簡単に………念のため普段の3倍撃つたんですが、無駄だったようですね」

切り裂いた対象が偽物であることにグラフィアイトは即座に気づき、すばやく振り向く。そして目の前に迫りくる弾丸のすべてを、双刃を用いて弾き落とす。その様子を見て、緒川は弾丸を装填しながら思わず呟いた。

「俺を舐めるな、あの程度で俺の動きを妨げられるとでも思ったか！」「くッ！」

装填が終わったと同時に、グラフィアイトが緒川に肉薄する。そして振り下ろされた双刃を緒川はギリギリ回避するが、その直後に放たれる蹴りを喰らい、吹き飛んでいく。しかし攻撃が成功したにもかかわらず、彼は既に吹き飛んだ先を見ていなかった。

「……俺が気づかないほどの気配遮断。そして変わり身の次は分身と

きたか」

グラフィイトの周囲を囲む、6人の緒川。間違いなく本物はこの内の1人なのだろうが、その見分けを今付けることは今の彼には困難だった。

「確か貴様、緒川とか言ったな……………そうか、思い出したぞ！」

そう叫びつつ、グラフィイトは正面にいる緒川に突撃し、攻撃する。それを緒川はまず避け、追撃を分身と連携することで更に回避。どうしても避けられないものは分身が身代わりとなって消えるが、すぐ6人の状態に戻っていた。

「俺が手に入れた、デュランダル封印に関する運搬方法の計画書。そこに記されていたデュランダルを一人で搬送する人間、それが貴様か！」

「ッ、何を言って……………！」

何者が聞いた時、奴はオガワと名乗っていた。名前は確定していないが、少なくとも一致している苗字。そして影の者と呼ぶにふさわしい継戦能力で、バグスターである自分に対して曲がりなりにも時間稼ぎは十分にできている。

間違いない、グラフィイトはそう判断して後方へ跳躍する。緒川一人による包囲網から抜け、貯蔵タンクの上に着地した彼は構え、双刃を握る手に力を込める。

「どれが本物か判別できぬのなら、すべて同時に潰せばいい！」

「これは……………！」

「吹き飛ば、激怒——」

「つと、そこまでだ！」

——大技を放とうとした直後、屋上の扉が開く。そしてその中から男性が出てきて叫ぶ。その声を聞き、誰が来たのかすぐに判断できたグラフィアイトは技を中断し、入り口に視線を向けた。

「弦十郎、ようやく来たか」

「よう、待たせちゃったみたいだな。……慎次、足止め感謝する」

「はい」

そうグラフィアイトに男性——弦十郎は返答し、二人のちょうど中間に位置取っている緒川に労いの言葉をかける。それに対し緒川は分身を解いて頷く。怪我は負ってないようだが、疲労の色が見え始めていた。

「む、シンジだと？……まあいい、次の相手はお前か？」

「そのつもりだ。……が、その前にお前さんにちよいと聞きたいことがある」

「なに？」

標的が予想していた人物ではなかったことにグラフィアイトは少し引つかかるが、すぐに些事だと切り捨てる。そして弦十郎と、可能なら緒川と弦十郎の両名と戦う気満々だったのだが、予想だにしない言葉が聞こえて思わず反応してしまう。

敵である自分に対して質問だと？ ふざけるなと一蹴しようかと思っただが、だが少なくとも弦十郎に戦う気は十分にあるように見える。それに、この質問自体が時間稼ぎであると言うわけではなさそうだ。

「先に言っておくが、俺は奴等の仲間などではない」

「だろうな。それはお前の今までの行動から把握できている」

「……ではなんだ？」

「俺は腹の探り合いは苦手だな。だから真正面から直球で聞かせてもらおう」

そう言つて、弦十郎は真剣な表情で口を開く。その内容を聞きおえたグラフィアイトは身動きせず、二人をじっと見つめる。

全身鎧のため、グラフィアイトの表情を見ることはできない。しかし彼の反応を見ていた弦十郎と緒川は、確かに笑っているように感じていた。

「現実世界、と言うのが正しい表現なのかはわからんがな。とにかくこの世界に来たお前は何が目的なんだ？」

——狩猟ゲーム【ドラゴナイトハンターZ】の住民である龍戦士、グラフィアイト。

《See you Next game……》

第25話 『Dragon knightの極意!』

——時間はさかのぼり、翼が絶唱を使った日。

藤堯からの連絡を受けた弦十郎は急いで二課に戻り、司令室の扉を開けて入った。

「戻ったぞ」

「司令!」

「司令、お疲れ様です」

声の聞こえる方を向くとそこには藤堯、そして緒川の姿がある。それを確認した弦十郎は二人の元まで近づき、口を開く。

「おう、二人ともお疲れさん。……友里君に了子君は?」

「友里さんは検証と情報収集のため本部の人たちとあの広場へ、了子さんは広木大臣に提出する書類作りで一足先に帰りました」

「そうか……にしても藤堯、お手柄じゃないか。まさか頼んだ日のうちに見つけてくるとは」

「いや、そうなんですけど……」

「……む?」

未だに手掛かりが少ないため、少なくとも時間はかかると思っていた弦十郎。しかしその日のうちに手柄を上げたと聞いて、藤堯を称賛する。しかしそれに対して彼の表情は芳しくなく、なんとも言えない表情をしている。そして隣に立つ緒川もまた、複雑な表情をしていた。

その様子を見て、弦十郎はすべてがうまくいったわけではないと察する。そしてその詳細を聞くため、藤堯に質問した。

「なにかあったみたいだな、どうした?」

「……司令、今から話すことは荒唐無稽に聞こえるかもしれせん」

「まずは言ってみろ、話はそこからだ」

「ええ……わかりました」

藤堯はそう返事をして、個人用のノートパソコンの電源を付ける。そしてしばらく操作すると、画面を弦十郎に見せた。

「これは……ッ！」

「司令から話を聞いてまさかと思いました……」

「司令、本当にアンノウンはこの名の道具を使ったんですね？」

「……ああ、間違いない」

弦十郎はしばらく画面を見ていたが、驚いて思わず声を上げる。その画面にはサイトのホームページが映っていて――

——そこには大きな文字で「ドラゴナイトハンターZ」と書かれていた。

「藤堯、これはなんだ？」

「ドラゴナイトハンターZ……今から10年前に幻夢コーポレーションから発売されたゲームです」

「ゲームだどっ!？」

藤堯の言葉に弦十郎は驚愕するが、彼の脳内である時のグラフィアイトの台詞が思い起こされる。

『ドラゴナイトハンターZは、最大4人プレイでドラゴンの討伐を行う狩猟ゲーム』、彼は確かにそう言っていた。あの時はグラフィアイトやネフシユタン、そしてドラゴンに気をとられていたため、頭の中からすっぽりと抜けていたのだ。

「……そう言えば、グラフィイトもそのような事を言っていた。よくこれを見つけることができたな」

自らの不覚を恥じつつ、弦十郎は話を進めるために口を開く。それを聞いた藤堯はいやー、と言いながら頬をポリポリと搔いて答えた。

「見つけたというか、僕もこのゲームをやっていましたからね。学生の頃の話だったので、調べ始めるその瞬間まですっかり忘れていましたけど」

「そうか、結構人気だったのか？」

「ええ。少なくとも何度か再販され、その度に売り切れになっていた程には」

またそれだけではありません、そう言いながら藤堯はパソコンを操作してページを切り替える。そして開かれたページは、ゲームに登場しているキャラクターを一人ずつ紹介しているものだった。

「アンノウンの性質上、僕は彼の姿を目視できていません。しかし……」

そう言いながら藤堯はページを下にスクロールしていく。そして一番下までたどり着いた時、弦十郎は今度こそ驚愕で目を見開いた。

「——彼は、こんな姿ではありませんでしたか？」

そこには、弦十郎と戦った時と寸分違わぬ容姿のグラフィイトが堂々と載っていた。

「そこから俺たちは『ドラゴナイトハンターZ』に登場するグラフィアトとアンノウン——お前の関連性について本格的に調査を始めた」
「……………」

弦十郎の話を、グラフィアトは静かに聞いている。何も口を挟んでこない辺り、暗に自分たちの推察は間違っていないと言っているように二人は感じていた。

「最初はゲームのキャラクターを利用した偽装だと思っていたんだがな。調べれば調べるほど、ゲームに登場するグラフィアトとお前さんが同一の存在としか思えなくなってきた。ウチが今まで保持したところのある聖遺物の中には、並行世界と繋げる機能を持つと言われているモノがある。突飛な話だが、ありえないと言っわけではないだろう」
「それはつまり、俺が何らかの方法で『ドラゴナイトハンターZ』の世界から来たグラフィアトそのものだと？」

グラフィアトがそう言うと、弦十郎はそう言い切れれば話は簡単なんだがな、と頭を掻きながら口を開く。

「さつきは同一の存在と言ったが、それだとおかしな点がいくつか出

てくる」

「ほう、それは？」

『それはあなたの出現、および離脱手段。そして所持しているガングニールです』

新たな男性の声が聞こえ、グラフィイトは周囲を見渡す。しかしどこにも弦十郎と緒川以外の人物はおらず、そこでこの声が通信によるものだと思いついた。

「こいつは藤堯、お前の正体に真つ先に気づいた俺の部下だ」

「……そうか、で？ その相違点とやらを話してもらおうか」

『ええ、僕もそのつもりです。まずは移動手段、〔ドラゴナイトハンターZ〕に登場するグラフィイトは特殊な移動手段を持ってはいませんでした。しかしあなたは瞬間移動ともとれる移動手段を持っている』

通信機越しの声が屋上に響く。少し離れた薬品工場では多数の間が集まって作業をしているため、騒音がここまで聞こえてくる。しかし藤堯の声は不思議と3人の耳にしつかりと入ってきていた。

確かにこの時点で〔ドラゴナイトハンターZ〕のグラフィイトがそのまま来たという可能性は低くなるだろう。だがまだ証拠が足りないと感じているグラフィイトは、無言で話の続きを促す。

『そしてこれよりも決定的なのは、あなたがガングニールのシンフォギアを使用できることです。基本的に女性しか扱えないはずのそれを、あなたは限定的ながらも使用できている』

〔ドラゴナイトハンターZ〕に登場するグラフィイトは人間ではないが、間違いなく男だ。一応聞くが……「俺は男だ」……だよな」

念のため弦十郎が確認しようとするが、言い終える前にグラフィイトが即答する。そして視界に映る二人の方を見て、口を開いた。

「だが、まだ足りんな。偶然人間側に男のシンフォギアの担い手がないだけではないか？」

『これはシンフォギアシステムの製作者であり、その元である櫻井理論を提唱した櫻井女史がほぼ結論付けたことです。そして【アンノウンはシンフォギアを扱っている】のなら、そこには何かしらの要因があると考えた方がまだ現実的だ』

「——ほう」

グラフィアイトが口を挟むが、藤堯はそれに対して即答する。「たまに男性の奏者がいないだけ」、【アンノウンは偶然シンフォギアを扱える】、【アンノウンはゲームの世界から来たからこの世界のルールには縛られない、だから使える】。確かに理由づけはできるだろうがそれはあまりにも無理やりで、思考することを放棄している。できる限り確実性を持ちたい藤堯にとって、この結論を出すこと等ありえなかった。

そしてその答えを聞いたグラフィアイトはそれ以上は話さず、再び黙る。一見言い負かされたように見えるが、弦十郎はどことなく彼がこの状況を楽しんでいるように感じる。それは通信機越しのため、グラフィアイトの情報は声しかない藤堯にも同じ印象を抱かせていた。

それは自分たちが真実に近づいていることを喜んでいるのだろうか。それとも、荒唐無稽な予想を立てている自分たちを嘲笑っているのだろうか。それはまだわからない。

しかしどちらにせよ自分の役割は果たす、そう考えた藤堯は一度深呼吸をして、再び口を開いた。

『この時点でああなたの正体に関するいくつかの仮説が立ちました。まず1つ目、【ドラゴナイトハンターZの世界から来たグラフィアイト】。しかしこの仮説だと先程答えたように相違点があります。ですので、これは違うでしょう』

『次に2つ目、【グラフィアイトというキャラクターを模倣しているだけの別の存在】。一番現実的な答えですが、あなたが今まで取ってきた行動からその可能性は低い。だからこれも違う』

2つ目の仮説は真つ先に藤堯が思ったことだ。しかしそう決めつけるには、違和感を抱く出来事がある。

アンノウンは今まで数々の聖遺物がある遺跡を襲撃し、回収していった。そして襲撃した遺跡には【強力な防衛機構があると予想されている場所】という共通事項があったのだ。間違いなく単独で動いているアンノウンにとつて、そこは本来避けるべき場所。だと言うのに彼はあえてその遺跡だけを狙い撃った。これは【生粋の武人であり、常に強者との戦いを望む】という【ドラゴナイトハンターZ】のグラフィアのキャラ紹介と非常に合っていた。

それすらも偽装だ、と言われれば確かにそうだ。しかし、これを行うにはリターンに対してあまりにもリスクが高すぎるのだ。どこかで失敗したら確実に命を落とすだろうし、例え実行しなくてもだれも違和感を抱かなかつただろう。

故に藤堯はこの可能性は低いと考え、切り捨てることを選んだ。

『これだと1つ目の仮説が戻ってきますが、僕はあなたが【ドラゴナイトハンターZ】のグラフィアイト本人であるという点は正しいと考えました』

「だと言うのなら、俺の能力とガングニールを扱える理由をどう説明する？」

「そう、そこだ。んで、これは俺の予想になるんだが……その移動能力、後天的に手に入れたものじゃないか？」

グラフィアイトの問いに答えたのは、先ほどまで黙っていた弦十郎だった。そして予想の内容を聞き、その正確さに彼はわずかながら言葉に詰まる。

「……なぜ、そう思った？」

「お前と戦った時、移動能力を使用しなかったからだ。お前の動きは熟練されていて、迷いがなかった。それは自分の戦い方に絶対の自信と信頼があるからだろうか？」

「ああ」

弦十郎からの問いに、グラフアイトは頷いて肯定する。それは全くその通りであり、今更この戦い方を変えるなど、彼にとってはありえない選択だった。

「だがもしお前が最初からあの移動能力を使えていたら、それも戦法に組み込んでいたはずだ。……だが、それをしていなかった。だから俺は、その移動能力は大分後から手に入れた力だと予想した」

「――フ。では、俺がガングニールを扱えるのは何が理由だ？」

予想を聞き終えるが肯定も否定もせず、更なる問いをグラフアイトはぶつける。それを肯定と受け取った弦十郎は笑みを浮かべながら口を開いた。

「まず結論を言ってしまうえば、お前さんの適合係数が一定量あるからだ」

「当たり前だな」

『ではなぜ適性があるのか？ 基本的に女性にしか纏えないシンフォギア、男性と女性の違いで根本的な部分でいえば……それは遺伝子です』

「遺伝子、だと？」

はい、そう藤堯は返す。今回の調査の上で、彼はシンフォギアシステムそのものについて理解する必要があると感じた。そこで仕事の間を使ってシンフォギアシステムに関する資料を集めて読み漁り、都合が合えば了子の特別集中講義を受けて来たのだ。おかげさまでこ

こ最近まともな休憩をとれなかったが、シンフォギアについてある程度の理解はできたと思っている。

そしてその中で藤堯が最も疑問に感じていた「シンフォギア適合値の性別差」、それに関する意見を了子に聞いた時、彼女はいくつか推察を立てて答えてくれた。そしてその中で最も腑に落ちたのが、この遺伝子という観点だったのだ。

『まだ仮説らしいので、これが適合係数と確実にわかっているかは僕にはわかりません。しかし人間を作るデータの塊であり、男女で決定的な差が生まれる性染色体を含んだ遺伝子。あなたに適合値がある理由を明確な言葉にするならば……完全な女性の遺伝子を何らかの方法で、あるいは先天的に所持しているからではないでしょうか？』

「遺伝子、データか。……いい加減まどろっこしい、結論を言え。既にお前たちの中で、それは出ているのだろうか？」

しばし考える様子を見せた後、グラフアイトは結論を言うように促す。

聞きたいことはもう聞けた、十分だ。そう言葉に含められているのを感じ取った藤堯は再び深呼吸をして、結論を言った。

『僕たちの結論は、「あなたはドラゴナイトハンターZのグラフアイト本人であり、後天的に手に入れた移動能力を使ってこの世界に来た。そして先天的、あるいは後天的に女性の遺伝子を持っているためシンフォギアを起動できる」ということです』

それに対する返事なのかどうかは定かではないが、その後には彼はようやく落ち着き、拳を握りしめながら称賛の言葉を送った。

「完璧な解答ではないが、十分だ！ まさかあの程度の情報で、俺の真実にこうまで近づくとは思わなかった!!」

「素晴らしい……素晴らしいぞ！ お前たちは、我が好敵手にふさわしい!!」

一切の淀みがない、賛辞の言葉。敵であるはずのグラフィイトから真っ直ぐ送られるそれを聞いた藤堯は、思わずガッツポーズをとる。そしてそれを真正面を受けた弦十郎と緒川もガッツポーズまではいかないものの、知らずと笑みを浮かべていた。

「ククク……いいだろう、ここまでたどり着いた報酬だ。いくつかお前たちにとって有益な情報を与えてやる」

「ほう、随分と太っ腹だな？」

「気にするな……まず一つ、俺は【ドラゴナイトハンターZ】の世界からこのことは別の世界へ生まれ変わった」

「このことは違う世界、ですか……」

上機嫌な声からサラッと伝えられる、異世界の存在。そもそも【ドラゴナイトハンターZ】というゲームの世界がある事を前提に調査していたため特に抵抗はなかったが、もし数週間前に同じことを言われた場合、彼らは混乱していただろう。

「ああ、そして2つ目。その際俺はバグスターという新たな種族となった。これは人間にも感染するコンピューターウイルスであり、あの移動能力はバグスター共通の力だ。そしてその中でも俺たち完全体は宿主だった人間のデータを保持している」

「人間に感染する、コンピューターウイルス……!?!」

『宿主のデータを……まさか!?!』

「お前の思ってる通りだ、藤堯。俺の宿主は女であり、そのデータ——
遺伝子がこの身体に根付いている。それがほぼ最低限とは言え、ガン
グニールを起動できる要因なのだろう」

少なくとも3人を認めただため、藤堯を名称で呼ぶグラフィアイト。そ
して次々に明かされる衝撃の真実に藤堯は混乱し、表面上は平常心を
保っている2人も内心疑問が尽きなかった。

「——む、流石に時間をかけすぎたか。今日はここまでのようだな」
「ッ、待て！ 最初の質問にまだ答えてもらっちゃいないぞ！」

いつの間にか薬品工場にいた人が少し減り始め、撤収作業が完了し
かけている。それを確認し、当たり前だがネフシユタンをとり逃した
グラフィアイトはこれ以上にここに留まる理由がないため、武器を収め
る。それを見て離脱の予兆を感じ取り、弦十郎が大声で問いかけた。

「……たしか、この世界での目的だったか」

「ああ、そうだ」

「何も変わらないさ。俺は『ドラゴナイトハンターZ』の龍戦士、グラ
ファイト！ 俺が俺である限り、その生き様を貫くだけだ！」

グラフィアイトは堂々と答え、振り向いて二人から離れだす。おそら
く、ここから去るつもりなのだろう。

いくら正面から語り合って称賛されたとはいえ、グラフィアイトは決
して味方ではない。離脱されると予想がついた弦十郎は気合を入れ
なおし、緒川は彼の逃げ道を塞ごうと静かに動き始める。藤堯もま
た、声だけとはいえ彼から得られる情報を1つ残さず聞きとれるよう
集中する。3人とも最後まで気を緩めないように気を付けていた。

「なっ!？」

「ッ!？」

「なんだって!？」

——だからだろう。突如グラフィイトが放ったその言葉を聞いて、彼らは硬直してしまったのだ。

そしてその隙をつかれ、グラフィイトは屋上から飛び降りる。それを見た弦十郎は真つ先に立て直し、飛び降りた場所に走る。そこから下を覗くが、彼の姿は見えない。すぐさま緒川が周囲を索敵するも、彼の気配を感じ取ることはできない。

痕跡を残すことなく、グラフィイトはその場から姿を消した。これ以上の深追いは無駄だと判断し、弦十郎と緒川はその場から撤収する。しかしその2人と司令室にいる藤堯の頭の中では、先ほどのグラフィイトの言葉が何度も反響していた。

「……1人1つだと考えた場合、まだ報酬が足りないな。あと1つ、有益な情報を教えてやろう」

「バグスターには共通して、ある特性がある。それはバグスターが倒した人間はデータとなって、元となっているガシヤットに保存されるというものだ」

「——俺を倒して見せろ、人間。さすれば GANG ニール……いや、天羽奏を取り戻せるかも知れんぞ?」

《See you Next game……》

第26話 『翳りなきSunny』

「デュランダルは覚醒し、二課の連中は俺の正体に気が付いた」

木々が生い茂る森林の中を、グラフィアイトは歩く。

「俺が倒すべき存在も定まり、目的を達成する手段も向こうから現れた」

かろうじて獣道と呼べる狭い隙間を、グラフィアイトはずんずん進んでいく。その心情を表しているのかのように足取りは軽快で、普段よりもペースが速い。

「……ああ、順調だ。俺の正体も判明し、奴らが思う存分戦える大義名分も与えてやった。後はアメノハバキリが復活し、ガングニールが覚悟を決めるだけ」

木々を抜け、川のほとりに出る。そこから川に沿って移動を続け、暫くすると目の前の光景が一変する。この先は崖であり、川の水は滝となって下へ落ちていく。その底は見えず、水は途中で霧となって下の風景を隠していた。

そしてグラフィアイトは迷わずそこから飛び降り、霧の中を突っ切る。そして数十秒間の浮遊の後、危なげなく着地した。

「——故に、ここからはセカンドステージだ。お前にもそろそろ、動いてもらおう」

そう言いながらグラフィイトは視界に映る建造物——荒れ果てた大地の中心に建つ大型のドーム、それを目指して再び歩き出した。

「ハア、ハア、ハア……………」

リディアン音楽院、その運動場。その敷地内にあるトラック内を、響は走っていた。走り始めた時はまだ薄暗かったが、今では太陽が完全に顔を出している。一度休憩を挟んだとはいえ、彼女は既に1時間以上は走り続けていた。

なぜこう迄走り続けるのか、それは数日前に起こなわれたデュランダル移送作戦が関係している。

（あの時、暴走したデュランダル。怖いのは制御できない力じゃない。私がそれを躊躇いなく、あの子に使おうとしたことだ）

あの日、響はデュランダルを握った瞬間から意識が朦朧となっていた。作戦終了後に了子から話を聞くと、自分はネフシユタンの鎧を纏った少女に襲い掛かったらしい。

響自身、彼女と戦う気など毛頭なかった。しかし、あの時彼女が聞いた声——

——スベテヲコワセ!!——

「……ッ！」

頭を振り払い、それを振り払うようにペースを上げる。

響が目を覚まして最初に見た光景、それはすさまじいものだった。薬品工場の建物はほぼ崩壊し、もはや工場としての機能は維持できないだろう。そして周囲には後処理のためか何人かが作業しており、目の前では了子が誰かと通話していた。

『——了解、移送計画を一時中断し撤収の準備をさせます。……あ、響ちゃん。目を覚ましたのね』

『あ、はい。あの、これは……』

通話を終了させ、振り向いた了子は響が目覚めたことに気づいて声をかける。それに返事をしつつ、響は周りを見ながら思わずつぶやいた。

『これがデュランダル、あなたの歌声で起動した完全聖遺物よ』

『私、が……?』

『まあ暴走していたし、しようがないとしか言えないわね。……でも、これでも幸運なのよ?』

『これで、ですか?』

了子が話した内容、その言葉を響が理解するのには時間がかかった。たとえ爆弾が爆発したとしても、これほどの被害は上手ないだろ

う。だと言うのに、これが幸運？

『どういう、ことですか』

『圧倒的なエネルギーの無限生成、それがデュランダルの力。それが制御できずに暴走したのだから、私は少なくともこの工場は全部吹き飛ばすと思っていたわ』

『——え？』

その言葉を聞いて、響の思考が固まる。了子は軽く言っているが、それは了子やネフシユタンの少女、下手すればそれ以上の命を奪いかねなかったと言っているようなモノだ。

響はあの時意識が朦朧で、ある意味正気ではなかった。だとしても自分が人を殺そうとした、その事実是不変変わらない。

——この、人殺し!!——

『ッ、ちがう……私は、そんなつもりじゃ……!』

『……響ちゃん?』

『違う……違う……ちが、う…………ッ』

『響ちゃん!?!』

「人殺し」、そのワードは響にあの過去を思い出させてしまう。当時を思い出し、その時浴びせられた罵声が彼女の頭の中で反響する。

響は両手で耳を塞ぎながら、うわ言の様に「違う」と口にする。そして異変に気づいた了子が声をかけるも、彼女は再び意識を失ってしまった。

(私が、いつまでも弱いせいで……!)

「……?」

(このままじゃ駄目だ。ゴールなんかで止まっていちや、私はまた守れなくなっちゃう……!)

「……きー!」

(遠く、もつと遠くへ——!!)

「響、ストップ!」

「……え?」

ハツと正気に戻り、自分がいつの間にか立ち止まっていることに気づく響。そして右手に感触を感じて振り返ると、そこには一緒に走っている女性——未来が自分の手を握っている光景が映っていた。

「……未来?」

「ハア、ハア……やつと考え事やめてくれた。さつきからずつと呼んでいたのに、全然反応してくれなかったんだよ?」

「あ、ごめん……えつと、どうしたの?」

「いくらなんでも張り切りすぎ。さつきからペース上がりっぱなしで、そのままじゃ倒れちゃうよ?」

「大丈夫だって。ほら、今もこんなに元気……うひゃつ」
「響!」

自分が元気であることを示すため、その場で両手を上げてバンザイのポーズを響はとる。しかし一旦落ち着いたことで、今まで感じていなかった疲労感が一気に押し寄せてくる。軽くめまいがして体勢を崩すが、未来が素早く駆け寄って支えることで倒れずに済んだ。

「あー……ちよつと、無茶しちやったかも。あははは……」

「……」

「う……未来、ごめんなさい」

「よろしい」

響は笑って誤魔化そうとするが、それを見た未来はじー……と彼女を半目で軽くにらむ。お互いの顔は近く、間近で無言の時間がしばらく続く。そして、そう時間がかからないうちに響の方が折れた。彼女の謝罪を受け取り、未来は呆れと慈愛が混ざった表情で彼女を支えなおす。

いくら鍛えているとはいえ、スタミナを考慮せずに無謀なペースで数時間もの間走り続けたのだ。それを自覚してしまった今、響は身体が鉛のように重く感じていた。

「もう……今日の走り込みは終わり。お風呂入る？」

「はい、そうします……」

「ああー、極楽ウ……」

「ふふ、そのままじゃトロトロになっちゃおうよ？」

「今はトロトロになってもいいー……」

走り込みを中止した二人は、部屋に戻って一緒に風呂に入る。疲れ切った体に温かいお湯が染み渡り、響は文字通り溶けそうになっている。その様子を見て未来はクスクス笑い、さりげなく肩を当てることで彼女がお湯の中に沈むのを防いでいた。

「未来ー」

「なーに？」

「日曜日なのに、ごめんね。朝から付き合わせちゃって」

「ううん、大丈夫。私も中学時代を思い出せて気持ち良かったー」

響の言う通り、今日は日曜日。そして午前中だけとは言え、今日も学校はあるのだ。なのに朝早くから結構な密度の走り込みにつき合わせてしまったことを詫びる。それに対し未来は目を閉じつつ、両手で伸びをしながら返した。その様子から、言葉に嘘はなさそうである。

「うそお……さすが元陸上部」

「誰かさんと違って、ちゃんとペースを考えていましたからねー？」

「うぐっ………未来の意地悪」

「ウフフ、ごめんごめん」

片目だけあけて響を見ながら、未来は揶揄うような口調で話す。凶星をつかれた響は少し顔をしかめ、拗ねるようにお湯に深くつかりながらジト目で未来を見返す。いじらしい態度に未来は微笑みながらすぐに謝り、冗談であることをわかつていた響はすぐ浮き上がる。

そして再びお互いの肩が触れる位置になった二人は、窓から見える外の風景をゆっくり眺めていた。

「ねえ、響」

「なにー？」

「少し、リディアンに入学してから変わったね。前は何か1つのことを頑張ったりとか、あまり好きじゃなかったでしょ？」

「そうかな？ 自分では変わったつもりはないんだけど……」

「そうだよ。……あれ、ちよつと筋肉がついたんじゃない？」

「え、そうかな？」

未来に指を刺され、響は自分の腹部を見る。以前とあまり変わっていないように見えるが、運動部に所属していた彼女にはわかる物なのだろうか。

「ほら、ここ……って、あー！ よく見たら傷ついているじゃないの！？」

「へえあ!？」

恐らく弦十郎との鍛錬の際についた傷、それはとくに完治していない傷跡もほとんど残っていない。しかしわずかな異変に未来は気づき、慌てて傷のある個所をつかんだ。

先ほど言ったとおり、件の箇所は腹部。わき腹付近ともいえるそこを突如つかまれた響は思わず声を上げる。むず痒い感覚に響は身をよじらせているが、未来はそんななお構いなしに触り続けた。

「どうしたの？……うわ、ここにもある。ここにも、ここにも……」

「あーはははは！ やめてとめてやめてとめてやめて！」

「フフ、ここにも、ここにも！」

「わーーーー!!」

「ねえ、今度フラワーで好み焼きおごってよ」

「んえ？」

しばらくの間二人はじゃれ合っていたが、始業時間が近づきつつあることに気づいて風呂から出る。

そして脱衣所で着替えている時、未来が響に提案した。それを聞いた響は不思議そうな表情で聞き返す。

「日曜に付き合ったお返しということ……どう？」

「うん、もちろんいいよ」

「よし、契約成立！」

楽しみだなー、見るからに上機嫌な様子で制服を着る未来。しかしその様子を見ている響は不思議そうな表情を浮かべていた。

「……ねえ、本当にいいの？ フラワーなら時々だけけど一緒に行つて
るじゃん」

響の質問、それには自分の無茶に付き合ってくれた未来へのお礼が
それでいいのかという疑問が含まれていた。

フラワーのお好み焼き、それが頬が落ちるほど絶品であるというこ
とは二人の共通認識である。だからこそ二人が外食する際、真っ先に
候補に挙がっているのだ。と言つても基本的に家事が特異な未来が
食事を自炊するため、その回数は少ないのだが。

だから未来から要求されている報酬、それはあまり特別感を感じな
いものだった。なので思わず響は承諾した後聞いたのだ。

「い・い・の。フラワーのお好み焼きが食べたい気分なんだし……響と
一緒に食べたらもつと美味しくなるんだもん」

だが、そんな考えは余計なようだ。未来の照れつつも純粋な笑顔を
見て、響は自然とほほ笑みながらそう思った。

「……わかった、明日の夕方なんてどう？」

「うん！……あれ、今日は何か用事あるの？」

「うん、そうなの。最近一緒にお手伝いしている人から頼まれ事され
ちやつて……つて、もうこんな時間だ」

「あ、本当だ。ちよつと急ごつか」

未来の声に同意し、響も急いで制服に着替える。そして未来が用意
しておいた軽めの朝食をとり、二人は寮から出て学院に向かった。

「なに、これ……………」

その数時間後、とある病室の前に立った響。深呼吸をしてその部屋に入った時、彼女が見たのは衝撃の光景だった。

「ま、まさか……………そんな……………！」

その部屋は、荒れ切っていた。足の踏み場もない程部屋の主の所持品が散乱し、コーヒーが入っていたであろうカップは倒れて中身がこぼれている。見舞いに来た人が置いていったのだろう花は枯れ、普通はこのような惨状になるとは思えない。

思わず手に持っていた鞆を落とし、フラフラと部屋に入る。肝心の部屋の主の姿はなく、不気味な静けさを放っていた。

——この光景はまるで、ここで誰かが争ったかのように。

「ッ、翼さん——！」

《See you Next game……》

第27話 『舞台を動かす―そのPreparati
on』

「……うん、後はあそこで買い物すれば最後かな」

持ってきたバッグの中に入っているものを見て、予定通り進んでいくことを未来は確認する。今日の学校が午前中で終わったので、こうしてのんびりと買い物を楽しむことを彼女はできていた。本当は響も誘う予定だったのだが、今朝がたに用事があると言っていたのでしようがないだろう。

「……………響」

立花響、彼女は最近何かに打ち込んでいる。以前は1つのことに集中することはあまりなかったが、リディアン音学院に来てからは何かに付きつきりだ。

本人はボランティア活動の一環で、力仕事があるから鍛えていると言っている。が、それが嘘なのを未来は感じ取っていたし、彼女も誤魔化しきれているとは思っていないだろう。と言ってもそこに関して、未来はあまり気にしてはいない。多少不安にはなるものの、ちゃんと毎日帰ってきてくれているので今のところは大丈夫だと未来は思っていた。

……そう、思っていたのだ。

(響、一体何があったの?)

響に何かあったのはおそらく、数日前の一日中外出していた日だろ

う。夕方頃に帰ってきた時点で、少し違和感があった。ご飯を食べている様子はいつも通りだったのだが、それが表面化したのは寝る時だ。

『……………う』

『ん…………、響？』

『……………う、違う…………』

背後から聞こえる声を聞きとつて、未来は目を覚ました。そして寝返つて響の様子を見ると、彼女はうなされていたのだ。

響は寝顔ではあるものの、苦しそうな表情で「違う」と何度もつぶやいていた。そのただならぬ様子を見た未来は後ろからゆつくりと抱きしめ、何度も大丈夫だよ、と言いつつ聞かせた。すると効果があったのだろうか、響は少しずつ落ち着いていき、数分後には穏やかな寝顔に戻っていた。

最初はたまたま悪夢を見たのだと思つていが、その日から毎日のように響はうなされている。もしあの日気づかずにそのまま寝ていたら、彼女の寝つきはかなり悪くなつていただろう。

そこで昨日の朝、何かなかつたか響に聞いてみたのだ。すると彼女は「何も無いよ」と手を振りながら答え、そそくさと学校に行つていった。その様子から何かあったのは明白なのだが、どうも響はそれを未来に隠したいようだ。なのでこれ以上は聞くだけ無駄だと未来は判断し、せめてその問題が早く解決するよう、できるだけ響の傍にいますようにしていた。

「うーん……………あ」

考え事をしながら目的地に向かう途中、ふと近くの看板に目が留まる。そこにはいくつつかのお店のチラシが張り付けられていて、未来の視線はその内の1つに向けられていた。

「ケーキ……あ、そういえば前に寺島さんが言っていたのも……」

学校の友人が以前言っていた、とても美味しいケーキ屋。彼女の話だけでそのケーキが美味しいとわかるほどで、響に至っては少し涎が垂れそうになるほどだった。看板にあったチラシはそのケーキ屋ではないのだが、ちょうど未来はそのことを思い出した。

「……よしー」

これを響へのお土産に買っていこう。そう考えた未来は、目的地に向かつて再び歩き始めた。

「……………」

部屋に散らばっているものを片付けていく響。その表情はここに向かっている時の笑顔とは打って変わっていた。

無言のまま、散らばっているものを片付けていく。そして枯れていた花は自分が持ってきたものと変え、水を入れた。

「……………」

服もまとめ終わり、次にタオルをたたんでいく。そしてその作業も

終わり、収納棚に入れ終わった響はゆっくりと振り向いて口を開いた。

「——はい、終わりましたよ。翼さん」

「あ、ありがとう……」

視線の先に映る、赤面して縮こまった翼を見ながら。

(いやー、ビックリしたー……)

響が部屋の惨状を見て驚き、茫然とした後。誰かに襲撃されて攫われたんじゃないかと思った響は急いで立ち直り、誰かに連絡しようとして急いで部屋から出ようとした。

「——きゃっ」

「あ、ごめんなさい！……つて、翼さん!？」

部屋のドアが開いた時、響の目の前には翼が立っていたのだ。まだ全快ではないのだろう、右腕には点滴が繋がっていた。ぶつかると前で何とか立ち止まることに成功した響は、急いで口を開く。

「翼さん！ 大丈夫ですか、無事ですか!？」

「……入院患者に無事を探ねるの?」

唐突に尋ねる響に対し、翼は冷ややかな目で問い返す。入院してい

る時点で無事ではないのだが、なぜ今更それを聞くのだろうかと彼女は思っていた。

「だって、これ！」

「……………あ」

それを聞いた響は、部屋の中を指さす。中の様子を見た翼は、驚きからか硬直している。それを見た彼女は、焦りを隠さずにそのまま続けていく。

「私、翼さんが誘拐されちゃったんじゃないかと思って！」

「っ！」

その言葉を聞いたのか、翼は顔を俯かせる。響がどうしたのかとその表情を見ると、どうにも赤面しているようだ。

「二課の皆が、どこかの国が陰謀を巡らせているかもしれないって言ってたし……………て、え？」

赤面、つまりは恥ずかしがっていたのだ。あの、風鳴翼が。

「……………え？ あの、翼さん？」

「……………」

「え？」

(まさか、翼さんが片付けが苦手だなんて…………)

そう考えながら響は後で洗濯機に入れる服をまとめる。その様子を見ている翼はまだ恥ずかしいのだろう、赤面しているままだった。

そしてその表情を見られるのも恥ずかしいのだろう、響が翼の方を見ると素早く正面を向いて表情を隠す。

「私は、その……こういうところに気が回らなくて……」

「意外です。翼さんって何でも完璧にこなすイメージがありましたから……と、おしまいです」

「フ、真実は逆ね。私は戦うことしか知らないのよ」

そう苦笑しつつ呟く翼、そして振り向いて響を見る。ようやく落ち着いたのだろう、先ほどよりもいくらか雰囲気緩和していた。

「すまないわね。いつもは緒川さんがやってくれているのだけれど……」

「はい、私は緒川さんからお見舞いを頼まれたんですよ。だからお片付けを……って、ええ!？」

「？」

「緒川さんに……男の人に、ですか!？」

「はっ!」

サラッと放たれた言葉に、響は驚いて声を上げる。最初はなぜ驚いているのかわからず翼は首をかしげていたが、次に響が言った言葉で意味がわかったのだろう。再び顔を赤面させて、視線をさまよわせながら口を開く。

「た、確かに考えてみれば、色々問題ありそうだけど。……それでも、散らかしっぱなしにしてるのは良くないから、つい……」

「は、はあ……」

どもりながら言い訳をする翼を見て、響はポカンとしつつ返答する。先ほどから今までのイメージとはかけ離れた行動をとり続ける彼女を見て、内心混乱しているのだろう。

そしてその内心に気づいているのか、翼はこの話題から切り替えるように一度深呼吸をして口を開いた。

「今はこんな状態だけど、報告書は読ませてもらっているわ。私が抜けた穴をあなたがよく埋めている、ということもね」

「え？……っ!? そ、そんなこと全然ありません！ いつも二課の皆に助けられっぱなしです!」

翼に褒められたことに驚き、響は慌てながらそう返答する。彼女としては、二課のサポートをあれだけ受けてようやくノイズと戦えていると思っっているのだ。照れ隠しも混じっているものの、この言葉には本心も含まれていた。

「……でも、嬉しいです。翼さんに、そう言ってもらえるなんて」

だが、褒められてうれしいと言うのも事実。照れながらもそう話す響を見て、翼も微笑みを浮かべていた。

しかし翼は、その表情をすぐに真剣な表情に戻す。彼女の様子の変化を感じ取ったのだろう、響も同じように彼女を見つめていた。

「でも、だからこそ聞かせてほしいの。貴方が戦う理由を」

「……戦う、理由」

「ええ。ノイズとの戦いは遊びではない。それは今日まで戦い抜いて来たあなたならわかるはず」

そう響に問いかけるも、彼女は困ったように目を伏せながら頬を掻く。

「よく、わかりません……。私、人助けが趣味みたいなものだから、それで……」

「それで？ それだけで？」

「だって、勉強とかスポーツは誰かと競い合って結果を出すしかないけど、人助けって誰かと競わなくていいじゃないですか」

翼の問いに対し、響は答える。その途中で何かを思い出したのか、翼から視線を外して窓から空を眺めつつ口を開く。

「……そうですね。きっかけは、やっぱりあの事件だと思います」

「——ッ」

その事件が何なのか、翼にはもうわかっているのだろう。響の言葉を聞いて、彼女は目を伏せていた。その様子を横目に見ていたが、ここで中断しては自分の想いは伝えられない。そう彼女は判断して言葉紡ぎ続ける。

「2年前、私を救うために奏さんが命を燃やしたあのライブ。……奏さんだけじゃありません。あの日、たくさんの人がそこで亡くなりました。でも、私は生き残って今日も笑ってご飯を食べたりしています。だからせめて誰かの役に立ちたいんです」

響の人助けと言う趣味、その始まりはここからだった。あの地獄から生還した、数少ないうちの一人。生き残ったのは運がいい上に、天羽奏が命を賭したからだ。その事を当時の響は知らなかったとはいえ、生き残ったからには何かしなければと彼女は思っていた。でもない、響が笑い続けることはできなかつたから。

『響！ 生きてる、生きてるよお……！』

『故に、一人になるのはお門違いだ。共にそれを背負ってくれる仲間

がいれば、その想いはどこまでも貫ける』

「明日もまた笑ったり、ご飯食べたりしたいから。……だから私は、人助けをしたいんです」

——そして、大切な友人の笑顔を守り続けたいから。彼女との暖かい日常を、続けていきたいから。

あの日、あの人のおかげで思い出せた大切なこと。それを思い返しつつ、響は笑顔で翼に言い切った。

「えっと、確かここら辺にあるはずなんだけど……」

買い物も終わり、例のケーキ屋を探して未来は歩き続けた。以前友人に聞いた話によると、そこは所謂隠れた名店と呼ばれる類であり、表参道から結構外れたところにあるらしいのだ。友人は道に迷った時に偶々見つけたらしいので、あまり知名度は高くなさそうだ。

詳細が分からないため、先ほど例の友人である寺島に電話をして、目印となる物をいくつか教えてもらっていた。メモに書いておいたそれを確認しつつ、未来は人気の少ない道を歩き続ける。

「ここを曲がって……あ、黒猫の看板。ということは、この先かな」

最後の目印を見つけ、角を進んでいく。そしてふと開けた場所に出て、目の前に西洋づくりのお店が見えてきた。

「すごい……本当にこんなところにあるんだ」

未来は道中、本当にこの先にケーキ屋があるのだろうかと少し不安になっていた。友人が嘘を言うとは思えないのだが、いくら何でも表参道から離れ過ぎていたからだ。けれど、彼女の視界には確かにお店が映っていた。

「いらっしやいませ」

「わあ……！」

店員の声を聞きつつ、店内に入る。ショーケース内にある多種多様のスイーツを見て、未来は目を輝かせる。その一つ一つがとても美味しそうで、友人が言っていたことは間違いないとその場で確信していた。

「これも、これも美味しそう……！」

ショーケースの前でしゃがみ込み、一つずつ吟味していく。恐らくだがここにあるスイーツのどれを買って行っても、響は大喜びで食べるだろう。

「うう、迷っちゃうな……」

「お客さん、お悩みのようだね」

迷い続ける未来を見て、先ほどの店員が声をかける。ベテランの貫録と言うのだろうか、パティシエと言うよりは職人のような顔をしているその店員は落ち着いた雰囲気醸し出していた。

「あつ、はい。実はそうなんです……どれもとても美味しそうで」
「そう言ってもらえると嬉しいな。ここにある全てのスイーツは、僕の自信作でね。何回も改良を重ねて、納得のいったものだけを出しているんだ」

「そうなんですか……あ、じゃあ店員さんのおすすみを教えてもらえますか?」

「僕のかい? そうだなあ……」

未来は軽く聞いてみたのだが、店員は真剣に悩んでいるようだ。顎に手を当てた状態で「あれか? いや、これも……」とブツブツ呟いている。このままじゃ話が進まなそうだ、そう判断した彼女はとりあえず声をかけるために手を伸ばす。

「あ、あの……?」

「——店主、いるか?」

そう問いかけた直後、カランと来客を告げるベルが入り口の方からなる。そして未来の背後から、男性の声が聞こえてきた。

「いや、やはりあれこそ……ん? おや、もうこんな時間だったか」

「いつものだ」

「はいはい。マイティーシューにタドルタルト、バンバンシヨコラと爆走パフエだね?……と、これはナイスタイミングというやつじゃないか」

「……………なんだ？」

未来の隣で交わされる、男性二人の会話。その様子をポカンと見ていたのだが、店員——男性曰く店主が、彼女の方に掌を向けて口を開いた。

「彼女さ、ここに初めて来た娘なんだよ。どうにもどれを買うか迷っているみたいでさ、相談に乗ってやってくれない？」

「え？」

「は？　なぜ俺がそんなことをしなければ……………」

突如放たれた言葉に、未来と男性の両方が声を上げる。そして案の定男性がその提案を拒否しようとするが、それを遮るように店主が人差し指を立てて口を開いた。

「新作スイーツ、ときめきプリンでどうかな？」

「つ……………いや、何を勝手に——おい！」

その言葉に惹かれたのだろうか、男性の声が一瞬詰まる。それを見た店主はにつこりと笑って、それじゃよろしくねー、と奥に引っ込んでいった。男性はそれを止めようと手を伸ばすが、すでに彼の姿はない。

「……………ハア、いつにも増して勝手な」

「あの……………すみません」

「む、お前がなぜ謝る？」

巻きこんでしまったので未来が謝罪するも、男性は不思議そうに問い返す。不機嫌な顔だったものの、その矛先は店主に向けられているようだ。

「いえ、私が迷ったのが悪いのですし……」

男性としてはただ見ているだけなのだろうが、その眼光は鋭く未来は睨まれているように感じた。故に少し縮こまりつつそう答えると、彼はそれが気に食わないかのような表情で口を開いた。

「ち、無駄に気負うな。大方、奴に頼んでいたことが俺に投げられたとでも言った所だろう」

「はい……店主さん、どのスイーツも自信作みたいで迷ってました」

「だろうな。あんな性格だが、腕だけは確かだ」

「ですね、本当にどれも美味しそうで……」

そう言いながら未来は再びショーケースの中を見る。

その表情から本当にそう思っていることが男性もわかったのだろう。その様子をしばし見ていた男性は少し考える素振りをしていたが、やがてため息を吐いて口を開いた。

「ハア……仕方ない。多少ならば付き合ってやろう」

「え……あの、いいんですか?」

「奴が戻ってくるまでは手が空いている」

「あ、ありがとうございます……あの、私は小日向未来って言います。あなたの名前を教えてくださいませんか?」

「ふん、馴れ合うつもりなど——」「サキくん、おまけにノックアウトチョコ入れとくよー!」……………」

恐らく名乗るつもりはなかったのだろう、男性はそう言おうとしていたが、奥から響いてくる店主の声によつてそれも無駄に終わってしまう。その声を聞いた未来がゆっくりと男性の方に向き直ると、彼は額に手を当てて深くため息を吐いていた。

そして抗うだけ時間がかかると判断したのか、改めて未来の方に体を向けて、男性は口を開いた。

「……サキだ。ではまず聞くが、お前は今日なぜここに来た？」

《See you Next game……》

第28話 『衝撃までのCountdown!』

「フンフーン……っと。よし、できた」

以前より考えていた、新作のスイーツ。その試作を焼き上がった後、どう盛り付けるか考えている時に客が来たので、店主は先ほどまで対応していた。そこにちようど見知った顔が現れたため、ある意味では自分より適任だろうと判断した彼は押し——任せることにしたのだ。

そしてキッチンに引っ込んだ店主は、十数分かけてプリンの上上げを行った。その出来を見て満足そうに微笑んだ店主は、それを含んだ6種類のスイーツを2つの容器に分けて入れ、キッチンから出る準備を始める。

「さて、サキ君は上手くやってくれてるかな?」

そう呟くが、店主は内心大丈夫だとも思っていた。彼がこの店に通い始めたのは結構最近からであり、店主との付き合いは案外浅い。

いつも不機嫌そうな表情に荒々しい口調、そして人間嫌いを隠そうともしないその態度。そのような彼がここに通っているのはおそらく、立地条件の良さとその店主にあるだろう。人間が来やすいという意味では大分よろしくないのだが、人とあまり会わないという点では都合がよかったのだと思う。店主も半分趣味で始めた店なので、最初彼が現れた時はここを見つけたのか、と少し驚いたものだ。

そして何度か顔を合わせるうちに、先ほどの様に正面から会話をすることはできるようになった。きっかけが何だったのか店主にはわからないが、何かが彼の琴線に触れたのだろう。

「……ま、いつか」

そこで思考を一度中断し、キッチンの扉に向かう。正直なところ、彼がどんな人物かは店主にとってどうでもいいのだ。

彼は自分のスイーツを食べてくれるし、極稀にだが求めれば意見をくれる。店主がさらなる高みを目指すためには、彼のような存在は必要だ。店主にとって重要なのは、ただそれだけだった。

「はい、おまたs……………わお」

扉をくぐり、二人がいる店の中に入る。準備ができたことを伝えるために声をかけようとしたが、途中で口を塞ぐ。その視線の先では、件の二人が話し込んでいた。その表情は真剣で、その内容がさうとう重要であることが分かる。

「そうか、ではこれはどうだ」

「ジェットモンブランですね。サキさんの感想を聞くと、栗の美味しさが際立っているようなので気になります。……………うん、私はこれがいな」

「……………私は、ということはまだいるのか」

「はい、私の大切な友達です。最近ずっと考え事しているみたいなので、息抜きも必要かなって」

「ふむ……………」

——まあ、その内容はスイーツなのだが。

尚現在、この会話を聞いている店主は物陰に隠れている。学生の子と、威圧感のある大人の男性。何も知らない人が見れば親子、もしくは兄妹が一緒にケーキを買いに来たように見えるだろう。

しかし、男性の性格をある程度把握している店主にとって、眼前の光景はとても面白いものだった。店主が頼んだ時、彼は結果的に渋々承諾していた。だが間違いなく今の彼は、あの少女の相談を真面目に聞いているのだ。

「その者は普段何をしている？」

「えっと……最近は、ずっと自分を鍛えています。ただあまり考え事するタイプじゃないので、負担が増えちゃってるみたいで……」

「ならば、お前の案は悪くないな。頭だろうが身体だろうが、動かすのなら補給する必要がある。やるべきことが増えたのなら、その分補給する量も増やさなければ意味がない」

「はい……………あれ？」

「なんだ？……………おい、なぜ隠れている」

「あ、ばれちゃった？」

男性の言葉を聞いた後、ナニカが引つかかったのか未来が首をかしげる。それに気づいた彼は声をかけるが、その直後隠れていた店主に気づいてそちらを向きながら口を開く。そしてそれを聞いた店主は何事もなかったかのように物影から出てきて、普段と変わらぬ口ぶりで声をかけた。

「いやー、随分と話し込んでいたからね。これは面白そうだ、と思つて」

「……………相変わらず、隠すつもりはないのだな」

「必要がないからね。さて、お客さん……………小日向未来ちゃんだっけ？」

「今の言葉……………え？ あ、はい！」

「どうだい、君の求めるスイーツは見つかったかな？」

ショーケースの上に肘を寄せ、手であごを支えながら店主は未来に問いかける。そこで考え事から戻ってきたのか、彼女は慌てて返事をした。

「はい、私はこのジェットモンブランにしようと思います。……そして、友達にはこれを買っていいこうかなって」

そう言いながら、ショーケース内にある1つのスイーツに指をさす。その指先を同時に見た男性二人は、片方はとても楽しそうに笑みを浮かべ、もう片方はそれを見ながら口を開いた。

「……マイティーシュー、か」

「はい。今のでちよつと、友達の昔の出来事を思い出しまして」

「おや、シュークリーム関連で何かあったのかい？」

「そうです。昔、友達がとても悩んでいた時に、とある人が話を聞いてくれたみたいなんです。その時渡されたのが、シュークリームらしくて」

「へえ、そいつはロマンチックじゃないか」

「……………」

流石にありのままを話すわけにはいかないの、詳細をぼかして未来は説明する。それを聞いた店主は興味深そうに笑うが、男性は黙ったまま彼女の話を聞いていた。

「……………そうですね。そして、そのおかげで友達も立ち直れました。友達は大切なことを思い出せたと言っていました。ですので、考え込んでいる今だからこそ、それを思い出すのもいいかなって」

「そのカギが、思い出のシュークリーム……………いいね、実に魅力的だ！」

そう言つて、店主は両手を広げる。その表情はとても嬉しそう、相当未来の話の気に入ったようだ。

「サキ君も、異論なさそうだしね」

「……………元より決めるのは、この女だ。そう決めたのなら、口出しする理

由などない」

そう言いながら男性を見ると、彼は腕を組みながらそう答えた。その通りなのだが、それを聞いた未来はどこか嬉しそうな表情を浮かべていた。

「じゃあ、店主さん。マイティーシューと、ジェットモンブランを1つずつください」

「はいよ。ちよつと待っててね」

未来からの注文を聞き、店主はスイーツを容器に入れていく。そしてそれを持って未来の前まで歩いていき、それを渡した。

「はい、ケーキ2つで500円になります」

「え、あの、その……?」

「おや、どうしたんだい?」

しかし渡された容器を見て、未来は明らかに狼狽していた。彼女は見ていたのだ、明らかに店主は自分が頼んだスイーツをそれぞれ2つずつ入れていた。つまりこの容器の中には4つ入っていることになる。

「あ、これ? 今日とはとても良い話を聞いたし、面白いものも見れた。そのお礼ってことさ」

「え、でも……」

「……諦めろ、そう決めたら奴はテコでも動かん」

どうしようか迷っていると、男性が呆れた様子で声をかける。その表情を見た未来は、この行動が初めて行われたものではないことを察した。そして再び視線を店主に戻すと、彼はニコニコと満面の笑みを浮かべていた。

あ、これは絶対断つても受け取らないな。未来がそう判断するまで、さほど時間はかからなかった。

「……ありがとうございますー！」

「うんうん、それでいいのだ。おっと、サキ君の分も……はい」

「ああ。……ではな」

「今後も(鼻屑にー)」

未来が受け取ったのを確認した店主は、ショーケースの上に置いておいた容器2つをとって男性に渡す。それを彼は静かに受け取り、そのままさっさと店を出ていく。それを未来は見送ったが、姿が見えなくなつた直後にハツとあることを思い出す。

「……どうしよう、まだお礼言っていない！」

「おや、なら追うといい。今の彼ならそこまで速くないだろうしね」

「それって……ああ、なるほど。ありがとうございますー！」

「はいよ、ありがとうございますー！」

店主にお礼を言つて、未来も急いで店を出る。と言つても彼女もまた、男性と同じ理由で全力で走ることはできない。なので容器の中身が崩れないギリギリの速さで歩いていく。

そして小さなわき道を抜けていき、少し開けた道に出る。いつの間にか時間帯は夕方に差し掛かっており、辺りに人の姿は見られなかった。

「えっと、サキさんは………あー！」

辺りを見渡していると、視界の端に見覚えのある布が見える。路地裏に入っていくその元へ急いで向かうが、辿り着いてその中を覗くと、そこには誰の姿も見えなかった。

「あれ……確か、ここに入ったと思っただけど……？」

「……何者かと思えば、お前か」

「うひゃあ!」

路地裏に入り、辺りを探る未来。すると突然背後から声が聞こえ、不意を突かれた彼女は思わず声を上げてしまう。そして恐る恐る振り向くと、そこには男性が立ってこちらを見ていた。その眼光は鋭く、普通は睨みつけているように感じるだろう。

「サキさん、さっきここに入ったはずじゃ……？」

「そんなことはどうでもいい。何のようだ、と俺は聞いている」

「あ、そうですね。……さっきは、一緒にケーキを選んでくれてありがとうございます!」

「……………」

再び問いかけられたので、未来は軽く頭を下げつつお礼を言う。それを聞いた男性はしばらくその様子を眺めていたが、やがてため息を吐いて口を開く。

「……あの時も言ったが、手が空いていたから貸したまでだ。あの程度、礼を言われるまでもない」

「でも、私は嬉しかったんです。だから、お礼を言わせてください」

「……………いいだろう、受け取ってやる」

「はい……………あ、もうこんな時間なんだ」

そう微笑みながら言うと、男性は居心地が悪そうな表情で渋々と言ったようで感謝を受け取った。するとどこからか音楽が聞こえてきて、未来はそれが午後6時になるチャイムだということを思い出す。

「では、私はそろそろ帰りますね。……サキさん?」

「——これは」

未来はもう帰ろうと思ひ、男性に声をかける。しかし男性の視線は彼女ではなく、ある一点を集中して見ていた。彼女がそれに気づいて同じ方向を見るも、そこには壁しかない。

「あの……?」

「……俺は行く。今日はさっさと帰れ」
「え?」

そう言った男性は、未来の返事を聞く前にさっさと路地裏から出て行ってしまった。そしてその後を追って彼女も出るも、すでに男性の姿は見えなくなっていた。

『わかっている、自分に課せられたことくらいは』

鎧の力で空をかける、今日こそ自分の目的を果たすために。今度こそ、フィーネの期待に応えるために。

『あたしの方がアイツよりも優秀だっことを見せてやる。……あたし以外に力を持つ奴は、全部この手でぶちのめしてくれ! そいつがあたしの目的だからな!』

そう意志を示した時、彼女は何も言わず笑っていた。言葉だけでは足りない、結果を以って示して見せろ。彼女の眼は、確かにそう言っていた。

「どこだ、立花響……グラフアイト！」

そう叫びつつ、右手に持った杖を振るう。そこから光線が迸り、着地点からは次々にノイズが発生していった。そしてノイズは散らばっていき、その脅威を發揮していく。

本当ならば、この杖も使うつもりはなかった。しかしフィーネはこの杖を受け取ろうとしなかったのだ。これを使わなければ勝てないほど、少女はシンフォギア奏者に対し遅れはとってないという自負がある。

——つまり、グラフアイト相手にはノイズと共に挑まなければ勝てない。そう言外に伝えられているのだろう。

「くそ、くそっ……！」

苛立ちを抑えきれぬまま、着地して周囲を探索する。既に自分の存在を察知しているのだろう、辺りに人間の気配は感じ取れない。一般人を巻き込む気はない少女にとって、逆にそれは都合がよかった。

「こうなったら、ここら一帯全部ぶっ壊して——！！」

「心の熱を抑えきれん、か。……未熟が過ぎるぞ、ネフシユタン！」

「ッ！」

聞き覚えのある声が聞こえ、少女は素早くその方向に向きながら攻撃を受け止める。

「まずはお前からだ、グラフィア、イ……ト？」

そしてその名を呼びながら反撃しようとした。しかしそれを言い切るころには、彼女の表情は困惑で満ちていた。

「……なんだ、その姿は？」

「……………」

「鎧を付けず、生身だと……？ あたしを舐めてんのか!？」

少女の問いに対し、その存在——グラフィアは何も答えない。しかしそれが彼女の逆鱗に触れ、その沸点がピークに達する。

それもそのはず、グラフィアはいつもの龍鎧を纏った姿ではなかったのだ。フィーネからの情報により、人間の姿もあることは少女も知っていた。しかし彼は必ず、戦う時にはあの姿に変わっていたのだ。

——この様子はまるで、自分は戦う敵とすら見られていないよう
で。

「なんか言えつての！」

「……耳障りだな」

「ああ？」

「ふん！」

グラフィアの言葉に対し、少女は更に問い詰める。しかし彼はそ

れに答えず、両腕に力を込めて互いを吹き飛ばす。本来なら完全聖遺物であるネフシユタンが出力負けするはずはないのだが、激高してコントロールがおろそかになっていた少女は思わず距離をとってしまふ。

そして衝撃で後方に跳んだグラフィアイトは、静かに着地する。そして少女をにらみつけたまま、両こぶしを握って構えをとる。

「俺を舐めるなよ、ネフシユタン。貴様は俺の敵だ、潰すときは全力でやる。故に、この姿なのだ」

「……なんだ、と!？」

「この場で次に至ってもいいが……その権利を得たのは二課の者たちだ。貴様ではない」

「ッ、このー!」

その言葉を聞き、少女は全力で鞭を振るう。波のようにうねりながら迫ったそれを、グラフィアイトは身体を傾けることでギリギリ回避した。

そのまま鞭は突き進んでいき、グラフィアイトの背後にある壁に突き刺さる。すぐさまそれを戻そうとしたが、それよりも早くグラフィアイトが少女に肉薄する。

身体をねじりつつ走り、その勢いを全て拳に込める。そして遂にグラフィアイトの射程に少女が入り、溜めた一撃を全力で放つ。それを少女は両腕をクロスさせることで受け止める。生身の攻撃だと言うのに、生まれた衝撃はすさまじいものだ。

「てめえ……!」

「そもそも、貴様は勘違いをしている。……この姿であろうと、今の貴様ならば遅れはとらん!」

「馬鹿な!？」

そう叫びつつ、グラフィアイトは拳を無理やり振り抜く。その衝撃を

抑えきれず、少女はその姿勢のまま後方へ吹き飛ぶ。足が地についていたのですぐに止まることはできたが、それでも二メートル以上は飛ばされているだろう。

その様子を眺めながら、再びグラフィアイトは構えをとる。そして、姿勢を立て直した少女に対して口を開いた。

「ガングニールが来るまでの準備運動だ、かかってこい」

《See you Next game……》

第29話 『Gunnirの少女』

街の中心からは少し離れた街道。数分前に発生したノイズ警報によつて避難は完了しており、人の気配は一切感じ取れない。

その一部で爆発が起こり、それによつて発生した煙からグラフィアトが飛び出る。そしてそれを追うように鎧を纏った少女も飛び出し、鞭を振るう。

「ふんー！」

グラフィアトを狙つて振るわれた2本のそれを、彼は拳を持つて迎撃する。片方は横から叩いて方向を変えてそらし、もう片方は回避しながら掴む。棘がついているそれを躊躇いなくつかんだ彼はそれを引つ張り、少女はそれに抗うように両足を踏みしめる。

「この馬鹿力が……！」

「どうした、完全聖遺物がその程度のわけがなからう？」

「ッ、上等オ!!」

少女はそう叫び、あえて力を緩める。均衡が崩れたことによつてグラフィアトの方に引き寄せられるが、そこで足に力を込めて加速する。

グラフィアトの力も相まって、少女は文字通り一瞬で彼の目の前まで接近する。そして勢いのまま拳を握つて攻撃するが、彼はそれを回避。そのまま反撃とばかりに蹴りを叩きこむ。それを少女は両手を使って受け止めた。

「おい、さっさとあの姿になれよ！」

「……………」

「何か言えつてえのー！」

答えようとしないうらファイトを見て、少女は叫びながら蹴りを放つ。彼はそれを片腕で受け止めるが、全力で放たれたことで衝撃を殺しきれず、後方へ飛ばされる。

それを逃がすまいと少女は鞭を振るうが、体勢を崩しつつもグラファイトは体を捻ることですべて回避していく。そして着地した彼は右手を少女に向け、かかってこいと言わんばかりに挑発した。

「こんのおおおお!!」

——NIRVANA GEDON——

挑発を受けて激高した少女は、巨大なエネルギー球を生成して投げ飛ばす。それをグラファイトは跳躍することで回避するが、飛んだ先を狙ったかのように迫りくる鞭を見て、再び迎撃する。しかし打ち落とすことは成功したが、完全に体勢を崩してしまった。

「おらあー!」

「ッ!!」

それを逃すほど、少女は未熟ではない。鞭を放つと同時に跳躍しており、踵落としをグラファイトに叩きこむ。それを喰らい、勢いよく彼は地面と激突する。その諸劇によって彼の周囲に土煙が発生し、その様子を少し離れたところに着地した少女は睨んでいた。

「今のはモロに入った。いくらあいつでも………ッ!?!」

そう呟いた直後、土煙の中からグラファイトが歩いて出てくる。

衝撃で服の一部は破れ、素肌には土がついているが、傷らしい傷はない。少女から見て、彼は未だに健在の用に見えた。

「この化け物が……!」

「……どうやら貴様にとつて、今の一撃が全力のようだな」

「ッ!」

「いくら外殻が硬くても、中身が軽い貴様は所詮その程度か。……最早、貴様から得られるものはない」

そう呟き、グラフィイトはゆっくりと構える。それを見た少女は素早く鞭を振るつた。

高速で迫りくる、茨のような2本の鞭。それをグラフィイトは動かさないまま、じっと見つめ続け――

「その人に出すなあああああ!!」

「がっ!」

――上空から高速で飛んできた響が少女を蹴り飛ばしたことで、鞭がすぐ脇を通り過ぎていくのを見送つた。

「……来たか、ガングニール」

グラフィイトはそう呟き、響をじつと見つめる。響もまた、少女の立っていた場所から彼を見つめていた。

「ッ!」

そして響は一気にグラフィイトに走り出す。それを見た彼は懐にあるモノに手を伸ばすが、それよりも早く彼の目の前まで来た響は口を開いた。

「大丈夫ですか!？」

「……………は?？」

その言葉を聞いたグラフィイトと立ち直った少女、二人の反応は偶然にも一致した。そして響は彼の割と無事な姿を見た後、真剣な表情で振り返る。彼女の目標は一人、正面の少女のみに注がれているように見えた。

「お久しぶりです。説明は後でしますし聞きたいことがたくさんあるのですが、今はとにかく逃げてください!」

「おい、何を言っ——!」

「お前、後ろにいる奴が誰かわかって——!」

「でやああああああああああああああああああ!!」

「おわあああああツ!」

グラフィイトと少女の言葉を聞き終わる前に、響は少女に突撃する。予想外の出来事に茫然としていた彼女は回避が間に合わず受け止めるが、響はそのまま押し込む。急遽受け止めたため踏み込むのが間に合わず、少女と響はその場から後方にある森林に勢いよく飛んでいった。

「……………どういう、ことだ」

敵がいなくなり、静まり返る道路。懐に手を伸ばした姿勢で硬直していたグラフィイトは、ようやく正気に戻って眩く。

確かにこの姿を二課の面々には見せたことがない。しかし人間態だろうと怪人態であろうと、グラフィアイトの声は変わらない。そして少なくとも2年前、響は人間態の彼の声を聞いているのだ。

だからこそ怪人態の自分の声を聞くことで、少なくとも響は気づくだろうと彼は思っていたのだ。

「なぜガングニールは気づかなかった……まさか？」

……が、どうやら響はその発想には至っていないようである。その結論にたどり着いたグラフィアイトは深くため息を吐き、懐から手を放す。そして森林の方を見る限り、どうやら戦闘が始まっているようだ。

「くそ、タイミングを逃した。だがまだ——」

手遅れではない、そう判断したグラフィアイトは森林に向かって移動しようとするが、ふとその動きが止まる。そしてしばし考えた後、正面を向いたまま口を開いた。

「さっさと帰れと言ったはずだが？」

「ッ！」

その言葉を聞き、背後の物陰から出てくる少女——小日向未来。彼女の瞳はしっかりとグラフィアイトを見ているものの、驚愕と動揺で震えていた。だがその理由はおそらく、彼が戦っていたからではないだろう。

その様子を気配で感じ取りつつ、グラフィアイトはさらに言葉を続けるために口を開く。

「その様子では、ガングニールが戦っていることを知らなかったか」

「……やっぱり、あなたが響が言っていた人だったんですね」

「覚えているのか、忘れていいのか……まあいい。死にたくなければ去れ、ここは戦場だ」

先ほど起きた出来事を思い出し、呆れたようにグラフィアイトは話す。その直後、遠くで一際大きい音が聞こえてくる。それが戦況の變化であることを感じ取った彼はそう言葉を締め、再び移動しようとする。

「ッ、待ってください！　なんで……どうして、響は戦ってるんですか！？」

それを見た未来は後ろから大声で問いかける。その内容は、先ほどまで彼女が見ていた光景に関連したものだ。それを聞いたグラフィアイトは再び立ち止まり、今度は振り返って彼女の方を見た。

「どうして、か。あいつが戦うことが不服のようだな？」

「当たり前です！　あんな危険なこと、響がする理由なんて——！」
「ある!!」

未来の言葉を遮るように、グラフィアイトは大声で断じる。その声に彼女がひるむのを確認した彼は、最後まで言い切るために口を開く。

「あいつは、 GANG ニールは力を手に入れた。そしてあの様子を見ればわかるだろう、戦う事を選択したのだ!……理由など、それで十分」
「サキさん……」
「二度は言わんぞ」

そう言い残し、今度こそグラフィアイトは森林に向かって移動する。その様子を背後から見つめていた未来は手を正面で組み、先程までの光景——響が戦う姿を思い出して、頬から伝う涙を拭おうともせず、
呟いた。

「響、どうして……?」

「この、ちよこまかと!」
「ッ!」

森林の木々の間を、響は走り抜ける。その後ろから狙いすましたかのように鞭が迫りくるが、彼女はそれをギリギリで回避する。また行先にノイズが次々に出現するものの、最低限の迎撃だけで留めていた。

先程から何回も繰り返されているこの攻防。少女がひたすらに攻め、響がそれを回避か防御によって防いでいく。そして今回も凌がれたのを見て、少女は忌々し気に叫ぶ。

「さつきから逃げてばかり……やる気あんのかテメエ!」
「だからさつきから言ってるじゃん! 話し合おうって!」
「この期に及んで何を今更ッ!」

響に真剣な表情で言い返され、少女は胸の内の衝動のまま鞭を振るう。再び迫りくるそれを見た響は両手を広げ、タイミングを計る。

「——ここだ！」

「ッ、なに!？」

そしてその一瞬を見極め、響は鞭を勢い良く握りしめた。それを見た少女が急いで引きはがそうとするも、その状況が動くことはなかった。驚いた少女が改めて彼女の様子を見て驚愕の表情を浮かべた。

「これで、お互い攻撃できないよね……!」

「お前は攻撃どころか、動けねえみたいだな……!」

何と響は鞭を受け止める寸前、両足を地面に叩きつけて固定していたのだ。それに響自身の力も相まって、お互いに拮抗状態となっていた。

しかし、この状況に至るまでに生み出されたノイズは自由に行動できる。杖を持つ少女の指示に従い、追いついたノイズは響を取り囲んだ。

「さあ、どうする? このままだとお前、こいつらになぶられるだけだぜ?」

「どうするもなにも、私がやることは変わらない! 私たちはノイズと違って言葉が通じるんだから、ちゃんと話し合いたいんだ!」

「ッ、まだ言うか……!」

何度も話し合おうと叫ぶ響を見て、その度に少女の胸に苛立ちが募る。そしてそんなことは露知らず、響は自分の気持ちを伝えるためにもう一度口を開く。

「だって、言葉が通じていれば人間は——!」

——そしてそれはついに、彼女の限界量を超えた。

「うるさいッ!!」

「ッ!？」

少女は叫び、鞭を全力で振り上げる。今まで引つ張られていたため耐えていたが、突然のベクトル変更に驚いていた響の対処は間に合わない。

文字通り引っこ抜かれた響は、このままではまずいと判断して鞭を手放す。しかし少女は追撃せず、空中にいる彼女を睨みながら叫んだ。

「分かり合えるものかよ人間が！ そんな風に出てくるものか！」

「……………」

一度あふれ出した感情を抑えきることはできず、少女は衝動のまま叫び続ける。それはもはや咆哮に近く、それを着地した響はただ見ることしかできなかつた。

「気に入らねえ……気に入らねえ気に入らねえ気に入らねえ、気に入らねえッ！」

なぜかはわからないし、根拠などどこにもない。

「わかつちやいねえことをペラペラと口にするお前がああー!!」

——しかし響には、叫ぶ少女の姿がどこか泣いているように見えていた。

「お前を引きずってこいと言われたが、もうそんなことはどうでもいい……。お前を、この手で叩き潰す！」

両手を一度広げた後、強く握りしめる。そして杖を振るうと、周囲にいたノイズがすべて消えていく。炭化しているわけではないので、おそらく回収されたのだろう。

感情をあらわにしたことで、少女は多少頭が冷えていた。だがそれを上回るほどに、彼女の心は滾っていた。

「今度こそ、お前の全てを踏みにじってやる!!」
「来る……!」

その気迫を見て、響は今までのような攻防はできないと直感で察知する。そしてそれを証明するかのように、少女は上空へ跳んで力を込める。

「吹っ飛べ!!」——NIRVANA GEDON——
「くっ!!」

放たれたエネルギー球を、響は両腕をクロスさせることで受け止める。何とか準備できる時間はあったので、ギリギリだが拮抗している。

このまま行けば防ぎきれぬ、そう響は考えていたが——

「持ってけダブルだ!!」

——その考えが通用するのは、先程までだ。間髪入れずに放たれたもう1つのエネルギー球、それは先に放たれたそれとぶつかり、威力を増加させて爆発した。

戦場からは少し離れた、海岸近くの公園。その展望台で二人が戦う様子を眺めていた女性——フィーネはため息をつく。

「フウ……やはり駄目ね。あれでは、立花響を倒すことはできない」

その言葉のとおり、フィーネの視線の先には響が生存していた。そして再び少女との戦いが始まり、今度は響にも攻撃の意思があるようだ。

『おりやああああああああ!!』

どうやら響は自分の想いを、言葉と拳でぶつける方向に切り替えたのだろう。一瞬のスキについて少女の鞭をつかみ、引き寄せる。そこに合わせて拳を全力で叩きこんだ。それを腹部にもろに受けた少女は吹き飛び、広場の壁に激突した。

そこまで観察したフィーネは、ある一点に注目する。それは少女の腹部、響の拳がぶつかった箇所だ。

「ネフシユタンの鎧に穴を……あの一撃は最早、風鳴翼の絶唱に匹敵している」

フィーネは以前より、立花響に注目していた。なぜなら立花響と言う存在は、今までのシンフォギア奏者とは一線を画しているからだ。

少女が纏っているネフシユタンの鎧。完全聖遺物であるそれを起動させるには相応のフォニックゲインが必要であり、ツヴァイウイングのライブによって引き上げられたゲインで一応起動できた代物だ。しかし響は、同じく完全聖遺物であるデュランダルを1人だけで起動させた。さらには不完全ながらも、その力を行使することに成功させていたのだ。

原因は間違いなく、ガングニールの欠片が彼女の胸に埋まっていることだろう。シンフォギアから解放されるエネルギーの負荷は容赦なく奏者を蝕み、傷つけていく。その最たるものが絶唱だが、それに匹敵する一撃を放った響には何の問題も見られない。

(人と聖遺物とに隔たりがある限り、負荷の軽減など見込めるものではない。……もし、その理から外れるとするならば)

人と聖遺物の隔たりがなくなる事だ。そしてその条件を、響は見事に満たしていた。

『Killter Ichaiival tron—』

「……イチイバルを使った、か」

風に乗って聞こえてくる、少女の歌声。完全聖遺物を扱うならば必要のない聖詠を聞いたフィーネは、顔をわずかにしかめさせながら思考を中断する。どうやらその時間を稼ぐために、ネフシユタンの鎧もパージさせていたようだ。

『……歌わせたな。この雪音クリスに、歌を歌わせたなツ!!』

「あの子は本当、私を何度失望させれば気が済むのかしら？」

離れたここからでも容易に聞き取れるほどの大声を聞いて、フィーネは呆れながら呟く。せっかくネフシユタンの鎧のバイザーで正体を隠していたというのに、それを少女——クリスは自ら外した拳句、堂々と名乗ったのだ。彼女はもうにもこう言った手合いに弱く、挑発に乗りやすい性格も相まってこの結果を生み出したのだろう。

「ネフシユタンの鎧を回収すべきだが……ソロモンの杖も持たねば意味はない」

流石にノイズを操る杖——ソロモンの杖を手放すことはしていないようだが、どう考えても今のクリスには邪魔だ。それに先ほどから感じるフォニックゲイン、彼女がこの場に来ればクリスはさらに不利になるだろう。

しようがない、そう考えたフィーネは移動を開始するために展望台を下りる。そして戦場に向かおうとするが、その足は止まることになった。

「気づかないと思ったか？ 貴様の気配など、手に取るようにわかる」

「……グラフィイト」

目の前でブロック状の粒子が集まり、グラフィイトが姿を現す。だがその言葉を聞いても、フィーネの様子は変わらない。

「今は貴方に構っている暇はないの。そこをどいてくださる？」

「どくと思うか？」

「いいえ、思わないわね」

グラフィイトの質問に、フィーネは即答する。それを聞いた彼は好戦的な笑みを浮かべながら、懐に手を伸ばした。

「貴様を打ち倒し、ギャラルホルンを手に入れる。様子見は無しだ」
「……それは」

これは手を抜く場合ではなさそうだ。グラフィイトが取り出した物体を見てそう判断したフィーネは、そこで初めて余裕そうな表情を崩して構えをとった。

それを見てやる気になったと判断したグラフィイトは、手に持つ物体を起動させる。本来なら二課相手に初めて使う予定だったのだが、最優先目標であるフィーネがいるのなら、話は別だ。

『ドラゴナイトハンター、Z!』

「こいつを使うのは数年ぶりだな……培養!!」

その言葉と共に物体——ガシャットの向きを変え、自身の鎖骨付近に差し込む。すると接触したところから細かいブロック状の粒子が雷撃と共に発生し、グラフィイトを覆い尽くしていく。

そしてその粒子が消え去った時、グラフィイトの姿は怪人態へと変わる。しかし緑色の鎧は黒色となり、右腕部分は赤色から黄色へと変化していた。今まで見たことのないその姿、そして以前より増大した威圧感を感じ取ったフィーネは思わずつぶやく。

「その姿は……!?!」

「知る必要などない。……なぜなら、貴様はここで終わるからだ!」
「ッ!」

その言葉と共に彼——ダークグラフィイトバグスターは、双刃を構えてフィーネに突撃する。真正面から攻撃することが予想できた彼女は、障壁を展開して迎え撃つ。

そしてフィーネの目の前まで来たグラフィイトは双刃を振り上げ、

全力で振り下ろした。

「はあああああッ!!」

「なに!？」

以前のグラフィイトなら、少なくとも拮抗していたこの障壁。しかしその防壁が、まるでガラス細工の様にたやすく砕け散る。

それを見てフィーネは驚愕するが、素早く思考を切り替えて双刃を回避する。そして追撃と言わんばかりに放たれる蹴りも、後方に跳ぶことで回避した。

「このパワー、以前とは比べ物にならないわね……!」

思わずそう呟きつつ、正面から歩いてくるグラフィイトをフィーネは睨んでいた。

「覚悟は良いか? ここからはセカンドステージ、容赦は無しだ」

《See you Next game……》

第30話 『無双の一振り』

「響ちゃんとネフシユタンの少女、未だ交戦中！」

「周囲に散らばったノイズの状況は!？」

「市民の避難は完了、ノイズは炭化している個体が多数！」

二課の司令室。ここでは現在進行している戦闘の状況が、逐一弦十郎に伝えられていた。

「時間切れだな……翼、聞こえるか？」

『はい、司令。周囲のノイズは殲滅しました、これから立花の援護に向かいます』

「ああ、それで問題ないだろう。……無理はするなよ」
『はい』

そして弦十郎が通信しているのは、現在戦場に向かっている翼であった。彼女は未だ全快ではないのだが、街へ解き放たれたノイズの対処と響の援護のために出撃していたのだ。

「響君の様子は？」

「映像はノイズがひどくて出せません。原因はおそらく……」

友里の言葉通り、眼前のモニターには何も映っていないかった。響が戦っている場所の映像は映らず、先程までは翼の様子が映っていたが、今ではノイズが走っていて見えない。それはおそらく、翼が響のいる戦場に辿り着いたからだろう。

そしてノイズの原因を知っている弦十郎は、確認もかねて口を開いた。

「間違いなくグラフィイトだろう。響君かあの少女、どちらかと交戦

しているのか？」

「いえ、音声から判断するにグラフアイトはあの2人とは戦っていません。恐らく別の場所に……ッ、風鳴司令！」

「どうした！」

「新たにノイズが多数出現！ 場所を特定……郊外付近、住民の避難が行われていません！」

「なんだとッ!？」

まずい、弦十郎はその報告を聞いて焦る。報告された郊外は、最初ノイズが現れていた箇所とは離れていた。故にノイズ出現の警報は流していたものの、避難は行われていなかったのだ。

響と翼は現在、クリスと交戦している。戦況はどうやら互角のようで、どちらかをノイズ殲滅に向かわせれば劣勢になる可能性は非常に高いだろう。だが、だからと言って街の住民を見捨てるわけにはいかない。

「翼に連絡！ あそこから離脱させて、ノイズへの対処に向かわせろ！」

「ネフシユタンの少女とグラフアイトの対処はどうしますか!？」

「俺が出る、状況が動いたらすぐ伝えろよ！」

そう言っつて弦十郎は司令室を飛びだそうと走り出す。確かにグラフアイトを確実に相手できるのは、現状彼しかない。司令室の面子もそれは承知していたので、それを止めようとはしなかったのだが――

「ッ、ノイズ出現箇所に高出力エネルギーを感知！」

「波形を照合……ッ!?! 風鳴司令！」

――解析を終えた藤堯が、焦った表情で弦十郎を呼び止める。その声はなんとか届き、扉近くにいた弦十郎は振り向いて答える。

「なにがあつた!?!」

「至急、報告したいことが。ノイズの出現地点に高出力エネルギーを感知しました。解析の結果——」

そう報告しつつ、藤堯は解析の結果を正面モニターに映す。その内容を見た二課の面子は彼と同様の表情を浮かべている。それは解析結果の内容そのものよりも、その結果と現状を照らし合わせることで生まれる矛盾に対しての表情なのだろう。

そして藤堯の報告を受けた弦十郎もまた、驚愕と動揺の表情を浮かべていた。

「——アウフバツヘン波形、ガングニールと断定!」

「なんだとツ!?!」

「……ハツ。死に体でおねんねと聞いていたが、足手まといを庇いに現れたか?」

「もう二度と、何も失うものかと決めているのでな」

弦十郎が藤堯の報告を受けている頃、響とクリスの戦場には翼が到着していた。クリスは自分の真の姿——イチイバルのシンフォギア

を纏って響と交戦しており、響はそれに苦戦していた。

それも無理のないことだ。ネフシユタンの鎧という耐久を生かした近く中距離から、イチイバルによって生成できる様々な銃器を用いた中々遠距離へ。実戦経験の浅い響がこれまで戦えていたのも幸運だったのだが、ここにきて地力の差が生まれ始めていた。

そして両手に持つガトリング砲から生みだされた弾幕の嵐によって、響の体勢が崩れたところにミサイルがぶち込まれる。当たれば間違いない致命傷となるコースだったが、それをギリギリ間に合った翼が、剣を巨大化させることで防いだのだ。

「翼、さん……」

地面に突き刺さる巨大な剣、その柄の部分に立っている翼を見ながら、響はその名を呟く。だがその表情は援軍が来たことへの安心感と言うよりも、翼の安否を心配している表情だった。

その表情を、振り向いた翼も確認する。無理もない、同日の昼に見せた翼の姿は入院服に点滴と、明らかに戦える状態ではなかったからだ。今は大丈夫そうに見えても、いつ傷が悪化するかはわからないだろう。

「やはり気づくか、立花？」

「そりゃ、まあ……」

「ああ、私も十全ではない……だから立花、力を貸してくれるか？」

「ツ！……はい、もちろんです!!」

翼の口から初めて放たれた言葉、それを聞いた響は疲労なんて吹き飛ばし思いだった。そしてそれに応えるべく、立ち上がって構えをとる。それを見た翼は剣を元の大きさに戻し、彼女の隣に立って剣を構えた。

「2対1か、ちょうどいい。まとめて相手してやるよ……!」

並んで立つ二人を見て、クリスはその銃口を向ける。腰に携えているソロモンの杖を使えば数の差など簡単に埋められるが、以前の戦いで彼女は独りで戦えると慢心していた。

『クリス、今すぐソロモンの杖を上空へ投げろ！』

「ッ、フィーネ!?」

『はやく!!』

「なにがあつて……ちいッ!」

「逃がすか!」

しかしその思考は、突如聞こえてきたフィーネの声によつてかき消される。普段の余裕そうな口調とは違い、明らかに焦っている声色。それを聞いたクリスはしばし混乱するが、次いで放たれた怒声にも近い声を聞いて即座に行動に移すことにする。

バックステップで距離を稼ごうとするも、翼がそれに反応して接近する。そして射程に入ると同時に剣を振るうが、クリスはそれをかろうじて回避。そして追撃を上空へ跳ぶことで避け、狙いを二人に定めた。

「この、吹っ飛べ!!」ーMEGA DEATH PARTYー

放たれる大量のミサイル。それを翼は切り裂くことで迎撃し、響は走り回って回避する。しかし狙いの半分は地表そのものであり、着弾したことで土煙が周囲を覆った。

「これなら……フィーネ、投げるぞ!」

『ええ……!』

返事が聞こえ、即座にソロモンの杖を上空に投げる。土煙を切つて

現れたそれを見て翼と響は困惑するが、突如現れた女性がそれを手に取ったのを見て表情を引き締めた。

「何者……?」

「フィーネ、何があった!?!」

「ボサツとするな、来るぞ!」

クリスの問いにそう返し、ノイズを複数体生み出すフィーネ。生み出された鳥型のフライトノイズは素早く上空に展開し、クリスとフィーネを覆うように回りだす。それを見てクリスは一瞬疑問に感じるが、突如視界の外から迫りくる圧迫感を感じ取った。それは響は翼も同様であるが、フィーネはその正体を知っているが故に表情をしかめさせる。

「なにが……ッ!?!」

「もう追いついたか……!」

「ドドド、黒龍剣!!」

その声とともに、上空から無数の剣戟が現れる。それは次々にノイズで形成されたシールドに着弾していき、わずか数発でシールドを崩してしまふ。そして残っている剣戟が次々にクリスとフィーネの近くに着弾していった。

「うわあああああ!」

「この力、イレギュラーにも程がある……ッ!」

「——逃がさんと言ったはずだ!!」

あまりの衝撃にクリスは思わず叫ぶ。フィーネは直撃こそ回避したが、衝撃波でまともに動けなくなっていた。そしてその隙を逃がすまいと、上空からグラフィアイトが高速で接近する。隕石にも匹敵する勢いの彼は、自らを弾丸としてフィーネに狙いを絞った。二人の間には何体もノイズが立ちふさがるが、彼はそのすべてを貫いていく。

「ああッ！」

「ッ、クリスちゃん！」

だがしかし、時間稼ぎはできたようだ。回避不可能となる距離の直前で硬直が解け、フィーネはギリギリ回避が間に合う。そして狙いが絞られていたことで、クリスも直撃を免れた。しかしすぐそばに着弾したのも相まって、衝撃波で吹き飛ばされてしまう。そしてそれを見た響はすぐさま走り出し、空中に放り出されている彼女の身体を受け止める。だがその勢いは強く、二人して地面を転がっていった。

「お前、何やって……?!」

「えへへ……ごめん。クリスちゃんがぶつかりそうになっているのを見たら、つい……」

「ッ、このお節介焼きが……!」

「立花!」

ダメージが分散したことで、二人とも重傷は免れる。しかしそれでも、すぐさま体勢を立て直すことは難しそうだった。その様子を見抜いた翼はすぐ二人の元に行き、庇うように立って襲撃者——グラフィアイトの様子をうかがう。

「チッ、僅かに軌道を逸らされた」

「黒い、グラフィアイトだと……?」

「アメノハバキリか。随分と遅かったな……フン」

外見は間違はなくグラフィイトだ。しかし鎧の色合いの変化と、以前よりも圧倒的に感じる存在感。それを見て感じた翼は、思わずそう呟く。そしてその声が聞こえたのだろう、グラフィイトは彼女の方を振り返ってそう話す。しかしその途中で何かに気づき、詰まらなさそうに鼻を鳴らした。

「いや、まだ回復は完了していないか」
「なッ!？」

一瞬で見抜かれてしまう、翼の状態。だがグラフィイトは翼へ武器を構えることはせず、周囲を見渡している。まるで自分を敵と思っていないようなその行動を見て、翼は睨みつけながら口を開く。

「なんのつもりだ、グラフィイト?」

「手負いの身で、かつ後ろの二人を守りながら俺と戦えると思ってるのか?」

「……………」

「お前と決着はつける。だが、それは今ではない———そこか!!」

グラフィイトからそう指摘されるも、無言で剣を構える翼。それを一瞥した彼はそう言葉を残しつつ、双刃を投げ飛ばす。勢いよくはなれたそれは木々の隙間を塗っていき、フィーネの顔のすぐ横にある幹に突き刺さった。

「危ないわね、もう少しで当たるところだったわよ?」

「当てるつもりだったからな。……なるほど、ここに来たのはそういう理由か」

そう言いつつ、グラフィイトの視線はフィーネの足元に注がれる。そこには無数の破片が散らばっていた。

「あれは、私がパージしたネフシユタンの鎧……」

「ええ、そうよクリス。私がここに来たのは、ネフシユタンの鎧とソロモンの杖を回収するため」

そう言いつつ、フィーネは右手をかざす。すると手は光だし、同じようにネフシユタンの鎧も光り出す。鎧の破片は彼女の手元に集まり、まるで帯のように吸い込まれていった。

「もうこの場に用はない。さようならグラフィイト、さようなら二課の諸君」

回収を済ませたフィーネはソロモンの杖を使い、数多のノイズを呼び出す。既に目標も定められているのだろう、現れたと同時にノイズは身をねじらせ――

「そして、さようならクリス」

「……………え？」

――4つの標的に向かって跳んでいった。

「はあッー！」

「せいー！」

グラフィイトはノイズを拳を持って迎撃し、翼は切り伏せていく。しかしその間にもノイズは次々に呼び出されており、フィーネはその様子を微笑みながら見ていた。

「この量、間違いなくあの少女も狙っている……！」

このノイズはおそらくは時間稼ぎだ、しかし翼と響を狙うにしては量が多すぎる。それはつまり、翼が守っているもう1人も標的に含まれているということだ。

「ッ、しまった！」

普段の翼だったらこの程度の量、問題なく迎撃できていただろう。しかし病み上がりにも近い彼女はまだリハビリすら途中であり、長い間動かしていない身体はわずかながら鈍っていた。そのせいで生まれた空白を、1体のノイズが通り過ぎていく。

「立花、避ける！」

「ぐ……！」

大分回復してきたものの、高速で迫るノイズを回避するにはまだ足りない。ノイズは一直線に響の顔へと迫り――

「おらあ!!」

――銃口から放たれた弾丸を正面から受け、炭化していった。

「……なんだよ。どういうことだよ、フィーネ！」

銃口を下ろしつつ、クリスは叫ぶ。それを聞いたフィーネはため息を吐きながら彼女を見る。その眼光はサングラス越しでもわかるほど、冷たいものだった。

「わからない？ もうあなたに用はないということよ」

「ッ！」

「逃がすか……！」

その眼光を真正面から受けたクリスは、思わず身を震わせる。覚えている様子を見たフィーネは妖しく笑い、身をひるがえして歩き始める。それを見たグラフィイトが追撃しようとするものの、翼に殺到しているノイズの倍以上を相手取っている為になかなか動けない。

「雑魚共が、調子に乗るな！」

そう叫びつつ、グラフィイトは無理やり走りだす。無防備となった彼の背中にノイズが次々に攻撃するも、その鎧を貫くことはできなさそう。

そして先程までフィーネがいた場所までたどり着いたグラフィイトは、突き刺さっている双刃を引き抜く。そして力を込めつつ振り返り、それを開放した。

「すべて吹き飛ばす……！ドドドド、黒龍剣!!」

先ほど放たれた、無数の剣戟。それが今度は一撃に込められ、巨大な剣戟となって放たれる。その予兆を感じ取った翼は、響とクリスを抱えてその場から退避した。そしてノイズ集団の中心に着弾したそれは、大きな爆発と衝撃波を発生させる。そして周囲を土煙が再び覆い尽くし、その中で先ほどの一撃を目視した翼は思わずつぶやいた。

「何と言う一撃だ……！」

「くそ、なんで……この、離せ！」

「なっ!？」

「待てよ、フィーネ!!」

翼の腕に抱えられていたクリスが、大きく暴れる。片腕で持っていたためそんなことをされれば当然抑えきれず、彼女は思わず手を放してしまう。そして自由になったクリスは素早く立ち上がり、森の中へと走り出した。その数秒の後に、衝撃波によって生み出された土煙が晴れていく。

すべてのノイズは塵と消え、地面は大きく陥没していた。それを確認したグラフィイトは索敵するものの、フィーネの気配はかなり遠くに、そして薄くなっていた。

「俺の追撃を許さぬためか……小癪なことをしてくれる。だが——」

そして同じくこの場から遠ざかっている気配、それを感じ取っているグラフィイトはニヤリと笑う。

「あの女、やはりネフシユタンだったか。……フィーネよ、あいつを殺し損ねたのは痛いぞ？」

この動きからして、クリスはフィーネの元に向かうはずだ。ならば追跡するのはたやすいこと。そう判断したグラフィイトは移動しようとするも、後方から迫りくる剣を察知して素早く迎撃した。

「……先ほど忠告したはずだ。だが、死にたいというのなら話は別だぞ、アメノハバキリ！」

「立花は既に立ち直っている。そして確かに私は十全ではないさ……だが、それでも私は一刻も早く、おまえを倒したいのだ!!」

そう叫びつつ、翼は更に力を込めていく。鏝ぜり合っている今の状況。弾き飛ばそうとしているのにできない事に、グラフィイトはわずかながら困惑する。

「馬鹿な、この姿になった俺と互角だと?……いや、そういうことか」
「グラフィイト! お前を討ち取って、あの日失ったすべてを取り戻す!!」

「持ち主の想いに応じて力を増す。素晴らしい力だな、シンフォギア!」

翼の強さの秘密を見抜いたグラフィイトはそう叫び、力任せに振り払う。彼女はその勢いを流しつつ後方へ跳び、響の隣に降り立った。十分な時間を稼げたことで、響も戦える状態まで回復していたのだ。

「その様子ならば、俺の正体の説明は不要か」

「ああ」

「あの……本当なんですか? あなたがその、ゲームの世界から来たっていうのは……」

グラフィイトの確認に対し、二人は肯定する。そして響が恐る恐る問いかけ、それを聞いた彼は構えていた双刃を下ろして口を開いた。

「信じるかどうかは勝手にするがいい。だが、お前たちにとって重要なことはそこではないはずだ。違うか?」

「……………」

「はい。あなたを倒せば、奏さんを取り戻せると聞きました」

確信の意が込められた問いかけに対し、翼は静かに構えることで、響はしっかりと返答することで対応する。ただし二人の中に巡っている同じ感情を、グラフィイトは既に見抜いていた。

「……フ、未だ確信はないという表情だな」

「ツー!」

自らの心情を見抜かれ、二人の眼が驚愕で見開かれる。だがその反

応を見ても、やはりと思うだけでグラフィイトの態度はあまり変わらなかった。

「当たり前だ。いくら嘘を嫌うお前の言葉とて、そう簡単に信じることはできない」

「帰ってきてくれるのなら、私だってそうして欲しい！ でも、死んだ人が生き返るなんて……」

この二人の反応は当たり前物だ。一度死んだ人間は、決してよみがえることはない。嘘を言う性格ではないグラフィイトの言葉を、二課の面子は真実だと思いたい。しかし確証がない以上、流石に信用し切ることはできなかった。

「まあいい、お前たちがそう考えるのは想定していた。……だからこそ、お前たち二人が揃うのを待っていたのだ！」

「いざ、参る！」

「私だって……って、通信？」

その言葉と共に、グラフィイトは双刃を再び構える。それを見た翼は素早く踏み込み、彼に向かって肉薄した。同じく響も行動しようとしたが、不意に通信機が光っていることに気づいて、それを起動させた。

『——響君、聞こえるか!?!』

「師匠!」

『よし、繋がった。響君、教えてくれ。グラフィイトは今どこにいる?』

「え?……今、翼さんと戦っています。私も一緒に戦うつもりです!」

『やはりか……!』

「……どうしたんですか?」

通信は弦十郎からだった。そして二人が会話をしているうちにも、グラフィイトと翼の戦いは激化していく。ただし激しくなっているのは翼の攻撃だけであり、彼はその連撃をただひたすらに防いでいく。

そして数十回撃ちあつたのち、再び鏢迫り合いになつた状態で翼が口を開いた。

「何を待っている？」

「……流石にわかるか」

「狙いかまでは知らん……だが、その前に決着を付けるだけだ！」

そう叫びつつ翼は体を捻らせることで無理やり剣を振り抜く。そしてその状態でバク転し、無防備に見えた背後を切ろうとしたグラフィイトの頭上を通り過ぎる。そして振り向きざまに放たれた一閃は、素早くしゃがんだ彼の僅か上方を通り過ぎる。そこに追加の斬撃を繰り出す、それは双刃によつて受け流された。

「翼さん！」

『響君、聞いてくれ……数分前、そこから離れた箇所でガングニールの反応があつた！』

「え!？」

その攻防を見た響は、翼の援護に向かうため走りだそうとする。しかし弦十郎の報告を聞き、思わず足を止めて通信機の方を見てしまった。

「——来た」

「ッ、逃がさん!」——蒼ノ一閃——

そう呟き、不意に翼から距離をとるグラフィイト。それを逃がすまいと、翼は剣を巨大化させて剣戟を放つ。しかしその剣戟を見ても、

彼は迎撃体勢をとろうとはしていなかった。

翼の放った剣戟は、一直線にグラフィイトへと向かって行き――

『姿を確認しようとしたが、カメラはノイズで映らなかった。だから俺たちはそいつをグラフィイトだと思っていたんだが……』

「でも、あの人はここにいます。師匠、それって……!」

『本当は新しく出現したノイズの対処に翼を向かわせようとしたんだがな、そいつがノイズを全滅させた。そしてそいつは今、高速でそこに接近しているぞ!』

「……ようやくか」

「ッ!」

――突如現れた存在、その者が持つ槍によって切り裂かれた。

その姿を見た翼は、身体が硬直してしまう。フードを被っている為、乱入者の顔は見えない。しかし、彼女の勘が何か警報を発していた。

「なぜ俺がわざわざお前たちが揃うのを待っていたのか……それは、証拠を見せるためだ」

「証拠、だと……?」

翼の問いには答えず、グラフィイトは振り向く。乱入者と背中合わせのように立った彼は、顔だけをこちらに向けて口を開く。

「俺はフィーネを追う」

「……………」

「こいつを使え。……思う存分、やりあうが良い」

その言葉を聞くが、乱入者は何も言葉を発しない。だがそれを意にも介せず、グラフィアイトはその場から姿を消した。

そして離れる前に渡されたそれを、乱入者は手に持つて起動させる。

『ドラゴナイトハンター、Z!』

「それは確か……ッ!」

起動されたガシヤットを翼は確認するが、次に乱入者の懐から取り出された物体——ガシヤコンバグヴァイザーを見て素早く身構える。

あれはたしか、以前の戦いでノイズを変容させた機械だ。だが現在、周囲にノイズはいない。なにをするつもりなのか、乱入者の一挙手一投足を見逃さないように翼は警戒していた。

『ガツチョーン……』

「変身」

——その声を聞くまでは。

「まさか……!」

この時、彼女の中で全てがつながっていった。

乱入者の動きに対する既視感にも近い違和感、グラフィアイトの言葉の意味、通信機から聞こえていた弦十郎からの報告。これらの条件か

ら導かれる答えなど、これしかない。

そう判断した瞬間、翼は全力で乱入者へ駆け寄ろうとする。しかしそれよりも早くガシャットが挿入され、乱入者の手が腰に巻かれたバックルに固定されているガシャコンバグヴァイザーのスイッチを起動させた。

『ガシャット！——BUGLE UP！』

「ぐうツ!？」

「翼さん！」

ガシャコンバグヴァイザーから音声が発せられると同時に、翼の目前に全身を覆えるほどの大きさのパネルが出現する。それは勢いよく迫り、彼女はぶつかつた衝撃で吹き飛ばされてしまった。それを後方から走ってきた響が受け止めることで無傷で済んだものの、その間も眼前の状況は変わっていく。

彼女たちの目前に現れたパネルは、今度は乱入者の方へゆつくりと動いていく。そしてパネルが身体を通り抜けると、乱入者の容姿は変化しており、顔はあらわになっていた。そしてその顔を見た響は、身体がピクリとも動かなくなってしまう。

「う、そ……」

「……………」

それは間違いなく、目の前の光景を理解するのに精一杯だからだろう。翼は何とか立て直しているものの、明らかにその心は揺れていた。

『ド・ド・ドドド黒龍剣！』

『ドラ・ドラ・ドラゴナイトハンター……』

そしてその様子を眺めていた乱入者は、遂に変身を終わらせる。そ

して二人に向かってゆつくりと右手に持つ槍を上げていき、切っ先を突きつけたところで口を開いた。

「さあ、ゲームの始まりだ。ノンストップで、飛ばしていくぜ？」
『——ガングニール!!』

《See you Next game……》

第31話 『奏者たちよ、Let's fight!』

現在、響と翼の目の前に立っている乱入者。その変身した姿を見て、二人は恐る恐る口を開く。

「……………かな、で？」

「奏、さん…………？」

乱入者——天羽奏は、その言葉を聞いて静かに笑う。そして自分の姿を確かめるかのように、視線を下におろした。

その鎧はシンフォギアのそれと酷似している。だが所々に龍を模した装飾が入っていて、後方腰部からは鋭い尾が出ている。また手に握っていた突撃槍も形状が変化しており、鏢の部分には竜の顔が口を開いた状態で付き、その口から刀身が突き出していた。これももしシンフォギアだった場合、どこかの世界では「幻獣型ギア」と呼ばれていただろう。

だが幻獣型ギアとは明確に違う点が2つある。1つは幻獣型ギアで白色だった箇所が、全て黒く染まっていることだ。暴走しているようにも見えるが、それはシンフォギアだったらの話である。そしてもう1つ、今の奏の武装は槍だけではなかった。

「うし、問題ねえな。久しぶり…………でもないか。元気か、翼？」

「……………」

「あれ？ おーい、翼ー？」

奏が確認を終え、翼に問いかける。だが翼は視線こそ彼女の方を向いていたが、表情は完全に呆けていた。グラフィイトがそう言っていたので、少しだけだが希望はあった。だがこうも早く自分の目の前に姿を現すとは思っていなかったのだ、まるで心の準備ができていなかったのだ。

それを見た響は彼女がしばらく動けないことを察し、状況整理するために急いで口を開く。

「あの……奏さん、なんですか？」

「ん、翼の後輩か……立花響だったよな？ あの時は災難だったな」

「え……あの時、ですか？」

「そうそう。デュランダル持って暴走したんだろ、大丈夫か？」

「あ、はい。元気ですけど……」

そう奏に聞かれて、響は答える。その言葉を聞いた彼女はどこか安心したように微笑んだが、少し悲しそうに目を伏せて口を開く。

「ならいい。……あと、ごめんな。あのライブで私がハマったせいで、胸にガングニールの破片が刺さったんだろ？」

「いえー！ 確かに大怪我はしました。けれどその事があったからこそこうしてシンフォギアを纏えますし、今まで以上に人助けができますから」

「そう言われちゃ、これ以上謝るのは野暮か。……つと、そうだ。もうちよつと聞きたいことが——」

「待て待て待て待て！」

「お、戻った」

相対しているというのに、世間話を始める二人。しかし時間が経つたおかげで翼は再起動でき、奏を見ながら慌てて口を開く。

「立花、一応あの奏が偽物と言う可能性をだな……！」

「翼、まだ部屋の片付け緒川さんに任せているのか？」

「あ、本物みたいですな」

「ガハッ!？」

奏が口にしたのは、翼と親しい者しか知りえない情報。さらにそれ

を聞いた響が即決したこともあって、翼は二重のダメージを受けてしまふ。

翼はフラフラと膝を折って両手を地につける。それを見た奏は笑いながら近くにより、肩に手を置いた。

「ハハハ、ごめんな。こうして会えたもんで、つい揶揄っちゃった」

「……やっと会えたのに、奏はやっぱリイジワルだ」

「そう言う翼はガチガチだ。あの子のおかげでちよつとは柔らかくなつたけど、まだ硬い」

そう微笑みながら奏はポンと頭に手を置き、再び立ち上がって二人から距離をとる。ある程度離れたところで振り返り、再び右手に持つ槍を前方に突き出した。

「ま、これ以上の会話も野暮だ。ここからは、こっちで語り合おうじゃないか？」

「待つてください！　なんで私たちが戦わなきゃ……！」

「私がこの姿になる際に使った道具、忘れたのか？」

「それは……ッ、翼さん？」

戦いを拒否しようとする響に対し、奏は腰にあるガシャコンバグヴァイザーとガシャットを指しながら問いかける。それを聞いて響は言葉に詰まるも、いつの間にか立ち直っていた翼が剣を構えて口を開く。

「立花、無駄だ。あんなった奏は、テコでも動かない」

「でも……！」

「さっすが翼、話が早い」

「なぜグラフィイトと共に行動するのか、聞いても答えないのでしょう……私だつて言いたいことがたくさんある。この剣と共に、全てぶつけさせてもらおう！」

「おうよ！」

そう叫び、翼は奏に向かって突貫する。上段から振り下ろされた剣を、彼女は槍を持って真正面から受け止める。そして勢いのまま後方に弾き飛ばし、翼が着地すると同時に薙ぎ払いを仕掛けた。それを翼は剣を持って防御し、切り返して攻撃する。何度か攻守を交代しながら、二人は獲物をぶつけ合った。

「ずっと、奏に会いたかった！」

「ああ！」

「また、奏と一緒に歌いたかった！」

「そいつは悪いな！」

「もつと、奏と一緒にいたかった！」

「私もだ！」

何度もぶつかり合いながら、言葉を交わす二人。戦っているというのに、響には二人の表情はとても晴れやかに見えた。

「おらッ!!」

「ぜやあ!!」

振り下ろされた槍と、振り上げられる剣。それは二人の中間でぶつかり合い、激しい衝撃波を発生させる。しばらく鏝ぜり合うが、奏はニヤリと笑って口を開く。

「おっと、今の私の獲物はこいつだけじゃないぜ？」

「なっ!？」

その言葉を飲み込む前に、翼の目の前に銃口が現れる。それを見た翼は素早く槍をはじいて後方へ跳躍する。その直後、先ほどまでいた場所に弾丸が着弾して地面を抉った。

その隙を逃さず、超電磁砲の様な銃身を左肩に収納しながら奏は槍を構えて突撃する。それを翼は剣をうまくぶつけて受け止めるが、空中のため踏ん張りがきかずに吹き飛ばされてしまう。

「翼さん！」

「余所見たあ余裕だな！」

「ッ！」

飛んでいった方向を見て響が叫ぶが、直後上空から迫りくる奏を見て急いで回避する。振り下ろした槍が空振りに終わり、奏は響を見ながら手の甲を向けつつ指を曲げて挑発した。

「お前さんも来な。何か言いたいことがあるんなら、一緒にぶちまけちまえ！」

「……………はい！」

勢いよく返事をして、響は奏に向かって走り出す。それを見た奏は再び銃身を展開し、迎撃するために何発か撃ち出した。彼女はそれを左右にステップすることで回避し、直前で跳躍して上空から拳で攻撃する。奏はそれを槍の腹で受け止めるが、衝撃が強く足元は陥没していた。

「やあああああ!!！」

「ッ、こんのおおおお!!！」

響はそのまま押し込もうとするが、奏もまた全力で耐える。しばしの間均衡するが、遂に響の勢いが弱まってしまう。それを察知した奏は力を込めて押し返し、弾き飛ばすことに成功する。

「グ、なら……………！」

「……………！」

響は何とか空中で立て直し、距離をとって着地する。そして両手を近づけてエネルギーを溜め始める。それを見た奏だが、攻撃せずにその様子を見守っていた。手のひらの中で形成されたエネルギー球、それは徐々に大きくなっていく。

「——あぁっ！」

「おおっとー！」

だがある程度大きくなった所で弾けてしまい、その衝撃で響は後方に飛ばされてしまった。その衝撃波は奏の元まで及び、思わず声を上げてしまう。そこまでダメージはないのですぐ立ち上がったが、その表情はあまり明るくない。

「駄目だ、やっぱりまだ固定できない……！」

「……なるほど、まだアームドギアは展開できないか」

「はい……でも、私の想いをこの拳に込めることはできます！」

「へ、そうこなくっちゃー！」

響がまだアームドギアを展開できないことに気づき、奏はそう呟く。それに対し彼女は返事し、気を取り持ち直して再び突貫した。その様子を見た奏は笑い、今度は槍を持って迎撃する。

次々に振るわれる槍を響は時に避け、時に受け流して対応する。そして隙が生まれれば素早く反撃するが、それを奏は最小限の動きで回避していく。

「ま、近接戦主体だよな……なら、こいつはどうだ？」

「ええ!？」

その言葉と共に、奏は左手を伸ばす。すると腕部の装甲が展開し、

格納されていた刀身が姿を現す。

インド発祥の武器であるパタの様に固定された長剣と、右手に持つ槍。奏はその2本を使って猛攻撃を仕掛ける。嵐のように放たれる連撃に、響は徐々に防御が間に合わなくなっていき、少しずつ攻撃がかすり始めた。

「速い……！」

「おらおら、どうした！ このままじゃすぐにゲームオーバーになっちゃまうぜ!?!」

「……良いんですよ。私がこうして正面の連撃を押さえれば!」

「——背中ががら空きになる!」

奏の猛撃に対して響は叫び、それと共に奏の背後からも声が聞こえる。その声に気づいた奏が顔だけ振り向かせると、上空にいる翼が巨大化させた剣を投擲する構えをとっているのが見えた。

すぐさま迎撃の体制をとろうとするが、両手がピクリとも動かない。急いで視線を正面に戻すと、一瞬のスキについて両手の武器をつかむ響の姿がそこにはあった。

「なにッ!?!」

「はあああああああ!!」

——天ノ逆鱗——

無防備となった奏に背後に向かって、巨大化した剣と共に翼が突撃する。このままでは奏は避けることができず、直撃してしまうだろう。

「……なーんてな」

「うそっ!？」

「なんだと!？」

しかし奏はそれを回避した。両腕が塞がれたこの状況、全力で押さええている響を振り払ったのだ。それによって自由になった彼女は側方へ素早く跳躍し、翼の一撃をも回避する。

「ハハ、今のはマジで焦った」

「……それ、飾りじゃなかったのね」

「ああ、生憎とな」

空振りに終わり、着地した翼は響を吹き飛ばした正体——大きな尻尾を見る。それを聞いた奏もまた尻尾を見て、ユラユラと動かしただろうやらあの尻尾は奏の意思に応じて自由に動かせるようである。

そして奏は視線を正面に戻し、展開していた長剣を格納する。それと同時に槍を肩にのせ、口を開いた。

「随分と強くなったな、翼」

「あの日からずっと鍛えていたもの。そう言う奏だって、あの時とは比べ物にならないわよ?」

「私も今日までの間、何もしていなかったわけじゃないからな。……それに前さんも、結構使いこなせてるじゃねえか」

「え!?!……そんなことないですよ。翼さんや奏さんみたいに、アームドギアを展開できていませんし」

「ふむ……ま、これくらいは良いか」

響の様子を見た奏は、しばし考え込むそぶりを見せる。そして結論が出たのか、顔を上げて口を開いた。

「先輩からのアドバイスだ。お前、どんなことを考えて戦ってる？」
「え？」

それを聞いて、響は困惑する。翼もまた奏の行動に眉を顰めるが、その行動を阻害しようとはしなかった。この行動は考えなしの物ではない、そう思ったからだ。

「いいから、答えてみろって」

「それは……自分の想いを伝えることです」

「そりやどんな風に？」

「えっと……最速で、最短で、一直線に。アームドギアのない私は、この手でそれを伝えることしかできませんから」

「なるほど、なるほど……やっぱりな」

「え？」

合点が行ったような表情を浮かべる奏を見て、響は困惑の表情を浮かべる。だがそれを聞いた翼もまた、何かを思いついたような表情をしていた。

「いいか？ アームドギアってのは、奏者の心を反映して形作るもんだ。別に私や翼のように、武器の形になることだけが正解じゃないんだよ」

「そうなんですか？」

「奏、それって……」

「ああ……自分の奥底の想いをよく思い出してみな。すると自然と見えてくるはずだぜ、立花響のアームドギアが」

『ガツシューーン……』

そう言って後方へ跳躍する奏。少し距離を開けて着地した彼女は、バグヴァイザーに刺さっているガシヤットを引き抜いた。

「さて、そろそろタイムアップが近いんだ。ラストスパートと行かせてもらおうぞー!」

『ガシャット! キメワザ!』

そして槍の鏝、龍の頭にある挿入口にガシャットを突き刺す。そして音声が響くと共に、龍の眼が光って動き出した。

『ツ!!』

「翼さん!」

「ああ! 行くぞ、立花!」

響の声にそう返し、翼も剣を構える。その間に龍は咆哮を上げ、その口から炎を吹き出す。それは刀身にまわりつくように展開し、大きな突撃槍の刀身を形作る。それを見た響はクリスの時と同様にエネルギーを右手に込め、翼は剣を巨大化させて刀身と脚部のブースターを起動させた。

力を溜め続ける3人、それが完了するのは全く同タイミングであり、3人は同時に走り出した。

――DRAGOKNIGHT CRITICAL FINISH
!――

――双星ノ鉄槌――DIASTER BLAST――

「おらああああああああああああああ!!」

「いけええええええええええ!!」

奏の放つ炎を纏った一撃に対し、響と翼はそれぞれの武器を同時に振るう。それらはぶつかり合い、大きな爆発音とともに周囲を凄まじい衝撃波で覆っていった。

「戻ったか」

「ああ。ありがとうな、あいつらと戦わせてくれて」

そう言いながら、奏はソファに身を投げ出す。流石にはしやぎ過ぎたようで、全身に心地よい疲労感が巡っていた。

その様子を横目に、グラフィアイトは武器の手入れを続ける。進化したことで双刃も強固になった。だが久々のレベルアップもあって、念のためメンテナスをしているのだ。

「構わんさ。アメノハバキリは十全ではなく、ガングニールはまだ未熟だからな」

「翼もあの子も、大丈夫そうだった。……私の頼み、両方やってくれたんだな」

「元より1つ目は博打、上手く行く保証などなかった。……それ以前に、人間から借りを作った拳句1つも返せないなど俺自身が許せん」
「その私はもう人間じゃないんだけど……まあいいや。で、そっちな首尾は？」

「上々だ。奴の拠点を突き止めた、明日にでも襲撃する」

グラフィアイトのぶっきらぼうな声を聞き、仰向けに寝返った奏はそう返す。そして彼の成果を聞くために問いかけ、それを聞いた彼は微笑を浮かべてそう返した。

それを聞いた奏は上半身を起こし、楽しそうに笑って口を開く。

「そいつはいい、私も行くぜ」

「好きにしろ。だが、俺の足は引つ張るなよ？」

「大丈夫だって。このまま連戦するならともかく、行くのは明日だろ？」

そんだけ時間があるなら回復しきるさ、奏はそう言い切った。それを聞き終えたあたりでグラフィイトは手入れが完了し、立ち上がる。

「これで十分だな。……おい、渡していた物をすべて返せ」

「あいよ」

奏はそう返してガシヤットとバグヴァイザー、バックルをグラフィイトに向かって投げる。それを彼は全てキャッチし、バグヴァイザーを起動させた。

『infection! LET'S GAME! BAD GAME!
E! DEAD GAME! WHAT'S YOUR NAME
!?! —THE BUGSTER……!』

「俺は朝まで鍛錬する。そこにあるものは好きにするがいい」

『ガツチョーン……ガシヤット!』

「いつてらっさーい」

怪人態に変身したグラフィイトは、バックルを腰に巻いてバグヴァイザーを固定する。そしてガシヤットを刺して、背後に現れるパネルを見ながら奏にそう話す。そして奏の返事を聞く前に、パネルの中に入っていた。

恐らくグラフィイトは「ドラゴナイトハンター乙」の中に入り、現れる敵キャラを相手に鍛錬するつもりなのだろう。その様子を見送りながら、彼女はそう考えていた。

「さて、なにしようか。この身体になったせいか、疲れても眠くなりやしねえし……お？」

そう奏が考えていると、ふと視線の先にあるものが止まる。それを見た彼女はニヤリと笑い、それに手を伸ばした。

「好きにするも何も、私がここまで持ってきたんだっての……
あー、やっぱり美味しい」

久しぶりに味わったパフエの甘味は、何となく体に染み込んでいくように感じた。

《See you Next game……》

第32話 『砕け散った Rampart』

『パラド、一つ聞いていいか？』

『ん、なんだ？』

人気のない廃墟。彼らが最近根城にしているこの空間で、グラフィアイトは近くにいる青年に問いかける。

『なぜゲナムは復活している？ 奴はお前が直接手を下したのだろうか？』

『ああ……俺があの時、デンジヤラスゾンビのバグスターウイルスと死のデータを感染させて消したはずだ』

『人間は俺たちとは違い、命は1つだけのはず。……考えてはみたが、俺では結論がつきそうにない』

『そうだな……』

グラフィアイトの問いかけに対し、パラドと呼ばれた青年は口に手を当てて考え込む。基本的にグラフィアイトは戦闘担当であり、こういった知略を使う仕事は彼かもう1人の仲間任せに任せている。そのもう1人が現在いない以上、この分野は彼の方が適任だった。

『とりあえずわかることはある。ゲナムは人間じゃなく、バグスターになったということだ』

『バグスターにだ?!』

驚愕するグラフィアイトに対し、パラドは間違いないと返す。確かに、それならば死んだはずの人間が蘇っているのかは説明できる。だが彼は、どうやって件の人物がバグスターになったのかはわからなかった。

『どうやって……ッ。俺たちバグスターによって倒された人間はデータとなって元のプロトガシヤットに保存される……』

『それはそのゲームのバグスターを倒すことで解放される』

グラフィアイトが話す言葉の続きを、パラドが口にする。それを聞いたグラフィアイトは、頭の片隅に置いていた知識が間違いではないことを確信する。

『それはつまり、俺たちの知らぬところでデンジャラスゾンビのバグスターが倒されたということか?』

『……いや。それよりは、ゲム自身がデンジャラスゾンビのバグスターになったと言う方が正しいと思う』

『人間がバグスターに、か。一度死んだ以上、そのまま復活するとは思わなかったが……そう言うことだったのだな』

パラドの考えを聞き、グラフィアイトは自分の中で考えをまとめながら呟く。その様子を見て、彼は少し呆れつつも笑って口を開いた。

『本当そこら辺はいい加減だな、お前』

『気にしたところで俺がやることは変わらんからな。……だがパラド、そんなことが人間如きにできるのか?』

『……そうだな、ただの人間なら無理だと思うぜ』

グラフィアイトの問いかけを聞いて、パラドは立ち上がりながら答える。そして両手に持つ道具――ゲーマードライバーとデュアルガシヤットを見ながら呟いた。

『だがゲムは仮面ライダー……バグスターウイルスをその身に適合させた人間だ。もしかしたら、それが死んでデータになっても人格を取り戻せた理由なのかもしれないな』

「——ッ！」

近寄る気配を察知し、グラフィアイトは意識を切り替える。そして迫りくる方向に予想を立てた後、ゆっくりと双刃を構える。

そしてその数秒後、グラフィアイトの背後からそれは現れた。前足の鋭い爪をもって引き裂こうと跳びかかるが、既に見抜かれていたその攻撃は空振りに終わってしまう。

「——ッ!!」

「ふんッ！」

体を捻ることで最小限の動きで回避するグラフィアイト。勢い良く跳びかかったこともあって、敵は目の前を通り過ぎようとしている。その隙を逃すはずもなく、双刃を振り抜いて胴体を真っ二つに両断した。

致命傷を受け、敵は絶命する。しかし血が出ることはなく、死体はブロック状の粒子に分解されてその場から消え去った。それを見たグラフィアイトは一度息を吐き、改めて周囲を探索する。

「反応は無い……一度戻るか」

グラフィアイトがこの世界に来てから、すでに結構な時間が経過している。時計などこの場にはなく、彼は時間など気にせずに戦い続けていた。朝になったら襲撃すると言った以上、時間を確認するためにも一度戻った方がいいだろう。

そう判断したグラフィイトは、この世界から出るために意識を集中させる。すると目の前にタイトルロゴ入りのパネルが現れ、彼はそのパネルの中に跳びこむ。そして再びパネルから出た時、彼の周囲は深い森林から拠点にしている廃墟へと変わっていた。雨が降っているように正確な時間は不明だが、少なくとも夜中ではなさそうだ。

「お、帰ってきた」

「ああ。準備は良いな、今から奴の拠点に襲撃を——」

背後から奏の声が聞こえ、グラフィイトは振り向きながら準備ができていくかどうかの確認をするため口を開く。だが、その言葉は途中で途切れることとなった。

「スー、スー……」

「……おい、なんだそいつは?」

振り返ったグラフィイトの視線の先には、ソファに座る奏と彼女の膝を枕にして眠る少女——クリスの姿が映っていたのだ。

「ノイズに追われてたみたいでさ。どうやら、雨をしのぐためにここに転がり込んできたらしい」

「なぜお前はそれを放置していた?」

「襲撃かと思つてさ、ノイズを蹴散らしに行つてたんだよ。んで終わって戻ってきたら、ソファで眠るこの姿が」

「……フウ」

奏から事の経緯を聞いて、グラフィイトは静かにため息を吐く。彼

女とは既に1年以上の付き合いであるため、これ以上何を言っても無駄だろう。そう判断した彼は、さつきと本題に戻すことにした。なおその内容でも彼女が膝枕をしている理由はわからなかったが、彼にとってそんなことは些事である。

「もういい、本題に戻すぞ。今からフィーネの拠点を襲撃する、ノコノコするなら置いていくぞ」

「あいよ……って、ん？」

「フィー、ネ……？」

フィーネと言う単語に反応したのか、クリスが身動きする。一度寝返りをうった後、ゆっくりと目を開ける。だがどうやら寝起きの方は良くないようで、意識の方はまだぼんやりとしていた。

「……、は……」

「お、ようやくお目覚めか」

「……………」

「……………」

クリスの頭上から声が聞こえ、ゆっくりと寝返りながらその方を向く。そしてその声の主と、近くににいるもう1人を確認した。

さて、ここでクリスから見た二人について確認してみよう。

一人目、グラフィイト。フィーネからは厄介な相手と太鼓判を押され、何度かクリスとは戦ってその度に辛酸をなめさせられている。その上、前回の戦いでは生身というアドバンテージがあつたのにもかかわらず有効なダメージを与えられない始末だ。結論を言うと、格上と認めざるを得ないとは言え、気に喰わない存在である。

二人目、天羽奏。彼女について、クリスを知ることとはあまりない。ガングニールのシンフォギア奏者であり、例のライブの日に死んだと

聞かされている。また昨日の戦いでは彼女が現れる前にクリスは離脱していたので、復活していることなど知るはずもない。

そんなクリスの視界には、間近で微笑みながらこちらを見る奏と、少し離れた箇所では壁に体重を預けた姿勢でこちらを睨みつけるグラフィアイトの姿が映っている。

「おはよう、気分はどうだ？」

「……………」

「フン、だんまりか」

「ッ!？」

しばらく呆けていたが、徐々に意識が鮮明になる。そしてグラフィアイトの声を聴いたことでこれが夢でないことを把握した時、クリスの行動は迅速だった。素早く身を起こし、その場から離脱しようとする。

「おおっと、残念！」

「うわっ！」

だがその行動を、奏が阻害する。上体を起こしたクリスがソファから立ち上がるうとしたのを、背後から抱きしめることで防いだのだ。シンフォギアもネフシュタンの鎧も纏っていない今のクリス、身体能力はただの人間だ。何とか振り払おうと暴れるが、奏の両腕がはかれる気配は微塵もない。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ……………」

「ハハ、寝起きの割には元気だな」

「ぜえ…………誰の、せいだと思ってる……………」

数分後、そこには息も絶え絶えになっているクリスと余裕の表情で彼女を抱きしめる奏の姿がそこにはあった。尚その攻防の間、グラフィットは呆れた表情でそれを傍観していた。本当は奏ごと置いていくつもりだったのだが、起きたのならそれはそれで用がある。

そう判断したからこそ、さっさとフィーネの拠点に行くようなことをグラフィットは実行していなかったのだ。と言っても彼が質問したところでクリスが答えるとは思わない。だからこそ視線だけを奏に向け、その視線に気づいた彼女はクリスの背後で静かにうなづいた。

「まあいいじゃねえか。私たちの拠点に入ってきたのはそっちなんだし、宿泊代つてことで」

「……はあ!? ーここが!？」

フィーネと対等に戦えるだけの力を持ったグラフィット、彼が率いる陣営の拠点がここ？

奏の言葉を聞いたクリスはそう考え、改めて周囲を見渡す。昨夜はノイズから隠れるためにこの建物に入り、ソファを見つけて何も考えずに突っ伏したのだ。廃墟にある割には埃をかぶっていないとか、眠りに落ちる寸前に誰かの声が聞こえたようなとか、今思えば違和感を抱くことはいくつもあった。だがある事情でノイズと夜通し戦闘しており、疲労で判断力が落ちていたのだ。

「そうさ。ノイズ引き連れてここに来たときは、遂に拠点バレて襲撃かと思っただぞ?」

「いや、それは……」

「……やっぱワケありみたいだな。なんでフィーネ側についてるお前がノイズに襲われていたのか、教えてくれないか?」

「そのようなこと聞くまでもない」

奏の質問に対し、クリスは悲しそうな表情を浮かべて沈黙する。だがその反応を見ずとも、グラフィイトは薄々と勘付いていた。

だからこそ目をつむって姿勢を変えないまま、そう言い切った。

「大方、見限られた上に殺されかけたとでも言った所だろう?」

「ッ!」

「……グラフィイト、そりやどういうことだ?」

「奴と同じ類の人間を俺は知っている。あれは己を絶対者と信じて疑わず、仲間すら己の駒としか思わない存在だ」

その人物を思い出しているのか、グラフィイトの表情は渋い。その表情から彼と件の人物の相性は相当に悪いのだと、奏とクリスは無言で察していた。

「……そして今までの言葉から、俺か GANG ニールを目標にした命令を受けていたのは明白だ」

「聖遺物の起動にはフォニックゲインが必要……だからか?」

「GANG ニールに限っては、それだけではなさそうだがな。お前を手元に置いていたのも、奴が保持している聖遺物を起動させるためだろう」

これ以上そのことを考えるのが嫌になり、グラフィイトは一度頭を振ってその思考を追い出す。そして自分が立てた予想を話すが、クリスは驚いた表情で彼を見つめていた。ほぼ確信に近いものだったが、やはり間違いではなかったようだ。

「だが現状はこのザマだ。そしてお前は奴について知りすぎている、だからこそお前を——ッ」

殺そうとしたのだ。グラフィイトは言い切ろうとしたが、その言葉を途中で止める。そして視線だけを動かして建物の外を見た。その

行動を奏とクリスは訝しむが、その数秒後には同じように外を見ていた。

「……これは」

「俺たちが、はたまたこいつを嗅ぎ付けたか」

「フイーネ……!」

気配の正体を見抜き、奏は気を引き締めて呟く。それに答えながらグラフィイトは壁に空いた大穴の傍まで歩き、そこから身を乗り出して外の様子を確認した。

そこにはノイズが次々に出現していた。今まで散発的に出現していたのとは違い、明らかに彼らがいる廃墟を中心に展開している。それはつまり、このノイズは誰かの統率を受けているということだ。

そしてその正体に気づいたのだろう、クリスは急いでグラフィイトの隣まで行き、ノイズの集団をにらみつけて呟く。そして胸元にある結晶——イチイバルを握り、シンフォギアを展開するために口を開く。

「Killter Ichai va——ゴホッ!」

だが聖詠の途中でむせてしまい、クリスは激しくせき込んでしまう。それにより聖詠は中断され、展開しようとしていたイチイバルは光が収まってしまう。

「チ、やはりか。……フン!」

「クソ、なんで歌えねえ……ッ!」

「おい!」

それを見たグラフィイトは忌々しそうにつぶやき、片手でクリスの胸ぐらをつかんで持ち上げる。苦しそうに彼女は呟き、二人の様子を見た奏は止めようと立ち上がる。しかし一瞬向けられた彼の視線に

気づき、その行動を強制的に中断させられた。

クリスはグラフィイトの腕をつかんで抵抗するが、それはあまりにも無力であった。そしてその弱い抵抗を見た彼は、彼女を静かに睨みつける。その瞳に込められている感情、それは奇しくも昨日フィーネが彼女に向けたそれと同じだった。

「なにしやがる！」

「良いか、よく聞け。たとえ力がなくとも、技術があれば補える。たとえ技術がなくとも、力があれば押し通せる」

「何を言って……！」

「だが戦う覚悟のない者は、何を持っていたとしても戦場では愚図以下だ！」

「ッ！」

——その感情は、失望だ。グラフィイトは今のクリスを見て、失望していたのだ。

クリスは昨日拠点まで戻り、フィーネになぜ自分を殺そうとしたのか聞いた。信じていた彼女からの裏切り、それを受けたクリスは何が正しいのかが分からなくなるほどに混乱していたのだ。

『すでに計画は最終段階に入った。もうあなたの力に固執する必要はないし、知りすぎているあなたは邪魔なのよ……クリス』

そしてクリスからの問いに対し、フィーネの答えは簡潔だった。邪魔だから消す、ただそれだけだった。そしてソロモンの杖を使ってノイズを呼び出し、彼女にけしかける。奇襲を受けたクリスは負傷し、フィーネが本気なのだと悟って急いでその場から逃げ出した。その後夜中まで追いかけてくるノイズと戦い続け、疲労困憊の状態でグラ

ファイト達の拠点に転がり込んでいたのだ。

過去に人間に対してトラウマを持ち、ようやく信じれると思っていたファイネからは裏切られたクリス。今の彼女を構成していたものが崩れ去り、現在の彼女は何を信じればいいのかわからなくなっていた。

「貴様のシンフォギアが起動しないのがいい証拠だな。俺は今の貴様のような軟弱者を、何よりも嫌悪している!!」

——そしてその有様は、グラフアイトを大きくイラつかせていた。

グラフアイトに対して、クリスは臆することなく戦っていた。技術こそ足りないものの、力と戦う覚悟はある。そう思っていた彼は、内心でだが彼女を評価し、将来に期待していたのだ。

だがその評価は、ファイネへの宣戦布告の時に崩れ始め、今この瞬間に失墜する。シンフォギアを纏えないということは、今の彼女の心は大きく揺れているということ。彼女の戦う覚悟、それを構成していたのが彼女自身ではないと知ってしまったからこそ、グラフアイトは彼女に対して失望したのだ。

「自らの意思なき者など、戦う価値もない……………ハッ!」

「あぁッ!」

「つとー!」

言いたいことをすべて言い切り、グラフアイトはクリスを投げ飛ばす。彼の怒号を真正面から受けた彼女は動けなくなっており、すぐさま移動した奏が彼女を受け止めた。

「こいつの処理は任せる」

「……………了解。で、グラフアイトは?」

「決まっている、ゴミ掃除だ」

グラフィイトの言葉を聞き、奏はそう返しながらクリスの様子を見る。相当ショックだったのだろう、彼女の瞳からは涙が止まることを知らず、両腕で自分の身体を抱きしめていた。

無理もない、そう奏は思う。グラフィイトと互角に戦っていたとは言え、クリスはまだ年端もいかぬ少女なのだ。ただでさえ不安定な時期に裏切りが重なってボロボロになっていた彼女を守る壁は、グラフィイトの強烈な言葉によって完全に崩れさった。

いくらなんでも言い方があるだろうと奏は思ったが、同時にそれを説明しても彼は納得しないだろうとも思っていた。

「わかった、こっちは任せときな」

「ああ」

だからこそ自分ができることは、グラフィイトをクリスから離すこと。そして彼女の面倒を見て、できればフィーネに関する情報を引き出すことだ。

そう判断した奏は、何も言わずに送り出す。そしてグラフィイトは建物から飛び降り、ガシヤコンバグヴァイザーを起動させた。

「培養！」

『Infection! LET'S GAME! BAD GAME!
E! DEAD GAME! WHAT'S YOUR NAME
!?! —THE BUGSTER……!』

空中で怪人態に変身し、双刃を全力で振り下ろす。飛び降りた勢いも加算されたその一撃は、着地点どころか周囲にいるノイズも消し飛ばす。

衝撃で発生した土煙の中で、グラフィイトは静かに立ち上がる。そして周囲にいるであろうノイズを睨みつけ、双刃を握る手に力を込めた。

「俺は今、虫の居所が悪い。……憂き晴らしに付き合ってもらおうぞ、ノイズ共！」

そして土煙が消え去った瞬間、グラフィアイトはノイズ集団に突っ込んだ。

「おーおー、いつもより荒々しいなーおい。……さて」
「……………」

建物の周囲から鳴り響く轟音。普段よりも1.5倍ほどの音量で鳴り響く戦闘音をBGMに、奏はソファに座ってクリスを自分の方へ向かせる。彼女の表情は先ほどと変わらず涙で濡れており、彼女自身の雰囲気も相まって捨てられた小猫のようだった。先ほどまでは抵抗しまくっていたというのに、今は奏の為すがままだ。

「たく、私もどっちかといえは戦う方が性に合ってたが……………よっ」
「……………」

そう呟きながら、奏は優しくクリスを抱きしめる。彼女の頭を胸元まで引き寄せ、引き寄せた右手を後頭部に置いた。そしてゆっくりと、何度も繰り返し撫でていく。

昔、母親が妹に対してこうやっていたのを思い出しながら実行していく。ふと奏の視界に空中へ跳んでいくノイズの残骸と剣戟が映るが、雨が激しくなったのも相まってその光景をクリスが知ることはないだろう。

やるならここだな、そう判断した奏はクリスを抱きしめる力を少し

だけ強める。そして彼女の意識がこちらに向いたのを確認し、口を開く。

「今ここにあいつはいないし、声が届くこともない。……そんなもん
は溜めるだけ毒だ、全部吐き出しちまいな」

「ッ！」

「泣きたくなった時には泣いちまえ。これからどうするかなんぞ、その
後で考えればいい」

「なん、で……………」

そう言いながら背中をポンポンと軽く叩く。その言葉を聞いたクリスの身体は一瞬大きく震え、両手の握る力が強まる。奇しくも壁が完全に粉碎したことで、奏の言葉は彼女にしっかりと響いていた。

あと一押しだと考え、再び奏は口を開く。その口調はできる限り優しく、記憶の中で母親が自分を慰めていた時のように。

「泣いていいんだよ、クリス」

「ッ、—————！！」

激しい雨が地面を打ち付ける音と、グラフィアイトがノイズを蹂躪する音。

二つの轟音は、少女の涙が止まるその時まで響き続けていた。

「——ノイズ、ですか？」

『ああ。今日の未明、ノイズのパターンを感知した。市街地から遠く離れたこともあり、人的被害がなかったのが救いなんだが……』

「師匠？」

「ノイズと同時に、聖遺物イチバルのパターンも検知したのだ。……おそらく、ノイズと戦っていたのだろう」

これから学校へ行くかと持っていた矢先に、弦十郎から電話がかかる。未来から距離をとって受け取った響は、その内容を聞いて顔をしかめた。

【さようなら、クリス】。あの場にいた女性——フィーネはクリスに対して確かにそう言っていた。言葉の意味をそのまま受け取るならば、彼女はフィーネから裏切られたということになる。

「……まさか」

『響君？』

「あの、もしかしてクリスちゃん、戻るところがないんじゃないかって……」

『ツ！……確かにそうかもしれない。わかった、この件はこちらで引き続き調査を進める。響くんは指示があるまで待機しててくれ』

「はい、わかりました」

通話を終了し、響は昨日戦ったクリスのことを思い出す。彼女は歌が大嫌いと言い、人間なんか分かり合えないとも言っていた。だがその表情に浮かんでいたのは怒りではなく、悲しみだと響は感じていたのだ。

そのクリスが唯一信頼してたであろうフィーネに裏切られた。奏と戦ったことによる疲労で昨日は何も思わなかったが、今考えてみるとかなりまずい状況なんじゃないかと彼女の直感が警報を鳴らす。

「クリスちゃん……」

「響、どうしたの？」

「ツ！……いや、なんでもないよ！」

考え込もうとするが、リビングから未来が顔を出して声をかけてきたのでその思考を中断させる。そして覚られないようにいつも通りの表情を浮かべ、彼女の方に振り向いた。

「そう？……てつきり何かあったんだと思っただけど」

「いやいや、そんなことないって。ボランティア先の人から連絡が来て、今日は雨が降ってるから待機してってくれて連絡が来たの」

「ふーん、そうなんだ」

「み、未来？」

響の嘘を聞いた未来は笑顔でそう返すが、明らかにその表情は笑っていないかった。その顔から嫌な予感を感じ取った響は、思わず一步下がる。

「ねえ、響？」

「な、なんでしよう……？」

「私、隠し事が好きじゃないのは知っているよね？」

「はい……」

「最近の響、明らかに私に嘘ついてるよね？」

「ツ!? いや、そんなことはないよ!」

凶星をつかれ、大慌てで否定する響。どう考えても怪しいのは自分でもわかっているが、証拠でも出さない限りシンフォギア奏者として戦っていることなんてバレないはず。そう考えていたからこそ、響はこの行動をとったのだ。

先ほどの言葉が、未来なりの最終通告だとも知らずに。

「そっか……疑ってごめんね、響？」

「うん、大丈夫。そう言う行動をしちゃった私も悪いから……」

「それじゃ学校に……あ、これ見てよ」

「なにになに？」

未来が携帯の画面を見て何かに気づいたようで、響に声をかける。その誘導に素直に従い、響が携帯の画面をのぞき込むと――

「ブハッ!？」

――そこには、ガングニールを纏って空をかける響の写真が写っていた。

「なんで!? あそこは避難が済んで人がいないはずなのに……」

「離れたところから戻っていたからね」

「でも、あの付近はグラフィイトさんのせいでカメラが使えないはず……!」

「何ともなかったよ? グラフィイトさんって……ああ、あの人かな」

「でもでも……ア、ア、ア」

慌てて話す響の言葉を、未来は淡々と返す。そして途中で彼女はピタリと動きを止め、まるでブリキ人形のようにゆっくりと画面から未来の方を振り向いた。

簡潔に言おう。未来が黒い笑みを浮かべて、響をじつと見つめていた。

「えっと、あの、ですね……」

「……………」

「何と言いますか、これには深いわけが……」

「嘘つき」

「グハッ！」

真つ直ぐ放たれた言葉の刃は、響の胸を深くえぐる。そのショックで昨日の翼のように崩れ去った彼女を横目に、未来はすつと携帯電話を操作し始めた。どうやらどこかに電話をかけるようだ。

「——もしもし。はい、小日向です」

「……………」

「……はい、響が風邪を引いちゃいまして。私は病院に連れていってから登校します。はい、よろしくお願いします」

響の目の前で、未来は学校に遅刻の連絡を入れる。もちろん響はいたって健康なのだが、どうやら風邪を引いたことにされたようだ。

そして通話が終わり、未来は携帯を鞆にしまう。そしてしゃがんで響と視線を合わせ、ガツチリと両肩をつかんだ。

「全部説明してね、響？」

「……………」

立花響、15歳。彼女は今この時、崖っぷちに立たされることとなる。

《See you Next game……》

第33話 『雨上がりからのTake off!』

「雑魚がッ！」

最後の一体を切り裂いて、グラフィイトファングを下ろす。その周囲は荒れ果て、所々陥没していた。しかし、上手い具合に廃墟に傷はついていないようだ。

「雨も上がった……なんだ、まだ日は昇ったばかりだったか」

グラフィイトの言葉のとおり、雨は止んで雲の切れ目から日の光が差ししていた。それを見た彼は、奏達がいる部屋に跳んで戻る。

「おい、片付いたぞ」

「あいよ。こっちはようやく一息ついた、つてとこだ」

「……また寝たのか」

奏にもたれかかった状態で寝ているクリスを見て、グラフィイトは呟く。奏はそれに対し、呆れた表情で口を開いた。

「完全にキャパオーバーだったの。……今日までに起きた出来事だけでボロボロだったところに、グラフィイトの喝で完全にノックアウトだ。毒は全部吐き出させたけど、今までの愚痴とかすごかったんだぜ？」

「フン、鍛錬が足りん」

「本当にお前はなあ……!」

無情に切り捨てる一言に、思わず奏は額に手を当てる。だが事前に予想できていたので、それを口にすることはなかった。

「……やっぱいいや。で、どつちかはわかったか？」

「この女だな。俺が襲う前、奴らの視線はこの部屋に集中していた。反対側にいた連中は、一手遅ければ突撃していただろうな」

「ま、そうだよな」

奏はそう呟いて、クリスの頭をなでる。それを横目に見つつ、グラフィイトはある作業をしてから人間態に戻った。

「で、お前はどうか動くつもりだ？」

「わかってんだろ？」

「ああ」

グラフィイトはそう問いかけるが、奏は逆に問い返す。その目から察するに、やはりクリスを放っては置けないようだ。

「だが、ここからは離れる。俺はしばしの間ここに残り、あのノイズ共の狙いを今一度確かめる」

「わかったよ……つと」

奏はそう返し、ゆつくりとクリスをソファにおろす。そしてその横に立てかけられている槍—— GANGNEER を、手に取った。

「GANGNEER、持ってくけどいいよな？」

「それがなくば、お前はまともに戦えないだろうが。……これも持つていけ」

「うわッ！」

グラフィイトはそう言いながらバツクルとガシャコンバグヴァイザーを投げる。そしてそれを奏が受け取っているのを見つつ、グラフィットを起動させる。

『ドラゴナイトハンター、Z!』

「培養……!」

そのままガシヤットを身体に刺し、怪人態へ変身する。そしてその後、持っているガシヤットも奏に投げた。

「つとと……いいのか?」

「ガングニールは改造した弊害で、シンフォギアとしてはまともに扱えん。……それにお前は、俺が二課の者達と戦うための人質だ。そう易々と死なれるわけにはいかん」

「はいはい、そうでした。……んじゃ、ありがたく!」

『ガツチョーン……』

苦笑いしつつ、奏はバックルを腰に巻いてバグヴァイザーを固定する。そして受け取ったガシヤットを起動させた。

『ドラゴナイトハンター、Z!』

「変身!」

『ガシヤット!——BUGLE UP! ド・ド・ドドド黒龍剣! ドラ・ドラ・ドラゴナイトハンター……ガングニール!!』

変身を終えた二人はどちらが言うわけでもなく外を見る。視界に映る風景は相変わらず荒れているが、その空間が突如歪む。

そして次々に現れるノイズ。先ほどの倍以上の数で出現したノイズを見て、グラフィイトが忌々しそうに口を開く。

「長話が過ぎたか……おい、今すぐ行動に移せ」

「わかってるって。……行くぞクリス、起きてんだろ?」

「ッ!」

奏がそう声をかけると、ソファに寝転がる身体がビクツと跳ねる。

二人の変身音が大きいのもあって、クリスは先ほど目覚めていた。ただグラフィイトはもちろん、奏もある意味では顔を合わせづらくて眠ったフリをし続けていたのだ。

その様子を見て笑みを浮かべつつ、奏はクリスを片手で持ち上げながら背中におぶさる。ちょうど背面には棘がなく、腰の装飾は彼女がおぶさるのを手助けていた。なおここまでの一連の動きは流れるように行われたため、クリスは何か言う暇もない。

「そうだ、しつかり掴まっとけよ?」

「……………え?」

奏はそう言いながら、バグヴァイザーの2つのボタンを同時に押す。低い音程の待機音が部屋に響く中、状況を理解できていないクリスは疑問符を顔に浮かべていた。

「なんだ、この音?……………おい、何をするつもりなんだ!?!」

「ハッハッハ!」

「笑ってないで……………ってえ!?! おい、答えろよお!」

奏は笑いながら移動し、壁に空いた穴の前に立つ。下にうじゃうじゃいるノイズを目にしたクリスは目を見開き、奏の身体を何度も叩いた。

「いや、なに。この間私が似たようなことをやったんだが、結構気持ちよくてな。クリスにも体験してもらおうかと」

「なにを……………いや待て、言わなくていい! 言わなくていいからやめろ!!」

「フハハ、逃がさん」

クリスは急いで降りようとするが、身体が固定されていることに気づく。背中に圧迫感を感じたので振り向くと、彼女の身体を丸ごと覆

うように尻尾が押さえつけられていた。もちろん棘は当たらない位置で調整されており、服が破けることはないだろう。

そして端までたどり着いた奏は槍を逆手に持ち直し、バグヴァイザーの紫色のボタンだけをもう一度押した。

『CRITICAL BLAZE!』

「お空の旅へご招待つてな？」

「待て待て待て！ あたしはネフシユタン使つて、前に飛んだことあるから！」

クリスはそう叫ぶが、奏が持つ槍の鏢——龍の頭部の眼が光り、刀身を飲み込むほど巨大化していることに気づく。

口から炎が漏れ出ている龍と、先程流れた音声。そこから答えを導き出したクリスが顔を青ざめさせる。それと同時に、彼女の方に顔を向けた奏はニヤリと笑つて口を開いた。

「そいつは知つてるぜ。でも……ジェットエンジン並の出力で飛ぶ感覚は、まだだよなあ？」

「そうだけど、それとこれとは話が別だろッ!?……そうだ、お前から何か言つて——!」

「やるなら飛び出してからやれ。ここですると消し炭で汚れる」

「わかつてるつて——!」

「うわあああああああ！」

希望が断たれ、クリスはただしがみつくことしかできなくなる。それを確認した奏は勢いよく飛び出した。それと同時にため込まれた炎が開放し、龍の口から勢いよく噴き出る。

逆手に持つていることで、炎は奏から見て後方に噴き出ている。そして踏ん張る地面がない以上、反作用の力の方が強くなるのは明白であり——

「いやっほおおおおおおお!!」

「キヤアアアアアアアアアアツ!!」

——数秒後……いや、2秒もかからないうちにグラフィアイトの視界から2人は消え去った。

改めて周囲を見渡すと、ノイズの数が明らかに減少し始めている。どうやらグラフィアイトの仮説は正しかったようだ。

「やはりノイズの狙いは、あの女か。……まあいい、俺は俺の目的を果たすだけだ」

そう言つて、グラフィアイトもその場から姿を消す。

向かう先はフィーネの拠点、目的はフィーネの打倒とギヤラルホルンの確保である。

「今日、最初に現れたノイズの反応がここ。そしてイチイバルの反応と同時に消失し、そこからは彼女を追うように出現している」

地図を開き、今朝の出来事を思い出しながらペンで書き足していく。二課の資料室で作業を続ける弦十郎は、ある地点に印をつけた。

「ここで反応が途切れた……確か、廃墟だったか。ここを寝床にしたようだな」

そう呟いた後、顎に手を当てて考える。気になっているのは、反応消失のタイミングだ。あの時はノイズよりも先に、イチイバルの反応が消失する方が早かった。

ノイズの反応が消えるまでの数分間、彼女はシンフォギアなしで乗り切ったのだろうか？

「まさか……、ツ！」

弦十郎の中にとある考えが浮かぶのと同時に、建物内に警報が鳴り響く。それがノイズが出現した時の類と瞬時に判断した彼は、資料室から飛び出る。

そして走って司令室へと向かう途中、通信機が光っていることに気づく。弦十郎はそれを手にとって画面を見ると、響からのようだ。

「響君か！」

『師匠！……あれ、なにかあったんですか？』

「まだ始まったばかりで状況は俺にもわからんが、ノイズだ！ 今司令室に向かっている……っつと！」

『え!?!』

その言葉を言い終わると同時に、弦十郎は司令室に入る。既に二課の面子は大方揃っており、各々の仕事を進めていた。

「風鳴司令！」

「おう、状況はどうだ？」

「距離60000にノイズの反応あり、街からは遠く離れた郊外です。規模は……かなり大きい模様！」

「よし、翼に連絡しろ！……聞こえたな響君？」

『はい、すぐに向かいます！　ただ、あの……』

「む……そう言えば、響君から俺に連絡していたな。何かあったのか？」

『はい、えっと……。スウー、ハアー……。よし』

響にノイズの居場所を教え、向かわせようとする弦十郎。しかし彼女の歯切れが悪いことに気づき、その理由を尋ねる。

それを聞いた響は少し迷ったようだが、数秒後に意を決したように深呼吸をする。そしてその内容を、大声で口を開いた。

『師匠、ごめんなさい！　昨日戦っていたところを、友人に見られてました!!』

「なんだとツ!？」

司令室に響き渡る弦十郎の大声。その数分後、響と話し合った彼は通話を切って頭に手を置いた。

「風鳴司令、どうしたんですか?」

「ああ……昨日の戦闘、一般人に目撃されていたらしい。しかもその人物は、響君と同じ部屋に住んでいる友人のようだ」

「ええツ!？」

「それ、大丈夫なんですか?」

弦十郎の言葉を聞き、藤堯は仰天する。友里は冷静に聞き返しているが、まさかあの場に避難していない一般人がいるとは思っていなかったようで、驚きの感情を隠せてはいなかった。

「大丈夫じゃないな。一般人に見られたとあっては、なんにせよ事情を説明する必要がある。その為響君と共に一度こちらに来るよう指示したのだが……」

「だが?」

「どうやら既に随分と絞られたようだ。通信機越しだが、ノイズと戦っていた時以上に声に覇気がなかった」

「あの響ちゃんが……」

連日のノイズとの戦闘を終えても、少し休憩するだけで元気になる響。その彼女がヘトヘトになるほどの折檻だときいて、友里は思わず呟いた。

知らずのうちに二課での未来の評価が定まっていくなか、何かに気づいた藤堯が声を上げる。

「ツ、ノイズが移動を開始。数も増大しつつあります！」

「なに、どこに向かっている!?!」

「街ではありません。……これは、移動しているというよりも、何かを追いかけている?」

「ッ!!」

その言葉を聞き、弦十郎は早朝に響が言っていた言葉が脳裏に浮かぶ。

『もしかしてクリスマスちゃん、戻るところがないんじゃないかって……』

それを思い出した時、弦十郎は自分が冷や汗をかくのを感じた。そしてすぐさま指示を飛ばすために、大きく口を開いた。

「まずい、ノイズの狙いはイチイバル適合者……雪音クリスマスだ!!」

——そしてその頃、件の少女は。

「いい天気だ、さつきまで雨が降っていたとは思えねーな！」

「いやあああああああッ!!」

大空を滑空していた。炎が尾を引いていることで、その姿を遠目から見たら流れ星と勘違いするだろう。

槍にまたがり、まるで魔女のような姿勢で飛んでいく奏。しかし箒の推進力は魔力ではなく炎であり、使い魔の猫ポジシヨンのクリスは落ちたらシャレにならないので、目を閉じて全力で彼女にしがみついていた。

「おい、見てみるよクリス！ いい空だ！」

「見る余裕がこつちにあると思うのか!？」

「大丈夫、お前の身体は私がしつかり支えているからさ！ 横見る位なら平気だって！」

「だあもうチクシヨウ！ どうなっても知らないから、な……」

言うだけ無駄だ。まだ少ししか話したことはないが、クリスはそう判断する。抱きしめる力は弱めずに顔を横に向け、恐る恐る目を開く。

「——ッ」

視界の下方は緑豊かな木々で埋めつくされ、真ん中には大きな山が悠々と映り、上方は青空が広がっている。奏がどんなルートを通っているかは知らないが、このような風景があったのか。

絶景だった。今まで何かが壊れている風景しか見てこなかったクリスにとって、生命溢れるこの光景はとても眩しいものだった。

「わぁ……！」

「お、やっとなつたな？」

「なッ!?」

思わずこぼれてしまった笑みを、奏は見逃さない。そして指摘した直後に慌てて顔を赤らめるのを見る限り、あの表情は素直に出たものなのだろう。

「そいつはいい。笑える時には笑っておいた方がいいからな！」

「お前……さつきは泣けるときに泣けて言っておいて、今度は笑えだあ？」

「泣くってのはマイナスを吐き出す行為で、笑うってのはプラスを増やす行為だ。クリス、お前はさつき泣きまくったことでマイナスは帳消しになってる！」

そう言うってから、奏は笑顔をクリスに見せる。それは先程見せた優しいものではなく、少年が見せるような快活で爽快な笑顔だった。

「だったら後はプラスを増やすだけだ！ だから笑えよ、クリス！」

「……ふん」

その言葉を聞き、クリスはそっぽを向く。そして視線の先に映る風景を見て、知らずに再び微笑みが現れていた。

奏の言葉はともかく、確かにこの風景は綺麗だ。緑豊かな森に雄々しくそびえ立つ山、そして雲がちらほらある青空。そこにはまるで二人に並走するかのよう、鳥型ノイズが羽ばたいている。

「ん？」

「どうした？」

——鳥型ノイズが、羽ばたいてる。しかも結構な数の。

「……なんか、追いつかれてねえか？」

「あー、流石にガス欠か。こりや落ちるのも時間の問題だなこりや」

「何すつとんきよんなこと言つてんだお前ツ!？」

「追いつきかけてんのは、まだ鳥型だけか。……よし、しっかり抱き着きな。着地すんぞー!」

そう言つて、奏は槍の柄を下に向ける。それはつまり、出力が落ちつつも炎を噴いている龍頭が上を向くわけで——

「またかああああああああ!!」

——その日、クリスは二度風になった。

《See you Next game……》

第34話 『禁断のTrap!』

どこまでも深く、微塵も人気のない森林。

その奥地にポツンと建っている大きな屋敷。それを視認できる距離にある木の上に、グラフィイトは姿を現した。

「……………」

しばらく屋敷を睨みつけた後、再び自らの姿を崩す。そして屋敷の入り口まで瞬間移動し、扉の目の前に立った。そしてゆっくりと扉に手をかけ、押し開いていく。扉が開く鈍い音が屋敷内に響いていくが、家主は姿を現さない。

遂にグラフィイトは屋敷内への侵入を果たすが、相変わらずほかの気配を感じることはなかった。

(まさか、留守とでも言うのか?)

頭の中にその考えが浮かぶが、安易だと振り払う。常に罠を警戒しつつ、グラフィイトは屋敷内の探索を進めていった。

「……………」にもいない」

もう何個目かもわからない扉を開き、中の部屋を確認する。そして自分以外の気配を感じないことを再確認し、その扉を閉めて歩みを進めて行く。

「可能性があるとすれば、残るはあの部屋のみ」

そう呟いた直後に、グラフィアイトは目的地にたどり着く。何かあるとすればここなので、念のため最後に回しておいたのだ。

警戒を厳にし、右手に握った双刃を確かめる。そして片足を上げ、今までと打って変わって乱暴にその扉を蹴り開けた。

「やはりここが根城か。だが……」

扉を蹴破った音が部屋内に響き渡る。逆に言えば、それ以外の音は感じ取れなかった。

フィーネの研究室だろうか。大きな机を挟んだ向こう側には、巨大な機械があった。その周辺にあるのはそれに関する道具なのだろうが、その詳細はグラフィアイトにとって些事である。

索敵を終え、正面の機械に歩みを進める。その道中警戒を怠らなかつたが、家主どころかノイズの1体も見当たらない。

「……なんのつもりだ、フィーネ」

遂に機械にたどり着き、思わずグラフィアイトは呟く。しかしその問いかけに答えるものも、彼の周囲にはいなかった。

まさか本当に留守なのだろうか？ グラフィアイトの中で本格的にその予想が浮上しつつ、機械に向かってハッキングを仕掛ける。そしてわずか十数分で、彼は目的の情報を手に入れていた。

「なるほど、地下室とききたか。そこにギャラルホルンがある……が」

十中八九、罠だろう。多少苦戦したとはいえ、いくらなんでもセキユリテイが甘い。その事から、おそらくフィーネはグラフィアイトをこの位置におびき寄せたいのだ。

だが、そんなことは関係ない。なにか罠を用意しているというのな

ら、毘ごと突き破って進むのがグラフィイトなのだから。

「上等だ。何を用意してしようと、俺が為すことは変わらない」

そう呟き、グラフィイトは地下室までの道筋を調べる。そして隠されたエレベーターの位置を見つけ出し、そこに向けて移動を開始した。

「ノイズ、依然として移動中！」

「響君と翼は？」

「二人とも、現場に向けて急行中です！……あの、風鳴司令。良かったのでしょうか？」

自らの仕事をこなしつつ、ふと藤堯が弦十郎に問いかける。

良かったのか、その言葉の意味は翼の体調にある。ほぼ完治していたとは言え、昨日の奏との激闘で傷が悪化した可能性がある。そこで今日はメデイカルチェックを終えさせる予定だったのだが、ある事を聞いた瞬間に響と一緒に飛び出してしまったのだ。

「不安だが、仕方ないさ。なにせガングニール……奏君の反応が現れたのだから」

そう話す弦十郎の眼前に映るモニターには、ノイズの反応を示す円形と隣り合うようにガングニールの反応を示す円形が映し出されていた。それは二つとも移動し続けており、ノイズが追いかけているように見える。

「やはり、雪音クリスを奏ちやんが守っていると？」

「確証はないがな。……事情を知るためには、二人が現場にたどり着くしかない。それまで気を緩めるなよ！」

『はい！』

弦十郎が櫛を飛ばし、司令室の面々がそれに答える。それを見た彼は領き、後方にいる二人の様子を見るために振り向いた。そこにはソファに座る未来の姿があり、調書をとるために女性が話を聞いている。

「——ふむふむ。で、グラフィイトとの出会いは？」

「出会って……何もありませんよ！ こっさり見ていたのがバレて、邪魔だからさっさと立ち去れと言われただけです」

「それがそうでもないの。彼が話しかけること自体が珍しいことなのよ？ 普段は襲い掛かるか、無視しているんだから」

「ああ……」

女性の言葉を聞き、未来は納得するかのように呟く。その様子から見ると、すでに彼の性格は多少把握しているのだろう。

弦十郎はそう考え、話を聞いている女性に声をかけた。

「了子君、進み具合はどうだ？」

「ほぼ完璧。おかげさまでこっちが聞きたいことは全部分かったわ……って、そうだ」

書類を見ながら女性——了子は答え、途中で何かを思い出したよう

に手をポンと叩く。そして視線を弦十郎から未来に戻して口を開いた。

「未来ちゃん、私たちに聞きたいことがあるのよね？」

「……はい。響がどうして戦えるようになったのか、それが知りたいんです」

「それを聞いて、君はどうしたいんだ？」

未来の言葉を聞き、弦十郎はそう問いかける。響の報告を聞く限り、彼女は響が戦っていることに対して大層ご立腹だったらしい。

つまる所、当たり前だが未来は響が戦うことに対して反対なのではないか。弦十郎はそう考えている。本来は機密保護のため話すことはできないのだが、理由も聞かずに拒否しても彼女が納得するはずもない。そのため、まずは話を聞く必要があった。

「支えたいんです」

「響君を？」

「はい。理由はまだ知りませんが、響はノイズと戦える力を持ち、そしてノイズと戦うことを選択しました。なら、もう私に止める権利はありません」

だがその問いかけに対する未来の答えは、弦十郎の予想とは違っていた。なにか思うところがあるのか、彼女は思い出すように目を閉じながら話していく。

「だから、響が思う存分やりたいたいことができるように支えたいんです。そのためにも、響が戦うようになった経緯を教えてくださいませんか？」

ゆっくりと目を開き、弦十郎と了子をしっかりと見つめる。その意志は固く、纏う雰囲気は先程響を見送った時の柔らかいそれとはかけ離れていた。

「つと、そこだ！」

背後から迫りくる気配を探り、飛び込んできたノイズを的確に迎撃する。だが深追いすることはせず、すぐさま正面を向いて走り出した。

「ツチ、本当にしつこいな。そんなにこいつを消したいってのかわ……！」

「だから離せて！ あんたなんかいなくても、あいつら程度あたし一人でも！」

「無茶が過ぎるんだよ！ さつき詠えなかったお前が残るなんて、自殺行為もいとこだ！」

背中ではクリスが叫ぶが、奏はそう言い返して走り続ける。彼女の言葉の通り、この追いかけては始まってから既に十数分が経過していた。途中からノイズが増加することはなくなったが、それでもかなりの規模だ。その大集団がクリス——ひいては彼女を守っている奏を狙っている。

その事に途中で気づいたクリスは、すぐさま奏から離れようとする。しかし尻尾に押さえつけられて離れられそうになく、こうして呼びかけることしかできなかった。

だが、そんな戯言を奏が聞くはずもない。そう言い返して、彼女は走る速度を更に上げた。そのスピードは乗用車並みであり、おかげでノイズの大波にのまれることはなさそうだ。

「だが、それ以外に方法はねえ！　こうやって逃げ続けるよりも、あたしを下ろした方があんたは生き残れるだろ！」

「——ッ」

「あたしのことなんて放っておいて、自分のことを優先しろよ！　あたしを助ける理由なんざ、何もないだろうが！」

「——ッ!!」

言葉に詰まった奏を見て、クリスはさらに言葉をたたみこんでいく。

あのノイズの狙いは自分だ、この人は関係ない。奏と別れて単独行動をすれば、必ずノイズはこちらを追いかけてくるだろう。

そう判断したクリスは、彼女におろしてもらおうよう口を開いて——

「さっきのは偶然だ、今度はちゃんと纏ってみせる！　だから——
——イ、ッ!?!」

その言葉は、頭部に衝撃を受けたことで中断された。どうやらクリスを押さえつけている尻尾の先端が、器用に彼女の頭を叩いたようだ。

なにをやるんだ。そう言おうとクリスは正面を見るが、その言葉が口から出ることはなかった。

「舐めんな!! そんなことして生き残っても、私は私を許せねえ!」

そう叫ぶ奏の横顔は、とても険しい。間違いなく今の彼女は怒っている、そう直感で感じたクリスを尻目に、再び正面を向いた奏は口を開く。

「理由が欲しいのなら言ってみようよ。私はな、あの時にお前を助けると決めたんだ!」

「ツ、んなことあたしは頼んだ覚えは——!」

「私が、助けると決めたんだよ! お前がどう思おうが、知った事か!」

「私が私であるために、お前を、雪音クリスを助ける! 理由なんてもん、それだけだ!」

そう言い切って、奏は勢いのまま跳躍した。崖上の地表は数メートルも上にあるのだが、道中何度も加速して上昇していく。

そして頂上に着地し、ノイズを見下ろす。鳥型ノイズはともかく、それ以外はここまで来るのに時間がかかりそうだ。その鳥型ノイズも地表のノイズを待っているのか、奏たちの元には近づいて来ない。

「よし、これで少し時間が稼げた」

「……おろしてくれ」

「まだ言ってるのか?」

「大丈夫、ここから離れることはしねえよ」

奏の背中中、クリスは呟く。先ほどまでの反抗っぷりが嘘のようにおとなしく、静かに提案していた。

その様子を見て、奏はしばし考えてから尻尾を下ろす。これによってようやく自由になったクリスは降り立ち、胸のシンフォギアを握りしめた。

「はい待った」

「ッ、あんただけじゃこの数のノイズはきついだろ。……あたしも」

「なんか勘違いしてるみたいだけどな、別にクリスが戦う必要はない」
「はあ!？」

サラツと言う奏に、クリスは驚いて詰め寄る。

まだ時間があるとはいえ、周囲には多数のノイズがいる。奏の実力を知らないクリスにとって、彼女の言葉は無謀としか思えなかったのだ。

「何言ってるんだ、あたしはイチイバルを使える！ だからノイズをぶっ潰すこと、当たり前前の事だろうが!？」

「違うね」

クリスの怒号に対し、奏は素早く言い返す。そしてクリスが何か言うよりも早く、次の言葉を紡いだ。

「確かにお前は、ノイズと戦える力を持っている。だけど、それだけじゃ足りないんだ」

「それだけ……だって?」

「それだけさ。戦う覚悟を持つにはあと1つ、戦うことを選択が必要だ」

「選択……なら、とつくに決めてる!」

「お前のは決めたんじゃなくて、決めさせられたんだよ」

そう言つて、奏はクリスの頭に手を置く。そして少ししやがみ、視線を合わせて口を開いた。

「今のクリスには、戦わないという選択肢が初めてある。もしそれを選ぶのなら、私が安全にお前を逃がしてやるよ」

「何を勝手な……ッ！」

「いつでも一人、なんでも壊しちゃう、こんなはずじゃないことばかり、あと……」

「——ッ!!」

言い返そうとするが、いくつかの言葉を並べていく奏を見て、クリスは顔を真っ赤にして口を塞ぎにかかる。それは今朝、彼女が泣きながら話してしまった内容だった。

必死に口に手を当てようとする姿を、奏は笑いながら回避している。そしてふと表情を元に戻し、クリスの手を取った。

「少なくとも、ここには私がいる。んでその気になりや逃げれる以上、なんでも壊しちゃう力をクリスが使う必要はない」

「……………」

「ま、これ以上は言うだけあれだな。決めたら教えてくれ、言っとくがあまり時間はないぞ？」

周囲の警戒を緩めないよう注意しつつ、奏はそう話す。そして黙って考え込むクリスから離れ、崖下を見下ろした。ノイズの集団は仲間を土台にして上ってきており、その距離は当初の半分ほどになっている。

近づいて来るその様子を眺めつつ、奏はガシャコンバグヴァイザーの2つのボタンを同時に押す。そして待機音が響く中、再び紫色のボタンだけをもう一度押した。

『CRITICAL BLAZE!』

「今度は本来の使い方だ、焼き尽くしてやるよ！」

再び槍の鏢、その部分にあたる龍の頭部が巨大化し、炎を噴き出す。今度は奏の正面に放たれたそれは、視界に映るノイズを焼き尽くしていく。その火力は高く、塵も炭も残らない程だ。

クリスを守る以上、ここから離れるわけにはいかない。彼女が選択するその時まで、この場から動くことはできないのだ。

「おらおらおらあッ!!」

植物に燃え移らないよう配慮しつつ、次々にノイズを燃やしていく。ある程度倒したところで炎の勢いが弱くなっていくが、銃身を展開し砲撃することで火力をカバーしていた。

だが、いくらなんでも1人では限界がある。ある程度地上のノイズを処理することはできたが、ふと視界に映るものを見て、僅かながら頬に汗が垂れていた。

「超大型ノイズ……あれが来る前に決めたいところだな」

そのわずかな隙をついたのか、いつの間にか空中に多数の鳥型ノイズが展開している。地上のノイズを倒し過ぎたことで待つ理由がなくなつたのか、奴らは今にも攻撃を始めそうだ。

それを見た奏は長剣も展開し、迎撃の構えをとる。それに反応したのか、空中のノイズが身体をねじれさせていく。同士討ちなど構わないのでだろう、彼女の周囲にいるノイズ全てが同じように攻撃の準備をしていた。

準備を終えたノイズは同時に動き出し、奏に殺到する。それを迎撃するため、彼女は武装のすべてを展開し――

「Killter Ichaiival tron」
――MEGA DEATH PARTY――

——背後から放たれた多数のミサイルによって、ノイズが爆発していくのを眺めていた。

後ろから一歩ずつ踏み締める音を聞きつつ、奏は長剣と銃を収納する。そして隣に並んで立ったクリスを見ずに口を開いた。

「いいのか？」

「……どうあがいたって、あたしの力は変わらない。なんでも壊しちまう力、それがあたしの力だ」

そう静かに呟きつつ、クリスは超大型ノイズを睨みつける。そして両手のボウガンを買トリングに変形させ、銃口をノイズに向けながら口を開く。

「だから決めた。なんでも壊すのなら、ノイズだけを……私の敵となる物だけを壊してやる」

「……クリス、お前の戦う理由は？」

そう問いかける奏。彼女をの方を振り向いたクリスはしばらく考え込むようなそぶりを見せるが、吹っ切れたような表情で笑って口を開いた。

「あたしの居場所を守るためだ、悪いか!？」

「グツドだ!」

奏はそう叫び、槍の矛先を同じように超大型ノイズに向ける。いざ参ろうと意気込む二人だったが、ふと後方から何か近づいてくる音を聞きとった。

「こいつはいい、ナイスタイミングだ」

「この音……ヘリコプターか？」

その正体に気づいた奏はニヤリと笑い、クリスは視線だけを背後に向ける。

そしてヘリコプターが二人の背後まできたのを確認し、奏は好戦的な笑みを浮かべてノイズの集団を睨みつけながら口を開いた。ヘリコプターから降りてくる、二人の人物の気配を背中で感じ取りながら。

「Balwisyall Nescell gungnir tron
n」

「Imyuteus amenohabakiriron」

「さあ……こっから反撃だ!!」

足音だけが、暗い廊下に響いていく。

エレベーターを見つけ、無事に地下室にたどり着いたグラフィアイト。手に入れた情報を元に進んでいき、ある部屋の前で立ち止まった。

「……やはり気配は感じない」

そう呟き、静かに扉を開ける。今までの狭い空間とは打って変わっ

てその部屋は広く、その中央にある物体以外は何もない。それがこの部屋の広さを助長している。どこか既視感のある部屋にグラフィアイトは少し違和感を抱くが、正面の物体を視認した瞬間、その思考は消え去った。

中心にある物体。宙に浮いているそれは巨大で、法螺貝のような形状をしている。それを見たグラフィアイトは、記憶にあるそれと形状が一致していることを確認し、口を開いた。

「あれが、ギャラルホルン」

そう言つて、歩みを進める。周囲への警戒は怠らないが、相変わらず何か動くそぶりは見えない。

そして遂にギャラルホルンの目の前までたどり着く。光を点滅している様子を見る限り、少なくとも起動自体はしているようだ。

「ようやく見つけた。こいつさえあれば、俺は……!」

その言葉と共に、ギャラルホルンに手を伸ばす。フィーネが留守なのは気がかりだったが、これを回収できるのはかなり大きい。

そして遂に手が触れ――

「――なッ!?!」

――触れた直後、周囲の風景は一変した。

真つ暗な部屋から、広い草原に。グラフィイトがギャラルホルン以外何もない空間を見渡していると、ふと目の前にパネルが現れる。

『ステージ1・草原』……この部屋は、シミュレーションルームか！』

先程抱いた違和感の正体を見抜き、グラフィアイトは先程までの自分を恨む。

毘だとはわかっていた。しかし、ギャラルホルンを目の前にしたことでつい油断してしまったのだ。

だがこうなった以上、反省は後回しだ。グラフィアイトがそう判断すると同時に、そこから声が響き渡る。

『毘だとわかっているのに踏み込むか。随分と舐められたものだな？』

「……………」

『気配を探しているようだが、生憎と私はここにはいない。お前はこの部屋を悟られるわけにはいかないからな』

「まさか、これで俺を閉じ込めたつもりか？」

『ええ、そうね』

草原に響き渡る、フィーネの声。その言葉を聞いたグラフィアイトは目に見えて不機嫌になり、双刃を握る手に力がこもる。確かにシミュレーションルームは出口が見えない密室だ。だが機械で制御している以上、瞬間移動で脱出することができる。

「舐めているのは貴様だ!! この程度、すぐにでも——！」

『そう、お前はすぐにでもその空間から出ることはできる。そんなことは知っているさ』

『なら、これならどうだ？』

——その直後、背後から迫りくる気配を感じ取って振り向く。そこには身体を振らせたノイズが複数体いて、振り向いたと同時に攻撃し

てきた。

「何を今更……、ッ！」

呆れた声色で呟くが、その途中で何かに気づいて素早く行動に移す。ギャラルホルンを飛び越えるように跳躍し、飛んできたノイズを双刃を持って迎撃した。

危なげなくすべてを打ち落とすことに成功するが、周囲に新たなノイズが出現する。それを見たグラフィイトには先ほどまでの余裕がなく、怒りのあまり身体が震えていた。

そしてその様子をあざ笑うかのように、淡々とフィーネの音が響いた。

『私にとって、それはもう不要の産物だ。元々お前と同盟を結ぶために手放す予定だったんだ、今更未練はない』

「……………ま」

『脱出したければするがいい。それを遮ること等、私にはできそうにない』

「……………さま」

『だが……そこにあるギャラルホルンは、果たして共に脱出できるかな？』

「貴様……………！」

——先ほどの攻撃、ノイズの狙いはグラフィイトではなくギャラルホルンだった。それに気づき、狙いを察知したからこそ彼は憤っていたのだ。

『元の世界に戻る可能性を失いたくなくば、死ぬ気で守れ。このいつまでも続く、永久の空間でな！』

「貴様アアアアアアアアッ!!」

その怒号の中、数多のノイズは完全聖遺物を壊すために攻撃を開始した。

《See you Next game……》

第35話 『ふぞろいのPlayers!』

「ハアッ！」

跳びこんでくる8体のノイズ。攻撃する順番を瞬時に見極め、双刃を持って次々に切り裂いていく。

最後の8体目は突き刺し、それを後方へ投げ飛ばす。勢いよく投げ飛ばされたノイズは後方から奇襲してきた別のノイズとぶつかり、共に地面に倒れる。

「ドドド、黒龍剣!!」

その隙を逃がさず、グラフィイトは大技を空中に向けて叩きこむ。無数の剣戟は空に散らばっている球体に次々にぶつかり、大きな爆発を引き起こす。また迎撃と同時に攻撃もしており、爆発物を飛ばしていたノイズにも剣戟が迫る。回避することは間に合わず、奴らは球体と同じ運命をたどって爆発した。

だが、グラフィイトが気を緩めることはない。その理由を示すかのように、爆発によって生まれた土煙の向こうに無数の影が出現し始める。その数はちょうど、先程倒したノイズの数と同じくらいだろう。

「……随分と懐かしい光景だ」

土煙が晴れ、先程から変わらない光景が写る。グラフィイト、と言うよりはギャラルホルンを中心に、その周囲にノイズが高密度でひしめいている。

そしてその様子を見るグラフィイトの視界の端には、「フェイズX」と表示されたパネルが浮かんでいた。

「進化した俺である以上、こいつらは敵ではない……が!」

今度は同時に襲い掛かる数を倍に増やして、次々にギャラルホルンに襲い掛かるノイズ。それを察知したグラフアイトはギャラルホルンを足場に跳躍し、そのすべてを迎撃していく。

時に切り裂き、時に突き刺し、時に蹴り飛ばす。いつぞやの時は違い、今のグラフアイトはプロトガシヤットの力でパワーアップしている。事実その時も、この形態になってからは楽勝だったのだ。これほどのノイズを用意したところで、彼を倒すことは叶わないだろう。

だが、この戦闘において重要な事はそこではない。フィーネはグラフアイトをこの場に押さえつけるために、ギャラルホルンという完璧に近い罠を用意したのだから。

「ギャラルホルンの力は、完全聖遺物だからこそ。こいつらの攻撃をまともに食らえば……」

力を維持できる保証はない、その予想がグラフアイトの脳内をちらつく。そしてそれを暗に示すかのように、ノイズはギャラルホルンを執拗に狙い続けていた。

ノイズの迎撃を行いつつ、頭の中で対策を立てようと思いを始める。この場にはグラフアイトしかない以上、苦手だとしても自分一人で考えるしかないだろう。

現在、グラフアイトが取れる手段は主に3つある。

1つ目、移動能力を用いて脱出する。これは最初にフィーネも言っていたことであり、この方法でなら脱出することは容易だ。だがギャラルホルンを放っておくことになり、そこにノイズの攻撃は殺到するだろう。この選択をとること等、グラフアイトにはできなかつた。

2つ目、終わるまでノイズを倒し続ける。以前は既定の回数、ノイズを倒し続ければシミュレーションは終了した。だがそんなこと、フィーネが予想していないとは考えにくい。何かしらの対策をして

いると考えるのが妥当なので、優先度は低めだ。

3つ目、ギャラルホルンを持ってこの場から脱出する。いくら広大な草原でも、元はそこまで広くない部屋だ。出口さえ発見できれば、ギャラルホルンを持ってそこから脱出することができるだろう。後は安全な場所にギャラルホルンを保管すれば、いつも通り戦えるようになるはずだ。

「……これ以上は考えるだけ無駄だな」

一旦思考を止め、辺りを見回す。周囲にはノイズの姿しかなく、出口は見えそうにない。

当たり前だが、グラフィアイトは3つ目の選択肢を実行しようとしている。彼の目的を達成するにはギャラルホルンは必要であり、フィーネの用意周到さを考えると終わるのを待つのは賢明ではない。達成の難易度は一番高いが、やるしかなかった。

もしこの場にかつての仲間がいれば、グラフィアイトが時間を稼いでいる間に策を考えてくれただろう。そしてその策がどんなに難しいものだとしても、彼はそれを実行し、達成するはずだ。

だがこの場には、グラフィアイトしかない。策士がこしらえた計略の網を、彼1人で抜け出すしかないのだ。

「上等だ。……たとえガングニールがなくとも、この程度の雑魚など全て捻りつぶしてやる！」

自らを鼓舞するようにそう叫び、双刃を構えて迎撃の構えをとる。それに呼応するかのように攻撃を開始したノイズの波に向かい、グラフィアイトは再び双刃を振るった。

「これでフィニッシュだ!!」

「この一撃、受けてみる!!」

――DRAGOKNIGHT CRITICAL FINISH

!――

――天ノ逆鱗――

炎を纏った槍と、巨大化させた剣。それぞれの獲物で奏と翼は超大型ノイズに突撃する。その勢いは衰えることなくノイズの胴体を突き抜け、二人が通った後には巨大な穴が二つ空いていた。

「おりゃああああッ!!」

「吹っ飛べ!」――BILLION MAIDEN――

大空で超大型ノイズが爆発する音をBGMに、勢いよく振るわれた響の拳が地面にぶつかり、衝撃波でノイズを吹き飛ばす。そしてクリスが放つ弾丸の大雨がその隙を逃さず、ノイズの肉体を食い破った。

「オマケだ、こいつも持ってけ!」――MEGA DEATH PART

Y――

ダメ押しとばかりに放たれた数多のミサイルが、残っていたノイズを1つ残らず吹き飛ばす。土煙がようやく晴れた時、彼女たちの敵は1体も残っていないかった。

「これで一段落、と。……あの野郎、諦めたか？」

変身は解除しないが、槍を肩に担いで緊張を解く奏。しかしその表情はどこか納得していないようで、空を眺めながら考え事をしていった。

「奏……？」

「あ？……ああ、なんでもねえよ。この身体の便利さを、改めて実感してただけさ」

その様子を見た翼は、疑問に感じて奏に問いかける。それを聞いた彼女は軽く手を振ってから、その手を見つめつつ答える。

先程の戦闘、移動時間を加味すると奏は30分以上この鎧を纏っていた。以前はシンフォギアを纏った場合、LINKER込みでも数分間が限界だったのだ。それが今ではこの通り、正規適合者である翼たちと遜色ない継戦能力を手に入れていた。

「ッ……奏は、その身体になってよかったというの？」

だがその言葉は、翼に悪い意味で伝わったようだ。悲しそうに目を伏せ、先程よりも小さな声量で再び問いかける。

翼は以前から、奏を人間から逸脱させてしまったのは自分のせいだと考えている。その仇をとるために必死に鍛え、グラフィートの正体を知ってから奏を取り戻すことを決意していた。だが肝心の奏はグラフィート側に付き、彼女の元には戻らない。洗脳されている可能性も考えられたが、奏の言動が本人そのままだったので、その可能性は低いと結論付けていた。

昨日の戦闘こそ思う存分ぶつかり合ったが、逆に出し切ったことで寂しさが込み上がってきたのだ。それによって密かに不安になった所に発せられた、先程の言葉。

響がクリスにじやれついている為二人から離れており、この場に奏と翼しかいないからこそ、彼女は心の不安を素直に口に出していた。

「そうだな。……よかつたものにも、この身体になることを望んだのは私だし」

「……それ、どういうこと？」

その問いかけに込められた感情を察し、奏は無意識に呟いてしまふ。その言葉を聞いた翼は驚愕して詰め寄るが、そこで自分の言ったことに気づいた彼女は慌てて口を開いた。

「つと、待て翼。このことは、まだ話すわけにはいかないんだ」

「どうして？ グラフアイトに脅されているの？」

「いや、違う。……まあこの内容は指令室に筒抜けだし、いいか」

チラリと翼が持つ通信機を見て、電源がオンになっていることを確認する奏。そして彼女に近づき、響たちに聞こえないよう耳元で口を開いた。

「旦那たちだつて気づいてんだろ、内通者のことをさ？」

「ッ!？」

「詳しいことはまだ何も言えない。でもこの件がひと段落したら話に行くよ……それじゃダメか？」

なぜ奏が二課内にいるであろう内通者のことを知っているのか、翼は驚きつつ疑問を抱く。その言葉は二課司令室にも届いており、そこにいる面々もまた、翼と同じような感情を抱いていた。

『……奏君、聞こえるか？』

「おや、旦那」

そして数秒後、通信機から弦十郎の声が聞こえる。それに対し前と変わらぬ返事をした奏の声を聞きつつ、彼は口を開いた。

『なぜ君がグラフィアイトと共に行動するのか、俺たちにはわからない。なぜ内通者のことを知っているのかもな』

「ハハハ……そいつはまだ秘密」

『だが1つだけ言えることはある。奏君、君の部屋は今もそのまま残してある。……一段落したら、必ず顔を出すんだぞ』

「ツ……あいよ」

弦十郎の穏やかな声を聞き、奏は少し言葉に詰まりながら返事をする。

そして振り返り、響とクリスの方に向かって歩きだす。翼はその後を追いかけるが、彼女の背中が嬉しそうに揺れているのを見逃さず、その用を見て微笑んでいた。

「よう、お前ら平気か？」

「えへへー……あ、奏さん！ はい、私は平気へっちゃらです！」

「だから離せて……って、ああ。余裕に決まってるだろ？」

未だにじゃれついている二人に奏が声をかけると、各々違った反応を見せる。響は奏の姿を見てうれしそうに声を上げ、クリスはそっぽを向きながらぶつきらぼうに返事をする。ただその頬が赤らんでいることから、照れ隠しであることは誰の目にも明白のようだ。

「ならいいさ。……で、クリス」

「なんだよ？」

「単刀直入に聞くが、これからどうする？」

「……………」

奏の問いかけに対し、無言で考え始めるクリス。その様子を見て、

やっぱり何も考えていなかったかと彼女は少し呆れた。

戦う理由は決まったし、これからやることも先ほど考えて決まった。だが問題点として彼女は家無しであり、このままでは野宿生活になってしまうのだ。あくまで昨日はグラフィアイト達の拠点に宿泊しただけであり、あそこに住み着いているわけではない。この問題は早急に解決する必要があった。

「フイーネと戦うってことは言わなくてもわかる。が、体調を万全にできなきゃ出せる力も出せないぞ?」

「うぐッ」

「なら二課においでよ、クリスちゃん! 師匠、いいですよね?」

『ああ、むしろ大歓迎だ』

クリスが宿なしであることを知り、喜々として声をかける響。二課ならば彼女をノイズから守れるし、宿に食事もつく。弦十郎の許可が必要だが、絶対に許可してくれるという確信が響にはあった。そしてその予想通り、通信機越しに彼は許可を出す。

だがその言葉を聞いて、クリスの顔は微妙なものだった。真正面から拒絶することはしていないものの、まだ許容することはできないという表情だ。

「あー……そいつは断らせてもらう。あたしはまだ、大人を信じることが怖い」

「クリスちゃん……」

「信じれない、とは言わないんだな」

「……まあな。パパとママは夢を見て戦場に行き、結局死んだ。あたしは前まで二人を無謀な夢想家だと思ってたんだけど、今は何か意味があったんじゃないかと思ってる」

奏が静かに問いかけ、クリスは3人に背を向けて空を見上げながら答える。両親のことを思い出すその表情は切なげで、以前のように怒

りは含まれていなかった。

「そう言うの、一度じっくり考えてみたいんだ。なんでそう言うことをしたのか、誰かの言葉じゃなくあたしの言葉で考えてみたい」

「……………」

「んで、だ。もしあたしの中で結論が出て、その時でも受け入れてくれるってんなら……………考えてやるよ」

「ッ……………やったー!!」

「のわッ!？」

照れくさそうに頬を掻き、決して響の方を見ずに話すクリス。そして最後の言葉を聞いた彼女は表情を明るくし、クリスに飛びついた。既にシンフォギアは解除していたため引きはがせず、二人は再びじゃれあいを始める。

「離せつての! あたしたち、こないだまでやりあってたんだぞ!？」

「関係ないよー! クリスちゃん、私待ってるからね!」

「ああもう、お前本当の馬鹿!!」

「ま、あの様子なら大丈夫だな」

「そうね。……………で、やっぱり奏が?」

「ああ、とりあえず落ち着くまでは私が面倒みる。グラフィイトに許可ももらったことだしな」

二人の様子を眺めつつ、言葉を交わす奏と翼。その表情はとても穏やかで、まるで後輩を見守る先輩のようだった。

「……………そう言えば、グラフィイトは今日いないのね。てつきり私たちと戦いに来ると思っていたのに」

「何も知らないのか?」

「なにが？」

「……いや、なんでもない」

奏の言葉を聞き、翼はずっと抱いていた疑問を投げかける。それを聞いた彼女は、翼がグラフィアイトの行方を知らないことを知って眉を顰める。

グラフィアイトはフィーネの拠点を襲撃したはずだ。敵の本拠地である以上何かしらの防衛機構があるはずだし、それと戦闘すれば二課が察知できるだろう。

(まさか戦闘をしなかったってか?……なんか妙だ)

はぐらかすように翼に返事した後、奏は内心そう思いつつ二人が落ち着くのを待っていた。

《See you Next game……》

第36話 『張り巡らされたYarn!』

「うわ、本当に変わってねえ」

とあるマンションの一室。そこにブロック状の粒子がどこからともなく集合し、奏が姿を現す。その顔は苦笑しており、今いる部屋の景色が自身の記憶と寸分たがわぬ事に半分驚き半分呆れているのだろう。

奏は自分が現れた場所——かつて使っていた部屋がほとんど当時から変わっていないことを確認する。当時のことを思い出して呟きつつ、窓のロックを外す。そしてベランダに出て、そこから飛び降りた。

「よっ……と」

「どうだ？」

「問題なし、多分いけるだろ」

この部屋は5階にあり、普通ならば飛び降りれば無事では済まない。だが大きな音を立てることもなく奏は着地し、その様子をクリスは特に気にせず声をかける。

「んじや行くぞ、クリス」

「……わかった」

奏は返答しつつ、クリスに向かって両手を広げる。彼女は数瞬躊躇したが奏に近づき、全体重を預ける。所謂お姫様だっこの状態で奏は跳躍し、飛び降りた部屋のベランダに危なげなく着地した。

二人とも部屋に入り、クリスはソファに腰かけて息を吐く。4人がかりで挑んだノイズ戦は快勝だったのだが、彼女の身体は鉛のように動かなかった。

「ああもう、つつかれた……」

それもそのはず、昨夜から現在に至る半日だけで様々なことがありすぎたのだ。

フィーネによる裏切り。グラフィイトの叱責によるアイデンティティの崩壊。奏の優しさに触れたことによる本音の吐露と戦う理由の再構築。そして大量のノイズからの逃走と戦闘、ついでに纏わりつく響を剥がす作業。

立ち直ったとはいえ、彼女の身体……というより精神は疲弊しきっていた。二課の奏者と別れてからここにたどり着くまでの間、何度か舟をこぐほどに。

「フウ……」

「ハハ、お疲れ様。……ほれ」

「ん？」

顔を向けると、奏が両手に1つずつ持つコップの内、片方をクリスに向けている。先ほどから台所で何かやっていたが、どうやらここに来る途中買っていた飲み物を温めていたみたいだ。

「ホットミルクだ、疲れた時にはこれってな」

「……ありがとう」

クリスがコップを受け取ったのを確認した奏は、隣に座ってコップの中身を飲む。それを横目に見ながらクリスも飲み始め、半分ほど飲んだところで確認もかねて質問を投げかけた。

「なあ、本当にここは大丈夫なのか？」

「多分だけだな。あの言い方からして時々掃除に来てくれているみたいだけど、直近はここ数日だ」

埃一つないし、そう言いながら奏はリビングを見渡す。彼女がこの部屋の主ではなくってから数年経っているのだが、全体的に綺麗な状態が維持されている。定期的に掃除されていることは明白だった。それは直近の掃除された日が近いことも同様で、次掃除に来るまでに期間が空いているという事だ。

「そんなわけで、数日間ならここで過ごせるだろ。で、今日はもうするんだ？」

「どうする、って言われてもなあ……」

奏の問いに対し、クリスはコップ内の牛乳の表面に映る自分の顔を見ながら考え込む。

自分の戦う目的は、自分の居場所を守るため。すべて壊してしまう力でも、その矛先は居場所を壊そうとする者だけにする。それが雪音クリスの覚悟だ。

そして現状クリスの居場所を壊そうとしている存在、それは間違いなくフィーネと彼女の操るノイズだろう。そしてクリスは受け身の姿勢で動くつもりはさらさらなかった。

「フィーネの屋敷にもう一度向かって、アイツをぶっ飛ばす。……が、目標なんだけど」

「今すぐに向かうのか？」

「いや。今日は休んで、コンディションをバッチリにしてから行く」
「だな、私もそれが良いと思う」

奏も多少疲れているのだろう。グーツと両手を伸ばして身体をほぐしながら同意する。クリスだって多少の無茶なら今すぐにでも行きたかったが、今回の出来事は多少と言う範囲では収まり切りそうにない。だからこそこの選択を選ぶことができていた。

そこまで考えたところで、今までよりも大きな眠気がクリスを襲

う。そろそろ限界に近いのだろう、昼寝にはちょうどいい時間帯だと彼女は鈍った思考で判断した。

「……とりあえず一回、寝る」

「おいおい、なんでここで寝ようとしてんだ。向こうにベッドがあるだろ？」

「どっちも同じだろ？……それにもう、限……界……」

一度瞼を閉じてしまったが最後。午前中、ノイズ逃走時に急降下した時のように、クリスの意識は暗闇に落ちていった。

「……おいおい、本当に寝ちゃった」

ため息を吐きつつ、クリスの身体を抱き上げて運ぶ。相当疲れていたのだろう、ベッドに寝かせても起きる様子は微塵も感じなかった。

「でもまあ、それはそれで都合がいいか」

そう呟きつつ、奏はリビングに戻ってソファに座る。そして置いてある自分用のコップを持ち、残っている飲み物——コーヒーを飲み干した。

（あいつと最後に別れてからもう何時間も経っている。……けど、相変わらず音沙汰はない）

グラフィアイトは意外と律義な性格で、長時間出払う際は連絡を入れるか、書置きを残している。そして買い物に行ったついでに一度拠点

に戻ったみたのだが、その類のものはなかった。

ただ単にグラフィイトが拠点に立ち寄らなかつたという可能性もあるのだが、奏は先程から嫌な予感がしていた。

（グラフィイトが襲撃したつてのに、戦闘が一切なかつた？……ありえねえ）

先程の翼たちとの会話から、あの戦場以外で爆発やノイズの反応はなかつたことは把握している。だからと言って、あのグラフィイトが潜入して奇襲をするようにはとても見えない。

妙だ。奏が戦闘中に抱いていた疑問は、今はほぼ確信に変わっていた。

「罨……なのかはわかんねえけど。とにかくあいつに何かあったのは間違いないな」

しょうがない、クリスも寝たことだし様子を見に行こう。そう考えた奏は立ち上がり、意識を集中させる。今の彼女なら、場所を思い浮かべるだけで瞬間移動が――

「……………あ、フィーネの拠点の場所聞いてねえや」

——どうやら彼女が次の行動を起こすには、眠り姫が目覚める必要がありそうだ。

「だー、ハマった……しょうがない。念のため、あれの準備だけでもしておくか」

頭の中でそう切り替え、今度は別の場所を思い浮かべる。すると奏の身体が崩れ、ブロック状の粒子となってその場から消えていった。

「あそこが休憩室。ノイズがないときは結構人がいてよくおしゃべりするんだ」

「そうなんだ。……それにしても、学校の地下にこんな基地やシェルターがあるなんて」

「まさしく秘密基地って感じだよね！」

「フフ、そうだね」

基地内の廊下を歩く、響と未来。

了子による事情聴取も1時間前に終わり、未来はこれから外部協力者として二課に移植登録することとなった。それを聞いた響は嘘をつく必要がなくなると喜び、こうして二課の案内を買って出たのである。

「それで今度はあっち。あそこに……あつ！」

「どうしたの？……あ」

「翼さんだ。翼さん！」

「む？ ああ、立花か」

「……すごい、本当に翼さんだ」

指を刺した方向から誰かが歩いてくるのが見え、その内1人が翼だとわかった響は手を振って彼女に駆け寄る。その声はすぐに届き、彼女もまた微笑を浮かべて手を軽く挙げた。

それを見た未来もついていく。しかし、超がつくほど有名人である翼と親友の響が普通に話しているのを見て、今朝がた響から聞き出し

た情報が本当であることを再確認する。まあ、どう考えてもあの時の響に嘘をつく余裕などないのだが。

そして翼は追いついた未来の姿も確認し、響に問いかけた。

「こちらは？……たしか、外部協力者の」

「えっと、こんにちは。小日向未来です」

「私の一番の親友です！」

「そうか。……立花はこういう性格ゆえ、色々と面倒をかけると思う。支えてやってくれ」

「え？」

翼の言葉を聞き、呆ける響。またその言葉をかけられた未来も内心驚いていたのだが、同時に察する事も出来た。

彼女もまた、響の最速で最短に一直線な性格を知っているのだと。

「……いえ、響は残念な子ですので。ご迷惑をおかけしますがよろしくお願いします」

「え？」

「フフ……ああ、承知した」

「はい、こちらこそ！」

「ええ？」

そう言葉を返すと、翼は意味を受け取ったのか笑みが少し深くなる。その様子を見て未来も微笑み、間にいる響は突如通じ合った二人に混乱していた。

「えっと、どういうこと？」

「立花さんを介して、お二人が仲良くなったということですよ」

「そうなんですわね！……あれ、なんかはぐらかされた気がする？」
「ウフフ」

わけもわからず放たれた眩きに対し、翼の隣にいた緒川が返す。それを聞いた響は笑顔を浮かべるが、その後疑問符を浮かべると共に顔を傾げる。その様子を見て未来は再び笑い、翼は声こそ出さないが笑顔を浮かべる。その様子を見た緒川もまた、別の意図があったが笑顔を浮かべていた。

3人ともほほえましそうなものを見る表情で居るのを見た響はなんだか気恥ずかしくなり、無理やり話題を変えにかかる。

「こ、こそばゆいですけど、こうして未来と一緒にいられるのは嬉しいです！ これも師匠のおかげで……あれ、そういえば師匠は？」

「ああ、私たちもメディカルチェックの報告のために探しているのだが……」

「どうやら外出中らしく、戻ってくるまで休憩室で待機しようとしていたのです」

「そうなんですか。なら私たちも——」「あらいいわね、ガールズトーク？」——了子さん？」

響の問いに対し翼が答え、緒川が続ける。それを知った響はついて行こうと提案しようとするが、背後から了子の声が聞こえたので中断して振り向く。そこには普段と同じ様子の了子と、普段とは違う様子の藤堯が立っていた。

「どこから突っ込むべきか迷いますが、とりあえず僕を無視しないでください。……そして藤堯君、大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃ、ないです……」

「しゃんとしなさい、男の子でしょ？ もー、今日はちよつと専門的な分野に入っただけじゃない」

「了子さんにとつてはちよつとでも、俺からしたらノーマルからベリ－ハードになったようなもんですよ。……ふう」

了子の呆れた声を聞いた藤堯は弱々しく返答し、自販機からコー

ヒーを購入する。そしてそれを一気に飲み干し、多少意識が戻ってきたようでひと息ついた。その様子を見た翼は、以前グラフィイトの事を調べるために、彼がシンフォギアシステムについて了子に師事していたことを思い出す。

「藤堯さん、引き続きシンフォギアシステムについて学んでいるのですか？」

「……本当は、グラフィイトの正体を突き止めた時点で終了の予定だったんだけどね」

「だって藤堯君、まだまだだけど今まで聞いてきた人たちの中で理解度がピカイチなんだもの。こうして私が特別講義をしても、喰らいつける程には」

「えっと……それはつまり、乗り掛かった舟には最後まで乗れと？」

「そゆこと♪ それに中々鋭い視点を持っているから、私にもいい刺激になるのよ」

教え甲斐があるわー、と了子は笑顔で話す。それを見た緒川と藤堯は苦笑いを浮かべるしかなく、響と翼はあの講義をマンツーマンでやっている藤堯に同情を覚えた。

「……と、話がそれたわね。それで何を話してたの？ やっぱり恋バナかしら？」

「恋……いやいや、そんなんじゃないですよ！ でも、了子さんもそういうの興味あるんですか？」

「モチのロン！ 私の恋バナ百物語を聞いたら、もう夜は眠れなくなっちゃうわよ？」

「うわー！」

「なんだか、怪談みたいですね……」

「ハア……」

盛り上がっている響と了子を見て、未来は苦笑いを浮かべ、翼はた

め息をつく。基本的に響は彼女と同じノリなので、一度話が盛り上げると中々収まらないのだ。

「そうね、あれはもう遠い昔の話になっちゃうかしら……」

こんな前置きから始まり、了子は自身の恋バナを響に話していく。それを響は目をキラキラさせて聞き、未来もまた彼女が放つ大人の雰囲気を感じ取って聞き入っていた。これは長くなる、今までの経験からそう判断した翼も諦めて彼女の話に意識を傾ける。

そんな女性たちの様子を離れた場所から見ている男性2人、彼らは彼女たちの意識がこちらに向いていないことを確認して目を合わせる。

「どうですか?」

「今のところ、7:3くらいですかね。決定的な証拠こそありませんが、近づきつつあります」

「そうですね。……米政府から送られてきた兵は、おそらく明日動くでしょう。僕が監視し、対処します」

「お願いします。……どうにも、彼女たちに隠れて行動するのは居心地が悪いですね」

「……そうですね」

藤堯が少しだけ目を伏せ、呟く。それを聞いた緒川は眼鏡を外して、彼女たちの……正確には、1人だけの姿を瞳に映して呟いた。

「でも、やらなければならぬんです。たとえそれが、残酷な真実を暴露事になってしまうとしても」

彼らは人知れず影で動く。光の存在に気づかれないよう、同じ影の者と戦うために。

そして、彼もまた次の一手を打ちだしていた。

「——わざわざ時間をとってもらい、申し訳ない」

「いや、構いませんよ。……それで風鳴さん、どうしたのですか？ あなたがわざわざ私の会社まで来るなんて」

「ええ、今日はいくつか聞きたいことがあつてきました。特異災害対策機動部二課の司令として」

「二課の……？」

「はい」

「あなたが開発したゲーム【ドラゴナイトハンターZ】について、いくつか聞きたいことがあるんですよ。岩永社長」

(……あれから12時間が経過。未だにギヤラルホルンには傷一つないか)

フィーネは自身の研究室で作業をしながら思考する。眼前に広がるスクリーンの内、その1つにはグラフィイトが戦っている様子が映っている。

ギヤラルホルンに向かって次々に迫りくるノイズを、的確に迎撃するグラフィイト。少なくともこの防衛線が始まってから半日以上が経過しているはずだが、彼も温存しているのか動きのキレが衰えている様子はなかった。

(だが、これでグラフィアイトの一時的な無力化は成功だ。倒すことは叶わずとも、邪魔が入ることはなくなった)

しかしそれも、ファイネにとっては予想の範囲内。シミュレーションのレベルXは既に改造済みで、目標を達成するまでノイズを出現させ続ける設定にしているのだ。そして戦っている様子を観察する限り、今のところグラフィアイトに打開策はなさそうである。

それはつまり、ファイネの計画を実行するのに絶好の機会ということだ。

「だがそれも、時間を与えるほど覆される可能性が高くなる。……少々前倒しになるが、仕方がない」

明日、計画を最終フェイズに移行する。そう判断を下したファイネは、最終調整のために機械を操作するスピードを引き上げた。

全ては、人類にかけられた呪いを解くために。

《See you Next game……》

第37話 『Emotion&Ruthlessの狭間!』

「……………」

自身の研究室。昨夜から夜通しで作業をしていた了子は、驚異的と言える集中力で画面を凝視している。

キーボードを叩く手は残像が見えるのではないかと言うほど素早く、それでいて正確だ。この速度は作業開始時から衰えることはなく、むしろ時間を重ねるごとに早くなっていた。

「……………」

視線はせわしなく動き、キーボードを叩く手は止まらない。そしてある程度言った所で手は動きを緩め、人差し指でエンターキーを一度だけ叩いた。

『100%:COMPLETE』

「…………フウ」

どうやらひと段落したらしく、了子は息を軽く吐く。そして時計を横目に見て、自分が徹夜で作業を行っていたことに気づく。

1 徹程度なら何度も経験しているので支障はないはずだ。しかしこれから行うことを考えると、体調はできるだけ万全にしておきたかった。

「…………コーヒーでも淹れるか」

それも特別濃いのを、ブラックで。これで意識を覚醒させた後、要

となるあの場所へ向かおう。

そう考えた了子は機械の電源を落とす。そして席を立ち、コーヒーマーカーがある部屋へ向かうため歩き出し――

『櫻井了子だな？』

「ッ!？」

――扉を開けた時、そこには本来いないはずの男性の姿があった。その男性は軍服に防弾チョッキを付け、右手には小銃を握っている。そして話す言葉は日本語ではなく、英語だった。

「誰……きやつ!」

『動かないことを勧める。ここにいるのは、私だけではない』
「……………」

了子は急いで扉を閉めようとするが、男性がそれよりも早く右手に持つ小銃の引き金を引く。数発の弾丸が彼女に襲い掛かり、右肩を食い破る。

その衝撃で了子は後方へ跳ばされてしまい、男性は扉を開けて声をかける。そしてその内容を証明するかのように男性の背後から2人の男性が現れ、また他にも何人かが窓を突き破って侵入してくる。その全員が武装しており、どう考えても穏やかな目的ではなさそうだ。

『手前勝手が過ぎたな。聖遺物に関するデータは、我が国が有効活用させてもらう』

『……散々あの子に関する研究をさせておいて、掠める準備ができたら用なしってわけね』

『セレナ・カデンツアヴナ・イヴはわが国唯一にして世界最高レベルの完全適合者だ。たとえ切れ端であろうと、日本に渡せるものではない』

『徹底してるわ』……グッ！』

了子がそう呟いた瞬間、話しかけていた男性——リーダー格の男は再び引き金を引く。弾丸は彼女の両足を貫き、この場から逃がすことなく、確実に仕留める準備を整えていた。

『さらばだ』

『……ッ』

男性は銃を構え、その銃口は了子の頭部に照準を定める。それを見た彼女は顔をしかめ、かろうじて動く左腕に力を込める。

それに素早く気付いた男性は了子が何か行動する前に仕事を終えようと、引き金にかける指に力を入れ——

「そこまでです」

——その言葉が聞こえると同時に、男性の身体が崩れ落ちる。

薄れゆく意識の中、男性が力を振り絞って振り向く。するとそこには見覚えのない男性が、静かにこちらに銃口を向けていた。

「あなた方の動向を監視していましたが、これ以上は看過できません」

「緒川、君……」

男性——緒川はそう言い切ると同時に引き金を引く。倒れていた

男性は彼の言葉を最後まで聞き届ける前に、その意識を暗闇へ落としていった。

『隊長！』

『撃て、撃てエ!!』

『掴まって！』

『ぎゃっ!?!』

襲撃者たちの銃口が火を噴く直前、緒川は了子を抱きかかえてその部屋から離脱する。直後、その場に数多の弾丸が降り注ぎ、衝撃による煙が辺りを包み込む。

「どうして、……?」

「あまり話さないで、じっとして下さい。……すみません、このタイミングでアメリカから兵が秘密裏に送られたのを察知し、彼らを監視していました」

「……もっと早く助けてくれてもよかったのに」

「ええ、僕もまだ詰めが甘い。まさか彼らが、こうも直線的かつ短略的な手段でくるなんて……」

そう話しつつ、緒川は襲撃者に気づかれないうち部屋を脱出する。そして現場から少し離れたところにある部屋に入り、了子をゆっくりと下ろした。そして懐から治療用具を取り出し、応急処置を始める。幸運なことに重傷だが致命傷はなく、弾丸も体内に残らずに全てが貫通していた。

その甲斐もあってか、消毒し薬を塗って包帯を巻くだけの簡易的なものとはいえ、数分もしないうちに処置が完了する。道具を素早く片付けた緒川は立ち上がり、了子はだいたい痛みが和らいだことで安堵のため息を吐く。

「弾丸は貫通しているようですね……よし、できました」

「ありがとう。……でも、これからどうするの？」

「了さんはここで安静にしてくださいください。僕は特異災害対策機動部二課のエージェントして……二課の敵を始末します」

了子からの問いに緒川はそう答え、ゆつくりと立ち上がった。普段からは想像もつかない心配を漂わせる彼を見て、彼女は頬に一筋の汗を流す。その様子を気にすることなく、彼は装備の確認と補充を進めていった。

——『おい、あいつらはどこだ!?』——

——『こつちに逃げたのは間違いないはずだ、探し出せ!』——
「……さて、と」

マガジンの交換も終わり、装備の確認も終える。準備を整えた緒川は纏う雰囲気以外何も変わらず、落ち着いた足取りで部屋を出る。

そして声がする方へと歩を進めていき、扉の前に立つ。そして扉に手をかけ——

『撃て!!』

——その直後、扉の向こう側から多数の銃口が火を噴いた。弾丸は次々に扉を貫き、その先にある壁にも穴を開ける。

『ハッハー、ざまあみろ!』

『やったか!?!』

『まだ油断するな』

そう言いつつ、男性達は銃口を下ろす。1マガジン撃ち尽くしたのだ、普通の人間なら助かるハズがない。

そう考えている間に、ゆっくりと煙が晴れていく。その視線の先には穴だらけになり、最早残っている箇所の方が少ない扉が彼らの視界に映る。少なくとも動く存在は確認できなかったので、男性3人の内1人が様子を見に部屋を出た。

『……待て、奴の死体がない。ジャケットだけだ!』

『何言ってるんだ、そんなわけ……!?!』

『ッ、なんだ!?!』

その報告を聞き、部屋の中にいた二人が扉に向かおうとする。しかしその途中、まるで何かに縛り付けられたかのようにその動きが止まる。

いや、彼らだけではない。確認をするために向かった者もまた、2人と同じように動きを封じられていた。

「残念ですが、そちらは身代わりです」

「ガッ!?!」

「ウグッ!」

「カハッ!」

影縫いによって生まれたその隙を逃すはずもなく、天井から降り立った緒川は素早く3人の背後に回って手刀を打つ。鮮やかながらも力強い一撃を喰らった3人は意識を失い、前のめりに昏倒した。

襲撃者はおそらく少数精鋭。リーダー格の男は既に殺し、今3人の無力化に成功した。

「あと4人。……少々、急ぎますか」

その言葉を残して、緒川はその部屋から立ち去る。次の獲物を探し出すために。

薄れた意識が浮上し、微睡みながらも目を開ける。

窓からは太陽の光が差し込み、備え付けの時計を見ると長針は7時をさしていた。

「……まじか」

そう呟き、クリスは上体を起こす。本当は軽く寝てから夕食を調達しようと思っていたが、まさか12時間以上もぶっ続けで寝ていたとは。

そこまで考えたところで、クリスのお腹がキューと鳴る。慌てておなかを押さえて周囲を見るが、どうやら奏はこの部屋にはいないようだ。

「……ふう」

「お、やっと起きたか」

「ツ……なんで起こしてくれなかったんだよ」

「起こしたさ。でも全然起きねえし、あんな気持ちよさそうに寝られたら逆に起こしづらいつての」

「うう……」

奏が答え、ヤレヤレと手を振る。それを聞いたクリスは先程のとは別の理由で赤面し、布団をかぶって顔を隠す。

「ま、気にすることはないさ。朝メシあるから、落ち着いたらこっち来てくれ」

その様子を見た奏は笑顔を浮かべて言い、寝室から姿を消す。数分後、落ち着いたクリスがリビングに顔を出すと、ソファに腰かけた彼女がコーヒーを飲んでいた。

「ほれ、コンビニで買ったやつだけど」
「おっと」

その言葉と共に、袋に入ったパンがクリスに向かって投げられる。それをキャッチしながら奏の隣に座り、袋を開けてパンをかじる。そして牛乳も同時に飲みつつ、全部飲み込んでから口を開いた。

「疲れは取れたか？」
「ん、バツチリだ。あたしが寝てる間、なんか動きはあつたか？」
「いや、特に……ってわけでもねえか。昨日の夜は翼のライブがあつただけだし、こっそり見に行つてたらノイズが現れやがった」
「なっ!？」

サラツと告げられる出来事に、クリスは驚く。パンを食べようと口を開いた状態で固まった彼女を見て、奏は手を振りながら口を開いた。

「いやいや、出現箇所はライブ会場じゃねえって。ノイズ自体も私と立花で対処したしな」
「2人だけなのか？」

「ああ、流石にライブ放り出して向かうわけにもいかねえだろ」
「……まあ、そうだな」

ノイズの規模も小さかったしな、そう言つて奏はコーヒーを飲み干す。

まさか自分が寝ている間にノイズが出現していたとは、少々後悔したが先ほどの言葉を思い出すに自分を起こすのにも時間がかかるので、それだと本末転倒だろう。そう考えたクリスは何とも言えない表情をしながら、朝食を食べ切った。

「で、提案なんだけどき。フィーネの屋敷に行くんだろ？」

「当たり前だろ？ それがどうしたんだよ？」

「私もついて行く。……ちよいと確認したいことがあつてな」

「別に止める理由はねえけど……何かあつたのか？」

「ま、色々とな」

疑問に思ったクリスが尋ねるが、奏は言葉を濁して煙に巻く。そう答えつつ片づけをしていく彼女を見て、もしやグラフィイト関連かと思つたが、別に聞いたところで自分にはあまり関係がないと判断することにした。

「んじゃ、そろそろ——！」

片付けも終わり、奏がクリスに向かう旨を伝えようとするが、その言葉が途中で止まる。それをクリスが訝しげに見るが、彼女はその視線を気にすることなく寝室に走り出す。

寝室に入り、ベランダに通じる窓を開ける。そしてフェンスに手を付け、とある方角に向かって目を凝らした。

「この感じ……！」

「おい、どうしたんだよ！」

「今すぐ準備しろ、ノイズが来る！」

「ッ！」

寝室の中からクリスが声をかけ、奏はそう返答しつつ部屋に戻る。そしてグラフィイトから借りている道具一式を手にとって、険しい表情のまま扉を開ける。その気配から冗談ではないと判断したクリスも、待機状態のイチイバルを確認してから後に続く。

階段を駆け上り、屋上に出る二人。二人の視界にノイズは映っていないが、それからほどなくして警報が町中に響きだした。

「まじで来やがった……！」

「仕掛けてきやがった……行くぞ、クリス！」

『ガツチョーン……』

「わかってるっての！」

声をかけながら奏はバグヴァイザーをバックルに装着し、ガシヤツトを手を持つ。それに答えつつ、クリスもまた胸元の結晶を握りしめた。

『ドラゴナイトハンター、Z！』

「変身！」

『ガシヤツト！——BUGLE UP！ ド・ド・ドドド黒龍剣！ ド

ラ・ドラ・ドラゴナイトハンター……ガングニール！！』

『Killter Ichaiival tron——』

共に戦装束に着替え、奏は素早くバグヴァイザーのボタンを同時に押す。その様子を見て何をするのかクリスは察し、今回はイチイバルを纏っているのだからマシだと判断して彼女の肩に手を置いた。

「しっかりと掴まってな、スタートダッシュかましていくぞ！」

「おう！……って、場所わかんのかよ!？」

「大丈夫だ、昔から勘は良いんだよ！」

『CRITICAL BLAZE!』

その言葉と共に屋上から飛び降り、昨日と同様ガングニールを使って二人は現場へ飛んでいった。

コツコツと、緒川は静かになった廊下を歩く。数分前までは男性の怒号や銃声が鳴り響いていた空間だったが、今では物音ひとつしかない。

そして了子を隠した部屋の前に立ち、ノックをする。回りくどい方法から緒川だと判断したのか、彼女が動く気配はない。それを確認し、ゆっくりと扉を開けて部屋に入った。

「……終わったの？」

「はい、この通り」

そう答え、緒川は両手に持った男たちを下ろす。彼らは武器を奪われ、1人を除いて縄で縛られており、身動きが取れない状態となっていた。その様子を見た了子は苦笑し、口を開く。

「……まだ10分も経ってないんだけど」

「伊達に二課のエージェントはしていませんよ。それよりも、怪我はどうですか？」

「ええ、見た目はすごいけどそこまで重傷じゃないわ」

しばらく包帯生活は避けられそうにないけど、了子はそう言いながら肩をすぼめる。

だがこうして二人は生存し、目の前にいる襲撃者7人の無力化にも成功した。何とか危機は脱したのだ。

「なんにせよ、緒川君が無事でよかったわ。今すぐ弦十郎君に連絡して、援軍を要請しましょう」

「いえ、それには及びません。あのタイミングで介入したのも、意味がありますので」

「え？　またどうし、て……う？」

了子は聞き返そうとするが、その途中で視界が揺らぐ。貧血による立ちくらみかと考えたが、明らかにそれとは違うことを彼女の頭脳は素早く判断していた。これは間違いなく、意識を失う前兆だ。

馬鹿な、この程度で私が倒れるはずはない。揺らぎ続ける意識の中、彼女はふと考える。

緒川慎二、彼が二課の裏の仕事を担当エージェントであることは了子も知っている。普段は温和な彼だが、単独で敵と相対する時はまるで刀のような鋭い気配を纏うことも。だからこそ先ほど感じたのは、彼の中でのスイッチの切り替えだと思っていたのだ。

——じゃあなぜ、私はその気配を感じ取れた？

その答えは、了子を見ている緒川が全く取り乱していないことから推測できるだろう。

「先ほどの治療薬に、仕込ませてもらいました。効果が出るまで少々時間がかかりますが、無味無臭で決して気づかれないしびれ薬です」
「なん……で……?」

「……風鳴司令はあなたを信じているようですが、僕はそう言うわけにはいかないんですよ」

「ッ！ まさか……!!」

答えは導き出せたが、一手……いや半手遅かった。

「話は二課で聞かせてもらいます。それまで、ゆっくり休んでいてください」

そう言った緒川は、了子が何か行動を起こす前に素早く近づく。そして、彼女のうなじに向かって手刀を振りかぶった。

《See you Next game……》

第38話 『Noiseをぶつとばせ!』

「……ム、この気配は」

もう何度目になるのだろうか。襲い掛かるノイズを迎撃したグラフィイトは、頭上から新たな気配を感じとって呟く。数分前に7人ほどの人間の気配を感じ取っていたのだが、そいつらとは別の人物のようだ。

恐らく戦闘をしていたからだろう、普段は薄く感じ取りづらいその気配を彼は察知することができた。

「――緒川か。遂にこの箇所を嗅ぎ付けたようだな」

その名を呟きつつ、周囲を見渡す。

相も変わらずノイズしか見えないのだが、気のせいか先ほどまでとは違う点があるように感じる。

(なんだ?……いや待て、まさか)

グラフィイトはある事を思いつき、双刃に大きく力を込める。それを察知したのかノイズが次々と跳びかかるが、ギャラルホルンに届くまえに準備は完了した。

「ドドド、黒龍剣!!」

空中にいるノイズに向けて放たれる、無数の剣戟。それは次々にノイズを切り裂いていき、空に待機していた個体にも襲い掛かる。

グラフィイトはその結末を見ることなく、再び力を込める。そしてギャラルホルンの上に立ち、双刃を振りかぶった。

「次だ、ドドドド、黒龍剣!!」

放たれた巨大な剣戟は、前方のノイズの集団に襲い掛かる。攻撃体系でない以上、ノイズの性質から威力は大きく落ちてしまうだろう。だがダークグラフィアイトとなったうえでの大技、その威力は通常兵器のそれを大きく上回っている。通常サイズのノイズを倒すには、十分すぎる威力だろう。

「おおおおおおおッ!!」

剣戟に触れた瞬間、そこから2つに寸断されて炭に還るノイズ。それを確認したグラフィアイトは振り下ろした双刃を流れるように動かし、少しずつ方角を変えながら連続で剣戟を放つ。それらはとどまることなくノイズを切り裂いていき、次々に爆発を起こしていく。

そして地上の全方位に撃ち終わり、連撃を止めた。流石に堪えたのだろうか、肩で息をしながら地上に降り立って煙が晴れるのを待つグラフィアイト。その視線は何かを確認しようとしているようで、ネズミ一匹見逃さないほど鋭い。

そして数秒後、煙が晴れる。そこには次々にノイズが生み出される光景が映っているのだが、先程までとは明らかに違う点が生まれていた。

「……わずかだが生成される速度が遅い。それに、先程の違和感は本物だったようだな」

そう考えつつ、再びノイズで埋め尽くされた光景を見渡す。だがそれは先程までの光景に比べ、多少だがその密度が落ちていた。

(このノイズ共は所詮シミュレーターで作られた偽物。無限に生み出

されるとはいえ、それは供給が安定している場合に限る)

これはグラフアイトが知ることではないのだが、アメリカからの襲撃者は行動に移す前にあらかじめ情報封鎖をしていた。そして突入と同時に電力経路を爆破し、防衛機構の妨害も行おうとしていたのだ。

だが家主もそれを想定していないわけはなく、緊急用の電源を確保している。そこには相当量の電力が確保されており、全ての機器を作動させていても1日はもつ代物だ。

——だがこの部屋において、消費される電力量は通常の比ではない。ただでさえシミュレーターは機械の性質上、電力消費量はトップクラスだ。それを全力稼働させているうえ、12時間以上の継続稼働により、冷却装置も最大出力で稼働している。

つまり何が言いたいのかと言うと、無限の敵は無限ではなくなったということだ。

「誰かは知らんが、礼を言っておいてやる。……これで、少なくとも終わらせる目途が1つ付いた！」

それを察知したグラフアイトは気合を入れ、ノイズの集団を見渡す。そして双刃を水平に構えて腰を落とし、力を溜めて次の一撃を放った。

「こちら翼、もうすぐスカイタワーに到着します」

『わかりました。既に響さんが戦っています、着き次第合流して戦闘を行ってください！』

「了解！」

通信を終了し、バイクを加速させる翼。その視界の先にはスカイタワーが映っているのだが、上空にはそれよりも巨大な超巨大ノイズが4体、旋回するように浮遊している。また所々で爆発が起きていることから、あの付近で響が戦っているのだろう。

数十分前、彼女は歌手としての仕事をしていた。だが突如ノイズの警報が鳴り響き、直後に二課から連絡が入ったのだ。その内容は、超大型ノイズがスカイタワーを中心に7体出現したというもの。さらに空中に浮遊しているすべての超大型ノイズから小型ノイズが投下されているようで、その脅威は今までの戦いの中で最大規模だろう。

「……着いたッ！」

遂にスカイタワーの入り口が視界に入る。そこに乗りつけようとさらに加速させるが、周囲に降り立った小型ノイズが身体を振り、翼に向かって突撃してきた。

それを見た翼は瞬時に座席に立ち、全力で跳躍する。直後ノイズの突撃を喰らったバイクは爆発し、それを視界の端に捉えながら彼女は口を開く。

「Imyuteus amenohabakirritron——
——」

——蒼ノ一閃——

聖詠を終え、シンフォギアを身に纏う。そして空中で剣を巨大化させ、上空にいる超大型ノイズに向けて大きく振りかぶって剣戟を放つ。

剣戟は一直線に飛び、道中の小型ノイズを次々に撃破していく。そして遂に超大型ノイズに届き、着弾点で爆発を起こす。だが距離があったことと途中で小型ノイズを巻き込んだことで、威力が足りないことを翼は察知していた。

「ッ、距離がありすぎる！」

そう言いつつ、着地して小型ノイズを切り裂く。そこを狙おうと空中の鳥型ノイズが近づくが、懐から取り出した小刀を投擲して迎撃する。

ある程度周囲のノイズを殲滅し、翼は建物の屋上に跳ぶ。そして周囲を見渡し、視界の端に爆発を捉えた。

「あそこか！」

その方向に向かって建物を跳び移り、爆発地点まで移動する。そこには響が立っており、地上のノイズ相手に奮闘していた。

戦ってはいるようだが、如何せんノイズの数が多すぎる。そう考えた翼は手を上空へ掲げ、響に声をかける。

「立花、後方へ下がれ！」

「ッ、はい！」

——千ノ落涙——

響は翼の声に気づき、素早く後方へ跳躍する。その直後、上空から無数の剣がノイズに降り注ぐ。既に避難も終わっているため全力で放たれたその技の範囲は広く、目の前のノイズ集団はすべて駆逐された。

だがそれに反応するかのように、超大型ノイズの1体が2人の頭上に移動する。そして小型ノイズを投下し始めた。

「翼さん！」

「ああ、相手に頭上を取られるということが、こうも立ち回りにくいはー！」

響と背中合わせに立つて、翼はそう叫ぶ。もしヘリコプターがあれば超大型ノイズの近くまで移動できただろう。しかし響が乗ってきたそれは既に撃墜されており、新たに要請しても時間がかかる上にここにたどり着ける保証はない。

「空飛ぶノイズ。どうすれば……？」

「臆するな立花。私たちが後退すれば、それだけ戦線も後退するということだ。ここで食い止めるぞ！」

「はい！」

響がそう返事したのと同時に、2人はその場から跳躍する。その後無数の鳥型ノイズがその場に殺到し、地面に穴が開く。

さらに追撃するかのよう無数のノイズが襲いかかるが、響は拳を振るって打ち落とし、翼は剣を振るって切り裂いていく。だがこうしている間にも超大型ノイズが小型ノイズを投下しているので、敵の数は減りそうにない。

「この……ッ！　翼さん、あれー！」

「やはり来るか……！」

響の声を聞いて翼がその方向を見ると、別の超大型ノイズがこちらに近づいてくるのが見える。あれがここにたどり着けばノイズの数は激増し、自分たちは劣勢に立たされてしまうだろう。

現状を打開するため、翼は迫りくる超大型ノイズを睨みつけながら思考をめぐらせる。

「このままでは……ッ、あれは——！？」

だがその思考は、超大型ノイズの更に向こう側から見える光を見たことで中断された。

「ここでいいのか？」

「ああ、十分だ。こんだけ溜めりや、1体は潰せる！」

「オーケー、んじゃここは任せませ！」

「わかってるっての！」

超大型ノイズよりも上空。そこを飛んでいる物体から、1人の少女が飛び降りる。

その位置はちょうど翼たちに迫りくる超大型ノイズの頭上であり、空中で少女は両手を広げる。すると彼女の背中のパーツが変形していき、2発の巨大ミサイルを形成した。

「持ってけ、ダブルだ！」

—— M E G A D E T H F U G A ——

発射された2発の巨大ミサイル。空中に浮遊する超大型ノイズの更に上空から放たれたことで鳥型ノイズの迎撃も間に合わず、超大型ノイズに直撃して大爆発を起こす。

「おっしや！　んで、次はてめえらだ!!」

—— B I L L I O N M A I D E N ——

超大型ノイズを倒したことを確認し、空中で少女——クリスは歓声を上げる。そしてそのまま今度は周囲にいる鳥型ノイズに狙いを定

め、ガトリング砲に変形させたアームドギアを構えて連射し始める。発射の衝撃を生かして回転しながら撃ち続け、鳥型ノイズを次々に迎撃する。そして地面が近づいてくるとそこに銃口を向けて連射し、多少減速させてから着地した。

「つとと……フウ」

「クリスちゃん!!」

「……なんだ、お前らいたのか」

そしてクリスが着地した瞬間、響が手を振って近づく。それに対し彼女は今気づいたかのように話すが、その頬が赤いことから嘘をついているのは明白だ。

周囲を警戒しつつその様子を見ていた翼はそう思ったが、あえて触れずに口を開く。

「感謝する。……それにしてもどうやってあれの上空から?」

「ああ?……あいつがあそこまで乗っけてくれたんだよ。んであいつは別のデカブツをぶっ潰しに行ったから、同じ手段は使えねえ」

「そう、奏が……」

クリスと行動を共にしていて、あそこまでクリスを運べる可能性を持っているのは奏しかいない。そう翼は確信して呟く。それに対しクリスは否定せず、だがその戦法がもう使えないことを2人に告げた。

「だが問題ねえ、イチイバルの特性は長射程広域攻撃だ。派手にぶっ放してやるよ」

「派手に、って……さっきのミサイル?」

「ああ。さっきので1発ありや倒せるのはわかった。あと4体、一気につぶしてやるー!」

「一気に……まさか絶唱を?」

クリスがそう言うのを聞き、翼は少し顔をしかめて口を開く。

先ほどのミサイル、間違いなく超大型ノイズを倒せる威力を秘めているが、相応の準備が必要だったはずだ。それを4発も撃つとなると、通常の方法ではないということは明白だった。だからこそ、真つ先に彼女はこの可能性を確認したのだ。

「バーカ、あたしの命はそんな安物じゃねえ！　ギアの出力を引き上げつつも放出を抑える」

「なるほど。行き場の無くなったエネルギーを臨界まで貯め込み、一気に解き放つつもりか。……だが、その間は」

「ああ、チャージ中は無防備になる」

「なら、その間私たちがクリスちゃんを守ればオツケーですね！」

自分がすべきことが分かり、響は笑顔でそれを言葉にする。それ聞いた翼は同意するように頷き、クリスは照れくさそうに頬を掻くも、最後にはそういうことだと頷いた。

それを見た翼は少しだけ目を見開き、微笑みながら口を開く。

「随分と素直になったのだな」

「ツ、うるせえよ！　悪いかよ!?!」

「いや、むしろ良い傾向ではないか」

「ーッ！　ああもう、あいつと組んでただけあるなチクシヨウ！」

面白いくらいに突っかかってくるクリスを軽く流しつつ、翼は彼女の言葉を聞いて笑みを深める。

最初会った時は取り付く島もなく、警戒心の強い野良猫のような少女だった。だが今ではこうして自分の護衛を頼んでくる位には角が取れている。こうなったのは、間違いなく奏の影響があるだろう。引っ込み思案で自分の意見をうまく出せなかった翼も、奏のおかげで今ではこうして前線に立つ事ができている。

(うん、やっぱり奏はすごい)

「おい、聞いてんのか!？」

「クリスちゃん、ストップストップ!」

そう再確認した翼は、表情を引き締めて切り替える。そして超大型ノイズの位置を確認すると、4体がスカイタワーを中心に旋回しながら集結していた。

そして響に抱き着かれて翼に襲い掛かるのを止められていたクリスも、翼の視線の先を見て同様に気持ちを切り替える。

「……つと、流石に動き出したか」

「みたいだね。行きましよう、翼さん!」

「うむ」

「おっしや、んじゃ……つと、ちよつと待った!」

いざ行動に移そうとするが、クリスが待ったをかける。それを聞いた2人は飛び出すのをギリギリで耐え、彼女の方を見た。

「どうした?」

「今、お前らの上と通信できるか?」

『——突然すまんが、大丈夫だ。基本的に戦闘中は常に通信状態にしてある。どうかしたのか?』

「ツ……いや、聞きたいことがある。カ・ディングルってモノについて何か知ってるか?」

「カ・ディングル……?」

クリスの言葉を聞き、響はその単語を呟く。翼も心当たりはないように、眉をひそめていた。

そしてそれは指令室で指示を飛ばしていた弦十郎も同様で、彼も心当たりは存在しなかった。

『カ・ディングルだと……？』

「ああ。フィーネが言ってたんだ、カ・ディングルって。そいつが何なのかわかんねえけど……もう完成している、みたいなことを言っていた」

『カ・ディングル……確か、バベルの塔の語源になったバビロンの古代名だったかな……？』

『藤堯、知っているのか？』

『ええ、随分前……学生の頃の記憶ですけど。確かそんな意味があったと思います』

弦十郎の問いに対し、藤堯は昔の記憶を引っ張り出しつつ答える。臆気なので自信があまりなさそうだが、藤堯の性格を知っている弦十郎は信憑性は高いだろうと判断した。

『バベルの塔……天を仰ぐほどの塔か。だが何者かがそんな塔を建造していたとして、何故俺たちは見過ごしてきたのだ？』

「それは確かに……」

「……ま、こつちじや何もわからなかったから教えただ、調べるかどうかは好きにしな。……だがその前に、あたしたちはこいつらの相手だ」

弦十郎が抱いた疑問を聞き、同意するように響も呟く。だがその流れを切るようにクリスが口を開き、銃口を超大型ノイズに向けた。いつの間にか旋回していた4体の内3体がこちらに近づき始めていたのだ。

それを察知した響と翼はクリスを庇うように前に立ち、己が武器を構えた。それを見たクリスは驚きで目を見開くが、その様子を誰も知ることはない。

『わかった、カ・ディングルについては俺たちで調べる。お前たちは気

にすることなく戦ってこい!』

「はい!」

「了解しました」

「……………ふん」

通信を終え、3人は上空にいる4体の超大型ノイズを見る。まるでその瞬間を待っていたかのように小型ノイズの投下速度が上がリ、あつという間に周囲はノイズで満たされた。

「行きますッ!」

最初に響が飛び出し、正面のノイズを殴り飛ばす。そのまま次々に目標を変えて攻撃していき、時にバンカーを伸ばして複数体を一気に貫く。今回はいつにもまして大立ち回りを演じており、そのおかげで周囲のノイズをひきつけることにも成功していた。

「いざ参る!」

そして次に翼が剣を振りかざし、迫りくる複数のノイズを同時に切り裂く。そして小刀を投げつけることでクリスに近づくノイズを牽制しつつ、目の前の障害を排除するために飛びだした。

「はあああああッ!!」

——蒼ノ一閃——

——逆羅刹——

剣を巨大化させ、飛んでくるノイズを切り裂きつつ、剣戟を飛ばして鳥型ノイズを撃破する。そして脚部のブレードを展開しながら着地し、逆立ちしながら横回転して周囲を切り裂く。

その様子を見て一先ずは大丈夫だと判断したクリスは、エネルギーを溜めるために意識を集中させる。だがその途中でも、どうしても考

えてしまうことはある。

(ここにいる超大型ノイズは4体。あいつらとあたしの3人で何とか相手にできるっていう状況だ)

(……だけど、あいつは超大型ノイズ2体相手に1人で行きやがった。本当に大丈夫なのかよ?)

「——つと、流石にこの数はきついな」

迫りくるノイズを切り裂き、鳥型ノイズを砲撃しながら奏は周囲を見渡す。彼女の前の前には超大型ノイズが2体、並んで小型ノイズを投下させていた。

さきほどクリスが行ったように奏も上空から奇襲したのだが、ガングニールの一撃だけでは倒しきれなかった。あれを倒すには、キメワザ級の威力が必要なのだろう。

「……そういや、この間グラフィイトが面白そうなこと言ってたっけ」

その内容を思い出した奏は、地上の小型ノイズ……正確にはダチヨウ型ノイズを見ながら呟く。

そして数秒間思考をめぐらせ、超大型ノイズに視線を移す。そのまま自分の腰にある装備を確認し、口角を上げて嗤った。

「いいーいーこと思いついちゃった」

«
S
e
e

y
o
u

N
e
x
t

g
a
m
e
:
:
:
»

第39話 『Bossを追跡せよ!』

「——カ・デインギル、ですか?」

『ああ。慎二、何か心当たりはあるか?』

「いえ、僕にも心当たりはありません。……ですので、少々調べてから戻ろうかと」

『……そうか、頼んだぞ』

弦十郎との通信を終了させ、緒川は了子を抱きかかえて部屋を出る。そして廊下を歩き、一番奥の扉まで移動する。

「……………」

扉を開け、緒川は目的の部屋——最奥の研究室に立ち入る。そしてソファに了子をゆっくり下ろし、彼女の様子を確認してからパソコンの前まで移動する。確実に一撃を加えた上に薬の効果も強力なものだ、彼女は少なくとも目が昇っている間は目覚めないだろう。

「さて、ハッキングはそれほど得意ではないのですが……」

そう言いつつも手を素早く動かし、セキュリティを突破しようと試みる緒川。そして数分も経たないうちに成功したらしく、画面には大量のファイルが表示されていた。

ファイルのうち1つを開け、その中身に目を通し、見終わったら閉じて次のファイルを開く。行っていることは単純な閲覧作業なのだが、その速度が尋常ではない。次々に目を通していき、画面を埋め尽くしていたファイルの数は急激に減少していった。

「……………これは」

突如手が止まり、緒川の視線は1つの資料に集中する。それは一見全く関係のない報告書に見えるが、よく見ると所々に違和感がある。そこが気になった彼はしばらく見つめ、懐から手帳を取り出して書き込んでいく。

一通り書き込んでいったかと思えばしばらくそれを見つめ、改めて書き込んでいく。それを何度か繰り返し返した後、彼の手帳には画面の資料とは違う内容が書き込まれていた。

「やはり暗号でしたか。さて、この内容は……ッ」

ひと息ついて、改めてその内容を確認していく。最初は真剣な表情で見つめていたが、それは徐々に驚愕に上書きされていく。

そこに書き込まれていたのは、予想通りガ・ディングルに関する資料だった。その概要や性能、そして目的が記されているのだが、そこそが彼をここまで驚愕させるに至るには十分すぎる内容だったのだ。

「これは……少々まずいですね」

そう呟きつつ、緒川は思考する。資料の内容が本当だとしたら、ガ・ディングルを起動させるわけにはいかない。だが場所が分からない以上、対策の取りようもないのだ。

だが先程までとは違い、緒川はガ・ディングルの性能を知ることができている。そこから予測することはできるはずだ。

(ガ・ディングルの名前の通り、巨大な塔型の建造物であることは間違いない。だがそんなもの、ここ数年で確認できていない)

カモフラージュをかけられていたとしても、この規模のものを隠しきること等ほぼ不可能なはずだ。だが弦十郎からの報告を聞く限り、

間違はなくそれはほぼ完成して、どこかで起動の瞬間を待っているのだ。

(塔なんて目立つ物、それを誰にも知られずに建造するには……)

地下に伸ばすしかない、そう緒川は結論づける。上に伸ばしたところで隠せないのなら、下に伸ばした後で全体を押し上げてやればいいのか。

そして、そんなことが可能な場所と言えば――

「ッ、そう言うことですか!」

頭の中ではらばらだったものが繋がり、緒川は目を見開く。そして急いで通信機の電源を付け、弦十郎と繋げる。

「緒川です、聞こえますか?」

『おう、なにかわかったか?』

「ガ・ディングルの正体が判明しました」

『なに!?!』

「はい。物証はこれから送りますが、カ・ディングルとはおそらく――」

「――ああ、本当に厄介だ」

「ッ!!」

その声が背後から聞こえた瞬間、緒川は瞬時に振り向く。そしてそれと同時に衝撃が襲いかかり、全身を機器に叩きつけられた。

「素晴らしい策だったな、緒川慎二。イレギュラーである青二才のアンクルサム共すら私を欺くための駒とし、糸に絡めとられるその瞬間までボロを決して出さない」

その言葉と共に、緒川の正面にいる存在は手を光らせる。それを肩口に当てるとバリバリと言う音が迸り、同時に傷口がふさがっていく。

「いやはや、おかげでしてやられてしまった。本当に——」

完治したのを確認し、今度は全身を光らせる。そしてそれが収まった時、目の前の存在の姿は一変していた。

髪の色は茶色から薄い金色へ、そして身に纏うものは白衣から黄金のボディースーツへ。そして緒川を吹き飛ばした肩パーツ兼鞭は彼女を守るように周囲を浮遊している。

「——もしあと一仕事を起こすのが早ければ、私はなすすべなくお前たちの手に落ちていただろうよ」

「了子さん……あなたがフィーネだったんですか」

緒川の言葉を聞き、目の前の存在——フィーネは黄金色の瞳で心底愉快そうに彼を見つめていた。

「なぜ……。あなたは今日は身動きどころか、目覚めないようにしたはずです……」

「それはただの人間に限った話だろうか？ 今の私は完全聖遺物と融合している、そのような道理はまかり通らんさ」

「ネフシユタンの鎧……！」

そう話しつつ、緒川は身をよじらせて姿勢を立て直す。ダメージは軽くないはずなのだが、彼はふらつくことなく両足をしっかりと踏み締めていた。

「さて、私は質問に答えた。次は貴様の番だ……何がきつかけだ？」

その様子を見つつ、余裕の表情を崩さずにフィーネは問いかける。それに対し、緒川は警戒を維持しつつ答えるために口を開いた。

「きつかけは、デュランダル移送作戦を行った日です。あの日僕と風鳴司令は、秘密裏に彼と接触していました」

「……グラフィイト、か」

フィーネにとってのイレギュラー、その最たる存在の名を彼女はつぶやく。それを緒川は否定せず、言葉を繋げていく。

「そこで一度戦闘になったのですが、その時に彼が僕に言ったんですよ」

——俺が手に入れた、デュランダル封印に関する運搬方法の計画書。そこに記されていたデュランダルを一人で搬送する人間、それが貴様か！——

「……………」

「もちろんデュランダル移送計画の中に、僕の名前は記されています。そしてデュランダルを移送すると言う密命もまた受けていません」

「そこから違和感を抱いた、か。……やはり、グラフィイトは手傷を負ってでも始末すべきだった」

忌々し気に顔をしかめ、吐き捨てるようにフィーネは話す。それを見ながら、緒川はもう1つの違和感を話す。

もう一つ気になったこと。それは緒川の名前を弦十郎が言った時、グラフィイトがわずかに反応を示したということだ。その様子は、まるで思っていたのと名前が違ったかのようなようだった。

「僕と苗字が同じで、デュランダル移送を任せられる程政府からの信頼が厚い人物……それは考え得る限り1人だけです」

その名は、緒川総司。風鳴一族に代々仕える緒川家の頭領であり、彼の兄にあたる人物だ。

「その事にたどり着いた後、僕は誰にも勘付かれない状況を作って兄と接触しました。そして、本当の計画を聞きだしました」

緒川総司が話した本当のデュランダル移送計画、それは二課が表立って敵を引きつけ、総司自らがデュランダルを記憶の遺産まで移送するという計画。

だがそれはあくまで第1案として総司だけに提示されたものであり、本案ではない。そして提案者でもある広木大臣が暗殺されたことで、念のため計画を変更するとの通達、政府だけが知る通信手段であった。故に彼は関わる必要がないと判断し、緒川が聞きに来るまで誰にも打ち明けていなかったのだ。

「もしこの計画が実行されていた場合、デュランダルの位置を割り出すことは困難だったでしょう。だからこそあなたは広木大臣の殺害を手引きし、協力者である了子さんが計画を改竄した」

……と、思っていたんですが。そう締めて、緒川は改めて構えながらフィーネを見る。まさか了子とフィーネが同一人物であるとは、し

かも今のは見る限り変装と言うわけでもなさそうだ。

そこまで考えたところで、ふと通信機を見る。先程まで手に持っていたそれは鞭の直撃を受け、上半分が粉々に砕けていた。これではもう二課と連絡を取ることはできないだろう。

「状況を理解したようだな。……さて、運命の時まであまり余裕がない。大いなる計画に歪みを生まれさせるわけにもいかんのでな」

「ッ、止まってくださいー！」

「撃つか？ どちらにせよ貴様の運命は覆らない。それでも足掻くと言うのなら、その引き金を引くが良い」

そう呟き、フィーネは踵を返す。それを見た瞬間、緒川は銃を構える。その気配を背後に感じたフィーネは立ち止り、そう話す。それを聞いた緒川が彼女の纏うものを確認し、動きが止まるのを確認する。やはり人間なんてその程度か、そう考えたフィーネは歩みを再開する。そして扉に近づき――

「――ほう」

その歩みをもう1度止めて、意識を後方に向ける。そこにいる緒川の手を持つ銃の銃口からは、煙が出ていた。

「あなたを二課……ガ・ディングルの元へは向かわせません！ この命に代えてもです！」

「……フフ」

影縫いによって動きは制限されているものの、フィーネは無理やり

体を動かして振り向く。そして両手を上方へ翳すと、それに従うかのように2本の鞭が上空に昇っていく。

「良くぞ吠えたな、人間。ならば……望みどおりにしてやるッ!!」

その言葉と共に振り絞った力を開放し、全力で振り下ろす。迫りくる鞭を見ながら、緒川は小銃と小刀を両手に構えて迎え撃った。

「こいつで………しまいだ!!」

— M E G A D E T H Q U A R T E T —

限界ギリギリまで溜められた力が開放され、巨大なミサイルが1発ずつ超大型ノイズに向かって発射される。さらに同時に発射されたミサイルポッドからは小型ミサイルが大量に射出され、両腕に持つガトリング砲と共に空中の鳥型ノイズを撃墜していく。

邪魔がいなくなったことで遂にミサイルは超大型ノイズに届き、大爆発を起こす。大ダメージを受けた超大型ノイズの身体は粉々に砕け散り、炭素の粉となって空気中にばらまかれていった。

「やった………のか?」

「ハッ、たりめーだ!」

「ッ、やったー！」

三者三様ながら、その感情は一つ。強敵を倒したことによる、歓喜だ。

「やったやった、やったよクリスちゃん！」

戦いが終了したのを確認し、三人とも変身を解除する。そしてその感情の勢いそのまま響はクリスに跳びかかり、正面から抱き着いた。

「勝てたのはクリスちゃんのおかげだよー！」

「あーもう、だから抱き付くなって！」

嬉しそうな表情で抱き付く響に対し、抱き着かれたクリスは恥ずかしそうに大声を上げて引きはがそうとする。この数日で最早見慣れてしまった光景に、翼は微笑みながら少し離れた場所での様子を守る。が、ふと空が光ったことに気づいてその方向へ視線を向けた。その光は近づくにつれて少しずつ勢いが衰えていき、翼の隣に激突することなく着地した。

「よ……っつと。こっちは大丈夫だったみたいだな」

「奏。……うん、あの子が頑張ってくれたから」

降りてきた奏にそう答え、翼は再び二人の方を見る。そこではクリスが一度引きはがして響に何か言ってるが、それを聞いた響が再び顔を綻ばせて彼女に抱き着く光景が映っていた。

「じゃ、私たちも行くこうぜ。……どうやら、向こうもなんかあったみたいだな」

「……みたいだね。うん、わかった」

そう話して二人の元へ行く奏と翼。彼女の言葉のとおり、先程までじやれていた響は現在通信機に耳を傾けており、その表情は啞然としていた。

「立花、何があつた？」

「翼さん！ 未来が、未来が……！」

「落ち着け、小日向がどうしたのだ？」

「学校に……リディアンにノイズが出たって！ 途中で通信が切れて……私、どうすればいいか……!？」

目に見えて狼狽える響を見て、何とか翼は落ち着かせようとする。そしてその内容を聞いた奏は顔をしかめ、リディアン音楽院——正確にはその地下にある建造物がある方向を見て呟く。

「ッ、なるほど。本命は二課か……！」

「おい、それマジかよ!？」

「マジもマジ、大マジだ。急いで二課に向かうぞ皆！」

「で、でもここからリディアンまで結構距離がありますよ！」

奏が3人に声をかけるが、響がそう問い返す。実際響はヘリコプターで移動しており、それでも数分かかっていたことから徒歩の場合にかかる時間は考えるまでもないだろう。

「なあ、 GANG ニールをでかくして4人乗りにすることはできねえのか？」

「無茶言うな、2人乗りが限界だよ」

クリスがふと思いついて奏に提案するが、にべもなく即答される。いくらガシャットの力を用いて変形させているとはいえ、柄の部分を伸ばせるかはわからないし、ここからだとも距離に対して燃料が足りないだろう。

そう聞いたクリスも期待はしていなかったようで、そうか、とだけ返す。そして最早徒歩以外の手段はなさそうだと思つた響たちは焦りながらも移動を開始しようとする。

「……それに、問題はないさ」

だが、奏だけはその場を移動せずにニヤリと笑つて話した。

「奏、何か移動手段があるの?」

「ああ、あるぜ。それもとびっきりの奴がな!」

そう言つて、奏を指を上に乗す。それにつられて3人も上空を見るが、そこにはノイズがいなくなったことで青空が広がるだけだ。

「なんもねえじゃねえか?」

「うん、空もノイズがいなくなったことで戻ってきた鳥さんが数羽飛んでいるだけだよ」

「そうだな……む?」

3人がそれぞれコメントを残すが、ふと翼が上空を飛んでいる鳥の影を見て目を潜めた。

それは他の鳥と同様に4人のちようど上空を浮遊しているのだが、あまり動きがないように見える。さらに雲が通り過ぎていったのだが、その鳥だけ姿を消したのだ。

「待て、あれは……?」

「フ、今回は材料が上等だったからな。前に翼たちが出会ったやつとは、格が違うぜ?」

翼の眩きを聞いた奏はそう得意気に話し、両手を上げて視線を上空

に向ける。するとそれに呼応するかのように鳥がこちらに近づいて来る。

1羽、また1羽と地上に降り、残りは例の影だけになる。その影もどンドンこちらに近づいているのだが、それを見ている翼とクリスは少しずつ表情を引きつらせていく。

「オイ、まさかあれって……!」

「既に前回相まった時と同じ大きさだぞ、まだ大きくなるのか……!?!」「うわー!」

その言葉のとおり、すでに周囲の鳥より数十倍もその影は大きくなってきているのだが、未だに明確な姿は見えない。だが奏の言葉からその正体に勘付いているのだろう、翼とクリスの頬には一筋の汗が流れていた。だがしかし、響は迫りくる影を見て目を輝かせている。

そしてそれはついに、奏の元にたどり着く。それを確認した彼女は振り向き、笑顔の響と呆れ顔の翼、呆け顔のクリスを見て口を開いた。

「リディアン音楽院までの直行使だ、乗ってくかい？」

「ッ!!」

《See you Next game……》

第40話 『仕組まれたConcussion!』

——時間はさかのぼり、数十分前。

「リディアンの破壊、依然として拡大中!」

「学生の避難状況は!？」

「未来さんたちの協力で被害は最小限に抑えられています!」

「流石にゼロではいられないか……!」

二課の司令室、そこは慌ただしい状況となっていた。

超大型ノイズの出現に伴って響と翼を派遣したところ、戦闘が始まった直後にリディアン音楽院周辺にノイズが追加で出現したのだ。さらにジャミングがかけられたのか、現在は彼女たちにも通信がつかなくなっていた。

「4人の奏者がノイズとの戦闘を開始したタイミングでの通信妨害に、慎次から送られてきたこのデータ……関係がないはずがないか」「風鳴司令、これはあちらが仕掛けてきたということなのでしょうか?」

現状を振り返りつつ、通信が途切れる寸前に緒川から送られたデータを眺める弦十郎。そして自分の仕事をこなしつつ、藤堯は彼に問いかける。

おそろくな、そう弦十郎は答えつつ席を立つ。そして振り返って司令室の扉へ向かった。

「ノイズの対処は任せた。一課と協力しつつ学生と周辺住民の避難を最優先! お前たちもヤバくなったらすぐに脱出しろよ!」

「はい!」

背中越しに司令室のメンバーからの返事を聞き、安心して弦十郎は指令室から出ていく。そのまま廊下を突っ切り、目的地に向かって走り出した。

「天に届くほどの高さを、地下に伸ばすことで確保した塔。……そんなもの建てられる場所なんざ、ここしかないわな」

そして数分も経たないうちに目的地に付き、そう言つて弦十郎は立ち止る。そして通信機をセンサーにかざすことでロックを解除し、扉を開けて中に入った。

彼が通り抜けると扉は締まり、個室ごと下に降りていく。今彼が乗っているのは二課内で使用されるエレベーター、その中でもリディアン内部と繋がっている最も規模が大きいものだ。

「……………了子」

ここも含め、二課の施設建設の監修をしていたのは了子だ。緒川の予測通りだった場合、隠蔽しながらカ・ディングルを建設することは容易いだろう。

そう考えつつ、弦十郎はネクタイを緩める。そして袖を改めて巻くって動きやすい格好にし、目を閉じて軽く深呼吸をする。それを何度か繰り返した後で目を開き、前を見た。ちょうどそのタイミングでエレベーターは止まり、扉が開く。

「デュランダルの元へは行かせんよ」

「……漏洩した情報を逆手に、上手くいなせたと思つたのだが」

「調査部だって無能じゃない。米政府のご丁寧な道案内でお前の行動にはとっくに行き着いていた」

正面に立つ存在が呟き、廊下を歩きながら弦十郎は問いに答える。

その瞳には戦意を宿し、拳は握りしめられていた。

「後は燻り出すため、敢えてお前の策に乗りシンプオギア奏者を全員動かしてみせたのさ」

「フ、陽動に陽動をぶつけたか。食えない男だ」

目の前の存在はそう言って笑い、弦十郎の方へ振り向いて両手の鞭を持つ。それを見た彼もまたファイティングポーズをとり、いつでも始められる準備を整える。

「1つ聞きたい、慎次はどうした？」

「ああ、あの男か。無謀にも私に牙をむいたのでな、その対価を支払ってもらった」

「……そうかい」

互いに動かぬまま、数秒間睨みあう。そして相手が動き出すのを察知した瞬間、弦十郎は正面に向かって飛び出した。

「ネフシユタンの鎧と完全なる融合を果たしたこの私を、止められるなどと思えば上がるな！」

「女に手を上げるのは気が引けるが……。一汗かいてから後で話を聞かせてもらおうか、フィーネ……。いや、了子!!」

迫りくる鞭の起動を見極め、体を捻らせることで最小限の動きで回避する。そしてその勢いを維持したまま拳を振りかぶり、正面の存在——フィーネの胴体を狙って突き出す。それを彼女は引き戻した鞭を盾状に展開して正面から受け止めた。

「ほお……。お前はまだその名で私を呼ぶのだな」

「まあな。ネフシユタンの鎧と混じったことで大分変わっちゃまった

が、それでもお前の気配は間違えんよ！」

「ッ、減らず口を！」

弦十郎は至極真面目に答えたのだが、フィーネはそうは受け取らなかつたようだ。軽く目を見開いてから彼を力任せに吹き飛ばし、追撃するために鞭を振るう。それを見た彼は天井を殴ることで無理やり方向転換し、壁に跳んでさらに蹴りつけることで再びフィーネに突撃する。

「おおおおおおッ！」

腕を振りかぶり、渾身の力を込めて放つ。それはフィーネに再び回避されてしまうが、直前まで彼女が立っていた地面を打ち抜いて大きな穴をあける。それを見た彼女は反撃しようとするが、あることに気づいて後方に跳躍した。

距離をとって着地したフィーネは、肩部の鎧を見る。そこは弦十郎の拳が近くを通りすぎただけなのだが、僅かながらひびが入っていた。

「……チッ、肉を削いでくれる！」

それを確認したフィーネは忌々しそうに舌打ちし、両腕を振り上げて両方の鞭を狙って振り下ろす。それを見た彼は両足を踏みしめ、両手を広げてそれを握り止めた。

「なッ!？」

フィーネは目の前の常識外れの光景を見て、思わず思考が固まる。その隙を彼は逃さず、全力を込めて引き寄せる。そして引っ張られたことにより無防備になった彼女の腹部を狙い、全力でアッパーを放つた。

「ガツ……………」

「……………」

拳を最後まで振り抜き、フィーネは弦十郎の背後に飛ばされる。うつぶせで彼女は倒れ込むが、どうにか上半身だけでも起こそうと身体に力を込める。その様子を見つつ、彼は先程の手の感触を確かめていた。

（人間とは明らかに違う感触。…………ネフシユタンの鎧と融合した、ていようのは本当みたいだな）

「完全聖遺物を、退けるだと…………？ 一体どういうことだ！」

「なんだ、知らないのか？」

上半身を起こすことに成功し、フィーネは弦十郎を睨みつける。その視線を真正面から受け止めて、弦十郎は再び構えをとって口を開いた。

「飯食って、映画見て、寝る！ 男の鍛錬はそいつで十分よ！」

「…………なれど、人の身である限りは！」

真剣な表情で弦十郎は叫び、それを聞いたフィーネは顔をしかめて両腕の前に突き出す。すると今度は鞭が自動で動き出し、不規則な軌道を描きながら連続で攻撃を始めた。

その様子から受け止めることは難しいと弦十郎は判断し、迎撃する方向にシフトする。連続で迫りくる鞭の順番を見極め、一つ一つを拳で打ち落とししていく。

お互いに立ち止まっているが、その間では激しい攻防が繰り広げられる。だがフィーネは鞭は自動で振るわれている為両腕が空いており、その手に懐に納めているソロモンの杖を抜き取った。

「ッ、させるか！」

杖が突き出されたのを見て、フィーネがノイズを呼び出そうとしていることを察知した弦十郎。彼はそう叫んで鞭を地面に叩き落とし、足元を壊す。そしてその衝撃で空中に浮きあがった石の破片に狙いを定め、蹴りを放つ。

高速で飛ぶ石の破片。それは正確にソロモンの杖に命中し、彼女の手から弾き飛ばした。

「チ……ッ、しまった!？」

「ノイズさえ出させなければ!!」

背後に飛ばされたソロモンの杖に視線を向けるが、弦十郎の声を聞いてフィーネは急いで正面を見る。するとそこには生まれた隙を逃さずに鞭の嵐を切り抜け、再び彼女に肉薄する弦十郎の姿があった。

溜めていた力を開放し、全力で拳を振るう弦十郎。それはフィーネが何かを話す前に顔面に直撃し、彼女を吹き飛ばす。勢いよく飛ぶ彼女は突き当りの扉にぶつかることでようやく止まり、ズルズルと座り込んだ。

「……………こいつは慎次の分だ、了子」

そう言いつつ、彼女の元まで歩く弦十郎。

いくら完全聖遺物と融合したとはいえ、今のフィーネの気配は半分薄くなっている。未だ弦十郎は健在であり、ノイズを呼び出せるソロモンの杖は彼のはるか後方に落ちている。現状彼女に打つ手はほとんどないだろう。

「なぜ止めを刺さない?」

「……防衛大臣の殺害手引と、デュランダルの狂言強奪。そして本部にカモフラージュして建造されたカ・ディングル。俺たちは、全てを

お前の手の平の上で踊らされてきた」

「なら……」

「だが、それでも同じ時間を過ごしてきたんだ。その全てが嘘だったとは、俺には……………」

フィーネの前に立ち、動こうとしない彼女の眩きに弦十郎は答える。その時の表情を見た彼女は、僅かに笑みを浮かべて口を開いた。

「——全く、本当に甘いわね」

「言ってくれるな……性分だよ」

苦笑しながら弦十郎は手を差し出す。それを見たフィーネは表情を崩さぬままその手を見つめ、そしてゆっくりと自分の手を伸ばして掴んだ。

『今すぐ彼女から離れてください、風鳴司令!!』
「ッ!」

——その瞬間、フィーネの口から男性の声が響く。しかもその声には聞き覚えがあり、弦十郎は目を見開いて驚愕した。

「その声、慎次か！ 何でお前がッ!」

急いで事情を聞こうとするが、声が聞こえるのと同時にフィーネが弦十郎に抱き着く。先ほどの緒川の忠告もあって一先ず引きはがそうとするが、先程までの鈍さが嘘のように、その腕はピクリとも動かない。

「この……！」

このままでは離れることが難しいと感じた弦十郎は、無理やりにもはがそうと力を込め始める。しかしその視線が彼女のある一部分を見た瞬間に止まり、その箇所を凝視した。

先程までは気にしてなかったが、その部分は彼女が纏うネフシユタンの鎧の肩部。

弦十郎の攻撃によって入った罅が、修復されてなかったのだ。

『——その甘さがお前の最大の弱点だ、風鳴弦十郎』
「ッ！」

再びフィーネから言葉が放たれる。それは間違いなく彼女本人の声なのだが、抱き着いている彼女の口は動いていなかった。

その瞬間、弦十郎は己の失態に気づく。目の前のフィーネの気配が変わっていたのは完全聖遺物と融合したからではない。

『私自身のクローンを用いて作った自信作だ。そして、これは耐えられるか？』

——半分以上が機械でできている、フィーネが生み出した偽物^{クローン}だからだ。

その事に気づいたが、もう遅い。フィーネの全身が光り、二人を中心として爆炎が廊下全体を駆け抜けた。

コツコツと、彼女は廊下を歩く。その途中に落ちている杖を拾い、更に歩みを進める。

いや、ここからは最早廊下と呼べるのだろうか？ 周囲はガレキでまみれ、無事な箇所を探す方が難しい様相となっていた。

「…………あの男、まだ動けたのか。更に痛めつけるべきだったな」

そう呟いて、彼女は足元を見る。そこにはフィーネの頭部だけが転がっており、他の部分は吹き飛んだようで周囲にはない。

だがその断面からは火花が散っており、それが人間ではないことが分かる。

「思考能力は敢えて残さなかったが、間違いなくこれも私だ。それを気配だけで半ば勘付くとは…………」

扉の前に立ち、周囲を見渡す。すると視界の端に瓦礫が動いているのを捉え、その場所へ歩み寄る。

「……………」

そこには瓦礫に埋もれて重傷を負っているが、確かに生きている弦十郎の姿があった。だがそれを見ても、フィーネが表情を変えることはない。

なぜなら、敢えて弦十郎を生かす程度に爆発の威力を抑えたからだ。そしてその理由は、彼が持つ通信機が必要だからだ。

「殺しはしない。……お前たちに、そのような救済など施すものか」

そう呟き、弦十郎の懐から通信機を取り出す。そして改めて扉の前に立ち、センサーに彼の通信機をかざす。するとセンサーが光、扉がぎこちないながらも開いた。流石は聖遺物を補完する部屋の扉だ、間近で爆発を喰らったというのにその機能は健在のようである。

歩みを進めて部屋の中に入り、両手を前に出す。するとコンソールがフイーネの前に現れ、それを操作し始めた。

「目覚めよ……天を衝く魔塔。彼方から此方へ現れ出でよ!!」

「皆さん、大丈夫ですか!」

「小日向ちゃん!? どうしてここに?」

「ハア、ハア……学生の避難が終わって……響や翼さんは後どの位で、到着するのか確認したくて……」

司令室の扉が開き、未来が走って入ってくる。その様子を見た友里が驚いて声をかけるが、全力で走り続けていたようで彼女は息も絶え絶えの状態で中々滑らかに話せない。

「なるほど……とりあえず深呼吸して落ち着いて。もう少しでつながるはずだから」

「スウ、ハアア……あの、向こうの様子は?」

「ノイズがリディアンに現れたのと同時に、通信妨害が入ったんだ。今はその対処中……と」

だが言いたいことは伝わったようで、代わりに藤堯が答える。そして未来が落ち着こうとしている間も手を動かし続け、彼女からの質問に答えたと同時にその操作を一度止めた。

「これで繋がったはずだ。……響さん、聞こえますか？」

『はい』

「響！」

音声だけとはいえ通信を回復させることに成功し、響の声が指令室に響く。そしてその声を聞いた未来は急いで藤堯の隣に行き、大きく口を開いた。

『あれ、未来!?!』

「学校が、リディアンがノイズに襲われてるの！ それで——」

だが、それ以上未来の言葉が響に届くことはない。突如司令室の照明が落ち、通信が無理やり中断させられたのだ。

「え……?？」

「どうした!?!」

「本部内部からのハッキングです！」

「こちらからの操作……受け付けません！」

「なんだって!?!」

周囲の職員からの報告を聞き、藤堯は急いで画面を開く。そこには画面がどんどん消えていくのが見えており、急いで彼が対処しても時間稼ぎくらいしかできそうにない。

焦る藤堯の頬に、汗が流れる。それはこのハッキング自体への焦りもあるのだが、このやり方に心当たりがあるのも大きな要因だった。

「こんなこと、了子さんしか……!」

そして藤堯の奮闘も虚しく、システム全体が掌握されてしまう。ノイズで埋め尽くされた正面モニターを茫然と眺めながら、未来は呆然と呟いた。

「ああ、響……………」

「うそ……………」

「一足、遅かったか……………」

「おいおい、こりやあ……………」

「これは……………ひどいな」

その光景を龍の背中から見て、4人はそれぞれ茫然と呟きながら見続けている。

まだ午前中だと言うのに太陽の光は届かず、まるで夜の様に空では星の光が瞬いている。さらに視線の先にあるリディアン音楽院はかつての姿は残っておらず、まるで震災の直撃を受けたかのようにボロボロになっていた。

「とりあえず、降りるぞ」

「……お願い、奏」

「……ああ」

奏が声をかけ、翼とクリスがかろうじて反応する。響は崩壊している学校を茫然と見ており、反応はなかった。

そして龍はリディアン音楽院から少し離れた場所へゆつくりと着地し、4人は地面に飛び降りる。

「……よし、やることはわかるな？」

「おっしや、んじゃ行つてこい！」

「ッ！」

奏が龍を見つめ、暫くすると龍は了承するかのように1度うなずく。そして彼女の声に合わせて1度鳴き、再び翼を広げて飛び立っていった。

「奏、あの龍をどうしたの？」

「ちよつとお手伝いをお願いしといた」

「それって？」

「お迎え……つと、それは後でもいいだろ？　今は早くリディアンに行こうぜ」

既に響とクリスが向かっているのを見て、奏は話を切り上げて2人に追いつくために走り出す。それを見た翼も走り出し、ちようどりディアン音楽院に着いた時には合流することができた。

「未来……みんな……」

響が声を上げながら歩いていくが、反応はまるで帰つてこない。周囲に人の気配はなく、今の形相も相まって廃墟のように見えていた。

「リディアンが……」

「やりたい放題やってくれちゃって………ッ」

翼は顔を険しくしながら呟き、奏は内心怒りを抱きながら話す。だがその途中で奏が立ち止まり、他の3人がこれ以上進まないよう手で制した。

「奏さん？」

「いるんだろ？ さっさと出て来いよ」

「……………」

険しい表情を崩さず、奏はある一点を見て話す。するとその場所の物陰から1人の人物が現れ、4人の前に姿を見せた。

「了子さん!？」

「櫻井女史!？」

響と翼は、目の前にいる人物——了子を見て驚く。彼女は様子こそ普段通りだったが、身に纏う服からは出血したであろう跡が何力所からか見て取れた。

だがその様子を見ても、微塵も警戒を緩めない人物が二人。その内1人が一歩前に出て、口を開く。

「フィーネ、これはお前の仕業か！」

「フフフ……………ハハハハハ！」

フィーネと呼ばれ、了子はただ笑い続ける。その様子を見て彼女の正体に気づいた響と翼はさらなる衝撃を受け、確認するためにも翼がクリスの隣まで歩を進めて口を開く。

「そうなのか……？ その笑いが答えなのか!? 櫻井女史！」
「それで間違いないねえよ、翼」

そう声を荒げる翼の横を、奏が通つて前に出る。そして未だに笑い続ける了子を睨みつけ、ガングニールの切っ先を向けて口を開いた。

「あいつこそ、私たちが決着を着けなきゃいけないクソツタレ！
フィーネだ!!」

《See you Next game……》

第41話 『限界無きDreamer!』

了子は眼鏡を外し、髪をほどく。そして目を閉じると彼女の全身を光が包む。

そしてその光が収まった時、その姿は櫻井了子から、フィーネへと変貌していた。

「……嘘、だ」

フラフラと、響は前に進む。そして了子の方を見ながら茫然と呟く。

「嘘ですよ、了子さん？ だって、何度も私たちを助けてくれて……」

「あれは信頼を得るための演技だ。あの日とて、希少な完全聖遺物であるデュランダルを守ったまでのこと」

響の問いに対し、即答するフィーネ。その台詞は言外に、響たちを守ろうとはしていないと言っているようなものだった。

「でも……了さんがフィーネだっていうのなら、本物の了さんは？」

「櫻井了子の肉体は、先だって食い尽くされた。いや、意識は12年前に死んだと言っていないか」

そう答え、フィーネを上空を見る。いや、上空を見ると言うよりは、遠い昔の記憶を思い起こしていると言った方が正しいだろう。

「超先史文明期の巫女フィーネは、遺伝子に己が意識を刻印した。そして、自身の血を引く者がアウフバツヘン波形に接触した際、その身

にフィーネとしての記憶……能力が再起動する機能を施していたのだ」

「アウフバツヘン波形……ツ、まさか!？」

その言葉を聞き、翼が目を見開く。そしてその様子を見たフィーネは笑みを深め、口を開く。

「その通りだ、風鳴翼。12年前にお前が偶然引き起こした天羽々斬の覚醒。それは同時に、実験に立ち会った櫻井了子の内に眠る意識を目覚めさせた!……その意識こそが、この私」

「あなたが了子さんを塗りつぶして……」

「……まるで過去から蘇る亡霊だな」

真実を知り、啞然とする響。そして奏はフィーネのその姿をそう例え、吐き捨てるように呟いた。

「フフフ……亡霊と言うのなら貴様もそうだろう、天羽奏?」

それを聞いたフィーネはそう返し、奏の方に視線を向ける。その眼には黒い感情が込められており、忌々しげに彼女を見ている。

「あれからどうやって生き延びたのかは予測はつく。……グラフィアイトと同じ化け物になっても、私を討ちたいのだろう?」

「まあな。おかげさまで、こうして相對するだけでお前に貫かれた個所が疼きやがる……!」

力強く言いながら、奏は腹部に手を当てる。そして一度目を閉じ、忘れもしないあの日の光景を思い出す。

——ッ、あぶねえ!!——

——……私はあの日、お前に助けられた。だから、今度は私が助ける番だっただけ……で……——

——……そうだな。翼のこと、たまにでいいから見てやってくれな
いか？ それに、私が助けたあの子も……無事に日常に戻れたか、一
度でいいから様子を見て……——

——……たいに、生きたいにきまつてるだろ！ 私はまだ、こんな
所で死にたくない!!——

——そうだ、それでいい。……これは賭けだ、精々上手くいくよう
願っている——

「……だから這い上がってきた。フィーネ、お前をぶっ飛ばすために
な！」

目を開き、そう叫んでから手に持つガングニールをフィーネに向
かって突き出す。

「私が開発したシンフォギアを用いて、私を殺すか？……所詮、為政者
からコストを捻出するための玩具に過ぎぬそれを！」

「ッ、お前の戯れに、奏はその身を散らせたのか!？」

フィーネの言葉を聞き、翼は激昂して一步前が出る。そしてそれに続くようにクリスが横に出て、口を開く。

「あたしを拾ったり、アメリカの連中とつるんでいたのもそいつが理由かよ!？」

「そう……全ては、カ・ディングルのため!」

そう答え、フィーネは両手を広げる。すると地響きが鳴り始め、人は足元から何かがせり上がってくるのを感じる。

数秒後、フィーネの背後からそれは姿を現す。その塔は彼女達よりも、リディアン音楽院よりも、何よりも天高く昇っていく。

「これこそが、地より屹立し天にも届く一撃を放つ——荷電粒子砲、カ・ディングル!」

——その名は、カ・ディングル。フィーネの悲願であり、計画の集大成である。

「カ・ディングル、こいつが……!」

「そうだ。これで今宵の月を穿つことで、世界は再び一つとなる!」

「なっ!？」

「月を……穿つと言ったのか?」

「ああ」

そして語られる、フィーネの過去。

あの御方へと思いを届けるために建てられた、天まで届く塔。しかしそれは逆鱗に触れ、神罰を下される。そして塔と共に、人類は交わす言葉も奪われた。

その呪いの名は、バラルの呪詛。そして月が古来より不和の象徴とされているのは、月こそがその源であるからだ。そうフィーネは語つ

た。

「故に、人類の相互理解を妨げるこの呪いを！ 月を破壊することで解いてくれる！」

「そして世界を1つに戻す……冗談じゃねえ、それはお前が支配者になるってことだろうが！」

目的の先を見抜き、クリスが吠える。結局のところ、世界を統べた後に待っているのはフィーネによる独裁だ。

「安い、安さが爆発している！」

「永遠を生きる私が、余人に歩みを止められることなどあり得ない」

「……どうやら、これ以上は話すだけ無駄みたいだな」

そう言い放ち、とても人間を見ているとは思えない眼付きで4人を見下ろすフィーネ。

その視線から交渉は不可能と判断したのか、はたまた最初から分かっていたのか、どちらかはわからないが奏は前に出てそう言った。そして懐からガシャットを取り出し、起動スイッチを押す。

『ドラゴナイトハンター、Z！』

「行くぞ！」

「はい！」

「ああ！」

「言われなくても！」

奏の言葉に続くように、3人は胸元のペンダントを握る。そして目を閉じ、奥底から湧き上がってくる言葉を詠う。

「Balwisyall nescell gungnirtro
n」

「Imyuteus amenohabakiritron——」

「Killter ichiival tron——」
「変身！」

『ガシャット！——BUGLE UP！ ド・ド・ドドド黒龍剣！ ド
ラ・ドラ・ドラゴナイトハンター……ガングニール!!』

そして4人全員は戦装束に着替え終わり、同時にフィーネに向かって飛び出した。

「……………ッ」

何かが頬を撫で、薄れていた意識が徐々に戻る。目の前は真っ暗であり、最初はわからなかったが、時間が経つにつれてそれが地面であることが分かる。

「……は……………、ッ！」

なぜ自分がここにいるのか考え、すぐにそれを思い出す。そして急いで身を起こそうとするが、全身に激痛が走ってその行動は中断せざるを得なくなった。

「……僕は、生きているのか」

そう呟き、自分の周辺を確認する。

彼はうつぶせに倒れており、顔を上げると目の前にはもう動かない機械が見える。そして周辺は激しい戦闘の影響でボロボロになっており、壁や天井には大きく穴が開いていた。彼が最初目を開けた時、頬を撫でたのは風だったのだ。

「……全く、わかっていたとは言えこれは辛いですね」

なんとか体の向きを変え、仰向けになった状態で彼——緒川は呟く。

あの時、彼は死を覚悟してフィーネと戦った。念のため持ち出していた道具を使い、死力を尽くして時間を稼いだのだ。

……しかし、それでもできたのは十数分の時間稼ぎが精々だ。完全聖遺物を相手にしているのだから大健闘だと思うだろうが、それでも結果的に傷一つ付けることはできなかった。その事実、彼の胸に重くのしかかる。

「司令は無事でしょうか……?」

倒された後、緒川は今の前にも一度だけ意識をとり戻した。その時、目の前の機械から弦十郎の言葉が聞こえてきたのだ。その内容を確認するため全身に鞭を討って機械のところまで移動したのだが、その画面には弦十郎が映っていたのだ。

よく見てみると、その画面はまるで誰かの視界をそのまま映したかのように動いている。そして、聞こえてくる声は彼以外にもう一人。

『今すぐ彼女から離れてください、風鳴司令!!』

気づいた時には、画面に向かって叫んでいた。そしてその言葉が届いたかどうかわかる前に身体が限界を迎え、再び意識を失ったのだ。

——そして現在。確認しようと機械を見るが、その画面にノイズが走っていることに気づく。

フィーネから妨害が入ったのか、はたまた別の要因か。何にせよ、先程のが何だったのか確認することはできなさそうだ。

「とにかく、二課に戻らないと……ッ！」

体調は相変わらず最悪だが、動かせないほどではない。体を無理やり起こし、壁に手をつけて緒川は歩き出そうとする。しかしその行動は即座に中断され、彼の視線は上空へと向くこととなる。

遠くから、何か音が聞こえるのだ。それは少しずつ大きくなっており、こちらへ近づいているのが分かる。

まるで何かが羽ばたいているような、そんな音が——

「なッ!？」

そしてそれは上空に現れ、緒川を見下ろす。それは彼よりもはるかに巨体であり、鋭い瞳は爬虫類を思わせる。全身を覆う黒い鱗が光を反射し、口からはわずかに火が漏れ出していた。

「黒いドラゴン……司令の言葉にあった、グラフィイトの手によって変容したノイズ。何故ここに……?」

「ッ！」

「ッ、問答無用ですか！」

なぜ奴が現れたのか、緒川は疑問に感じる。しかし、龍がこちらを睨みつけながら咆哮するのを見たところで思考を中断して構える。

とは言え、状況は最悪と言っていていいだろう。こちらの身体はボロボロで、武器はすべてフイーネとの戦闘で損傷している。加えて相手は弦十郎ですら手こずった黒龍、しかも報告よりはるかに大きい個体だ。正直、勝負になるかすらわからない。

だがらと言つて、無抵抗でやられるわけにもいかない。どうにか隙を見つけて逃げ出そうと、緒川は相手の動きをよく観察した。

「——ッ!!」

「ッ……!」

そしてしばし浮遊していたが、黒龍は再度咆哮して上空へ浮上する。そして一旦緒川と距離を話したところで方向転換し、彼がいる箇所へ向かって加速した。その勢いは止まる事がなく、また減速する様子も全くない。

「まさか、このままぶつかる気ですか!」

その狙いに気づいた緒川は思わずそう叫び、急いでその場から離脱する。もう体が悲鳴を上げ続けているが、そんなことは関係ない。いくら体当たりと言えど、あの巨体で放たればそれだけで1つの兵器となる。直撃はもちろん、掠っただけでも今の緒川ならば容易くその命を奪うだろう。

全力で走り、建物から飛び出す。そしてその直後、彼がいた場所に黒龍は着弾した。その衝撃はすさまじく、緒川は踏ん張る間もなく吹き飛ばされてしまう。

「ガッ……!」

空中へと放り出され、しばしの浮遊感の後に壁にぶつかって地面に

落ちる。ただでさえ限界だった身体はそれを超えたようで、もう指一つ動かない。壁を背にした状態で視線だけを動かし、着弾点を見る。しかしそこに黒龍はおらず、大きな穴だけが開いていた。着弾時の速度から予測するに、あの穴はかなり深そうだ。

その事を目の前を見ながら考えていたが、建物全体を地響きが覆う。最初大きかったそれは徐々に小さくなっていくが、暫くすると再び鳴りだし、今度は徐々に大きくなっていく。

——それはまるで、地下に潜っていったナニカが戻ってきたかのよう
うで。

「ッ、来る！」

「——ッ!!」

緒川の眩きの後、穴から黒龍が飛び出す。それは再び空中に出た後、その場にとどまるように浮遊した。しかしその視線は緒川に向けられることはなく、穴だけをじっと見つめている。

ザク、ザク、ザク。穴の奥から、何かが地面を踏みしめる音が聞こえる。

恐らくそれは歩く音なのだろうが、その反響してくる音はかなり鈍い。また聞こえ始めてから時間が経っていることから、結構な距離があるのだろう。

「……………」

そして音が聞こえ始めてから数分後、遂にその者は地表に姿を見せ

る。音の持ち主は男性で、彼よりも大きな物体を片手に抱えている。そして視線は上空にいる黒龍に向けられており、黒龍もまた静かに彼を見つめていた。

「まさか、あなたは……？」

彼を緒川は今まで見たことがない。だがその雰囲気は、間違いなく彼だ。そう考えた緒川は、正面の彼に向かって声をかける。

その声は小さいものだったが、彼の耳には届いたようだ。彼は緒川の方へと視線を向け、その様子を見て薄く笑う。そして口をゆっくりと開いた。

「……随分と揉まれたようだな、緒川？」

「開幕から飛ばしていくぜ！」

『CRITICAL BRAZE!』

「初手より奥義にてつかまつるッ！」

――蒼ノ一閃――

巨大化した龍の口から放たれる炎と、巨大化した剣から放たれる剣戟。それは途中で1つとなり、巨大な炎の剣戟となってファイネに迫

る。それを見た彼女は鞭を大きく振るい、正面から迎え撃った。

剣戟と鞭は空中でぶつかり合い、激しく火花を散らす。数秒の間は拮抗していたが、ついに耐え切れなくなったのか剣戟が爆発する。ファイネの視界を土煙が覆うが、彼女の視線はある一点に注がれていた。

「喰らえッ!!」

――MEGA DEATH PARTY――

煙の外でクリスが吠え、ミサイルを大量に発射する。それはファイネの上空を通り、カ・ディングルへと向かって行く。しかし煙の中から鞭が飛び出し、次々に空中のミサイルを撃ち落としていく。

「無駄だ。その程度、私が見抜けないとでも……ッ!」

「おりやああああああッ!!」

全て爆発したのを確認し、嘲るかのようにファイネが話す。しかしそれを言い終えるよりも早く煙の中から響が飛び出し、彼女に向かって拳を振るう。それは反応が間に合って回避に成功し、次いで放たれる蹴りは受け止めることで防御する。

「まずは貴様から……なッ!?!」

目の前の響から仕留めようと考え、ファイネは自由な右手で鞭を振ろうとする。しかし、その前に響は地面に手を当てて支えとして無理やり足を振り抜いた。力づくで不利抜かれたことで左手はかち上げられ、体勢が崩れるファイネ。そしてその隙を逃すまいと、翼が剣を基の大きさに戻して突貫した。

「はああああああッ!」

「チッ！」

「隙ありだ！」

冗談から振り下ろされる剣を、フィーネは後方へ跳ぶことで回避する。そして鞭を剣のように伸ばした状態で固め、続けて放たれた切り上げを受け止めた。

罅迫り合いの状態になるが、空中へ飛んだ奏が長銃から弾丸を放つ。その弾丸は正確にフィーネだけを狙い撃ち、その衝撃に思わず彼女は数歩後退する。その勢いのまま押そうと翼は剣を握る力をさらに込めるが、鞭が薙ぎ払われたのを見て刀身を立たせて受け止める。

「もう一つだ！」

「ッ！」

その様子を見て、フィーネは反対側から鞭を振り抜く。翼はそちらも受け止めようとするが、受け止めていた方の鞭が剣に絡まっていることに気づく。そして鞭は動き、彼女の剣は上方へかち上げられた。

だが翼は冷静に判断し、姿勢を低くすることで鞭を回避する。そしてそのまま脚部のブレードを展開し、逆立ちして彼女に切りかかった。

——逆羅刹——

「甘いッ！」

だがそれを、フィーネは鞭を回転させることで相殺する。何度も彼女たちの間で火花が散り、拮抗していることが分かる。このままではそのうち翼の勢いは衰え、フィーネから一撃をもらうだろう。

——しかし、それは1対1の場合の話だ。

「翼ッ！」

「たあああああああああ!!」

「……そこか！」

彼女の名を呼びながら奏は長銃を構えて走り出し、引き金を引く。単純に手数が増えたことでフィーネも対応を速めていくのだが、そこを狙うかのように響が横から殴りかかる。

奇襲ともいえるタイミングだったが、声を上げたことでフィーネは方向を即座に判断する。そして鞭の防御はそのままに、腕を上げることで響の一撃を受け止めた。

「もう間もなくカ・ディングルは発射される！ お前たちの行動は、全て無駄だッ!!」

そう叫び、響を力づくで飛ばす。後方へ彼女は飛んでいくが空中で体勢を立て直し、翼の隣に着地した。

「だとしても、やることは一つだ！」

そう叫び、力を溜めていたクリスは2発の巨大ミサイルを形成する。そしてその内1発をフィーネに向けて発射する。それをフィーネは躲そうと空中を駆けるが、ミサイルはどこかにぶつかることなくひたすら追いかけて続ける。

「そんなでもう一発！」

そしてクリスはもう一つのミサイルを構える。彼女の視線の先には、カ・ディングルが映っていた。

「ッ、させるか！」

「それはこっちの台詞だ！」

クリスの行動を妨害しようと、フィーネは彼女に向かって駆け出す。しかし奏の強襲によって防御せざるを得なくなり、その隙にもう一発が発射される。

だがまだ間に合うと考え、フィーネは急いで両手で鞭を振るう。一方は奏のガングニールとぶつかり合い、もう一方はフィーネに迫りくるミサイルを切り裂いて爆発させる。そして空中でぶつかり合ったことで互いに弾かれ、奏は一回転して着地した。

「もう一発のミサイルは……!」

邪魔はなくなつたとフィーネはもう一発のミサイルを探すが、ガ・デインギルを見てもミサイルの姿はない。急いで周囲を見渡すが見つからず、もしやと思い上空を見ると、そこには煙を引いて空へ上がっていくミサイルの姿があつた。そしてさらに驚くべきことに、その先端にはクリスの姿がある。

「クリスちゃん!」

「何を?……ッ、まさか身一つで止める気か!」

「ッ、あの馬鹿!」

『CRITICAL BRAZE!』

その動きは3人にも予想できていなかったが、まず真つ先に翼がその目的に気づく。そして続いて奏も気付き、急いで彼女を追うように空を飛ぶ。しかし追いかけるタイミングや先ほどまでの戦闘によるエネルギー消費。これらが相まって彼女との距離は縮まらない。

「あいつ、やっぱ追いかけてきやがった」

上空へ向かって飛ぶミサイル。その先端に手をかけ、共にに上がっ

ていくクリスは下から聞こえる声に小さく呟いた。

その声は、ここ数日ですっかり聞きなれてしまった声。あの地獄を味わってから、初めてフィーネ以外で自分の傍に立った相手。しかしフィーネとは違って何かを押し付けることはせず、あくまで自身の意思を尊重させてくれた相手。

立花響の先輩であり、風鳴翼の相棒であり……そして、グラフィイトと同じ力を持つ彼女。

「……だからこそ、一回くらい見栄を張らせてくれよ」

決して彼女には届かない声量でつぶやき、遂に成層圏を突破する。そこでクリスはミサイルから飛び降り、ちようど地球と月の間へ移動する。ここからでも、ある一カ所が激しく光っているのが見える。おそらくあれがカ・デインギルであり、後方の月を今まさに穿とうとしているのだろう。

あれほどの規模の建物だ。蓄えられるエネルギー量は半端なものではなく、生半可な一撃では拮抗する間もなく月ごと撃ち抜かれてしまうだろう。

なら、生半可ではない一撃を撃ち込むだけだ。

「G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a
l E m u s t o l r o n z e n f i n e e l b a r a l
z i z z l ————」

その歌をきっかけに、クリスのイチイバルは変化する。銃身は巨大な電磁砲のような形状になり、それを両肩で固定する。そして力を込めていくが、それは超大型ノイズを仕留めた時のそれよりもはるかに大きい。

それもそのはず、今のクリスの歌は奏者への負荷を厭わず、シン

フオギアの力を限界以上に撃ち放つもの。対価が大きいものほど、放たれるエネルギーは絶大なものになる。

——その名は、絶唱。

(……あれから、何度も考えた。そして、やっとわかったんだ)

力を込めながら、クリスはふと思いつく。あれからずっと考えていた、彼女の両親が音楽を届けていた意味。わざわざ危険な戦争地域で、しかもクリスを連れて行っていった意味。

きつと、両親はクリスに伝えたかったのだろう。夢は叶うという、揺るがない事実を。あくまで予想でしかないし、その正誤を答えてくれる人はもうこの世にはいない。ただこの答えにたどり着いた時、不思議なほどスツと滑らかに彼女の胸に落ちたのだ。

(私は……パパとママが、大好きだ)

(だから、二人の夢は私が引き継ぐよ)

そう考えているうちに、エネルギーの充電が終わる。後はガ・ディンギルの発射に合わせて撃つだけだ。真正面からぶつかれば勝ち目は薄い、一点に集中して撃ち抜けばまだ勝機はある。

(平和をつかみ取る。……だからまず、何もできないと思いついでる
フィーネに一泡ふかせてやる！)

「Gatrandis babel zingurat ede
nal Emustolronzen fine el bara
l zizzl」

「クリス……ッ!!」

(だから聞いて？ 私の歌を)

歌い終わり、目を閉じる。そしてその銃口から、極太の光線が放たれた。

《See you Next game……》

第42話 『翼を抱いてGo ahead!』

「……仕留め損ねたか」

はるか上空、視界に映る月が欠けるのを確認したフィーネは呟く。カ・ディングルは月を穿つために作り出したものだ。故に直撃すれば、粉々に砕け散るよう出力は調整してある。

ではなぜ欠けただけにとどまったのか？ それは先程までカ・ディングルの一撃と拮抗し、こうしてその軌道を逸らした人物がいるからだ。

「自分を殺して、月への直撃を阻止したか……!」

「あ、あああ………」

光輝く空を見て、響は呆然と呟く。するとふと視線の先に赤い光が見え、それは徐々にこちらへ降りてくる。

地面に向かって炎を吹き出し、勢いを殺して光の主——奏はゆつくりと降り立つ。その腕の中に、一人の少女を抱えながら。

「……おい、起きろよ」

反応は、ない。その瞼は固く閉じられ、薄く微笑んでいる口の端からは血が流れていた。

「馬鹿野郎、お前には夢があつたんじゃねのかよ……!」

「クリスちゃん……嘘だよ……。私、せつかくクリスちゃんと仲良くなれたんだよ……?」

歯を食いしばり、溢れ出る感情を無理やり押さえつけて、奏は震えながら話す。その手に抱くクリスの頬に手を触れた響も、今までの用

に反応がないのを見て瞳を激しく揺らしながら言葉をこぼした。少し離れた場所にいる翼は、その様子を痛ましそうに見つめながらも言葉を発さない。

「もつとたくさん話したかった……！」

「——ハッ、無駄なことを」

静まり返った空間に、その声は響いた。

遮るものなど存在せず、3人の耳にその言葉はしっかりと届く。そして各々で様子が変わっていくのだが、そんなことは気にも留めずにフィーネは言葉を続ける。

「いくら夢を見たとして、叶えられなければ意味はない。……とんだグズだ」

「……今、笑ったのか？」

その瞳に激しい炎を纏わせ、翼はフィーネを睨みつける。隣で奏もゆつくりと立ち上がるのを尻目に、フィーネに剣の切っ先を向け、胸の内からあふれ出す感情のままに口を開く。

「命を賭して大切なものを守り抜いた者を……お前は無駄とせせら笑うのか!？」

「てめえ、ふざけんのも大概にしろよ……！」

言い終え、剣を構える。そして奏と同時にフィーネに突撃しようとして力を込め、それを開放しようとして――

「それが、夢ごと命を握りつぶした奴の言うことかあああああああああッ!!」

――背後の咆哮を聞き、その荒々しい気迫に思わず振りかえる。そして、驚愕で目が見開いた。

声を発した主、響の姿は先程までとは全く違っている。全身が黒く染まり、輪郭しか見えないものの眼だけは赤く輝いていた。しかしその瞳に理性は感じられなく、ただ一つの感情が支配していた。

それは、怒り。生物が原初から持つ感情にして、最大級の激しさを持った物である。

「おい立花、お前……ガッ!」

「立花、奏!」

「なん、だ……これ……!」

「融合したガングニールの欠片が暴走しているのだ。制御出来ない力に、やがて意識が塗り固められていく」

異変に気づいた奏が響に声をかけようとするが、突如膝をついて苦しみます。それを見た翼が奏の方を見ると、彼女の槍が怪しく発光していた。

翼が焦りつつ二人に声をかけるが、二人はフィーネの方だけを凝視している。まだ奏は言葉を発しているだけマシのようだが、響は既に人間の言葉を発していない。そしてその様子を見たフィーネは、二人の状況を確認しつつ話す。

「暴走しているのは立花だけだが……元は同じ聖遺物であり、同じシ

ンフオギア。共鳴反応で同様の状態に陥る可能性があるのか……想定外だが、良いサンプルになった」

「まさかお前、立花を使って実験を？」

「立花だけではない……見てみたいと思わんか？ ガングニールに侵食されて、人としての機能を失っていく様を！」

「ッ、ファイネエエエエ!!」

ファイネの言葉をきっかけにして、迸る衝動を抑えきれずに奏が飛び出す。ガングニールを振り上げ、跳躍してから全力で振り下ろす。それをファイネは鞭を交差させることで受け止めるが、直後奏の背後から飛び出した響が同じ個所に拳を振るう。

「ガアアアアッ！」

「ッ、化け物が！」

槍と拳、二つのガングニールの攻撃は一カ所に集中する。それは徐々に鞭を押しつけてファイネに近づいていき、若干劣性である事を悟った彼女は顔をしかめ、腕を振りかざして鞭を拡散させた。それによつて二人は弾き飛ばされ、響だけが着地に成功する。

「……もはや人ではない。人の形をしただけの、破壊衝動の塊だ」

「——ッ！」

四つん這いの状態で着地した響は再び咆哮し、ファイネに跳びかかる。彼女は反応して鞭を展開し、防御の構えをとった。拳と障壁がぶつかり合い、激しい火花を散らす。

「何度やっても………なッ!?!」

「オオオオオッ!!」

ファイネが再び押しつけようとするが、それよりも早く響の拳が障

壁を貫く。そして拳を少し開き、情報から全力で引つ搔くように振り下ろす。

激しい音とともに、フィーネの周囲が土煙で覆われる。そしてそこからフィーネが飛び出す、その身体は上下に真つ二つに割かれていた。

「ッ、なんという力……!」

「——ッ」

完全聖遺物と融合して、それに匹敵するほどの耐久力を手にしているフィーネ。それを一撃で戦闘不能にした今の響を見て、翼はひそかに戦慄する。しかし響が肩で息をしている様子を見て、やはり代償がないわけでないことを悟った。

「立花、止まれ! これ以上は聖遺物との融合が進むだけだ!」

「ッ、——!」

「な!」

これ以上響を戦わせるわけにはいかない、そう判断した翼は声をかける。しかしその声を聞いた響きは彼女の方に振り向き、方向と共に突撃してきた。

「——させるか!」

予想外の行動に翼は対処が遅れるが、響がその場に辿り着く前に横から奏が飛び出して槍の腹で受け止める。一度吹き飛ばされたことで多少落ち着いたのか、その瞳に狂気は宿っていない。しかし槍は相変わらず発光しており、共鳴反応は健在のようだ。

「奏、もう大丈夫なの!」

「大丈夫じゃねえ、今も頭の中でガンガン響いてきやがる……ての!」

翼の問いかけに対し、奏は答えながら勢い良く槍を押し出す。それによって響は空中を舞うが、1回転して着地する。それを奏は油断せずに見ているが、表情はあまり芳しくない。

「翼、こっちは任せろ。お前はカ・デインギルを頼む！」

「カ・デインギルを!？」

「あれが一発で終わる代物なわけねえだろ！　まだ何発かは撃てるはずだ！」

「——ほう、気づいたか」

奏の指摘を聞き、倒れていたフィーネが口を開く。未だに身体は下に裂かれている状態のだが、普通に立ち上がる。そして彼女の言葉を切っ掛けに、背後のカ・デインギルが再び輝きだした。

「カ・デインギルがいかに最強最大の兵器だとしても、ただの一撃で終わってしまうのであれば兵器としては欠陥品。必要あるかぎり何発でも撃ち放つ、その為にエネルギー炉心には尽きることはない無限の心臓を取り付けているのだ」

「尽きることのない……まさか、デュランダルはその為か！」

「その通り！」

翼が答えにたどり着き、それをフィーネは楽しそうに肯定する。そして同時に彼女の傷口が塞がっていき、数秒もしないうちに全快の状態に戻っていた。その在り方は人ではなく、完全聖遺物ネフシユタンの再生能力そのものだった。

「……だが、お前を倒せば引き金を引く者はいなくなる！」

その様子を冷静に見つつ、翼は剣をフィーネに向ける。それを見た彼女は鞭を構え、数瞬の間を置いて二人は再びぶつかり合った。

「このッ！」

「↓！」

響が拳を振るい、奏はそれを左手に展開した長剣で受け流す。最初こそ槍を使つて迎撃していたが、接触する度に彼女の中で衝動が膨れ上がっていたので、それ以外の武装で対応するようにしたのだ。

「聞こえねえのか!? 響、落ち着け！」

「ッ!!」

銃で牽制しつつ呼びかけるが、響からまともな反応は返らない。完全に暴走しているようで、怒りの衝動に飲み込まれているのだろう。振るわれる拳は一撃一撃が非常に重い。ただ本能のまま放つために直線的であり、対処しやすいと言うのが幸運と言えるだろう。

「まったく、これじゃデュランダルの時みたいじゃねえか。……………つてことは、だ」

どうしたものかと考えながら奏はぼやくが、あることに気づいて後方へ跳躍する。空中で何発か牽制することで安全に距離をとり、響からある程度離れることに成功した。

「同じ方法でいけるかもな。……………あーあ、奥の手は最後にフィーネにかますつもりだったんだけど」

そう眩きつつ、響を見る。奏が気を抜いた瞬間に襲おうとしているのか、四つん這いの状態で彼女はいつでも飛び出せるよう構えていた。

それが分かっているながらも、奏は両手で槍を握って目を閉じる。響がそれに素早く反応して跳びかかるが、奏は迎撃の構えはとらずに、息を静かに吸って口を開いた。

「Croitzalronzell Gungnir zizzl

」

それを詠った瞬間、彼女の全身を光が包む。その眩しさに思わず響は距離をとり、警戒してその様子を見つめていた。

そして光が収まり、中から奏が姿を見せる。その様相はあまり変わっていないが、違う点が1つだけある。それは鎧の配色で、黒かった箇所が白く染まっていたのだ。

「シンフォギアとガシヤットの同時起動、上手くできるのは予想できていたが……!」

纏う鎧の変化を確かめ、奏は槍を構える。しかしその表情は笑ってはいるものの余裕はなく、むしろ汗の量は増していた。

彼女が行ったこと、それはハンターゲーマーを纏った状態でガングニールを起動させたのだ。今まではあくまでアームドギアの状態で固定されたガングニールを持つて変身していた、シンフォギアとして使ってはいなかったのだ。故にこの形態になった場合、彼女は2つの力を同時に扱うことができるということになる。

しかし、今回に限ってはデメリットも生まれてしまう。この形態に

なるということとは、奏は GANG ニールをその身に纏うということになるのだ。つまり……。

「う……ぐあ……！」

「——ッ!!」

彼女の暴走の影響を、より濃く受けるということになる。予想以上の衝動を受け、思わず奏は頭に手を当てる。その瞬間を狙い、響は再び飛び出して拳を振るう。それに気づいた奏は槍を持つ手を振り上げ

「ッ!!」

「——」

——その手を振り下ろさず、響の一撃を受け入れた。

胸元を狙って放たれた一撃。それは一切の妨害を受けずに炸裂し、奏に密着する。そして奏は槍を手放し、彼女を優しく抱きしめた。

「無茶すんじゃないよ。お前の拳は、こうするためのものじゃないだろ?」

そう話しかけ、ゆつくりと胸元の手をつかんで下ろさせる。その手は赤く染まり、奏の胸元も同じ色で濡れていた。

そして手を下ろさせた後、再び優しく抱きしめる。暴れないのかと響の様子を確認すると、彼女の瞳からは涙が流れていた。それを見て奏は確信する、彼女はまだ飲まれてはいないことを。

「大丈夫だ。……お前の怒り、私が引き受けてやる」

響の耳元でそう呟き、目を閉じる。その台詞と共に響の纏うシンフォギア、奏の纏う鎧と地面に刺さる槍が激しく発光し、2人を包み込んでいった。

「ぜあああああああッ!!」

「ッ!」

――天ノ逆鱗――

――ASGARD――

翼は空中で剣を投げて巨大化させ、それを蹴って加速させてファイネに迫る。それを見たファイネは鞭を格子状に展開して障壁を3重に展開し、それを受け止めた。

激しい火花を散らし、矛と盾はぶつかり合う。だがしかし、矛盾とはいずれ崩れ去る物。バリアに徐々に罅が入り、遂に1つが砕け散った。

「馬鹿な!?!」

「はあああああッ!!」

全身全霊で力を込め、剣はさらに勢いを増す。そして2枚目も砕け散り、ついに最後の1枚とぶつかり合う。2枚も障壁を破っておきながら拮抗する翼を見て、ファイネは忌々しさを隠そうともせず口を

開く。

「玩具如きが私と同等の出力だと……!?」

「私は私に誓った。もうこれ以上、失うことはしないと!」

鎧から新たに剣を2本取り出し、両手に持って翼は切りかかる。新たに加えられた衝撃で最後の障壁にひびが入り、徐々に広がっていく。それを見たフィーネは後方へ跳躍し、その直後に障壁が割れた。

地面にぶつかつた障壁で周囲を土煙が多い、フィーネの視界はさえぎられる。煙を払おうと鞭を振りかぶるが、その直後に正面から殺気を感じてその方向へ鞭を伸ばす。その方向からは翼が走っており、迫りくる鞭を剣でいなして彼女の目の前まで接近することに成功した。

「しまっ……い!」

「遅い!」

フィーネが鞭を手元に戻すよりも早く、翼は二刀を水平に構えて全力で振るう。それは腹部に直撃し、勢いを抑えきれずにフィーネは吹き飛び、カ・ディングルにめり込むことでようやく止まった。

「カ・ディングルごと叩き切る!」

「この……ッ!」

「蒼ノ一閃!」

翼は巨大化したまま突き刺さっていた剣を引き抜き、大きく振り抜いて剣戟を放つ。フィーネは回避こそ間に合うものの、回避すればこの剣戟はカ・ディングルに直撃する。彼女にとって、防御以外の選択肢は存在しなかった。

再び激しくぶつかり合うが、今度は拮抗する。フィーネは3重に展開していた障壁を1つに集中させたことで密度を上げ、質を上げたの

だ。

だがその様子を見て、翼が何の行動も起こさないわけがない。拮抗している様子を見て、剣を再び振りかぶった。

「二太刀で切れないというのなら、刃を重ねるまで——ッ、なんだ!？」

2発目の剣戟を放とうとした瞬間、翼の背後で激しい光が迸る。その方向が響と奏がいる場所と気づき、翼は思わず意識をそちらに向けてしまう。

そしてその隙をフィーネが逃すはずもなく、素早くカ・デインギルから飛び出して翼に迫った。

「詰めが甘い!」

「ッ、しま……ぐああッ!」

両腕を振りかぶり、意趣返しとばかりに鞭で薙ぎ払う。目をそらしていたわけではないので、翼はギリギリ防御が間に合う。しかし踏ん張りがきかずに吹き飛ばされ、何とか空中で体勢を立て直して着地。剣を地面に突き刺すことで減速していき、ようやく止まったころには距離をかなりあけられてしまった。

「奏、一体何……が……?」

だがちやうど光の発生地まで飛ばされたようで、翼は二人の様子を確認しようとする場所を見る。しかしその言葉は続くことはなく、その方向を見ていた瞳は大きく見開かれた。

「——奏、さん」

光が収まった場所、先に声を発したのは響だった。その瞳には理性が宿っており、彼女を覆っていた暗闇は鳴りを潜めている。二人は膝立ちの状態で抱き合っており、奏に対して声をかけていた。

しかし奏の反応はなく、身動きもまるで感じ取れない。それを見た翼は嫌な予感がして、急いで二人の元へ駆け寄った。

「奏さん、奏さん……………」

「嘘、だよね……………」

うわ言の様に何度も名前を連呼する響を見て、嫌な予感が増す。そしてそれを振り払うように奏の肩に手をかけて軽く引っ張った。

そして、奏は抵抗することなく仰向けに倒れた。それと同時に変身が解除され、普段着に戻る。

——それはまるで、あの日のようで。

「ッ!!」

「敵に背後を見せるとはな」

あの日のトラウマが呼び起こされ、翼は思わず硬直してしまう。そしてそれを近づいていたフィーネが見逃すはずもなく、鞭を振るって彼女に剣にまどわせる。そして彼女が反応するよりも早く振り上げ、遠くへ弾き飛ばしてしまった。

「…………ガングニールを身に纏うことで、負担を肩代わりしたか。この様子、デュランダルの時も同様の方法をしていたな？」

倒れている奏を見て、響が元に戻っている原因を推測するフィー

ネ。だがそれは詮無きことと切り捨て、翼の方へと視線を向ける。

「愚かだな。仲間になど気を向けなければ、一太刀は浴びせれていたやもしれなかったものを」

「……私は人間だ、剣ではない」

フィーネの嘲るような言葉を聞き、翼は静かに答える。そして立ち上がり、収納していた剣を取り出して構えた。チラリと響の様子をうかがうが、彼女は今までの様子を覚えていようであるように震えて泣いている。戦う力はまだ残っているが、もはや戦闘不能だろう。

戦闘が始まった時、翼たちは4人でフィーネと対峙した。しかし現在、彼女と戦えるのは翼一人になってしまっていた。

「だとしてもー！」

そう自身に言い聞かせ、翼は走り出す。フィーネは翼だけに狙いを絞って鞭を連続して振るうが、彼女は一方を回避、一方を受け流すことで突破する。そしてフィーネに近づいたところで跳躍し、その手に持つ武器を全力で振りかぶった。

「ッ、それはー！」

「力を貸してくれ、奏!!」

そう言いながらその手に持つ武器——ガングニールを投擲する。勢いよく放たれた槍は小型化しているものの鋭く、フィーネの心臓部へまっすぐ進んでいく。

その速度故に回避することはできず、攻撃したが故に鞭による防御も間に合わない。

「ガハッ！」

「両翼揃った、ツヴァイウィングならー！」

ー炎鳥極翔斬ー

フィーネに GANG ニールが突き刺さり、大きくのけぞる。そして翼は彼女の上空を通り過ぎ、両手に持つ剣から炎を噴き出させる。それを推進材として、カ・ディングルに向かって飛翔した。

「狙いは初めからカ・ディングルか！」

GANG ニールを引き抜き、捨てながらフィーネは叫ぶ。そして逃すまいと両腕を振るい、鞭を翼に向かって放った。

「どこまでも、飛んでいける！」

飛翔する翼を追いかける、2つの鞭。その距離は徐々に狭まっていき、彼女がカ・ディングルにたどり着くまでに追いつかれるかは五分五分だ。

「間に合え……！」

飛ぶ。鞭との距離が半分になる。カ・ディングルまではまだ遠い。

「間に合え……!!」

飛ぶ。鞭がついに足元まで迫る。カ・ディングルまでは後半分。

「間に合え……ッ!!」

飛ぶ。鞭の一撃をかろうじて避けるが、次は避けれそうにない。カ・ディングルまではかなり近い。

「間に合ええええええええええツ!!」

飛翔^とぶ。鞭は左右から挟み込むように迫りくる。そして遂にその背中に届き――

「行け、アメノハバキリ」

瞬間、彼女の真横を何者かが通り過ぎる。その直後、背後から迫りくる気配が一気に薄くなっていった。

やつが何をしたのかはわからない。だが、確実にわかることは一つある。

これで、風鳴翼の飛翔を遮る存在はいなくなったということだ。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

噴出する炎は勢いを増し、翼と一体化する。蒼き不死鳥となって、彼女は遂にカ・ディングルにその身を届かせた。

「どこまでも……どこまでも忌々しい!!」

苛立ちをぶつけるかのように、地面に拳を叩きつけるフィーネ。彼女の目の前にあったカ・ディングルは、その機能を停止させていた。発射直前まで蓄えられていたエネルギー、それすら利用して生まれた大爆発はカ・ディングルを再起不能になるほどの損害を与えたのだ。

「月の破壊はバラルの呪詛を解くと同時に重力崩壊を引き起こす。惑星規模の天変地異に人類は恐怖し……そして聖遺物の力を振るう私の元に帰順するはずであった!」

忌々し気に全壊したカ・ディングルを見上げながら、フィーネは呟く。そしてその根元にある土煙に向かって伸びている鞭を戻そうとするも、ピクリとも動かない。まるで何者かが、土煙の中で動きを阻害しているかのようなのだ。

「痛みだけが人の心を繋ぐ絆! たった一つの真実なのに! それを……それをお前は! お前達は!!」

土煙に向かって、フィーネは大声で叫び続ける。そしてそれに答えるかのように土煙が晴れていき、中にいる存在がゆっくりと鞭を手放した。

「貴様はなぜ邪魔をする、グラフィイトツ!!」

「気に喰わん、それだけだ」

《See you Next game……》